

新宇土市史基礎資料 第9集

考古

西岡台遺跡

石ノ瀬遺跡

上松山遺跡

2001

宇土市教育委員会

新宇土市史基礎資料 第9集

古 考

西岡台遺跡

石ノ瀬遺跡

上松山遺跡

2001

宇土市教育委員会

例 言

- 1、本書は、新宇土市史基礎資料第9集であり、考古関係資料を収録したものである。
- 2、宇土市内の3遺跡について、土器を中心とした遺物実測図を収録した。3遺跡とは、宇土市神馬町所在の西岡台遺跡、宇土市石小路町所在の石ノ瀬遺跡、宇土市松山町の上松山遺跡であり、これらには未報告のものや、ごく一部の遺物だけしか報告されていないものが殆どである。しかも比較的まとまった資料であり、考古学的にも注目を受けておりながらその実体がよくわかっていないものを中心としている。
- 3、調査が早い段階に実施され、遺構の状態や遺物出土の状況がよくわからないものや、攪乱されているなどの資料も含んでいるが出土位置や層位は、遺物観察表を参照されたい。
- 4、遺構関係の図面作成や製図、解説文執筆等は、宇土市関係者が行ない、遺物実測図の作成や土器観察表、遺物解説の執筆などは主として、福岡大学人文学部教授武末純一氏・小郡市埋蔵文化財調査センター片岡宏二氏・鹿児島県立埋蔵文化財調査センター川口雅之氏・福岡大学人文学部考古学研究室大学院生、学部生（氏名は42・109頁）など、宇土市関係者以外の方々をお願いしたものである。ご多忙な中を執筆いただいた各位に感謝申し上げます。なお、本文執筆・実測図観察表作成は下記のとおり。

本文執筆

遺跡名	遺跡概要	発掘調査概要	出土遺物概要	まとめ
西岡台遺跡	高木恭二	高木	武末純一	高木
石ノ瀬遺跡	高木・木下洋介	高木・木下	片岡宏二・川口雅之他	高木・木下
上松山遺跡	高木・木下	高木・木下	武末・福岡大学生	高木・木下

実測図・観察表作成

遺跡名	遺構実測図	遺構図トレース図	遺物実測	遺物図トレース	遺物観察表作成
西岡台遺跡	平山修一他	淵上幸恵・林麻穂	武末・福大生	武末・福大生	武末・福大生
石ノ瀬遺跡	木下他	淵上・林	川口・片岡他	川口・片岡他	川口・片岡他
上松山遺跡	木下他	淵上・林	武末・福大生	武末・福大生	武末・福大生

- 5、本書の編集は、高木恭二と林麻穂が行ない、印刷事務については文化振興課市史編纂室において実施し、本田浩二・阿田幸子が担当した。

本文目次

西岡台遺跡

1. 遺跡概説	1
(1) 調査の経緯	
(2) 遺跡の名称	
(3) 遺跡の概要	
2. 遺構概説	5
(1) 遺構の状況と発掘区の設定	
(2) V字溝の状況と遺物出土状況	
(3) 昭和49・50年以降の発掘調査所見	
3. 遺物解説	24
(1) 土師器	
(2) 円筒埴輪	
(3) 小結	
4. まとめ	43
(1) 宇土半島基部における前期古墳群	
(2) 西岡台遺跡の性格	
(3) 土師器の編年	
(4) 古墳との関係	
(5) 後記	

石ノ瀬遺跡

1. 遺跡の概要	49
2. 発掘調査の概要	54
(1) 第1次調査	
(2) 第2次調査	
(3) 第3次調査	
3. 遺物解説	55
(1) はじめに	
(2) 弥生土器	
(3) 朝鮮系無文土器	
(4) 陶質土器・赤焼土器	
4. まとめ	85

上松山遺跡

1. 遺跡の概要	87
2. 発掘調査の経緯	87
3. 遺構の検出	88
(1) 試掘調査	
(2) 第1次調査	
(3) 第2次調査	
4. まとめ	89
5. 後記	89

挿 図 目 次

3 遺跡位置図 (1/50,000)

西岡台遺跡

第1図	西岡台遺跡位置図 (1/25,000)	1
第2図	千疊敷旧地形図 (1/1,000)	2
第3図	トレンチ配置図 (1/600)	6
第4図	遺構全体図 (1/600)	7
第5図	H-1区出土倭鏡実測図 (1/3)	8
第6図	西岡台遺跡遺構 (H1区ET) 実測図 (1/80)	9
第7図	西岡台遺跡遺構 (H2区) 実測図 (1/80)	11
第8図	西岡台遺跡遺構 (H3区) 実測図 (1/80)	13
第9図	西岡台遺跡遺構 (H-T3N) 実測図 (1/80)	15
第10図	西岡台遺跡遺構 (H-T4) 実測図 (1/80)	16
第11図	西岡台遺跡遺構 (H-T8) 実測図 (1/80)	17
第12図	西岡台遺跡遺構 (H-T5・H-T7) 実測図 (1/80)	19
第13図	西岡台遺跡遺構 (H-T6) 実測図 (1/80)	21
第14図	古墳時代遺構想定断面図 (1/200)	23
第15図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (1) (1/3)	25
第16図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (2) (1/3)	26
第17図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (3) (1/3)	28
第18図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (4) (1/3)	30
第19図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (5) (1/3)	32
第20図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (6) (1/3)	33
第21図	西岡台遺跡出土土師器実測図 (7) (1/3)	35
第22図	西岡台遺跡出土円筒埴輪実測図 (1/3)	38
第23図	西岡台遺跡出土土師器の分期	39
第24図	関連遺跡分布図	46

石ノ瀬遺跡

第1図	石ノ瀬遺跡位置図 (1/25,000)	49
第2図	石ノ瀬遺跡調査地 (1/2,500)	50
第3図	石ノ瀬遺跡調査地 (工事完了後) (1/2,500)	50
第4図	石ノ瀬遺跡調査区設定図 (1/400)	51
第5図	石ノ瀬遺跡遺構図 (1/300)	53
第6図	石ノ瀬遺跡甕形土器分類模式図	56
第7図	石ノ瀬遺跡壺形土器分類模式図	57
第8図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	58
第9図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	60
第10図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	61
第11図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	62
第12図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	63
第13図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図 (1/3)	64
第14図	石ノ瀬遺跡出土甕形土器・壺形土器実測図 (1/3)	66

第15図	石ノ瀬遺跡出土壺形土器実測図 (1/3)	69
第16図	石ノ瀬遺跡出土鉢形土器・高坏・器台実測図 (1/3)	70
第17図	石ノ瀬遺跡出土朝鮮系無文土器実測図 (1/3)	83
第18図	石ノ瀬遺跡出土陶質土器・赤焼土器実測図 (1/3)	85

上松山遺跡

第1図	上松山遺跡位置図 (1/25,000)	87
第2図	上松山遺跡調査地 (1/2,500)	88
第3図	上松山遺跡遺構全体図 (1/400)	90
第4図	上松山遺跡1～4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	92
第5図	上松山遺跡1号周溝墓出土土器実測図, および2号周溝墓出土土器実測図(1) (1/3)	93
第6図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (2) (1/3)	94
第7図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (3) (1/3)	95
第8図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (4) (1/3)	96
第9図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (5) (1/3)	97
第10図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (6) (1/3)	98
第11図	上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図 (7)・3号周溝墓出土土器実測図(1) (1/3)	99
第12図	上松山遺跡3号周溝墓出土土器実測図 (2) (1/3)	100
第13図	上松山遺跡3号周溝墓出土土器実測図 (3) (1/3)	101
第14図	上松山遺跡4号周溝墓出土土器実測図 (1) (1/3)	102
第15図	上松山遺跡4号周溝墓出土土器実測図 (2) (1/3)	103
第16図	上松山遺跡4号周溝墓出土土器実測図 (3)・S D01出土土器実測図(1) (1/3)	104
第17図	上松山遺跡S D01出土土器(2)・他遺構出土土器実測図 (1/4)	105
第18図	上松山遺跡S D01出土土器 (3) 実測図 (1/4)・S D02～07出土土器実測図 (1/3)	106
第19図	上松山遺跡1号井戸およびC-3・C-6・D-3出土土器実測図 (1/3)	107
第20図	上松山遺跡D-3・D-5・D-6出土土器実測図 (1/3)	108
第21図	上松山遺跡表土および攪乱部出土土器実測図 (1/3)	109

表 目 次

西岡台遺跡

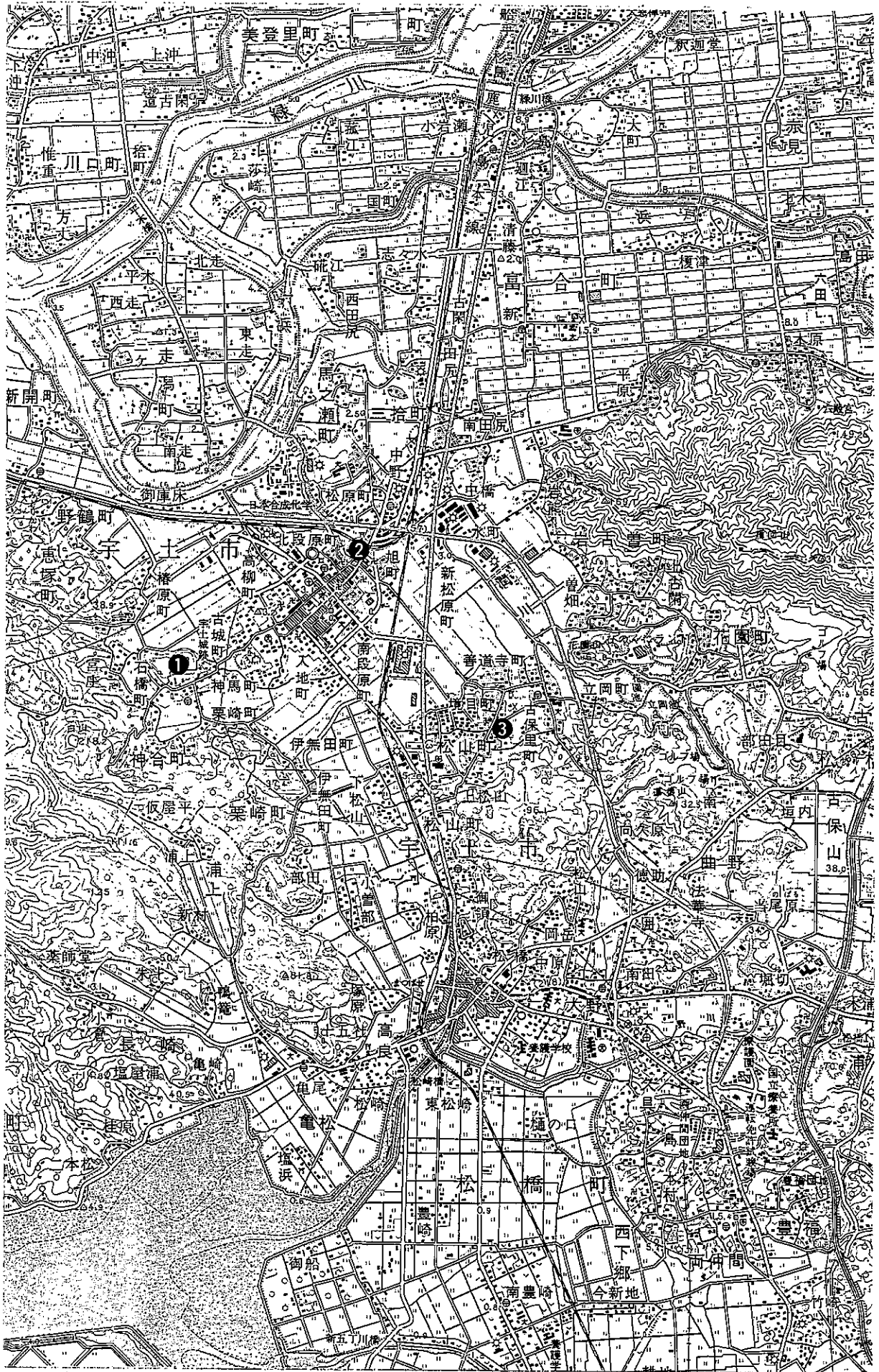
第1表	西岡台遺跡出土遺物一覧表	41
第2表	宇土半島基部における前期古墳一覧表	43
第3表	宇土半島基部における集落遺跡一覧表	44
第4表	土師器編年対照表	44
第5表	西岡台遺跡と古墳との対応関係	45

石ノ瀬遺跡

第1表	石ノ瀬遺跡出土遺物弥生土器集計表	59
第2表	石ノ瀬遺跡出土甕形土器・壺形土器と他遺跡の対応関係	70
第3表	石ノ瀬遺跡出土弥生土器観察表	72
第4表	石ノ瀬遺跡出土朝鮮系無文土器観察表	84
第5表	石ノ瀬遺跡出土陶質土器・赤焼土器観察表	85

上松山遺跡

第1表	上松山遺跡遺構一覧表	91
第2表	上松山遺跡出土遺物観察表	110



3遺跡位置図 (1/50,000 国土地理院発行五万分の一「熊本・八代」を使用)
 ①西岡台遺跡 ②石ノ瀬遺跡 ③上松山遺跡

にしおかだい
西岡台遺跡



V字溝内土師器出土状況



古墳時代溝（左）と中世溝（右）の重複状況

西岡台遺跡

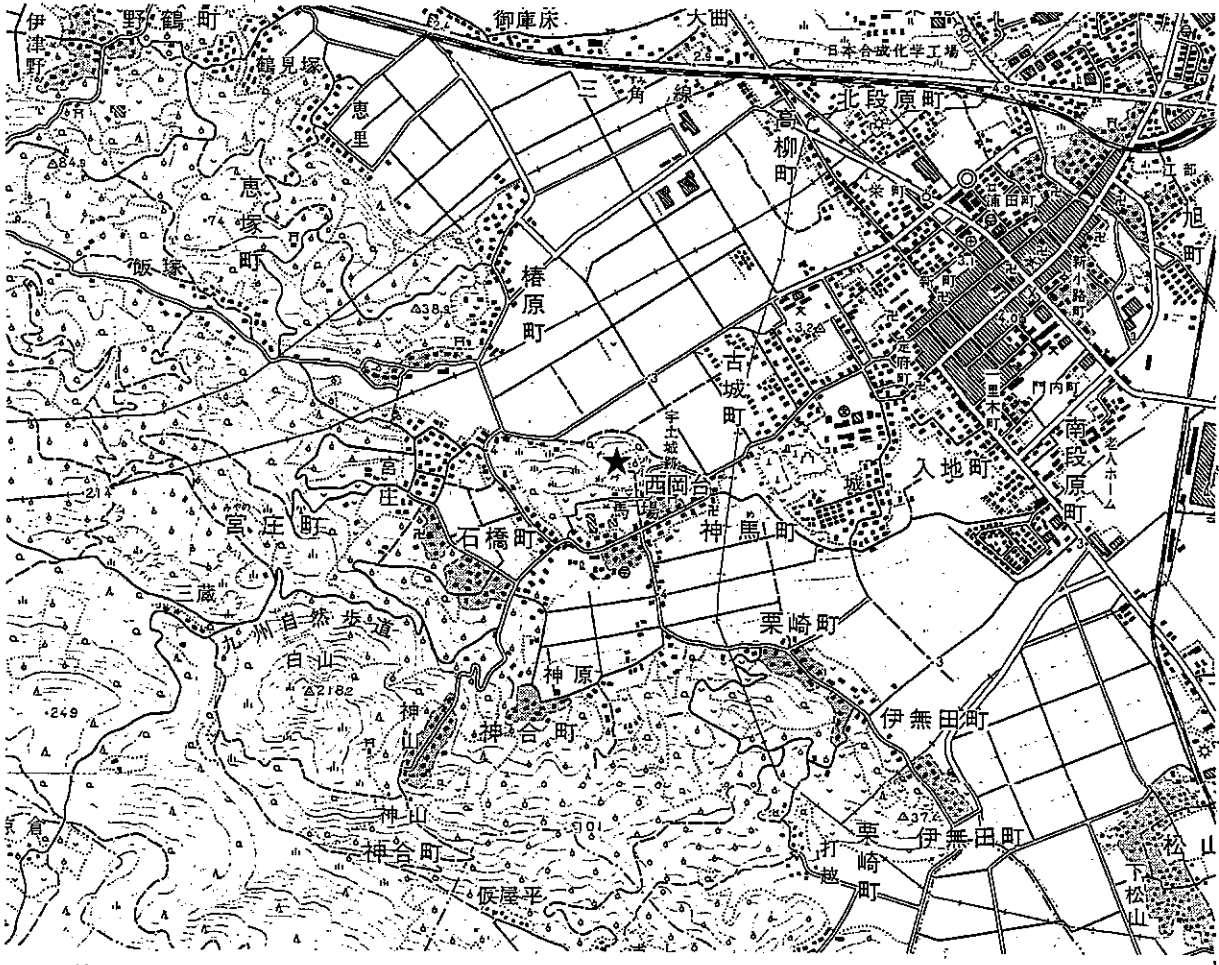
1. 遺跡概説

(1) 調査の経緯

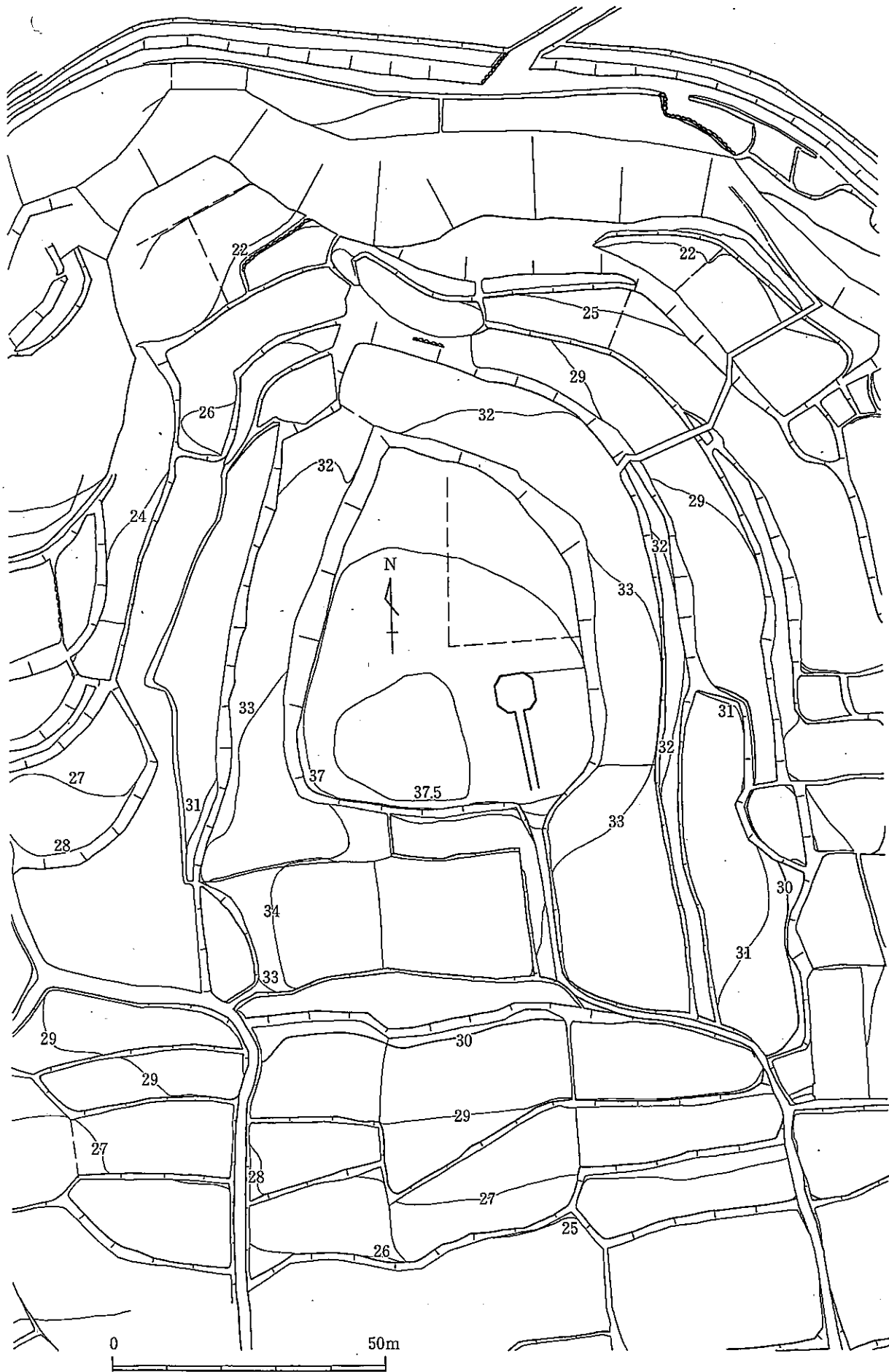
宇土市神馬町字千畳敷・三城・西岡・日平・西平に市立鶴城中学校を移転することが昭和49年1月に決定した。ところがこの場所は「宇土城跡（西岡）」の名称によって昭和47年12月23日付けで市の史跡としての文化財指定がなされていたので、事前の発掘調査を実施することになった。^(註1)

調査は、熊本県文化財専門委員であった故原口長之氏を調査団長とし、昭和49年4月から昭和50年3月まで宇土市教育委員会が中心となって実施した。調査着手の早い段階で、当初予想した以上に遺構の残りがよく、結果的には縄文時代の貝塚、古墳時代前期の首長居館（当時このような考古学的概念はなく、当時は防御機能をもった集落であろうと呼ばれた。なお、本資料集において武末純一氏は首長層居宅という名称を使用されているが、高木はこれに首長居館という名称を用いている。）、中世宇土城に伴う遺構などを中心として各時代の遺構が濃密かつ良好に存在するということが明らかになってきた。

発掘調査と平行して学校建設に向けての用地買収や基本設計案の作成も実施されていたが、上記したような埋蔵文化財の存在や用地買収の難航によって、中学校の移転設計案の修正がたびたび行われた。結果的には昭和50年3月31日に市執行部・学校関係者・学校建設期成会・



第1図 西岡台遺跡位置図 (★、1/25,000 国土地理院発行二万五千分の一「宇土」を使用)



第2図 千疊敷旧地形図（昭和49年当時）

文化財関係者等による会議が実施され、当時の大和忠三宇土市長は、「西岡台」への鶴城中学校建設を断念することを明らかにした。

つまり、この場所を文化財として残し史跡公園として保存活用するという方向性を打ち出し、史跡保存の検討に入ることを発表したのである。

その後史跡指定に向けて、貝塚部分の範囲確認調査を実施し、昭52年2月には発掘調査報告書を刊行するに至った。報告書は、国の文化財保護審議会に諮問していただくため早急に作らざるを得なかったため、古文書等文献による調査内容が主となり、発掘関係の内容については殆ど収録できず、概要を述べるに止めた。

報告書刊行後の昭和53年3月12日に国指定史跡「宇土城跡」の名称で官報告示が行われ、正式に史跡に指定された。以後は指定地内の未買収地についての用地買収に着手することになり、昭和56年「史跡宇土城跡環境整備計画」を策定。同年から整備に着手し、遺構発掘と平行して整備事業が継続的におこなわれている。

遺跡の保存に関して若干の補足をしておくと、発掘調査に着手してから5ヶ月が経った昭和49年10月頃になって、文化財専門委員会での保存要望をはじめとして、宇土文化の会（富樫卯三郎会長）や西岡台を守る会（村田多喜治会長）による遺跡の保存運動が起こった。

遺跡に対して地元有識者による保存要望や、宇土市内の文化財に興味を持つ人々によって結成された組織^(註2)によって保存運動が動き出し、結果的には遺跡は保存されることになった。

(2) 遺跡の名称

遺跡の名称は、調査着手当時「西岡台遺跡」を使用しており、調査時や調査終了後数年は、この名称を使用してきた。しかし、国指定史跡の名称が「宇土城跡」と決定されることになり、報告書の表題は「宇土城跡（西岡台）」の名称を使用し、遺跡名は史跡宇土城跡として呼ぶこととなった。ただ、中世城郭の史跡指定を受けたとはいえ、史跡内には縄文時代の貝塚部分や、古墳時代の首長居館その他の遺構が複合的に存在するため、考古学界では種々の名称が用いられることがある。

縄文時代の貝塚については、「西岡台貝塚」や「轟貝塚（西岡台地区）」、古墳時代首長居館については「西岡台遺跡」と呼び、時には宇土城遺跡と呼ばれることもある。

ただ、問題をやや複雑にしているのは、「宇土城跡」と呼ぶ場合、今回の宇土氏・名和氏の「中世宇土城」と、その場所から東側200mの場所に隣接して小西行長が築城した「近世宇土城」とが混乱する恐れがあるということである。しかも、近世宇土城には弥生時代前期の環濠集落遺構が検出されており、それは、『宇土城三ノ丸跡』において報告された通りである。

これまで宇土市で発行された発掘調査報告書において宇土城内の遺跡に関するものとしては次の8冊があり、中世宇土城と近世宇土城は区別される。

中世宇土城跡関連（宇土市神馬町）

- a 『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年2月
- b 『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集、1985年3月
- c 『宇土城跡（西岡台）Ⅱ』宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集、1988年3月
- d 『宇土城跡（西岡台）Ⅲ』宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集、2000年3月

近世宇土城跡関連（宇土市古城町・神馬町）

- a 『宇土城跡（城山）—宇土城跡（城山）調査概報Ⅰ—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集、1981年3月
- b 『宇土城跡（城山）—宇土城跡（城山）調査概報Ⅱ—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第

7集、1982年3月

c 『宇土城三ノ丸跡—弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査—』宇土城三ノ丸跡発掘調査団・熊本勤労者住宅生活共同組合、1982年12月

d 『宇土城跡(城山)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集、1985年3月

(3) 遺跡の概要

西九州の中央付近、熊本平野と八代平野を分けするかのよう(註1)に西側に向けて突出した宇土半島の基部には古代以来多くの遺跡に恵まれている。西岡台は、地質的に宇土半島の主峰である大岳の火山噴出物である旧期輝石安山岩が基盤にあり、現状では独立した丘陵となっている。

この独立丘は東西2ヶ所に高位部があつて、西側が最も高く海拔標高39.1mをはかり「字三城」を中心とする。東側がそれよりやや低く37.5mあり、「字千畳敷」を中心としている。中世宇土城の主郭となるのは、後者の千畳敷部分であり、頂上付近を一段下がった平場に中世の空堀をめぐらし、防御機能を高めており、主郭にふさわしい堅固な守りとなっている。

中世城の中心となるこの東側高位部に、城郭築造を千年以上も遡る古墳時代前期にも、防御的な機能をもった大規模なV字溝が巡っていることが昭和49年の発掘調査によって確認された。昭和49年当時、古墳時代にこのような大V字溝をめぐらすものや、防御的機能をもった大規模な遺構の存在はほとんど知られておらず、この遺構の名称も明確にできなかった。

わずかに宮城県小牛田町山前遺跡において同様の内容をもったV字溝が検出されていたので、これと同種の遺構であることが推測されていたのみである。ただ、その後の発掘調査の急増により全国各地で、ある一定範囲の生活空間を濠や堀で囲んだ遺構が確認され、それが首長居館あるいは首長居宅・豪族居館等の名で呼ばれ、現在のところ全国で100遺跡以上において確認されるに至った。西岡台遺跡は初期の発見例である。

さて、西岡台遺跡にはこの他にも縄文時代前期から後期にかけての遺構が西北部付近に広がっている。縄文中期には間違いなく貝塚を形成しており、同期の植物堅果類を貯蔵するための貯蔵穴5基も確認されている。^(註3)

明確な遺構は検出できていないものの弥生時代後期に属する遺物の発見もある。また、古墳時代前期に属する首長居館のほかにも千畳敷部分には古墳が築かれていたとみられ、V字溝上層からは半分ほどが遺存した倭鏡(獸文鏡)1面が出土している。この鏡には赤色顔料が付着しており、古墳が破壊された折に破棄されたものと思われる。

また、中世の箱堀からは円筒埴輪の破片もいくつか出土しており、倭鏡を伴った古墳のものである可能性がある。

古墳時代以降では、8世紀代に属する須恵器や土師器、それに土製馬等が出土しており、それから後は鎌倉・南北朝・室町末の城郭に関連する遺構が存在する。

(高木恭二)

註

1) 原口・富樫他「宇土城跡(西岡台)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年

2) a 富樫卯三郎「宇土市西岡台遺跡の調査と保存」『考古学ジャーナル』1974年12月号(通巻102号)、ニューサイエンス社、1974年。

b 富樫卯三郎「再び西岡台遺跡の保存について—周溝・周濠と柱穴群の発見—」『夜豆志呂』第38号、八代史談会、1975年。

c 富樫卯三郎「西岡台遺跡のV字溝—高地性集落の探求へ—」『熊本展望』1975年春季号、田水社、1975年。

3) 渡辺誠・高木恭二・木下洋介他「西岡台貝塚」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第12集、1985年

2. 遺構概説

(1) 遺構の状況と発掘区の設定^(註1)

本資料集では古墳時代のV字溝(SD01)を中心とした遺構・遺物に限定して概要を述べるが、一部、この遺構に近い時期と考えられる円筒埴輪についても触れることになる。

すなわち、中世城郭に伴う遺構の発掘調査を前提にして調査区の設定を行ったが、予想に反して古墳時代の大きなV字溝が検出され、大きな成果を取めることができた。偶然とはいえ中世の主郭部分の防御施設と似たつくりであり、時代を超えて共通した観念が存在したことを示しており興味深い。

調査区は字千疊敷の頂上部分を取り囲む一段下がった平坦面であり、調査区としてはH地区という名称で設定した(第3図トレンチ配置図参照)。H地区ではまずH-T1において北側部分に中世の箱堀が検出されたが、この堀の南側9mくらいの位置に大きな掘り込み線がわかった。結果的にはこの部分から南側5~6mで反対側の掘り込み線が検出され、その間の部分を掘り下げたところ、検出面から溝底までの深さ約2.8m、地表面から約3.5mのかなり深いV字溝であることが判明した。溝の断面は、外側(このトレンチの場合南側)の傾斜が急になって約65度を測り、内側(北側)では45度となった。

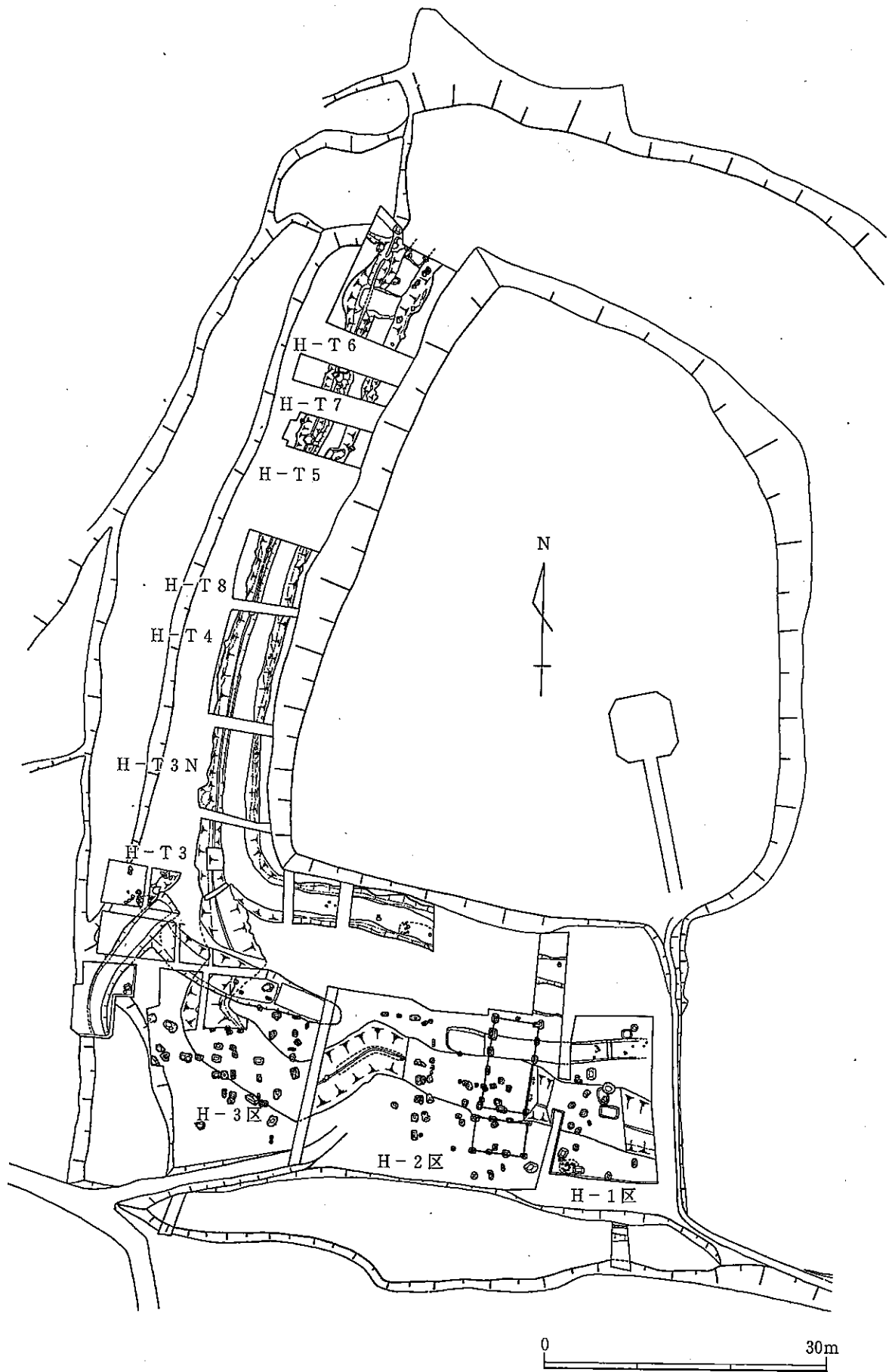
このV字溝は8~9世紀頃にかかなりの部分が埋まっていることが、出土した遺物によって明らかであり、その後この溝が完全に埋まった頃に、城の掘立柱建物跡にともなう柱穴が数多く検出された。下部遺構である古墳時代V字溝の上に、この柱穴群が検出されたために、上面で中世遺構を調査し完了してからでないと下部の遺構に取り掛かれず、古墳時代の遺構検出は必要最小限にとどめざるを得なかった。

H-T1の東側をH1区、H-T1を含む西側一帯をH2区とし、H-T1はその後H2区ET、その西にH-2区、その西をH-2区WTとした。当遺跡で最初にH-T1(H-2区ET)において古墳時代のV字溝が検出され、その東西方向にV字溝掘り込み線が確認できたことから古墳時代遺構の存在確認を行いながら中世遺構の検出發掘を進めていった。V字溝内を最も広く発掘したのはこの2区だけであり、溝底から大量の土師器が検出された。今回資料報告がなされるものの大半はこの部分からの出土である。

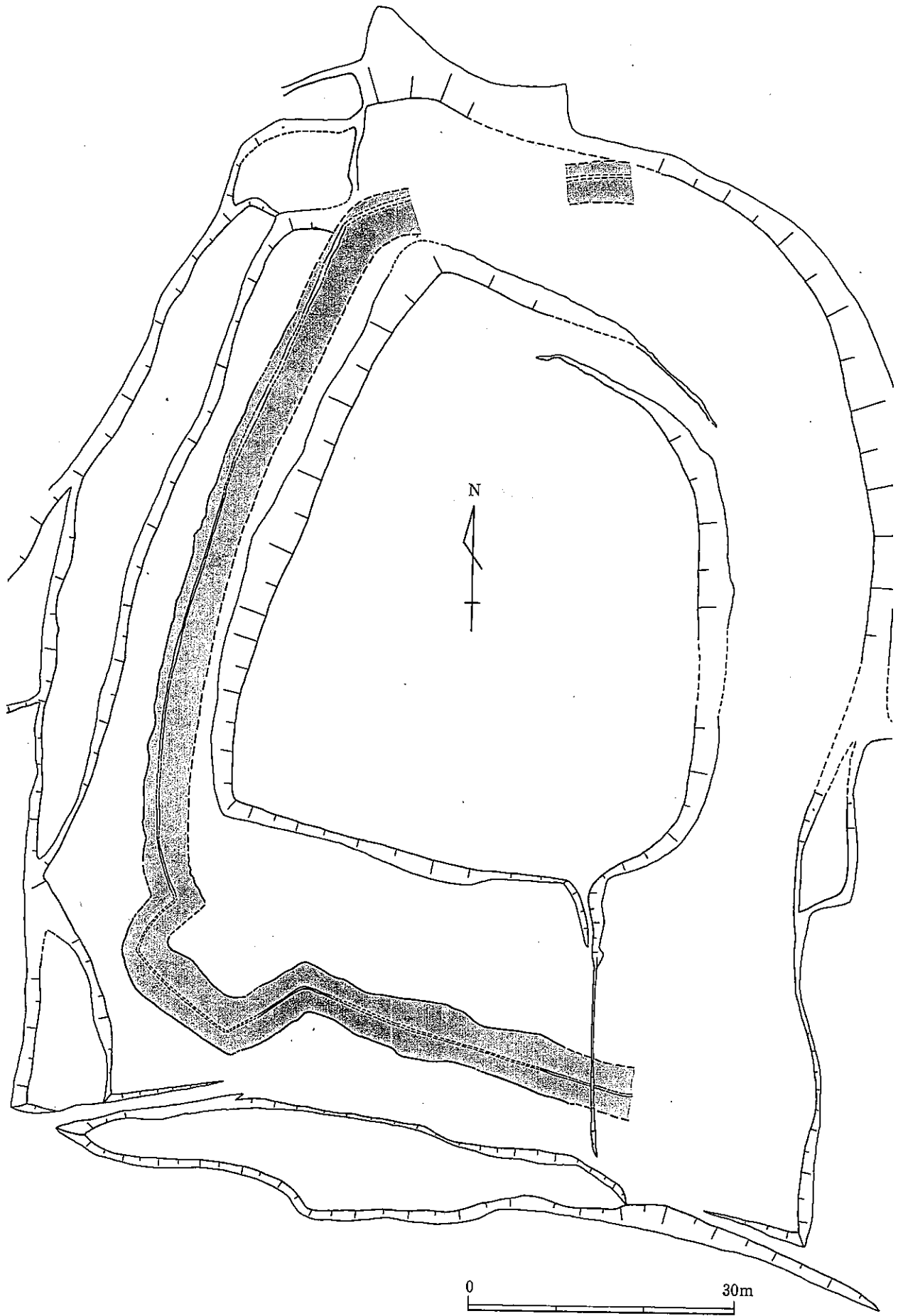
H2区の西側一帯をH3区としたが、この部分は中世柱穴が数多く検出されたので古墳時代遺構はほとんど発掘していない。上面観察だけではあるが、H2区で見られた溝が直線的に延びずに南西方向に大きく張り出すことが明らかになったが、この溝は再び北の方に延びており、結果的にはV字溝全体の中では局部的な現象であり、検出面内法で幅10~12m、長さ6~8m、検出面外法では幅18~21m、長さ約10m部分だけが突出しているということが明らかになった。

H3区の北は、北に向かって順次トレンチを設定していったがそれぞれのトレンチは随時拡大していったので、ややアランダムなトレンチ設定となり、名称もやや変則的なものになってしまったが、北に向けて順に、H-T3、H-T3NT、H-T3N区、H-T4S、H-T4、H-T4N、H-T8、H-T5、H-T7、H-T6ST、H-T6、H-T6NTとした。

H3区の西南部張り出し部から北方向に延びる古墳時代のV字溝は、H-T3付近で中世箱堀と一緒に、ここから北は中世と古墳時代の溝が平行して走っている。ただ、古墳時代溝がある程度埋まった段階でこの溝を切るようにして中世溝が掘られているために、第8図以降に見るように、古墳時代溝の上部を半載しながら約72mにわたって重複して続くことになる。この部分においても溝底から土師器がいくつか出土したが、H-2区で見られたように大量に



第3図 トレンチ配置図



第4図 遺構全体図（トーン部がV字溝）

土師器が出土するようなことはなかった。

なお、平成4年度の発掘調査によってH-1区の東側約5m付近にも古墳時代V字溝が延びていることが明らかになっており、更には平成12年度に実施した中世遺構の検出においても、最北端付近にあたる付近で、ごく一部ではあるが古墳時代V字溝の一部と思われる遺構が検出されたので、少なくとも今回新たに見つかったH-T6NTから東30m付近までは延びていることが確認できた。頂上平場の一段下がった段をほぼ一周していることは間違いのないと思われるが、この段の東側部分では、中世の箱堀に関する遺構は検出されているものの、西側で明らかになったような溝の重複は見られなかった。おそらくもっと東寄りにV字溝は通っていたものと思われるが、中世城に伴う段の整形や切り岸の造作などによって破壊されたものと思われる。

しかし、古墳時代の溝はかなり深いので、おそらく溝底部分は残っていると思われるものの、上部に中世遺構が被っているために残念ながら現段階では確認できない。

(2) V字溝の状況と遺物出土状況

以下、H-1区ET、H-2区WT、H-3区～H-T6の3地区における古墳時代V字溝の状況について概観してみることにする。

① H-1区ET

古墳時代V字溝は耕作土まで含め8層にわたっている。Ⅱ層下部からⅢ層にかけての層が15～16世紀頃の中世後期に形成されたもので、柱穴や堀はここから検出される。このⅢ層の下に黒色土層(Ⅳ層)があり、V字溝上面近くを覆っているが、その直下に赤褐色土層(Ⅴ層)が厚く堆積している。このⅤ層上部からは8～9世紀に属する須恵器や土師器が出土しており、その頃に堆積した層である事は間違いのない。そうなれば、Ⅳ層は平安から鎌倉時代頃に堆積した層であるということになる。

なお、このトレンチのⅤ層上部標高32.85m付近から古墳時代に属する倭鏡が1面出土している。^(註2)この鏡は全体の半分くらいしか遺存していなかったが、赤色顔料が付着し、散乱した状態での発見であったので、おそらく古墳等の埋葬遺構にあった可能性が高い。出土層位から考えて、8～9世紀頃に古墳の破壊と共に破棄されたものと思われる。

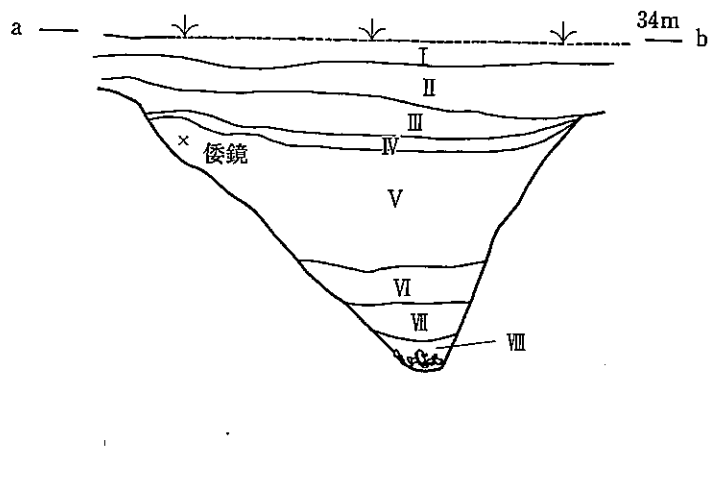
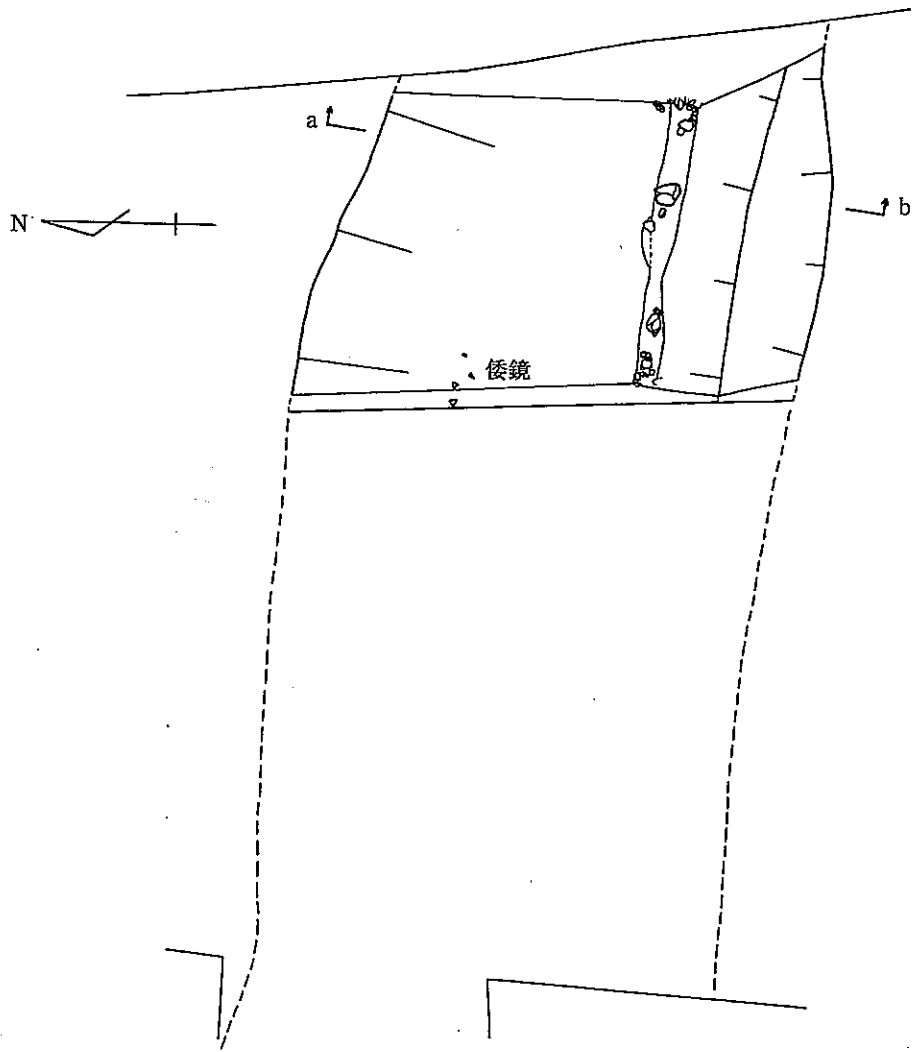
また、V字溝出土の土師器以外にも、中世の堀に混じって円筒埴輪が幾つか検出されており、その2点について第22図に実測図が掲載されているが、これらの埴輪が、倭鏡出土古墳に伴う蓋然性は極めて高い。鏡は5世紀中頃の所産とみられる。

V字溝は、上面の幅約4.7m～5.5m、深さ約2.7m～2.9mを測るのに対して、溝底は15～30cmくらいしかない。溝の断面をみると、南側が急な傾斜であり、60～65°、北側がこれより緩いカーブで45°くらいで、北側を内部とする生活空間の存在が想定できる。これに比べて南側が急なのは防衛的機能を備えているからであろう。

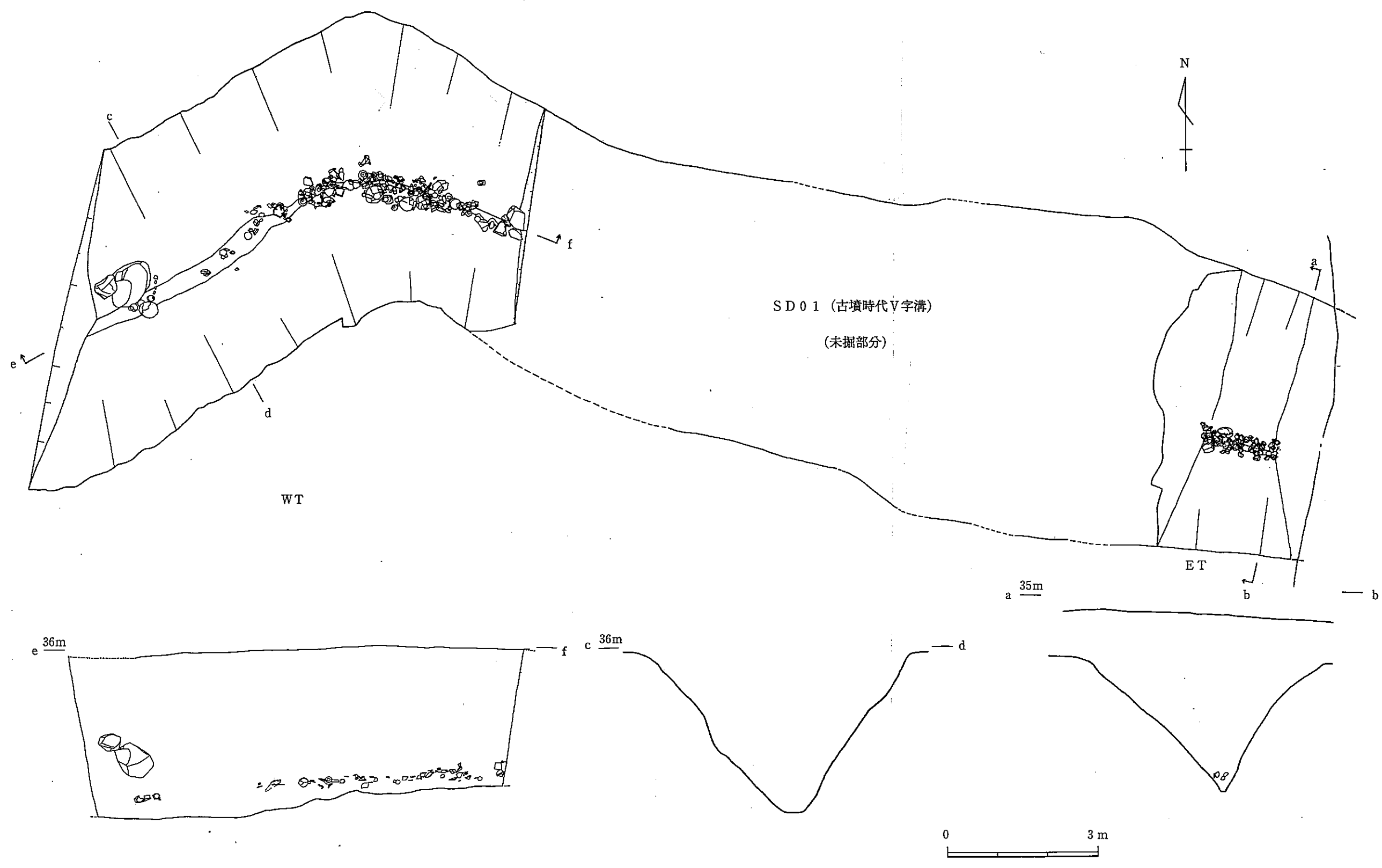
H-1区ETの最下層(Ⅷ層)から数点の土師器と拳大の礫が出土したが、これがこのV字溝に伴うものであり、溝の掘削と使用期間を考える上で貴重な資料である。土師器は溝底近くにだけ位置しており土層の分割は不可能であった。この第Ⅷ層以外には上層のⅤ層に含まれる8～9世紀の遺物だけで、Ⅵ・Ⅶ層が堆積する時期に、この地は生活の場としては利用されていなかったと推測される。



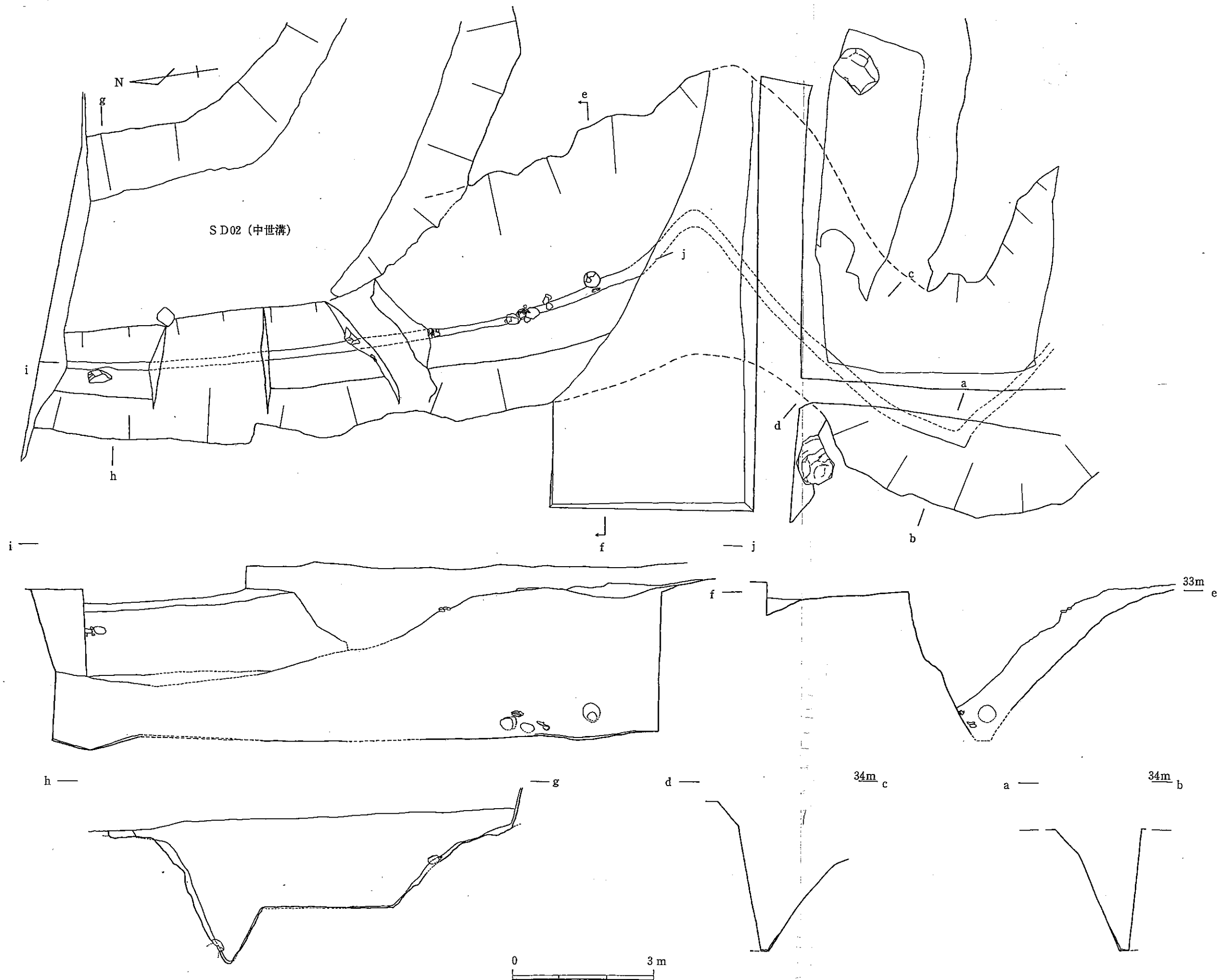
第5図 H-1区
出土倭鏡実測図



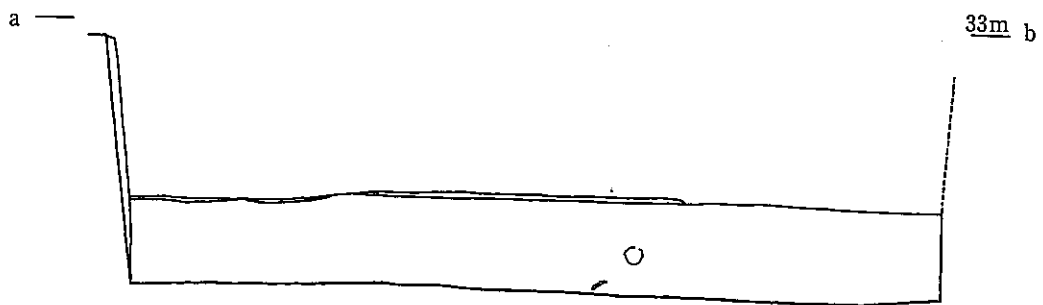
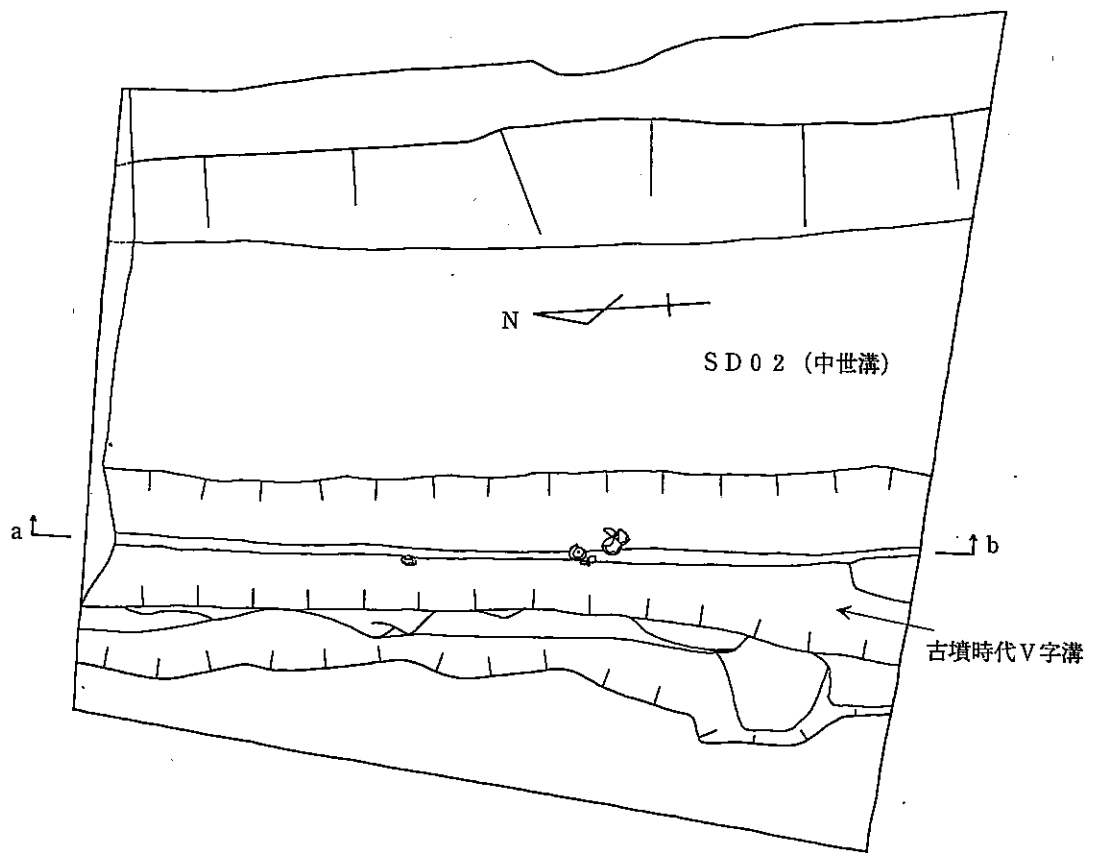
第6图 西岡台遺跡遺構 (H1区ET) 実測图



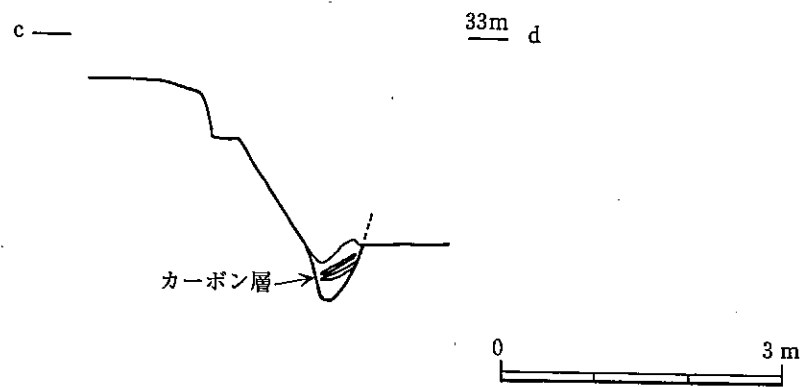
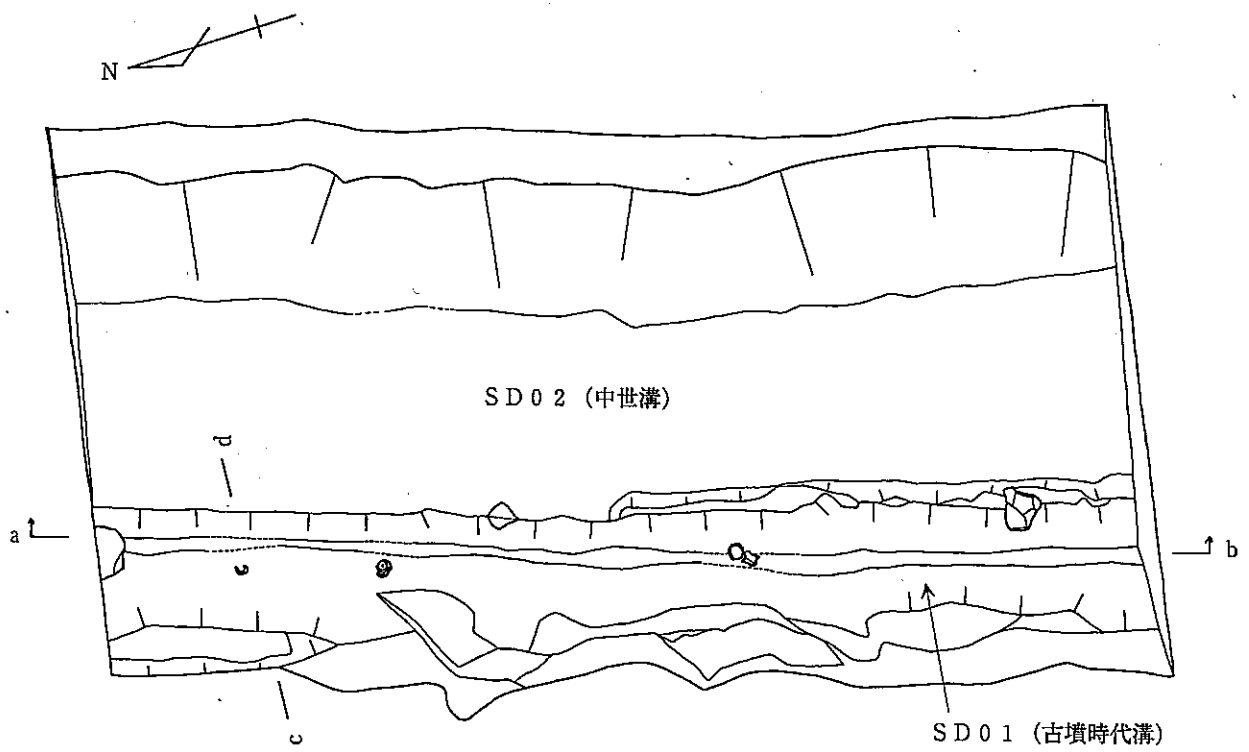
第7図 西岡台遺跡遺構 (H2区) 実測図



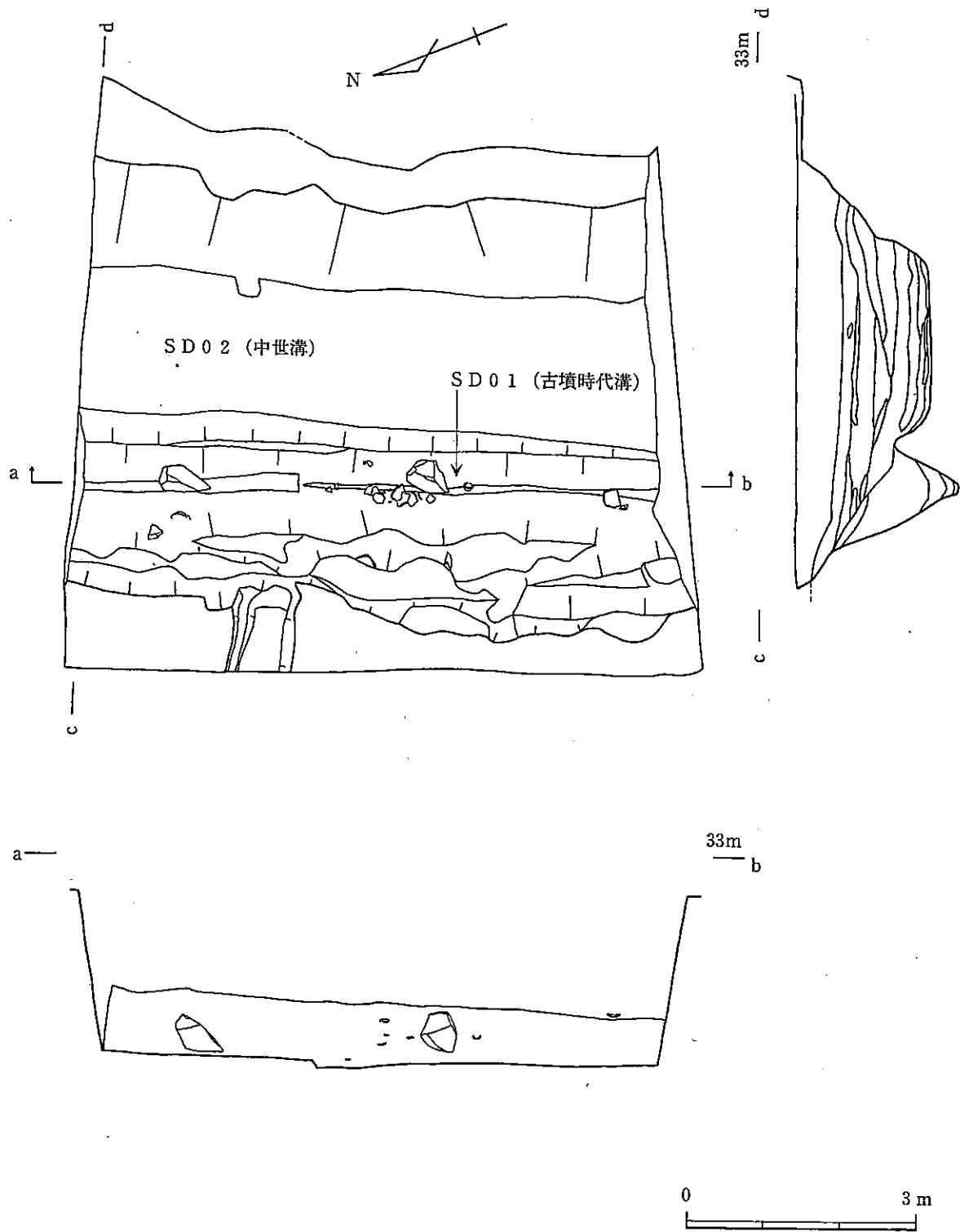
第8図 西岡台遺跡遺構 (H3区) 実測図



第9図 西岡台遺跡遺構 (H-T3N) 実測図



第10図 西岡台遺跡遺構 (H-T 4) 実測図



第11図 西岡台遺跡遺構 (H-T 8) 実測図

② H-2区WT

V字溝は、上面の幅約4.6m～5.8m、深さ約2.9m～3.5mを測るのに対して、溝底は15～30cmくらいしかない。溝の断面は、ここも南側が急な傾斜であり、60～65°、北側がこれより緩いカーブで45°くらい、北側を内部とする生活空間の存在が想定できる。これに比べて南側が急なのは防衛的機能を備えているからと思われる。

V字溝の溝底から約40～65cmくらい浮いた状態ではあるが、大量の土師器が検出された（IV層）。土器そのものは深さ約50cmの範囲内に無造作という感じで検出されたものであり、整然と配置された状態ではなくむしろ北側上部から転落したように見受けられ、廃棄されたものと解された。溝内の土器の堆積に顕著な層分けは不可能で、土器の間に明確な間層は観察できなかったが、堆積した土器の遺存状況はよく、細片になったものはあまりなく個体ごとにかたまりとなっているものが多い。なお、土器の間には拳大から人頭大くらいの礫も入っていたが、礫と土器には上下関係その他には明確な違いを見出すことは出来なかった。

土師器に混じって有溝石錘や赤色顔料を入れたとみられる土師器甕も出土した。また、Ⅲ層下部から安山岩の巨岩を検出したが、古式土師器埋没後、ある程度時間が経ってからの転落である。

③ H-3区～H-T6

H-2区WT付近で南西に張り出した溝は、一旦、北西方向に向きを転じて更に北東方向に屈曲する。つまり「コ」字形に張り出し部を持ってH-T3付近から北は真っ直ぐに北方向に延びている。H-T3からは中世の箱堀と重複するために、第11図（H-T8）に示すような断面形で、東側半分は削られた状態となって続く。ただ、東側は現在では中世箱堀があって大走り部分を含めて平坦面を形成しているが、古墳時代当時、溝の東側は頂上平場まで段は形成されていなかったと見られるので、溝底からの高さは約6mあってかなり急峻であったことが想像できる。

H-3区～H-T6の区間内での土師器の出土量は極めて少なく、ひとつのトレンチに1～3個ある程度である。出土するのは溝底ないしは底から2層目くらいの位置であり、全体としてあまり違いはない。

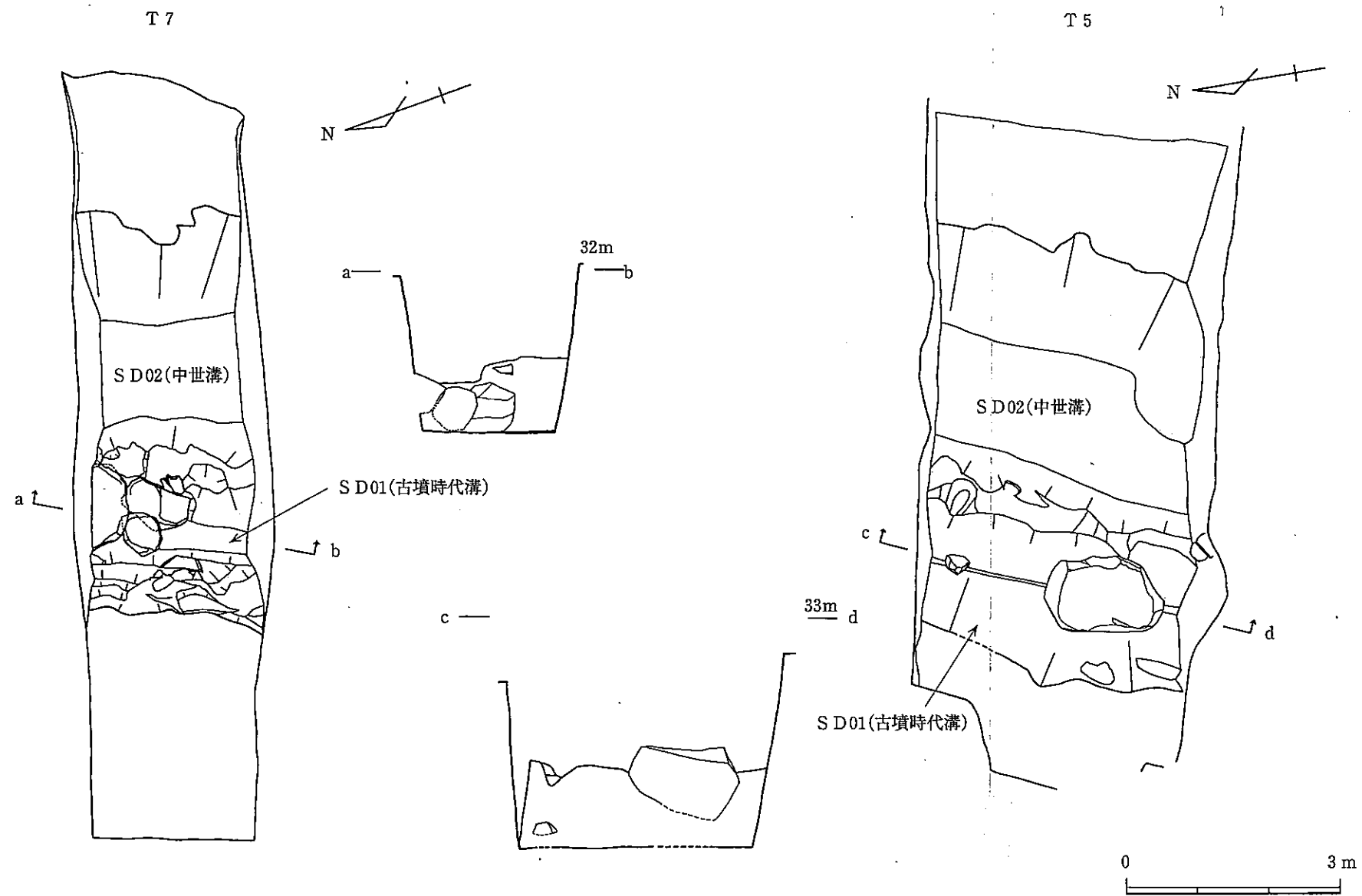
V字溝の北端は、調査区内では完結していないし、東側に周るということも確認できなかった。

(3) 昭和49・50年以降の発掘調査所見

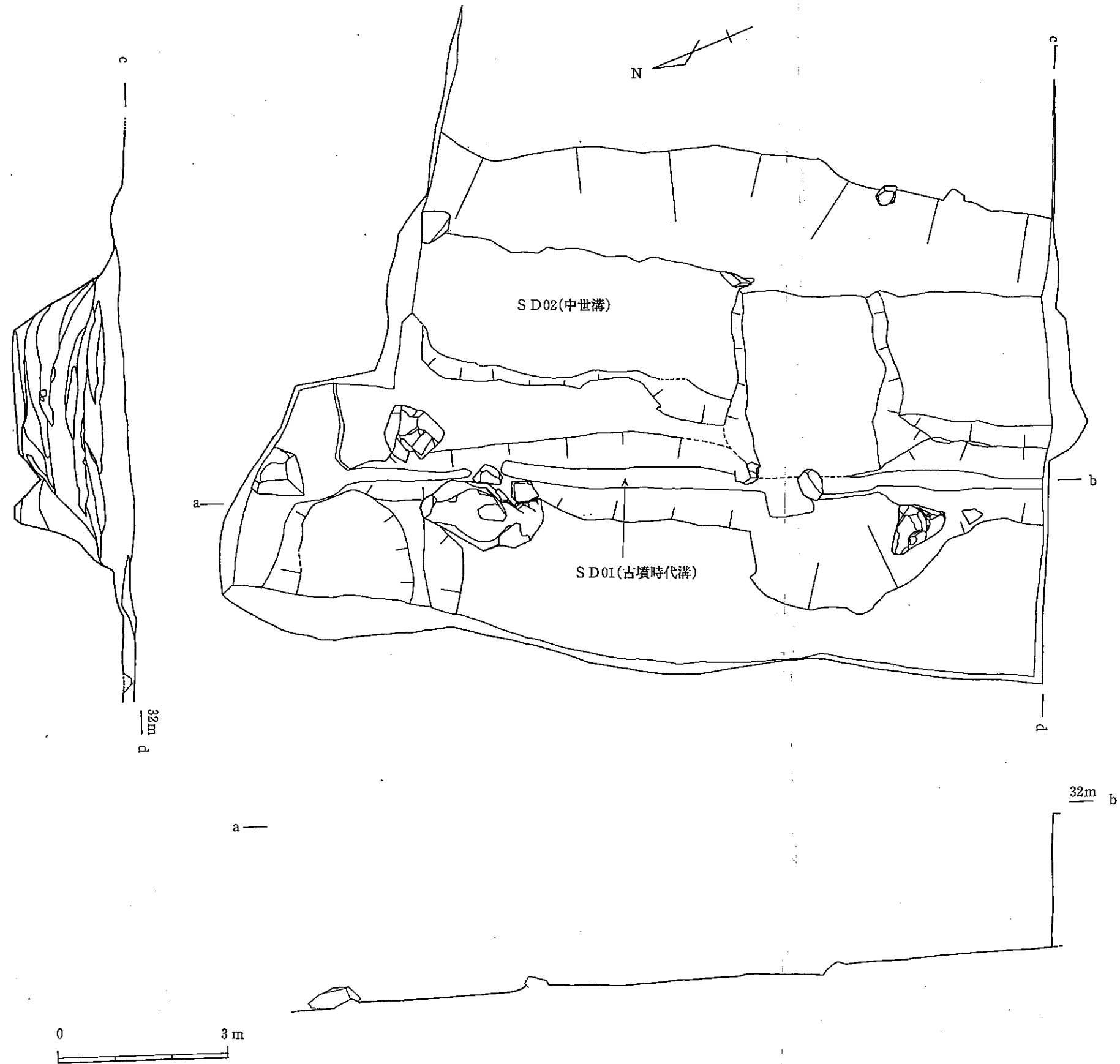
昭和49・50年に明らかとなった古墳時代V字溝は、その後の中世城郭整備に伴う発掘調査によって、ごく一部ではあるが明らかになったことがあるので、ここに追加しておく。

すなわち、H1区において検出された溝は当然のことながら東側に延びるであろうことは予想できたが、50年当時はその延長確認はできていなかった。その確認は、平成4年に行なった試掘において明らかにすることができ、少なくとも5mくらいは東にそのまま延びることは分かった。ただ、更にその後は真っ直ぐに延びるのか、北の方に延びていくのかは重要な点であるが、次に述べるように最北部分にこの溝の延長と見られる溝があるのでおそらく北の方に周っていたことは間違いなからう。しかしながら、この遺跡の場合、上層に中世遺構が被っており、調査はそれを飛ばして下層を掘るわけにはいかないため、その確認は簡単ではない。少なくとも、東側ではこれまでのところ確認されていない。

東の延長も分かっていないように北側端部もV字溝がそのまま真っ直ぐに延びるのか、それとも東に周っていくのかは未確認のままであった。この問題を解決するヒントがやっと平成12



第12図 西岡台遺跡遺構 (H-T5・H-T7) 実測図



第13図 西岡台遺跡遺構 (H-T6) 実測図

年の発掘調査において確認でき、おぼろげながら全体像が見えてきた。第3図に示したように中世の豎堀と見られる遺構の検出の過程で、明らかに中世遺構によってカットされた深い溝が明らかになり、そこに古墳時代V字溝の存在は動かしがたいものとなった。詳細は不明ながら頂上平場を取り囲むような状態であることは間違いない。溝の外縁部南北約105m、内縁部南北約93m、東西70m以上の規模をもつ不整楕円形プランで、面積約5000㎡以上の首長居館としての空間があることが推測できる。なお、南西部に張り出し部が見られたが、同様なものは今のところ他には見つかっていない。南東側や東北側にもあった可能性もあり、加えて陸橋の存在も不明で、今後の課題である。

また、溝底のレベルは南が高く北に行くにしたがって低くなっており、その落差は最大1.7mをはかる。

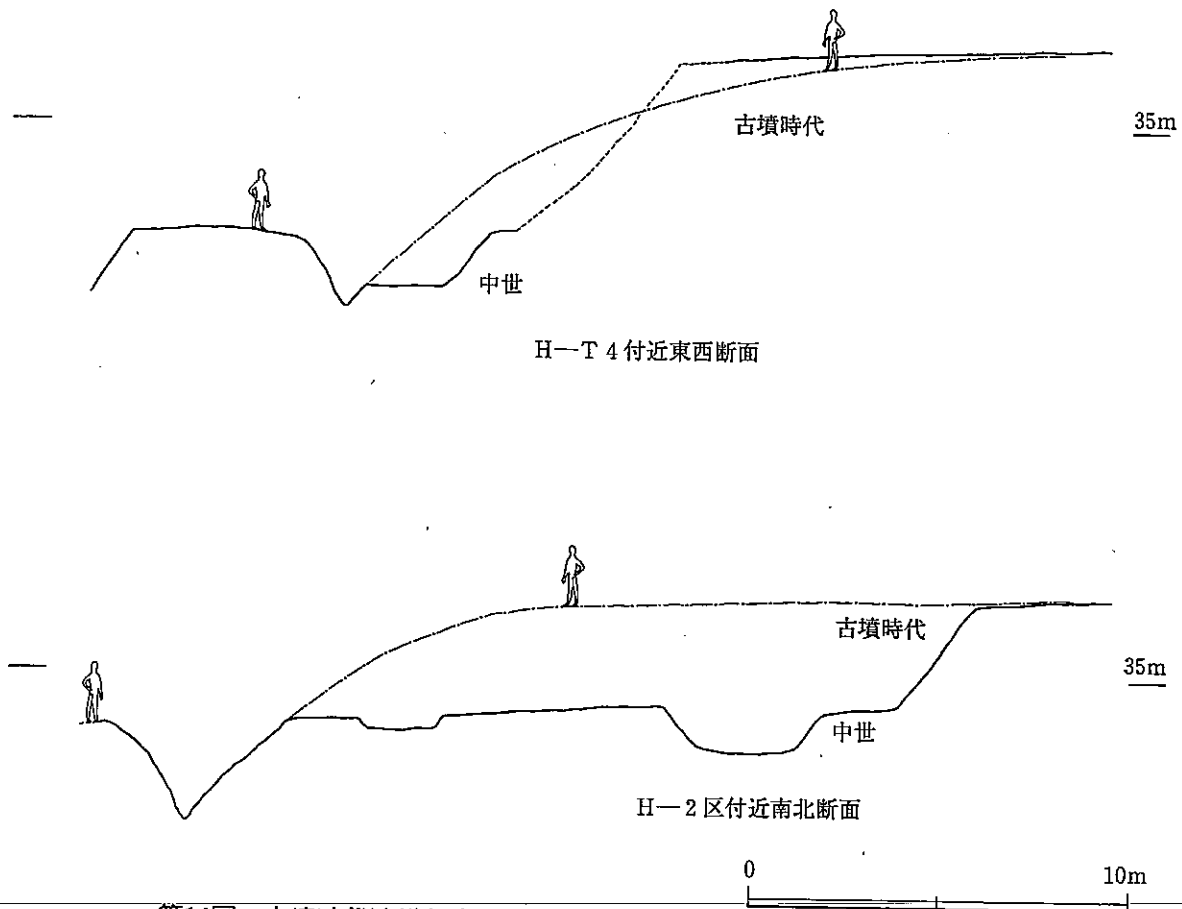
中世に削られた古墳時代V字溝は、本来頂上平場から直接掘り込まれたものであり、たまたま中世箱堀によってカットされたために、現況レベルから掘り込まれたかのような感じになっている。古墳時代にV字溝が掘削された当初の断面を推測すれば、第14図のようになる。

(高木)

註

- 1) 遺跡の発掘調査は、宇土市教育委員会社会教育課(当時)で行い、平山修一氏と高木恭二の二人が担当したものである。当該古墳時代遺構の担当は平山氏であり、高木は別の地区を担当した。今回、平山氏の了解を得て、調査の内容について高木が執筆を行なったものである。
- 2) 鏡はいわゆる日本列島で作られたとみられる青銅鏡であり、直径15.2cmで約半分は発見できなかった。鏡背面に赤色顔料が付着しており、本来は埋葬施設に置かれていた可能性がある。文様はかなりくずれた獣文が内区主文様となっており、その外側の歯歯文の外には擬銘帯が2列めぐっている。

平山修一「獣形鏡」『肥後考古』第3号、肥後古鏡聚英、1983年



第14図 古墳時代遺構想定断面図

3. 遺物解説

(1) 土師器

いずれもSD01から出した土師器である。

① 壺 (第15～第17図)

1～13は二重口縁壺である。

1はこれらの中でもっともさかのぼるとみられ、頸部はやや内傾して直立する。口径19.9cmで、全体的に内外面ともハケ目調整の後、口縁部内面および口頸部外面を横ナデする。

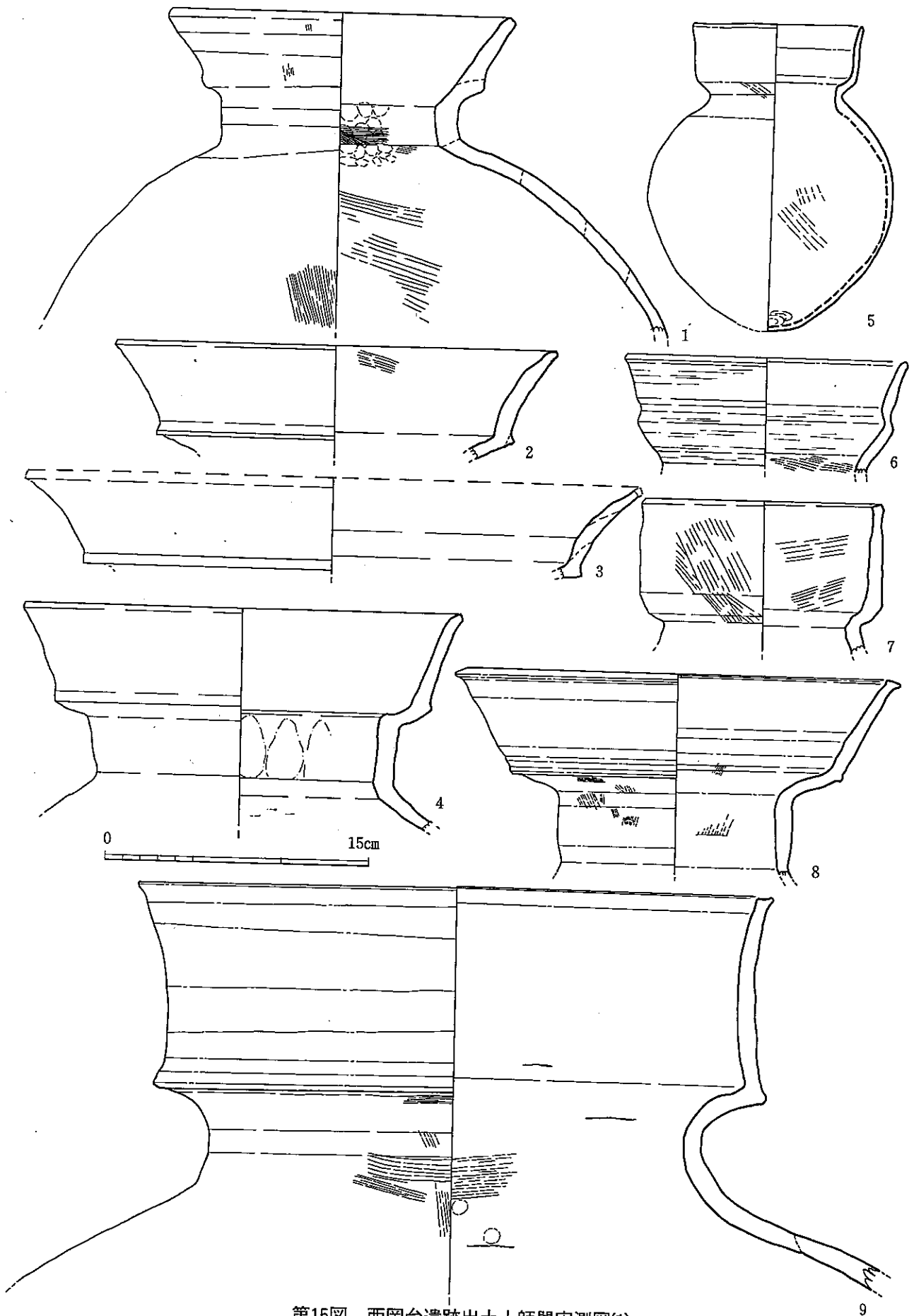
2～4・8・10・13は、直立に近い頸部から屈折して、いったん横あるいは斜上方に明瞭に広がった後に、外反する拡張部がつく類である。2は口径25.2cmで、口縁部を内外面とも強い横ナデで仕上げるが、内面上方に粗いハケ目が残る。3も口縁部のみの破片で、端部を失っているが、推定口径35cmである。内外面とも横ナデで仕上げる。4は頸部がやや上方に開き気味に直立し、屈折部内面に明確な稜をもつ。外面は摩滅のために調整は不明だが、内面は頸部指押えの後に口縁部まで横ナデし、胴部は横ヘラケズリのままである。口径25.0cm。8も4と似た器形だが、口縁端部が左右に拡張し、屈折部の稜は鈍い。内外面とも口縁部は横ナデ、頸部はハケ目調整後にナデ仕上げである。口径25.4cm。10は肩が張った倒卵形の胴部をもち、口径19.0cm、器高46.1cmの完形品である。口頸部は内外面とも横ナデで、胴部外面は風化が著しく調整不明、内面は底部付近に指押さえ、肩部に指押えとナデがみられ、胴下半部は横ヘラケズリである。13も、口径に対する屈折部の径の大きさからみて高杯の杯部ではなく、二重口縁の拡張部とみられる。口径14.6cmで、内外面とも細かな横研磨仕上げである。

5～7、9・11・12は頸部断面がC字形を呈したり、屈折部からの広がり不明瞭な類で、口縁拡張部が外反するもの(6・12)と、頸部に比べて長く直立するもの(5・7・9・11)に細分できる。前者のうち6は屈折部の上がうすくなる。内外面とも強い横ナデで仕上げるが、頸部内面に横ハケ目が残る。口径16.2cm。12は頸部のしまりが強く、口縁端は単純にすぼまる。口頸部は内外面とも横ナデ、胴部外面は荒れているが恐らくハケ目仕上げであり、内面は横ヘラケズリである。口径16.5cm。後者のうち5は口径9.8cm、器高17.7cmの完形品である。口頸部は横ナデだが、頸部外面に斜めのハケ目残り、長胴の外面は荒れて不明、内面はハケ目にナデ仕上げである。丸底の内面は指押えの痕が残る。7は口縁拡張部がやや内湾気味に直立し、口径13.9cmである。内外面とも横ナデ仕上げだが、ハケ目が残る。9は口縁拡張部が外反しながら直立する大型品で、口径36cmである。内外とも口縁部は横ナデ、頸部から肩部はハケ目とナデで仕上げるが、胴部内面はヘラケズリとみられる。11は二重口縁の屈折部の稜が弱く、口縁拡張部は内湾して直立する。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面は指おさえとナデで仕上げる。

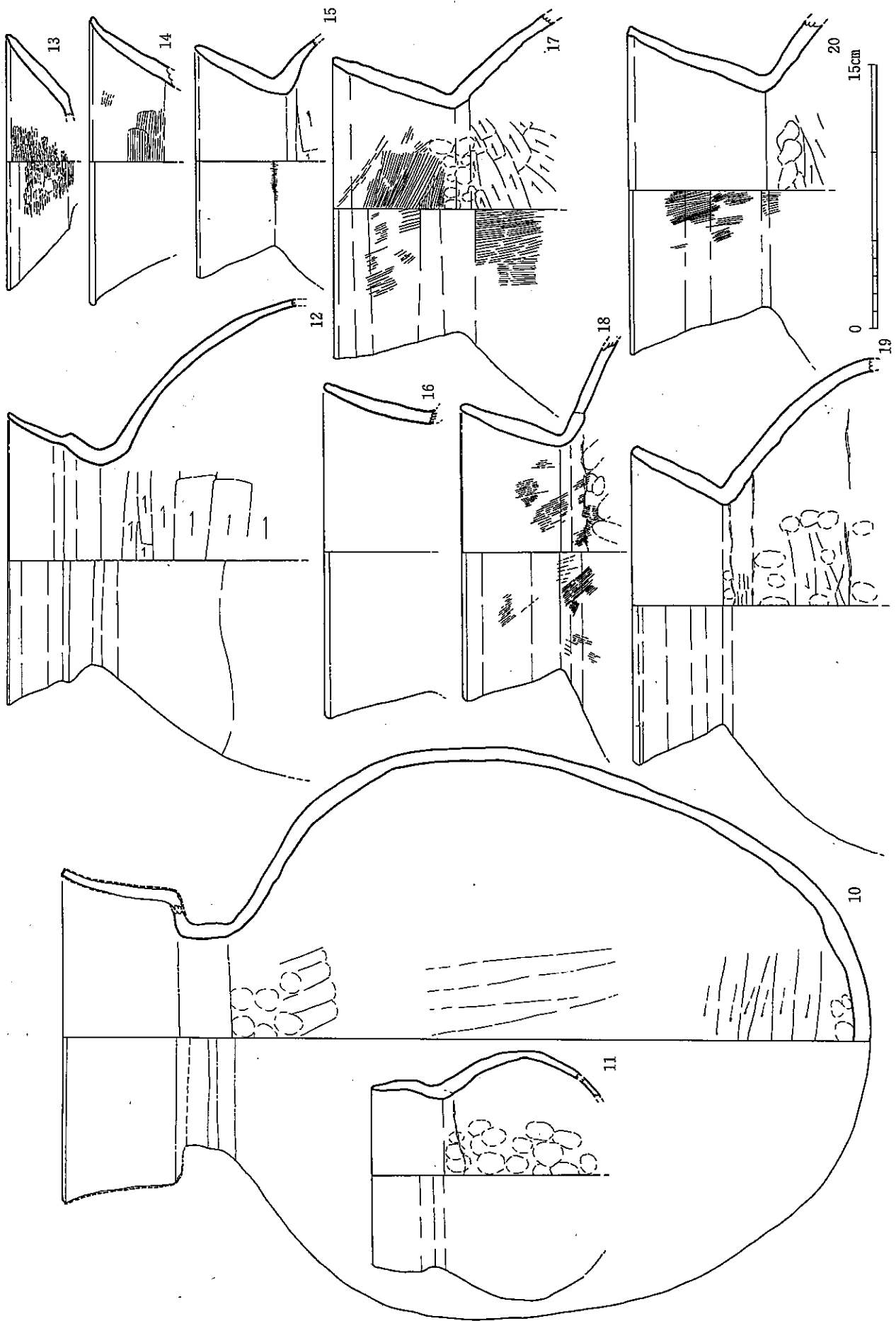
14～23は単口縁の大型壺、36～40は中型壺、24～32は小型壺である。大・中型の壺は、頸部つけねがしまって口頸部が長いことを指標に分類したが、甕との区別が難しいものもある。

14・20は口縁部へ向かって器壁が薄くなり、端部の断面は方形で、上方にわずかに拡張する。14は口径16.5cmで、外面は横ナデ、内面は横ハケ目後に横ナデで仕上げる。20は口頸18.6cmで、外面は縦ハケ目後に口縁部を横ナデして肩部はナデで仕上げ、内面は口縁部が横ナデで、肩部をヘラケズリするが、頸部つけねは指おさえのままである。

15～19は、いずれも口縁端部の拡張がみられず、17は平坦だが、15・16・18・19は丸味を帯びる。15は口径13.3cmで、胴部内面をヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデで仕上げ、頸部つけねの外面に縦ハケ目が残る。16は口径18.9cmである。17は口径17.1cmで、外面と口縁部



第15図 西岡台遺跡出土土師器実測図(1)



第16図 西岡台遺跡出土土師器実測図(2)

内面はハケ目調整後に口縁部を横ナデし、胴部内面はヘラケズリするが頸部つけね付近には指押えの痕が残る。18は口径16.8cmで、外面と口縁部内面から頸部つけね付近を縦ハケ目調整後に口縁部を横ナデし、胴部内面は指押えとナデで仕上げる。19は口径18.1cmで、口縁部を横ナデし、胴部は外面をナデ、内面をヘラケズリ後にナデと指押えで仕上げるが、内面の頸部直下には一部に横ハケ目がみられる。

21～23は大型壺の胴上半部から頸部にかけての破片である。21の胴部はハケ目をナデ消したとみられるが、内外面とも器面が荒れてよく分からず、口縁部は横ハケ目後に横ナデする。頸部つけねの外径が14.4cmである。22は肩が張り、外面ハケ目、内面は横ヘラケズリだが底部付近に指押えの痕が残る。頸部つけねの直下は外面横ナデで、内面は指押えのままである。二重口縁壺の可能性もあり、頸部つけねの外径は16.9cmである。23の胴部の外面はナデ仕上げ、内面はヘラケズリだが頸部つけねの直下は指押えとナデで仕上げる。頸部つけねの外径16.4cm。

36～38・40は球形丸底の胴部にやや内湾する口頸部がつき、口縁端部は丸味を帯びる。36は口径11.25cm、器高15.3cmの完形品で、胴部の外面は縦ハケ目、内面は下半部をヘラケズリし上半部は横・斜のハケ目で調整し、口縁部は内外面とも横・斜ハケ目を横ナデする。37は口径12.5cmの口縁部の破片で、内外面とも横ナデ仕上げだが外面に縦ハケ目が残る。38は球形胴の破片で、外面は下半部をヘラケズリの後に全面ナデ、内面は底部付近にヘラケズリが残るほかはナデと指押えで仕上げるが、内外面とも口縁部の横ナデが頸部つけねの直下まで及ぶ。胴部最大径12.5cm。40は底部を欠くが、口径は12.5cm、復元高14.4cmで、胴部の外面は風化が著しいが横ハケ目残り、内面はヘラケズリ後に指押えで仕上げる。口頸部は内外面とも横ナデだが、内面にハケ目が残る。

39は口径11.0cm、器高18.9cmの長頸壺の完形品である。胴部の外面は右上りの叩き目を斜ハケ目で消しており、内面はヘラケズリだが頸部つけねの直下は指押え後にナデで仕上げる。口頸部の器面は荒れているが、外面の一部に斜ハケ目が残る。

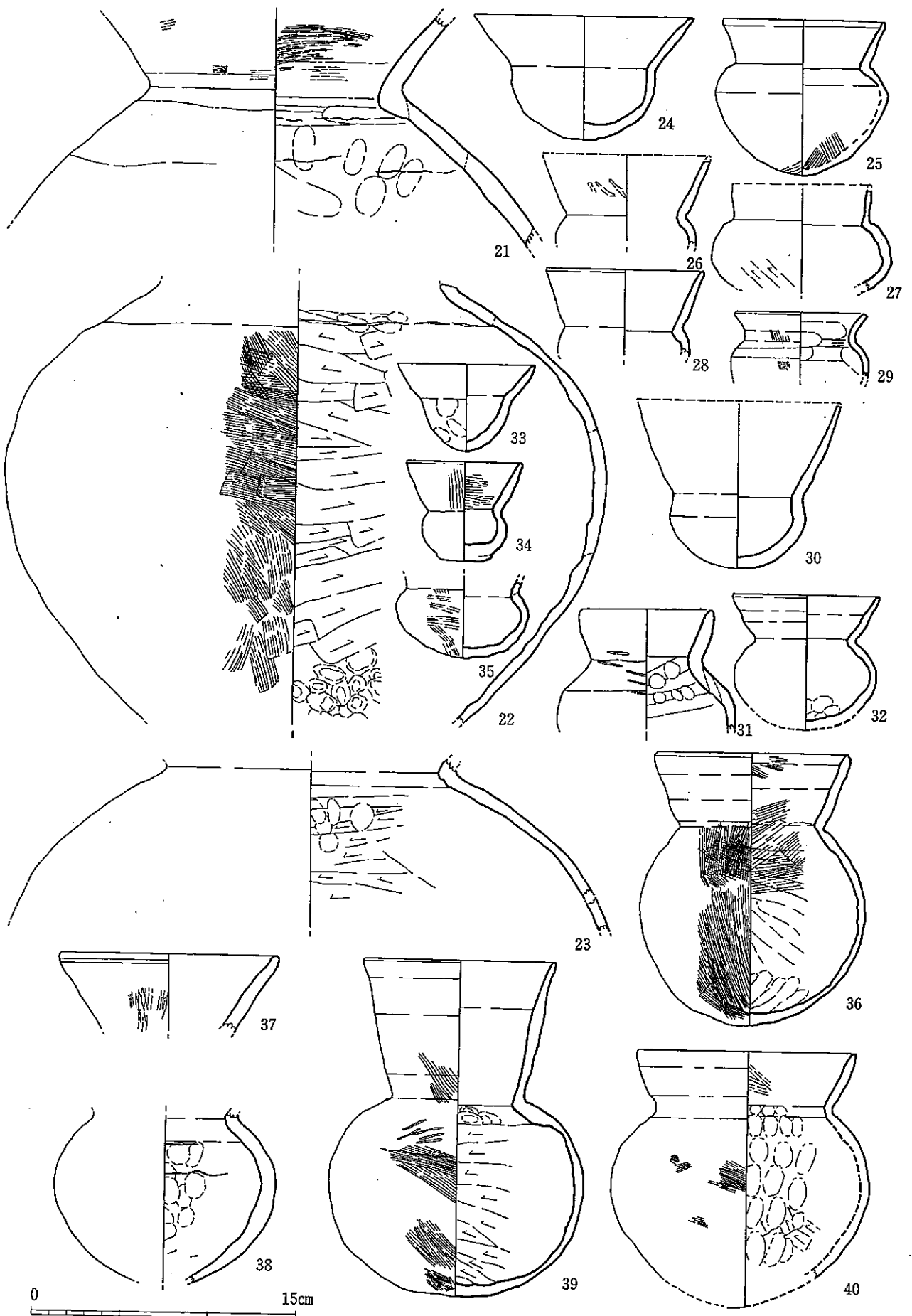
小型壺のうち27・29は在来系に属し、これらの中では最も先行する。27は短く直立する口頸部に扁球形の胴部がつく。外面は、胴下半部を縦ヘラケズリ、上半部から口縁部にかけてはナデ仕上げで、内面は器壁が荒れて調整は不明である。復元口径7.7cm、胴最大径10.3cm。29は口縁部内外とも横ナデ、胴部は外面を縦ハケ目後にナデ、内面を横ハケ目後にナデで仕上げる。口径7.2cm。

25の口頸部はつけねで内外とも明確な稜をもち、やや器壁がうすくなりながら直線的にひろがって、口縁端部は上方に拡張する。胴部はやや肩が張った球形の丸底である。調整は、口頸部が内外面とも横ナデ、胴部の外面は器面が荒れているが部分的にハケ目がみられ、内面は底部付近をハケ目、中位から上半部をナデで仕上げる。口径9.2cm、器高8.8cmで、外底面付近にはススが付着する。

24・26・28・30～35はいわゆる小型丸底埴だが、33・34はミニチュア土器である。

24の半球形の胴部は上方ですぼまらず、そのまま口頸部が大きく開く。器面が荒れているが、内外面とも縦ヘラミガキとみられる。口径12.6cm、器高7.0cm。33は24のタイプのミニチュア品で、指押えとナデで仕上げる。口径7.8cm、器高4.9cm。

これに対して26・28・30・34・35は、やはり口径は胴径より大きい、頸部つけねでいったんすぼまるタイプである。30は口頸部が大きく開く。器面は荒れているが、内外面ともヘラミガキ仕上げとみられる。推定口径11.7cm、器高9.5cm。34は30のタイプのミニチュア品で、丸底に円板を貼りつけて平底にする。胴部は内外面ともにナデ、口頸部は外面を縦ハケ目、内面



第17图 西岡台遺跡出土土師器実測図(3)

を横ハケ目で調整し、口縁部のみは横ナデする。口径6.6cm、器高5.6cm。26・28は30ほど口頸部が高くはない。26は内外面ともナデ調整だが、頸部外面に棒状のものによる縦ミガキがみられる。復元口径9.5cm。28は胴部内面をヘラケズリし、外面と口頸部内面は横ナデで仕上げる。口径8.9cm。35は口頸部を欠くが、扁球形の胴部や、頸部のしまり具合からみて、このタイプに属する。外面はハケ目の後にナデ、内面は全面をナデで仕上げる。31・32は胴部球形で口頸部は縮小し、頸部つけねのしまりが強いタイプである。32は内外とも全面を丁寧なナデで仕上げるが、底部内面に指押えの痕が残る。口径8.4cm、胴径8.2cm、器高7.6cm。31は全体的に器壁が厚く、外面の肩部から頸部にかけて平行タタキ目がみられる。胴部内面は指押えだが、粘土紐巻上げの痕跡がよく残っている。口径7.2cm、胴径10.0cm。

② 甕 (第18図41～第20図90)

本遺跡出土の土師器のうち、もっとも個体数が多いのが甕である。

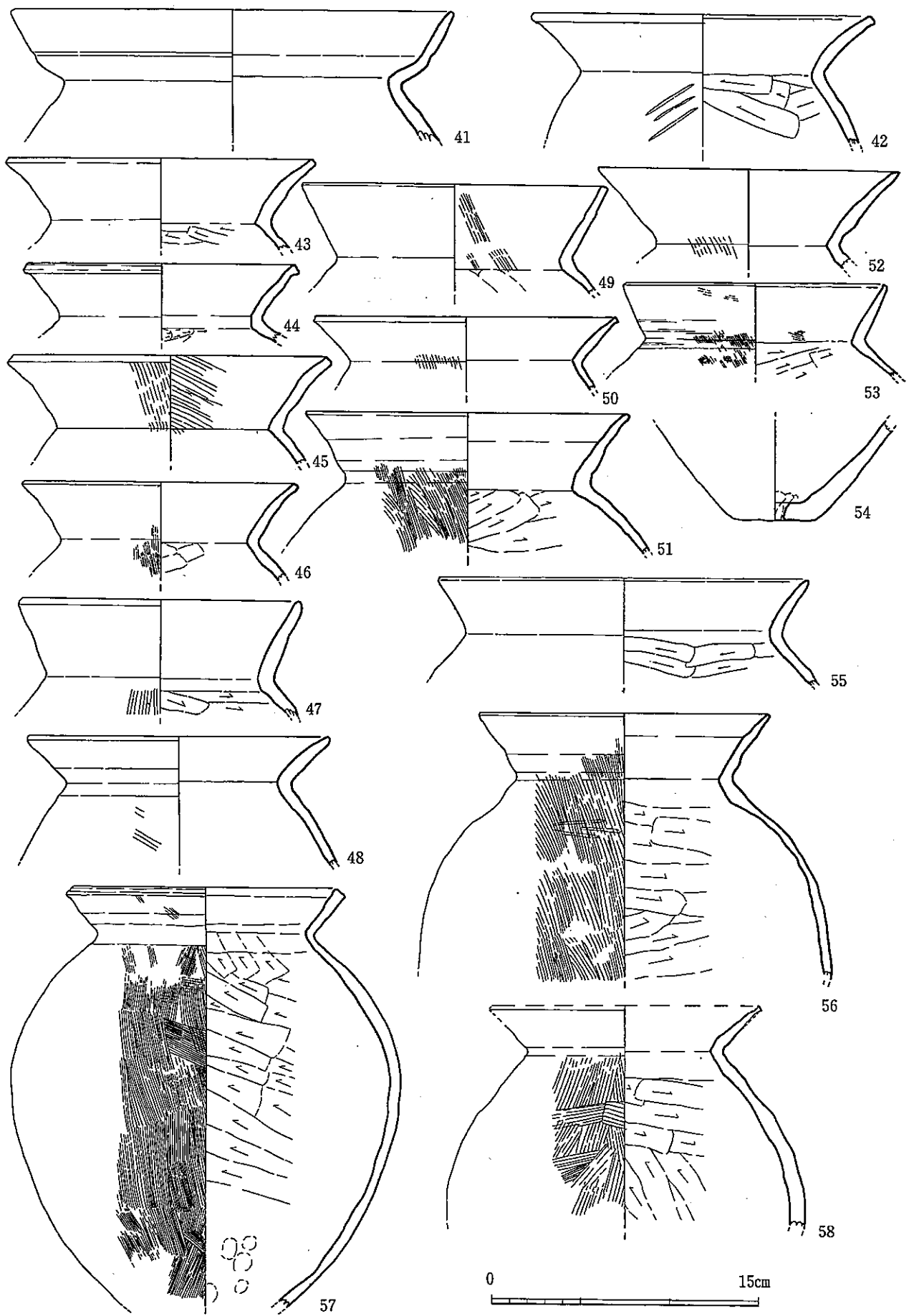
41は二重口縁の甕で、口縁端部を丸くおさめる。口径24.5cmで、内外面とも横ナデで調整する。口径24.5cm。

42～46・49は弥生時代の「く」の字口縁の伝統をひきつぐ在来の長胴厚手の甕で、頸部つけねで明確な稜をもち、口縁端部を断面方形につくる一群である。42は胴部外面がタタキ後にナデ、内面は横ヘラケズリ、口縁部は横ナデ仕上げである。口径19.4cm。43は口縁端部付近をうすくつくる。胴部内面はヘラケズリ、口縁部内外面と肩部外面は横ナデで仕上げる。口径17.5cm。44は口縁端がやや拡張し、胴部内面は横ヘラケズリで頸部直下にはケズリ残しの稜ができる。口縁部内外面と肩部外面は横ナデする。口径15.5cm。45は口縁部外面を縦ハケ目後に横ナデ、内面を斜ハケ目で調整する。胴部は器面が荒れて調整不明である。口径18.1cm。46は外面を縦ハケ目後に横ナデ、胴部内面を横ヘラケズリする。口径15.5cm。49は胴部内面をヘラケズリし、口縁部内面は斜ハケ目で仕上げる。口径17.2cm。

47・48・51・55・69・71は、やはり外反する厚手の「く」の字口縁の甕だが、口縁端部へ向かって徐々に器壁がうすくなったり、口縁端部を尖り気味あるいは丸く仕上げる一群である。47は胴部外面を縦ハケ目、内面をヘラケズリし、口頸部から肩部は内外面とも横ナデするが、頸部内面の直下にケズリ残し部がある。口径16.0cm。48は外傾度が強く、口縁端は垂直に近い。胴部内面は指押え、外面は斜ハケ目で仕上げ、口縁部は内外面とも横ナデする。口径17.0cm。51は胴部外面を縦ハケ目、内面をヘラケズリ、口縁部内面を横ナデ、外面は縦ハケ目後に横ナデで仕上げる。口径18.2cm。55は胴部外面と口縁部内外面を横ナデ、胴部内面をヘラケズリするが、頸部のつけねの内面を削り残す。口径20.6cm。69は球形胴の外面をハケ目、内面はヘラケズリ後に肩部のみ横ハケ目を加える。口縁部は外面を横ナデ、内面は横ハケ目後に横ナデする。口径15.7cm。77は口頸部の凹凸が目立つが、胴部内面のヘラケズリが頸部まで及ぶから、この類に含める。口径15.0cm。口頸部は内外面とも横ナデで仕上げる。

50・53は薄手のつくりで、胴部内面は頸部つけねまでヘラケズリして明確な稜をつくり、口縁部は端部へ向かってうすくなりながら直線的に開くタイプである。50の器面は荒れているが、外面に縦ハケ目が残る。口径17.0cm。53は胴部外面縦ハケ目、口縁部は内外面ともにハケ目後に横ナデする。口径14.9cm。52も、胴部内面の調整が不明だが、頸部つけねが強くしまって明確な稜をもち、口頸部は薄くなりながら大きく広がり、端部が尖る。胴部外面は縦ハケ目で仕上げる。口径17.0cm。

56・58の口頸部は、端部へ向かって薄くなりながら外反して、内外面とも横ナデで仕上げる。



第18图 西岡台遺跡出土土師器実測図(4)

胴部内面はヘラケズリするが、つけねの直下を削り残し、外面のつけねも丸く仕上げるとともに肩部が微妙にくぼむ特色をもつ。56は口径16.2cmで、胴部外面には叩き目がわずかに残る。58は口縁端部に面をつくり、小さく上方に拡張する。口径15.0cm。

57の胴部も56・58と同様に肩部外面がわずかにくぼみ、頸部のつけねは丸味を帯びるが、口縁部は内湾気味で、中くぼみの端部がもっとも分厚い。口縁部外面はハケ目を横ナデし、内面も横ナデで仕上げる。胴部外面はタタキ目を縦ハケ目で消し、内面はヘラケズリするが、頸部つけねの直下はナデており、底面付近は指おさえのみである。口径15.0cm。

61は、中ぶくらみの口縁部が外反し、端部を上方に拡張する。頸部のつけねの外面の稜は不明確で、胴部内面はヘラケズリだが頸部つけねの直下を削り残す。口頸部は内外とも横ナデで仕上げ、肩部外面に縦ハケ目が残る。

59・60は肩の張る球形の胴部に外反する口頸部がつく。口頸部内外面とも横ナデ、胴部外面はヘラケズリするが、頸部つけねの稜は不明瞭である。59は端部を断面方形につくるとみられる。肩部外面にかすかに右上りの叩き目がみられる。口径20.6cm。60は外面にハケ目が残り、口径は18.0cmである。

62～68、70～72、74～81、85～90は布留式系の内湾口縁や、その系譜から派生・展開したもの、あるいは在来系と融合したものである。なかでも62～65・71のつくりは典型的な布留式にもっとも近い。

62は口径16.6cmで、口縁端部を上方にわずかに拡張する。外面は縦ハケ目後に胴部は横ハケ目を施し、肩部から口頸部は横ナデで消すが、頸部にタタキ目が残る。内面は胴部をヘラケズリし、頸部つけね直下の削り残し部分は、横ハケ目、口頸部は横ナデで仕上げる。64も口縁端面が外傾する。胴部内面のヘラケズリのほかは、器面が荒れて調整は不明である。口径18.7cm。63は62・64に比べて口頸部が直立し、口縁端面がわずかに外傾する。外面は縦ハケ目後に胴部に横ハケ目、口頸部を横ナデし、内面は胴部横ヘラケズリで、口頸部から肩部の削り残し部分までを横ナデする。口径15.3cm。

71の内湾度は強くないが、口縁端部は外傾して上方にやや拡張する。内外面とも横ナデで仕上げる。口径14.7cm。65も口頸部の内湾度は強くなく、口縁端部は上方にわずかに拡張する。口頸部は内外面とも横ナデするが、外面に縦方向のヘラ痕が残る。胴部内面はヘラケズリで、頸部つけねの直下には指おさえの痕が残る。口径16.3cm。

66の口縁端部はやや丸味を帯びるが外傾してわずかに拡張し、外面の肩部から内面の頸部つけね直下まで横ナデする。胴部内面はヘラケズリのままである。口径16.5cm。

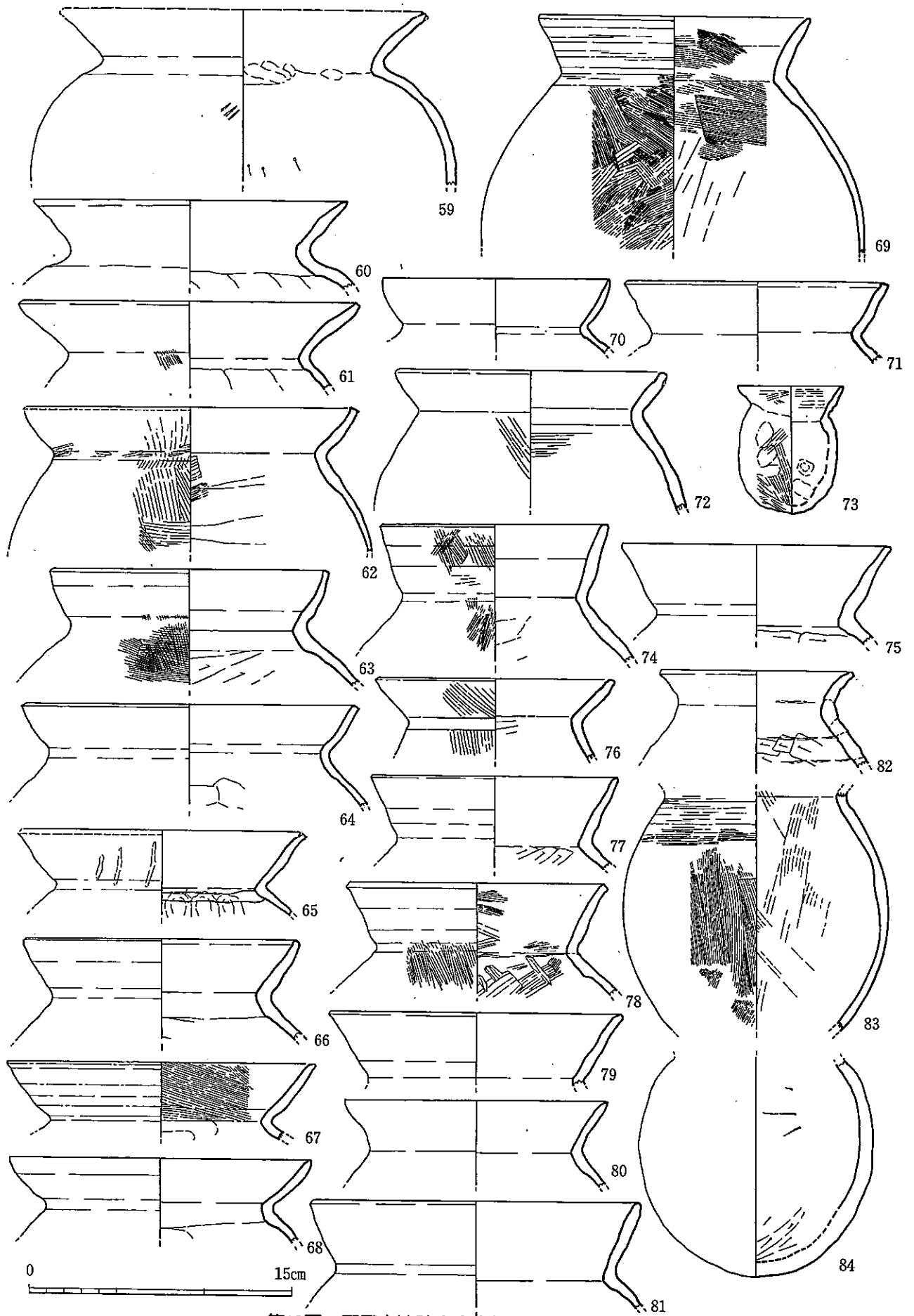
67は全体的に口頸部が内湾し、端面を水平につくってわずかに外側に張り出す。口頸部は内面を横・斜ハケ目後に内外面とも横ナデする。口径17.6cm。

68・70の口頸部は単純に内湾し、端部が尖る。68は口径17.1cmで、胴部内面を横ヘラケズリする。70は口径12.9cmで、胴部内をやはりヘラケズリする。

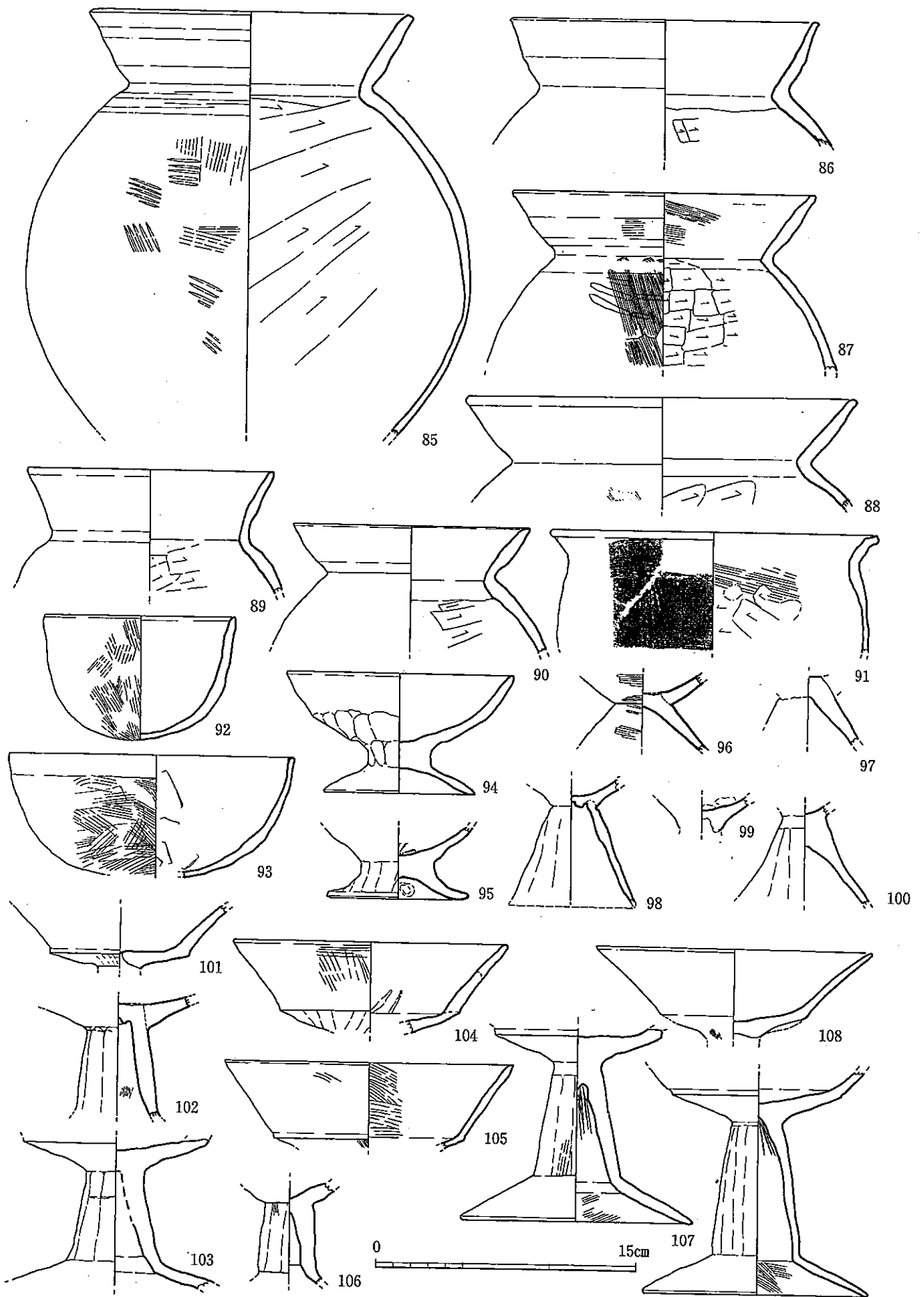
72は口頸部が短く内湾する。胴部は外面縦ハケ目、内面横ハケ目、口頸部は内外面とも横ナデである。口径15.2cm。76は口径13.7cmの小形品で、外面を縦・斜ハケ目後に横ナデし、口頸部内面も横ナデ、胴部内面は横ハケ目をナデ消す。

86・88は内湾口縁の端部がわずかに外側にひろがる。86は器面が荒れているが、胴部内面はヘラケズリする。口径17.2cm。88の口縁端部はほぼ水平で、口頸部は内面斜ハケ目後に内外面とも横ナデで仕上げ、胴部は外面縦ハケ目、内面横ヘラケズリである。口径22.4cm。

74・75・78～81・85・87・89・90は頸部つけねのしまりがつよくて外面が丸味を帯び、内



第19図 西岡台遺跡出土土師器実測図(5)



第20図 西岡台遺跡出土土師器実測図(6)

面にはヘラケズリ残しがみられるが、口頸部の器形は布留式から脱化して外面の線は内湾気味だが、89は外反気味である。ほとんどが口頸部なかほどで肥厚し、口縁端が丸味を帯びる。74は口頸部が直立する。外面は斜・縦ハケ目、胴部内面はヘラケズリして横ハケ目で調整し、口頸部は内外面とも横ナデする。口径13.0cm。75は胴部内面を横ヘラケズリし、口頸部は内外面とも横ナデする。口径15.4cm。78は胴部外面が縦ハケ目、内面はヘラケズリ後に横ハケ目を施し、口頸部は内面横ハケ目後に内外面とも横ナデする。口縁端部を断面方形につくる。口径14.6cm。79は口頸部のみの破片で、内外面とも横ナデする。口径16.6cm。80は口縁端部が尖り、口径15.1cmで、胴部内面をヘラケズリする。81は端部を丸くつくる。器面が荒れて調整は不明である。口径18.7cm。85は略完形品で、胴部外面は左上がりのタタキ目を縦と横のハケ目で消し、内面はヘラケズリ、口頸部は内外面とも横ナデで仕上げる。口径18.8cm、胴径25.4cm。87は口縁端部を丸くつくる。胴部外面は左上がりのタタキ目後に縦ハケ目、内面は横ヘラケズリで調整し、口頸部は内外面とも横・斜ハケ目後に横ナデする。口径17.6cm。89は口径14.1cmで、胴部内面をヘラケズリする。90は口縁端が内傾する。胴部内面は横ヘラケズリ、口頸部は内外面とも横ナデで仕上げる。口径13.6cm。

このほか82は口頸部が短く外反する。粘土紐巻上げでつくり、胴部内面はヘラケズリする。口径11.0cm。

73はミニチュア土器で、長胴丸底につくる。口径6.2cm、器高7.2cm、胴部外面はハケ目と指おさえ、内面は指おさえで仕上げ、口縁部は内外面とも横ハケ目を横ナデする。

83・84はいずれも丸底長胴の甕で口頸部を欠失する。83は胴部外面を縦ハケ目後に肩部に横ナデが及ぶ。内面は縦ハケ目をナデ消す。頸部つけねは丸味を帯びる。胴径15.3cm。84は83よりも厚手の鈍重なつくりで、胴部内面はヘラケズリする。外面は器壁が荒れて調整はほとんど不明だが、肩部には口頸部の横ナデが及ぶ。胴径13.4cm。

③ 鉢 (第20図91～95)

91は口縁部が外反する鉢、92・93は半球形の鉢、94・95は脚付鉢である。

91は頸部つけねがしまらず、しかもゆるやかで、口縁端部付近の内面に稜をもって開く。胴部内面はヘラケズリ、外面は縦の粗いハケ目を細かい縦ハケ目で消し、口頸部は頸部外面と肩部内面に横ハケ目を施したのち、内外面とも横ナデで仕上げる。口径18.8cm。

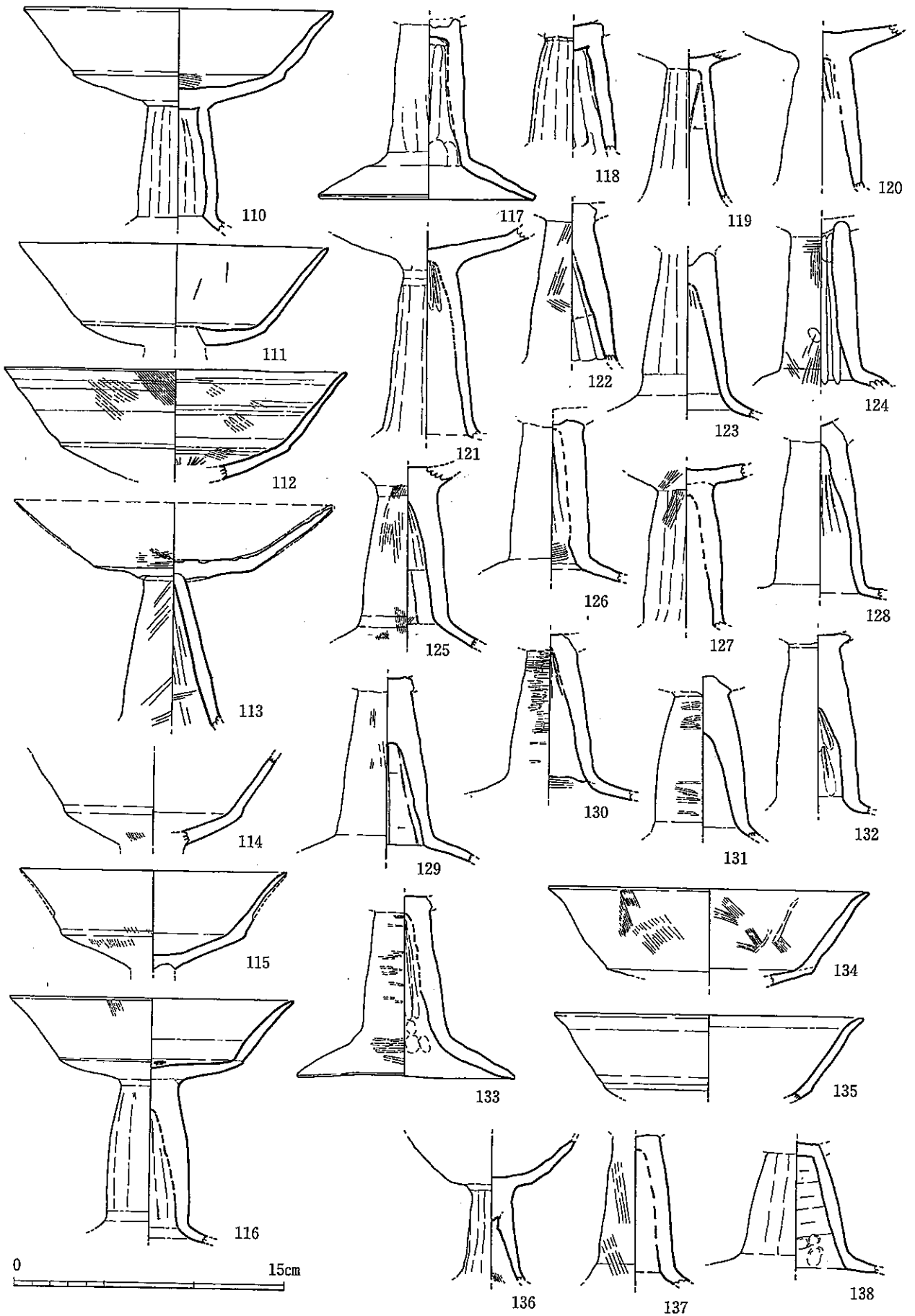
この土師器を実測した当初は、器形からみて百済系の赤焼鉢の可能性もあったため、今回図面を収録した。しかし、その後の検討によって技法的にこの地域の古代の甕との共通性が高くなり、出土層位も溝の上層(古代の層)に属するため8～9世紀の土師器としておく。

92は深手丸底の小形品で、胴部外面は縦・斜ハケ目、口縁部は内外とも横ナデで仕上げ端部が尖る。口径11.0cm、器高7.1cm。93は丸底で胴部外面はヘラケズリ後にハケ目、内面は丁寧なナデ、口縁部は内外面とも横ナデで仕上げ、端部が肥厚する。口径16.3cm、器高7.0cm。

94の扁半球形の鉢部は口縁端部が尖り、内面をナデ、外面下半を面取風のヘラ研磨で調整し、脚柱部外面は指ナデである。口径13.2cm、器高6.9cm、脚端径8.7cmである。95は脚付鉢の下半部の破片で、外面は脚部をヘラナデ、鉢部を横ナデ、内面は鉢部・脚部ともに丁寧なナデで仕上げる。脚端径8.2cm。

④ 器台 (第20図96～100)

作図できたのはいずれも受部が皿状に広がる小形器台である。96は外面を丁寧な細かい横へ



第21图 西岡台遺跡出土土師器実測図(7)

ラ研磨で仕上げる。5点の中ではもっとも脚が広がる。くびれ部径3.2cm。97は脚部を内外とも丁寧なナデで調整する。くびれ部径3.3cm。96・97が脚部の上面を受部の内底面にして接合するのに対して、98は受部にヘソをつくり、上面に穴をあけた脚部とさし合わせる。脚外面は縦方向の面取風ヘラ研磨である。脚端径7.2cm、くびれ部径2.8cm。99は以上の3点と異なり、受部と脚部をそれぞれつくって受部の底に脚部の頭をさし込む。受部内面は丁寧なナデで仕上げる。くびれ部径2.3cm。100は96・97と同様な接合技法である。脚外面は縦ヘラ研磨し、接合部付近を横ナデする。くびれ部径2.6cm。

⑤ 高杯 (第20・21図101~138)

甕とともに量が多いのが高杯である。

101~104・106~108の上限は庄内式併行期までさかのぼる可能性がある。径の小さな杯下半部に大きくあるいは強く外反する杯上半部、そして直線的で短く太い脚柱部に大きく長く開く脚裾部が特色である。101は杯下半部外面をヘラケズリ後に縦研磨し、上半部外面は縦ヘラ研磨とナデを併用する。杯部内面はハケ目を細かな縦・斜のヘラ研磨で消す。屈曲部径8.1cm。102は脚部外面を縦ヘラナデし、内面は縦ハケ目をナデ消す。杯部と脚部のつけねの径3.5cm。103は脚筒部外面を面取風にヘラケズリし、内面はナデで仕上げるが、屈折部直上にヘラケズリ痕が残る。脚裾内面は横ナデである。杯部と脚部のつけねの径3.3cm。104の杯部外面は上半部を横・斜ハケ目後に横ナデし、下半部は横ヘラケズリする。内面はナデと縦ヘラ研磨で仕上げる。口径15.8cm。106は脚筒部がきわめて短い。筒部外面は面取風に縦ヘラケズリするが、一部に斜ハケ目が残る。杯部と脚部のつけねの径2.8cm。108は、杯上半部が強く外反する。内外とも器面が荒れ、外面の一部に縦ハケ目が確認できるだけである。口径16.0cm。107は杯下半部が小さくて脚裾部も長く、杯上半部も大きく外反するとみられるが、脚筒部が細長くなっている。脚筒部の外面は縦ハケ目後に縦ナデで仕上げて、上端の接合部付近は横ナデし、内面の上半部にはシボリ目残り、下半部は縦ヘラケズリ後にナデ消す。杯下半部外面と脚裾内面には横ハケ目がみられる。脚端径13.4cm。

105・109は上記の高杯よりわずかに遅れるかとみられる一群である。105は杯上半部が直線的に開く。調整は外面の杯上半部が斜ハケ目後に横ナデ、下半部は縦ハケ目、内面は横ハケ目をナデ消す。一応高杯としたが、二重口縁あるいは鼓形器台の可能性もある。口径16.5cm。109の杯下半部は小さく脚裾部もまだ長い、脚筒部が細長くて中ぶくらみとなり、杯上半部もゆるやかに外反する。器面は全体にナデで平滑に仕上げるが、脚筒部の外面に面取風の縦ヘラケズリ、内面には横ヘラケズリとその上部のシボリ目、脚裾内面の横・斜ハケ目が残る。脚端径13.1cm、脚高10.0cm。

110~133は典型的な布留式系の甕の時期の高杯とみられる。杯上半部はゆるやかに直線的に広がるようになって縮小し、かわりに杯下半部が大きくなる。脚筒部は細長くなって中ぶくらみの度合いが強くなり、脚裾部は短くなる。したがって全体的な器形でも杯部が小さくなり、相対的に脚部が長くなる。110はこれらの中では脚筒部が太くて短い方だが、かなり中ぶくらみである。調整は、杯部内面の上半部を研磨、下半部はハケ目後にナデ、脚筒部外面は縦ヘラ研磨、内面をナデで仕上げるが上部にシボリ目残り。口径17.3cm。111は口径16.9cmの杯部で、脚部との接合部から剥離している。器面が荒れて内面のヘラの痕跡のみが残る。112は杯部外面の上半部を斜ハケ目、下半部をヘラケズリした後、全体を横ナデする。内面は、下半部をヘラケズリ後に全面に斜ハケ目を施して横ナデし、上半部の一部には研磨する。口径19.2cm。113

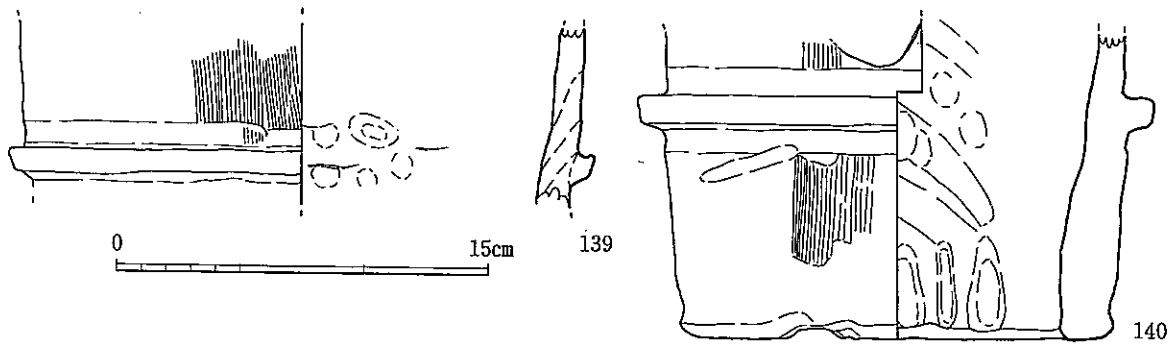
は杯部と筒部を完形につくって接合する。脚部は細長く、直線的に開く。全体的にナデで仕上げ、脚筒部内面にはシボリ目が残る。復元口径17.7cm。114は内外面とも器面が荒れているが、おそらく横ナデ仕上げとみられ、脚部とのつけねの直上にハケ目がみられる。115は脚部との接合部から剥離した杯部で、器面がやはり内外面とも著しく荒れているが、外面は斜ハケ目後に横ナデする。口径14.9cm。116は口径15.8cmで、内外面とも杯上半部は斜ハケ目後に横ナデ、下半部もハケ目をナデ消す。脚筒部は外面が縦ハケ目後にヘラナデ、内面は下半部をヘラケズリ後にナデ消すが、上半部にはシボリ目残り、脚裾部は内外面とも横ナデする。

117～133は脚部である。117は胴筒部外面をヘラナデ、脚筒部内面と脚裾部外面をナデで仕上げるが、屈折部外面と脚端部内外面を横ナデする。脚端径12.1cm。118は脚筒部内面ヘラケズリ、外面は縦ヘラナデで調整する。119は筒部内面をナデ、外面を縦ヘラナデし、脚裾部は内外面とも横ナデ仕上げである。筒部が細く直線的に広がるが、113と同時期とみられる。120は内外面ともナデで仕上げるが、筒部内面上半にシボリ目が残る。121も同様に内外面をナデで仕上げ、脚筒部内面にシボリ目が残る。122は接合部から剥離しており、別づくりした脚部の上面がそのまま杯部の内底面となる。脚筒部の外面はハケ目をナデ消し、内面はヘラケズリで調整する。123は杯部との接合面から剥離しており、筒部外面は縦ヘラナデ、内面はナデ、脚裾部は内外面とも横ナデする。124の脚裾部は内湾気味に開く。筒部外面はハケ目をナデ消し、内面は棒状の工具で縦ナデする。125の外面はハケ目後に杯部との境と裾の屈折部を横ナデし、内面はヘラケズリとナデで仕上げるが、屈折部直上に斜ハケ目が残る。126は外面と裾部内面を横ナデし、筒部内面にはシボリ目が残るが屈接部の直上は横ハケ目を施す。127の杯部は内外面ともハケ目で仕上げ、脚筒部外面は縦ヘラケズリ後に縦ハケ目と横ナデ、内面は縦ヘラケズリと横方向のナデで調整する。128は内外面ともナデ仕上げで、筒部内面上部にシボリ目が残る。129は筒部外面を縦ハケ目後にナデ、内面をヘラケズリし、裾部は内外面ともナデで仕上げる。130の筒部外面は横ヘラ研磨ののちに下半部をナデ、内面はナデ仕上げで屈折部付近にハケ目が残る。130は接合面で剥離し、筒部外面は細かいヘラ研磨の後に下半部をナデしており、内面はナデで仕上げる。131も筒部外面を細かく横ヘラ研磨し、内面は横なでするが、裾部内面はハケ目仕上げかとみられる。132は外面と裾部内面をナデで調整し、筒部内面にはシボリ目が残る。133は筒部外面を細かく横ヘラ研磨した後、裾部の内外面とも横ナデする。筒部内面にはシボリ目が残るが、屈折部付近は指押えする。脚端径12.1cm。

134～138はもっとも時期が下る高杯である。杯部は中ほどが内湾気味にふくらんで口縁部がわずかに外反する特色をもち、口縁端を丸く仕上げる。また杯部には明確な屈曲部をもたない例もある。脚筒部は短くなるとともに、脚裾部が水平に折れたり分厚くなる。特に、屈折部がもっとも厚くなる例は典型的である。134・135は杯部の破片である。134は内外面とも斜ハケ目で調整し、口縁部は横ナデするが、内面の一部にヘラ研磨がみられる。口径17.9cm。135は杯上半部を横ナデ、下半部はナデで仕上げる。口径17.3cm。136は杯部が半球形をなす小型品である。筒部外面は縦ヘラナデで杯部近くには横ナデが入り、筒部内面は横ヘラケズリ後に裾部付近に縦ハケ目を施し、最後に全体を内外面ともナデで仕上げる。137・138は脚部で、杯部との接合部から剥離している。137は筒部外面を縦ハケ目、内面はナデで仕上げる。138の筒部外面は縦ヘラナデ、内面は横ヘラケズリし、裾部は横ナデする。

(2) 円筒埴輪 (第22図139・140)

SD01の内側を走る中世の溝SD02の西側部分から円筒埴輪片や須恵器片が出ており、特に円



第22図 西岡台遺跡出土円筒埴輪実測図

筒埴輪はSD01の廃絶後に古墳が造られた可能性を示すため、今回収録した。

139は胴部の破片で黒斑がみられ、円形の透孔がみられる。外面は一次調整の縦ハケ目がそのまま残り、突帯を貼りつけ、その上下を含めて横ナデする。内面はナデと指押えで仕上げる。

140は黄褐色を呈する基底部の破片で円形の透孔をもつ。外面はやはり一次調整の縦ハケ目後に突帯を貼りつけて横ナデするが、底面付近は未調整で、器壁も2.0～2.4cmと厚い。内面は指押えとナデで仕上げる。底径17.5cm。

これらの円筒埴輪は、突帯の形状や高さ、調整技法からみて5世紀中頃～後半の所産とみられる。

(3) 小 結

以上、今回作図した西岡台遺跡の古式土師器を中心に紹介した。以下ではこれらの土器の時期について概略を述べる。^(註1)

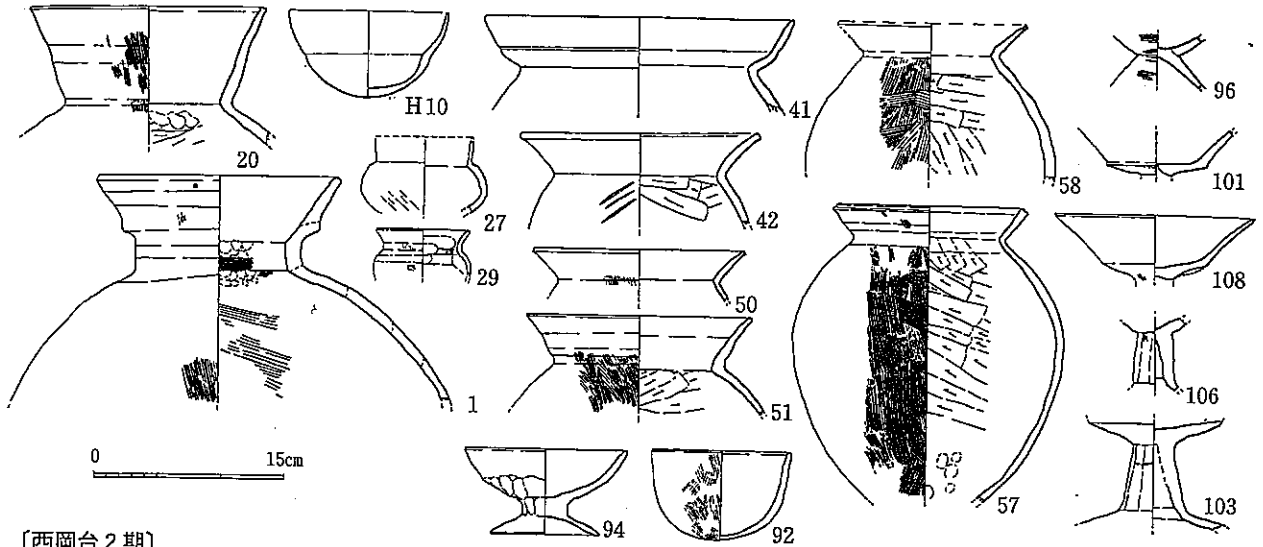
筆者は、古墳時代前期の北部九州の土師器を、宮の前A期（庄内式古段階）、宮の前B期（庄内式新段階～布留式最古段階）、有田ⅠA・ⅠB期（布留式古～中段階）に分け、中期の土師器は、有田ⅡA期（布留式新段階＝5世紀初頭）、有田ⅡB期（5世紀前半～中頃）、有田ⅡC期（5世紀後半）に区分している。^(註2) そうした視点からみると本遺跡の土師器は大きく西岡台1・2・3期の3時期に区分される。

〔西岡台1期〕 筆者の宮の前B期に相当し、庄内式新段階～布留式最古段階に平行する。これまでの熊本県内の土師器編年では、石橋新次氏のⅠb期～Ⅱa期古段階、野田拓治氏の古閑期～山下期古段階にほぼ相当するとみられる。^(註3)

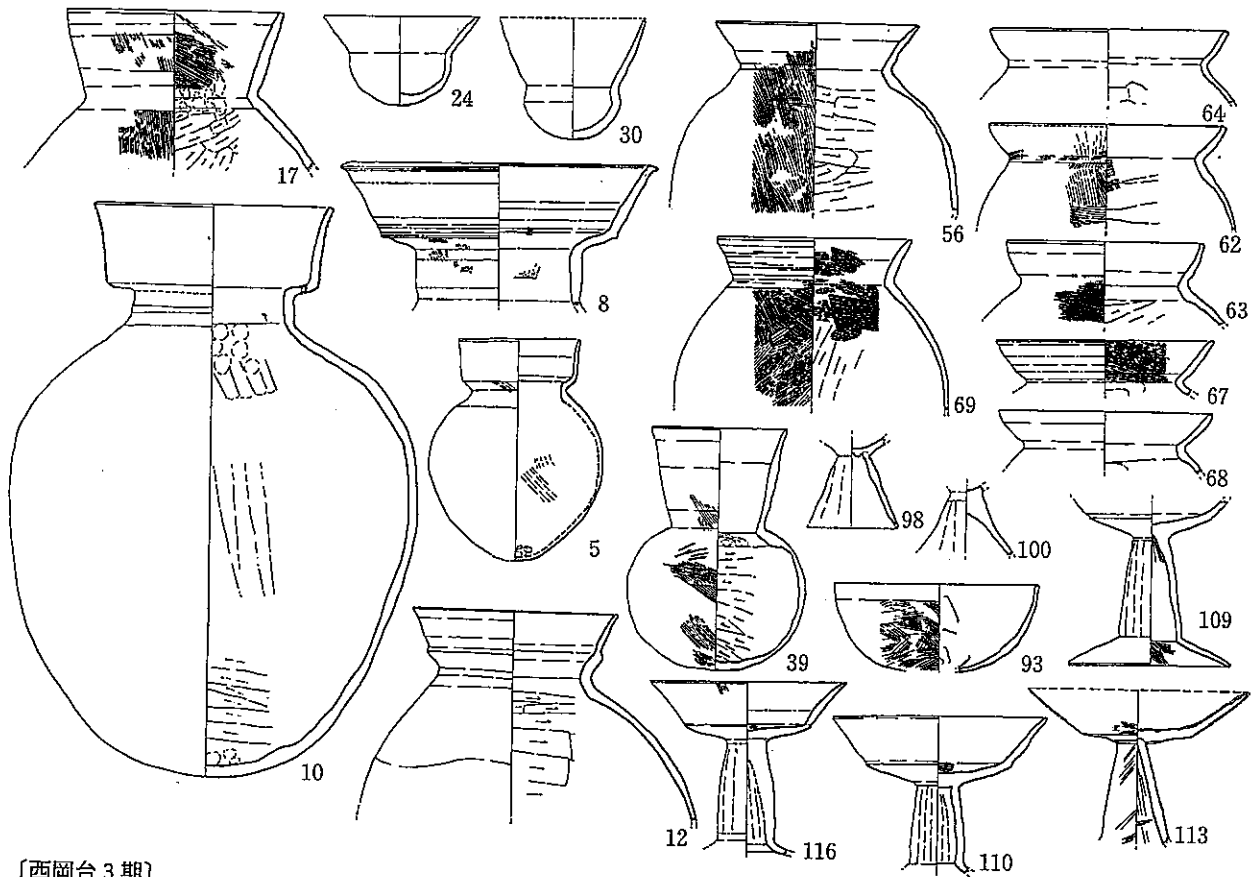
二重口縁壺では、口頸部内面が直立する頸部から直線的に斜上方に広がって屈曲部がもっとも分厚くなる、この地域独特の二重口縁壺（1）がこの時期に属し、大型広口壺も端部を上方にわずかに拡張する例（20）が相当し、小型丸底埴（27・29）は在来系を図化したのが、原報告所収の半球形丸底の胴部からつけねがしまらずに口頸部が内湾して短いながらも大きく開く小型丸底埴^(註5)も含まれよう（第23図H10）。甕は二重口縁の例（41）のほかに、在来系の「く」の字口縁甕（42・50・51）と庄内式の末期的形態や布留傾向甕（57・58）が相当する。高杯は、杯下半部の径が小さくて上半部は大きく外反し、脚筒部が直線的で太く短く、裾部は長く大きく開く（101・103・108）。半球形の鉢部に短い台脚がつく台付鉢（94）や、やや深い半球形丸底の鉢やつくりが丁寧で脚部の開きが大きい小型器台（96）もこの時期であろう。

〔西岡台2期〕 筆者の有田Ⅰ期に相当し、布留式古～中段階に平行する。石橋氏のⅡa期新段階～Ⅲ期、野田氏の山下期新段階～沈目Ⅰ期^(註7)に相当する。5・8・12をはじめ二重口縁壺

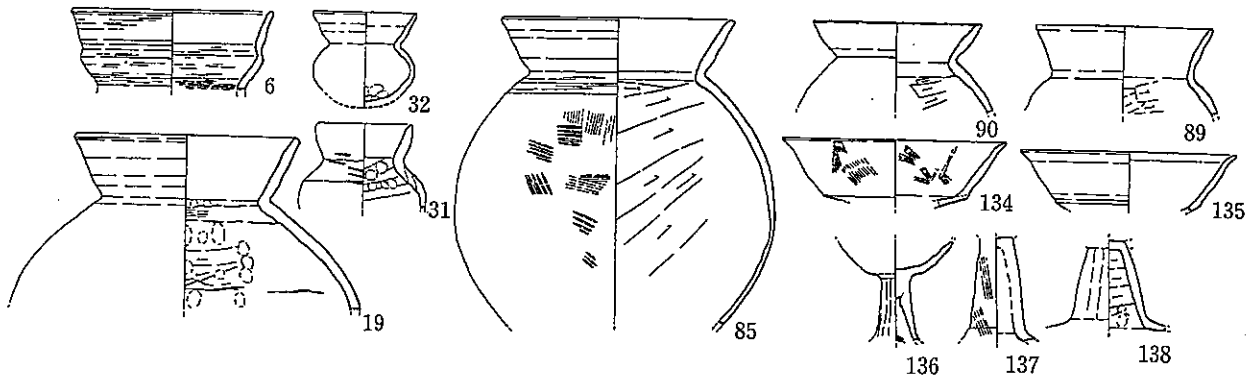
〔西岡台1期〕



〔西岡台2期〕



〔西岡台3期〕



第23図 西岡台遺跡出土土師器の分期 (番号は第15~21図の土器番号と一致する)

の多くはこの時期に属するとみられる。大型の広口壺は口縁端の上方への拡張がなくなる(17)。甕は布留式系が多くなり、内湾口縁で胴部外面ハケ目仕上げで、つけね部内面直下を削り残すのが特色である。口縁端部は面をつくり、外傾から水平へ変化するとみられる(63・67)が、薄く尖る例(68)もある。つけね部内面直下を削り残す長頸壺(39)もこの時期であろう。このほか、在来系の甕は、胴部が球形となって最大径が口径よりもかなり大きくなり、口縁端は薄くなったり丸味を帯びる。小型丸底埴は口頸部が大きく高い典型的な布留式系となる。小形器台も多く(97~100)はこの時期とみられる。高杯は西岡台Ⅰ期よりも杯部が小さくなり、上半部はゆるやかに直線的に広がる。脚筒部は細長くなり、裾部も縮小する。

〔西岡台3期〕 筆者の有田ⅡA~ⅡB期に相当し、布留式最新段階~初期須恵器の時期である。野田氏の沈目Ⅱ期~塚原Ⅰ期^(註8)にほぼ相当する。全体的に土器のつくりは粗雑化し鈍重になる。二重口縁壺は稜が不明確になり(6)、大形壺は甕との区別が難しくなる(18・19)。甕は胴部球形でつけねがしまり、口頸部中ほどは内湾気味だが、端部付近はわずかに外反して丸味をおびるなど、布留式の甕から脱化する(85・89)。小型丸底埴は口頸部が縮小して、口径は胴径とほぼ等しい例(32)から、さらに小さくなる(31)^(註9)。高杯は脚筒部が短くなり、杯上半部は中ほどでいったん内湾気味に肥厚しながら口縁端付近で外反する(134~138)。

以上、大別した西岡台SD01出土の土師器は、2期に属する例がもっとも多く、次いで1期となり、3期の例がもっとも少ない。しかし、宮の前B期~有田ⅡB期まで、暦年代でいえば3世紀後半から5世紀中ごろまで及ぶ。しかも各時期ともセット関係がそろっており、出土状況をみても混在していることから、このSD01を外郭とする首長層^(註10)居宅は、すでに指摘したように、長期にわたって存在したこととなる。

(武末純一)

註

- 1) 筆者はすでに「日本古墳時代首長層居宅をめぐる二・三の問題——九州の事例から——」『韓国古代文化の変遷と交渉』(2000年)で、本遺跡出土土師器の一部を抽出して、その年代を考究したことがあり、以下の文と重複する箇所があることを前もって明らかにしておく。
- 2) 武末純一『土器からみた日韓交渉』(学生社)1991年。
- 3) 石橋新次「中九州における古式土師器」『古文化談叢』第12集 1983年。
- 4) 野田拓治「古式土師器の成立と展開——特に中部九州における編年試案——」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年。
- 5) 熊本県宇土市教育委員会『宇土城跡(西岡台)』(宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集—本文編—)1977年 第67頁第3図H10。この土器については図化していない。
- 6) 註3文献。
- 7) 註4文献。
- 8) 註4文献。
- 9) 註1文献ではこの時期を筆者の有田ⅡA期に限定したが、この32の小型丸底埴や136の高杯から、下限は有田ⅡB期に訂正する。
- 10) 註1文献。

※なお、今回登載した土師器の図面には、「特色ある教育研究—遺跡・遺構・遺物の測量・実測・観察(平成10年度)」の成果も一部含まれている。

第1表 西岡台遺跡出土遺物一覧表

資料集 番 号	遺 構	器 種	土器 番号	備考
1	H-2WT 4OSDIV No.16	二重口縁壺	13	
2	H-2WT 4OSDIV	二重口縁壺	97	
3	H-2WT 4OSD	二重口縁壺	49	
4	H-2WT 4OSDIV	二重口縁壺	17	
5	H-2WT 4OSDIV	二重口縁壺	29	H14
6	H-T4 S-T 4OSD	二重口縁壺	96	
7	H-2WT 4OSDIV	二重口縁壺	33	
8	H-2WT E側 4OSD No.6	二重口縁壺	48	
9	H-2WT E側 4OSDIV層 No.126・No.129他	二重口縁壺	95	
10	H-2WT 4OSD	二重口縁壺	39	
11	H-T4S抜 4OSD	壺	84	
12	H-2WT 4OSD一括	二重口縁壺	28	H17
13	H-2WT E側 4OSD	二重口縁壺	59	
14	H-2WT 4OSDIV	壺	130	
15	H-2WT 4OSD一括	壺	58	
16	H-2W-T側	壺	110	
17	H・IWT 4OSDIV	壺	12	
18	H-5 N-T 4OSD	甕	144	
19	H-5 N-T 4OSD	甕	51	
20	H-2WT 4OSDIV	壺	114	
21	H-2WT 4OSDIV	壺	119	
22	H-2WT 4OSDIV	甕	67	
23	H-5 N-T 4OSD	甕	52	
24	H-5 N-TS 4O-SD下層	小型丸底壺	23	H 6
25	H-2WT 4OSDIV	小型丸底壺	24	
26	H-2W-2 4OSD No.10	小型丸底壺	55	
27	H-T4N抜 4O-SD	小型丸底壺	104	
28	H-2W 4OSD	小型丸底壺	102	
29	H-T4N抜 4O-SD	小型丸底壺	105	
30	H-5 S-NT 4O-SD上層	小型丸底壺	3	H 7
31	H-4 T-1T-4ET 4OSD	壺	83	
32	H-2W-2 4OSD No.10	小型丸底壺	118	H12
33	H-2WT 4OSDIV	小型丸底壺 (ミニチュア)	141	
34	H2WT 4OSD	小型丸底壺 (ミニチュア)	145	H 4
35	H-2WT 4OSDIV	小型丸底壺	143	
36	H-2WT 4OSDIV層No.122	壺	10	
37	H-2WT E側 4OSD	高坏	63	
38	4OND H-2W-TE 4OSD	壺	138	
39	H-7or8	壺	82	
40	H-2WT 4OSDIV No.103	壺	15	
41	(注記不明)	甕	54	
42	H-2W-T E側	甕	99	
43	H-2W-T E側	甕	101	
44	H-2N-TE側 4O-SD中層	甕	100	
45	H-2WT・E側 4OSD中層	甕	50	

資料集 番 号	遺 構	器 種	土器 番号	備考
46	H-2WT 4OSD	甕	40	
47	H-2WT 4OSDIV,一括	甕	121	
48	ND H3 W	甕	53	
49	H-2WT 4OSD一括, H-2W-T E側	甕	46	
50	H-2W-T E側, 4O-SD N側 下から2層目	甕	131	
51	H-2NT 4OSD一括	甕	132	
52	H-2E-T 4O-SD黒褐色土	甕	135	
53	H-2W側	甕	70	
54	WT IV層	壺	107	
55	4OSD H-4T-EⅢ-中層	壺	116	
56	H-T4 4OSD	甕	93	
57	H-2WT 4OSDIV	甕	30	
58	H-T4S-T 4OSD	甕	26	
59	(注記不明)	甕	86	
60	H-5・N-T (S) 4OSD下層	壺	115	
61	一括 H-2WT	甕	106	
62	(注記不明)	甕	35	
63	H-2W側 古墳周溝内最下層中	甕	98	
64	H-2 4OSDIV	甕	56	
65	4OND H-2カッ色	甕	37	
66	H-2W-T 4OSD	甕	124	
67	H-2WT E側 4OSD	甕	103	
68	H-2WT	甕	128	
69	H-2WT 4OSDIV, No.125・No.122	甕	92	
70	H-2WT 4OSDIV	甕	41	
71	H-2WT 4OSD一括	甕	42	
72	H-T4 S-T 4OSD	甕	89	
73	H-2WT 4OSDIV No.27	甕(ミニチュア)	142	H 5
74	H-2WT 4OSDIV, 4OSD一括	甕	43	
75	H-T4S-T 4OSD	甕	120	
76	H-2W-T E側	甕	94	
77	H-2NT 下から2層目	甕	112	
78	H-2W-T E側 4OND	甕	36	
79	H-2WT E側 4O-SD,4OSDIV	甕	47	
80	H-2	甕	61	
81	H-2WT 4OSDIV	甕	34	
82	H-T4N抜 4OSD	甕	44	
83	H-2WT 4OSDIV	甕	140	
84	H-2E側 4OSD 下2層	壺	122	
85	H-2W-T 4OSD No.2	甕	38	
86	H-2区W側 最下層中	甕	57	
87	H-2WT 4OSDIV層 No.126	甕	14	H21
88	H-2W-T 4OSD	甕	91	
89	H-4 H-T3W 4OSDIV (黒褐色+パイラン)	壺	88	
90	H-T8 4OSD	甕	113	

資料集 番号	遺 構	器 種	土器 番号	備考
91	H-2WT 4OSD赤カツ上半部	甕	45	
92	H-T4 S抜 4OSD	鉢	9	
93	H-2WT 4OSD No.7	鉢	11	H15
94	M-18 4OSD	高坏	1	
95	H-T4N抜 4O-SD	高坏	85	
96	H-2W-TE側 4OSD	小型器台	79	
97	H-2WT 4OSD一括	小型器台	77	
98	H-2 WT 4OSD一括	小型器台	27	
99	H-2 N-T 4OSD No.12	小型器台	78	
100	H-2W-TE側 4OSD	小型器台	5	
101	H-2WT 4OSDV	高坏	4	
102	H-2WT 4OSDV	高坏	72	
103	H-2WT 4OSDV Z No.118	高坏	32	
104	H-2WT 4OSDV	高坏	25	
105	H-2WT 4OSDV	高坏?	6	
106	H-2WT 4OSDV	高坏	18	
107	H2WT 4OSDV	高坏	8	
108	H-2WT 4OSD一括	高坏	123	
109	H-2WT 4OSDV	高坏	7	
110	H-2WT 4OSDV	高坏	2	H2
111	H-2 W-TE側 4OSD	高坏	21	
112	H-2WT E側 4OND	高坏	19	
113	H-2WT 4OSDV	高坏	68	
114	H-2WT 4O-SD	高坏	127	
115	H-2WT E側 4OND E104	高坏	20	

資料集 番号	遺 構	器 種	土器 番号	備考
116	H-2WT 4OSD一括, 4OSDV	高坏	69	
117	H-2WT 4OSDV	高坏	66	
118	H-2 WT 4OSDV	高坏	136	
119	H-2WT 4OSD一括, 4OND H-T8 4OSD	高坏	81	
120	H-2W? 4OSDV	高坏	71	
121	H-2 E-T 4O-SD 下ヨリ2層目	高坏	16	
122	H-2WT 4OSDV	高坏	126	
123	H-2WT 4OSD一括	高坏	74	
124	H-2WT 4OSDV	高坏	133	
125	H-2WT 4OSD一括	高坏	137	
126	H-2W-T E 4OSD	高坏	73	
127	H-2WT 4OSDV	高坏	90	
128	H-2WT 4OSDV	高坏	134	
129	H-2WT 4OSDV	高坏	75	
130	H-2WT 4OSDV	高坏	80	
131	(注記不明)	高坏	22	
132	(注記不明)	高坏	129	
133	H-2WT E側 4OSDV	高坏	117	
134	H-2WT E側 4OSD	高坏	31	
135	H-2 W-TE側 4OSD	高坏	76	
136	H-T4S抜 4OSD	高坏	108	
137	H-2WT 4OSD一括	高坏	125	
138	4OSD H-4T-E 4OS Ⅲ-中層	高坏	87	
139	9cND H-5 SK-T 90-r W	円筒埴輪	埴-1	
140	9cND H-T 4N-4	円筒埴輪	埴-2	

注) 備考の番号は、宇土市教育委員会1977『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集に掲載の実測図番号に一致する。

資料集のための遺物実測は福岡大学武末純一氏にお願いして平成11年度に実施した。その構成メンバーは次の通りである(肩書きは平成11年度当時)。

福岡大学人文学部教授 武末 純一

福岡大学考古学研究室 大学院博士課程2年 西山めぐみ

大学院修士課程1年 今塩屋毅行

大学院修士課程1年 元吉 知子

学部3年 坂田 邦彦

春日市教育委員会

井上 義也

4. まとめ

調査後27年という月日が経過している資料を整理検討することには、幾つかの問題点が残る。しかし、簡単な報告だけで大半の資料が公開されることなく、収蔵庫の隅に眠らせたままにしておくことはもっと問題があり、今回少なくともその責の一端を果たすことができた。

特に今回再報告を行なうきっかけとなった、首長居館をどのように捉えるかという視点での、西岡台遺跡の土師器の見直しは考古学的に極めて重要な問題である。それは、首長とそれを取りまく人々との関係や、首長と次世代首長との関係、更には他のムラとの関係、更には宇土半島基部における首長墓との関連性、それにもまして重要なのは地域研究の基礎となるタイムスケールの確立等々、派生する問題は数限りない。

以下、古墳時代前期から中期はじめに属する西岡台遺跡の性格についての若干のまとめと、今後の課題について少し触れておきたい。

(1) 宇土半島基部における前期古墳群

前期に属するとみられる8基の前方後円墳と4基の円墳をそれぞれの地域ごとにグループ分けを行なうと下表のようになる。^(註1)

第2表 宇土半島基部における前期古墳一覧表

	緑川・轟群	不知火西群	松山群	立岡群
前方後円墳	城ノ越古墳・スリバチ山古墳・迫ノ上古墳・天神山古墳	弁天山古墳	御手水古墳・向野田古墳	潤野3号墳?
円墳	猫城古墳・神合古墳		チャン山古墳	潤野2号墳

古墳の数から見て、以上の地域区分が適切であるかどうかは詳細な検討を要するが、地形や中期以降の古墳分布等を考慮すればこの4群にとりあえず、区分しておきたい。

この表をみればわかるように緑川・轟群が圧倒的に優位であることは首肯できるが、不知火の弁天山古墳を一群と見ることにはかなりの問題があり、今後の検討課題である。

さて、緑川・轟の一群が本稿の主題となる西岡台遺跡の位置に最も近いものであり、これらの古墳と当遺跡の関連が当然考えられるところから、後述のように武末氏による土師器の編年案との整合性を検討することが、重要であろう。

(2) 西岡台遺跡の性格

宇土半島基部における古墳時代の集落遺跡については、これまでのところあまりよくわかっていない。詳細は不明ながら、境目遺跡・上松山遺跡・松橋大野遺跡において住居跡が確認できているし、また、住居跡は確認できていないものの、おそらく集落遺跡と考えられるものを含め、首長居館・一般集落遺跡は第3表のようになる。

もちろん遺跡の詳細がわかっておらず、ましてや住居跡の検出ができていないにもかかわらず、このように規定してしまうことに問題がないわけではない。ここでは、過去に行なわれた表面観察や遺物の散布状況、それに調査内容等によって、現段階でとりあえず推測される可能性として提示したものである。

ところで、西岡台遺跡はどのような性格をもった遺跡であったろうか。これまで述べてきた、遺跡の立地や遺構の状況、それに遺物の出土状況や内容等々をみれば、この遺跡が一般成員の集落遺跡とみなすことはできない。V字溝の規模や立地をみれば、やはり、この遺跡が防御的機能を持っていることは間違いないし、生活空間であった可能性は極めて高い。残念ながら、

中世城に伴う造作によって古墳時代遺構は大きく破壊されており、V字溝で囲まれた中心部分の空間に古墳時代の建物があったことを証明する材料は何も発見されていないし、今後もその見込みはほとんどない。

第3表 宇土半島基部における集落遺跡一覧表

	緑川・轟群	不知火西群	松山群	立岡群
首長居館	西岡台遺跡	浦上遺跡?	不明	境目遺跡?
一般集落	城山遺跡・轟遺跡・馬場遺跡	不明	出町遺跡?・大野遺跡?・前田遺跡?	上松山遺跡

(3) 土師器の編年

今回の資料整理のきっかけとなったのは、V字溝から出土している土師器に時間的な幅があるのかどうかという点であった。古墳時代地域首長層の居館は、一人の首長が代替わりごと新たに造営するのではないかという橋本博文氏の見解^(註2)に従えば、西岡台の場合、出土土器にはあまり時期差がないはずであり、短期間に使用されただけということになる。

これに対して武末氏は、首長層居宅がそのような一首長一居館ということはありません、それぞれの首長は、前代から使用されていた居館を受け継いで、数代に亘って継続的に使用されていくのだという考えを示された。武末氏は、このことを実証するために西岡台遺跡の出土遺物の再検討を行うこととし、その研究成果はすでに「日本古墳時代首長層居宅をめぐる二・三の問題—九州の事例から—」^(註3)という形で公にされている。

今回の資料集は、武末氏自身による詳細なデータに基づく研究成果の更なる公表であり、その学問的意義は大きい。氏によれば、V字溝出土の土師器は大まかに3時期に分けられるといい、その時期的変遷は第4表の通りである。遺物そのものの詳細な内容は前節に譲るとして、第2期にあたる布留式古～中段階に属する土師器がもっとも多く、その時期がこの遺跡の中心時期にあたる。

第4表 土師器編年対照表

	北部九州編年 ^(註4)	熊本編年 ^(註5)	畿内編年 ^(註6)	土師器の量
西岡台Ⅰ期	宮ノ前B期	古閑期～山下期古段階	庄内式新段階～布留式最古段階	少ない
西岡台Ⅱ期	有田Ⅰ期	山下期新段階～沈目Ⅰ期	布留式古～中段階	多い
西岡台Ⅲ期	有田ⅡA期～ⅡB期	沈目Ⅱ期～塚原Ⅰ期	布留式最新段階～初期須恵器	少ない

これは西岡台遺跡における首長居館の使用時期の永続と盛衰を考える上では重要な指摘であり、この時期に築造された古墳の規模・内容その他を比較検討できれば、首長層の実体を考える上で看過できない。

(4) 古墳との関係

上記したV字溝出土の土師器編年によって、この居館がある程度は継続的に使用されていたことが明らかとなった。この3時期に平行する古墳にはどのような古墳が該当するであろうか。第2表で見た宇土半島基部における首長墓では緑川・轟群が距離的には最も近いし、西岡台か

ら直接見える場所に位置する古墳として、城ノ越古墳・迫ノ上古墳・スリバチ山古墳、それに猫城古墳・神合古墳の5基がある。

極めて限られた条件ではあるが、これらの古墳の築造時期を考えてみよう。まず城ノ越古墳は、全長49mの前方後円墳であり、ミカン園開発に伴う工事中に三角縁神獸鏡が出土している。鏡は中国製の波文帯四神四獣鏡で、鳥取県普段寺2号墳と同型鏡である。^(註7) 主体部についてはよくわかっておらず、鏡が出土した場所から約5m離れた場所に箱式石棺が確認されている。この古墳は3世紀末から4世紀前半頃に築造されたとみられる。迫ノ上古墳は長さ56mの前方後円墳であり、後円部には竪穴式石槨が構築されていた。盗掘を受けていたために遺物の残りはよくなかったが、石室には木棺のスタンプが発見され、遺物としては鉄刀・鉄剣・刀子・ヤリガンナ・鉄鏃などが見つかっている。4世紀中頃～後半築造か。

スリバチ山古墳は全長96mの前方後円墳である。主体部は不明であるが、墳丘には底部穿孔壺形埴輪の列が検出されている。猫城古墳・神合古墳については何らの遺物も発見されていない円墳であるが、墳頂部の広さや周辺には前期に属する古墳だけであるところなどから、おそらく前期から中期はじめ頃に属するものとみておく。以上見てきたような内容からこれらの古墳の西岡台編年との対応関係は、下表のようになろう。

第5表 西岡台遺跡と古墳との対応関係

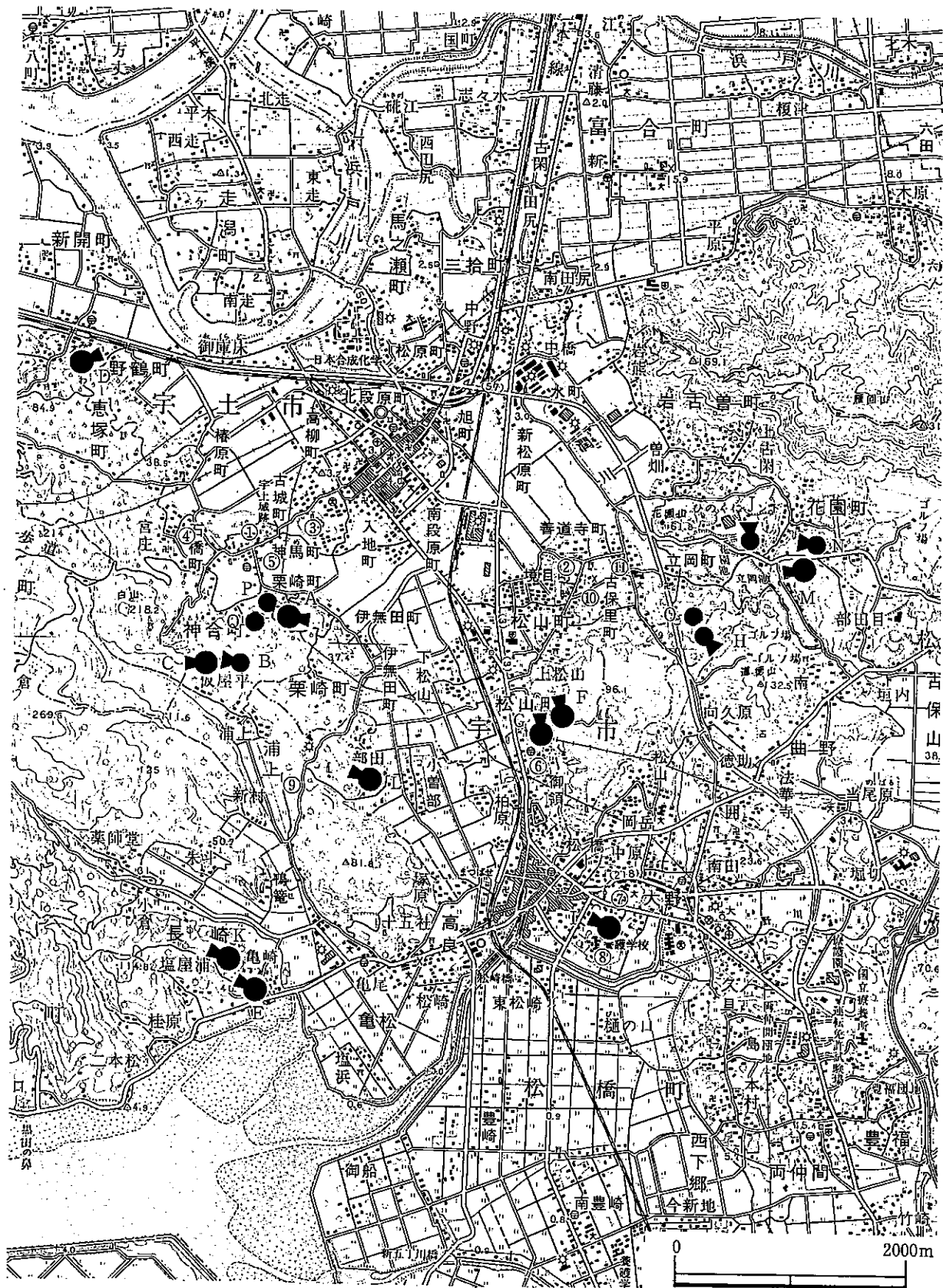
	西岡台Ⅰ期	西岡台Ⅱ期	西岡台Ⅲ期
前方後円墳	城ノ越古墳	迫ノ上古墳・スリバチ山古墳	
円墳			(猫城古墳?・神合古墳?)

この表から導かれる西岡台遺跡の首長居館との並行関係を考えると、城ノ越古墳の布留式最古段階に西岡台遺跡のV字溝は掘削され、その折に居館が造られた。その後、布留式古～中段階でも永続的に営まれたが、その頃が最も隆盛を極め、新段階では前方後円墳は知られていないし、この時期の西岡台の遺物が激減する現象と合致するのは面白い。

それで、その他のグループの首長居館はどこに造られたのであろうか。現在のところ、明確に居館と想定できる遺構が発見されたことはないが、その可能性がある遺構として、不知火町浦上字花建の浦上遺跡崖面に検出されたV字溝が、ひょっとしたらこの種の遺構である可能性もないことはない。それは、幅約3m、深さ約3mのV字溝が道路工事終了後の崖面に露出したのを昭和52～53年頃に確認したことがあり、それは西岡台のものと同様形状・規模であったが(第24図⑨)、環壕集落ないしは首長居館に伴う可能性がある。もしこの遺構が首長居館に伴うものであるとすれば、かなり重要なことであり、今後の機会に何らかの検証が行なわれることを期待したい。

松山や花園のグループでは、もちろんこのような遺構は検出されていないので何とも言えないのであるが、この地域の拠点集落としては、境目遺跡の存在があり、その場所に首長居館があった可能性がある。

今回の、西岡台遺跡出土土師器の整理作業は、宇土半島基部における古墳時代社会を考える上で、極めて重要な問題提起であった。これによって地域の歴史を見直す大きなきっかけともなったのは事実である。



第24図 関連遺跡分布図 (国土地理院発行五万分の1「熊本・八代を使用」)

- (前方後円墳) A城ノ越古墳、B迫ノ上古墳、Cスリバナ山古墳、D天神山古墳、E弁天山古墳、F御手水古墳、G向野田古墳、H潤野3号墳、I松橋大塚古墳、J楢崎古墳、K国越古墳、L仁王塚古墳、M女夫塚古墳(男塚)、N女夫塚古墳(女塚)
- (円墳) O潤野2号墳、P猫ノ城古墳、Q神合古墳
- (集落古墳) ①西岡台遺跡、②境目遺跡、③城山遺跡、④轟遺跡、⑤馬場遺跡、⑥出町遺跡、⑦大野遺跡、⑧前田遺跡、⑨浦上遺跡、⑩上松山遺跡、⑪古保里遺跡

九州の中でも前期古墳が密集する地域であり、特異な存在となっていることはかなり早くから注目されてきた。そのような地域において首長層の墳墓と生活の場が、ある程度時間軸を考慮しながら考えることができるようになったということは、今後の研究にとっても大事なことであり、更なる研究の深化が望まれる。

(5) 後記

冒頭でも述べたように、発掘調査に着手した昭和49年当時には、古墳時代前期に首長居館という明確な概念はなく、遺構の性格についてははっきりしなかった。

しかし、極めて良好な土師器の資料であるということは間違いのないことであったし、その後の発掘調査の増加によって、徐々に首長居館という考えが定着し、その種の遺跡の数も全国で100遺跡以上にもものぼるようになってきた。^(註8)

しかしながら、中学校建設に起因して始まった事前発掘調査であるという遺跡であったし、種々の経緯を経て、結果的には国指定の史跡としての指定を受けることができた。ただ、応急的に報告書を作成することになり、遺跡の大半が中世宇土城に該当するということが明らかになって、その部分の報告が多く、古墳時代に関する部分は少ないまま刊行せざるを得なかった。

27年という時の経過によって、ややもすれば再び採り上げられる機会がないまま、埃にまみれ、収蔵庫の隅に眠っていたのであるが、調査の主担当ではなかったものの、基礎的なデータだけでも何とか公開しておきたいという気持ちは長年あった。

ところが、最近になって武末純一氏から研究上必要であるので、資料の一部を実測したいとの申し入れがあり、当然のことながら了解し、実測していただいた。武末氏の申し入れは古墳時代研究にとって極めて意義のあることであり、前にも述べた通り、その成果は既に発表されている。

実測に来られた折に、他の西岡台出土土師器資料と、後掲の上松山遺跡出土の良好な土師器資料の整理・実測を進めたいので、それを引き受けていただけないかをお願いしたところ、快諾され、可能な限り図化をしていただくことになった。それから2ヵ年かけて福岡大学の学生さんと共に、休日を利用して宇土まで足を運んでいただき、武末氏みずからも積極的に図化作業を行なっていただき、このような形で資料化が可能になったものである。

古墳時代前期に関する熊本県下の土師器の編年研究は、ここ20数年間ほとんど進んでおらず、急速に増えつつけている資料の整理検討がほとんどなされていない。今回、新宇土市史の編纂事業をきっかけとして、基礎資料の蓄積と公開を目的として資料集を刊行することができたことは何よりであり、今後の研究に裨益することが多ければ幸いである。

(高木)

註

1) 宇土半島基部における前期古墳の概要については、次の文献を参照。

富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年

富樫卯三郎「古墳の立地と周辺の遺跡」『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年

2) 橋本博文「古墳時代における首長層居宅(総論)」『考古学ジャーナル』No289(特集:豪族の居館跡)、1988年

3) 武末純一「日本古墳時代首長層居宅をめぐる二・三の問題—九州の事例から—」『韓国古代文化の変遷と交渉』2000年

4) 武末純一『土器からみた日韓交渉』学生社、1991年

5) 野田拓治「古式土師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年

- 6) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49、1986年
- 7) a 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越出土の三角縁神獸鏡」『熊本史学』第33号、1967年
b 富樫卯三郎・高木恭二「熊本県城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡について—鳥取県普段寺2号墳出土鏡との比較—」『考古学雑誌』第67巻第3号、1982年
- 8) 古墳時代の首長居館に関する研究書はかなりの数にのぼる。ここでは研究誌などに特集されたものに限って、以下に列記しておく。
 - a 「特集：豪族の居館跡」『考古学ジャーナル』No289、1988年、ニューサイエンス社
 - b 「第5回歴博フォーラム 古代豪族と居館」1990年、国立歴史民俗博物館
 - c 「特集：古代の豪族居館」『季刊考古学』第36号、1991年、雄山閣出版
 - d 「特集：古墳時代の首長居館」『古代学研究』第141号、1998年、古代学研究会
 - e 「古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」第8回東日本埋蔵文化財研究会、1998年

いし
石ノ瀬遺跡

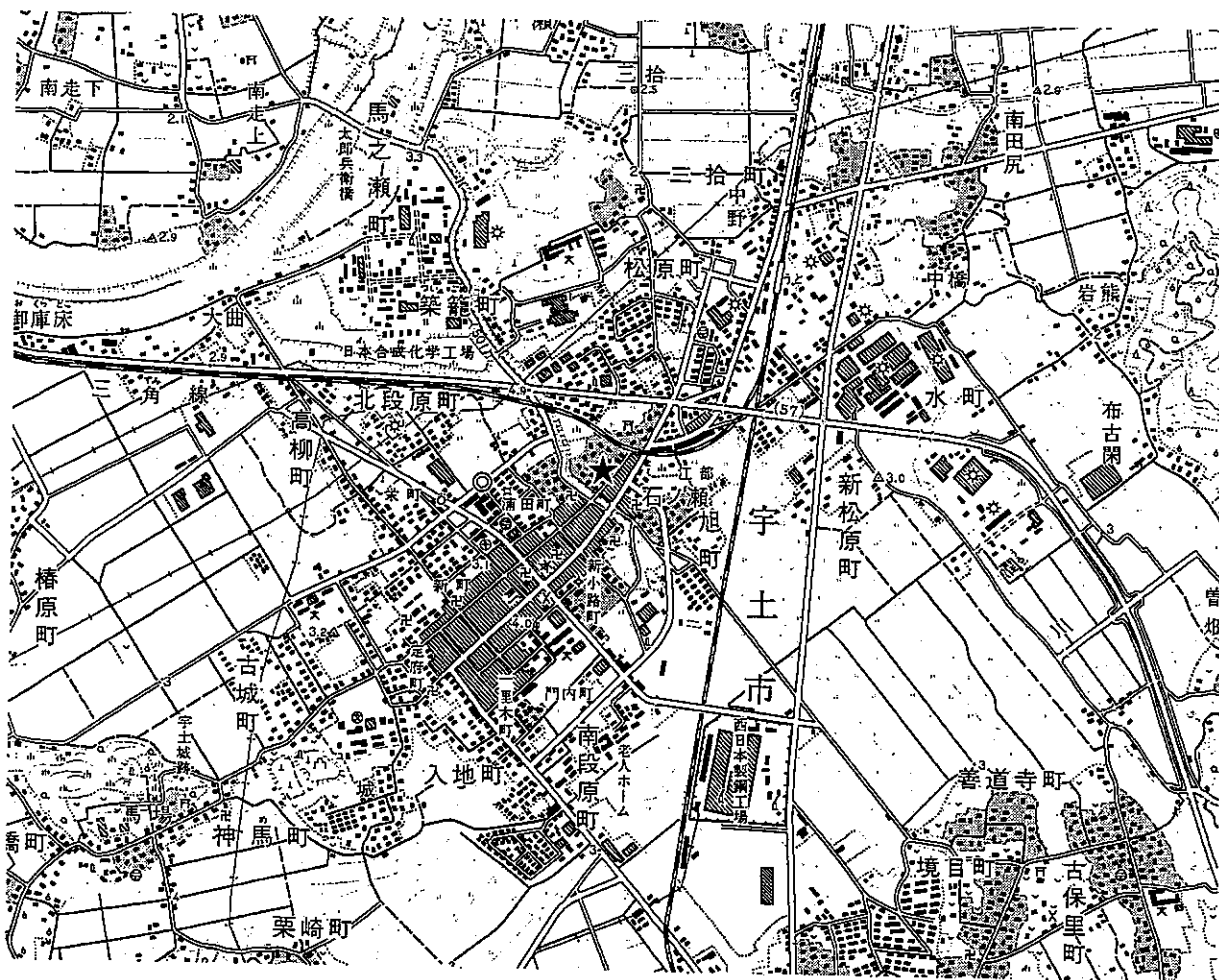
石ノ瀬遺跡

1. 遺跡の概要

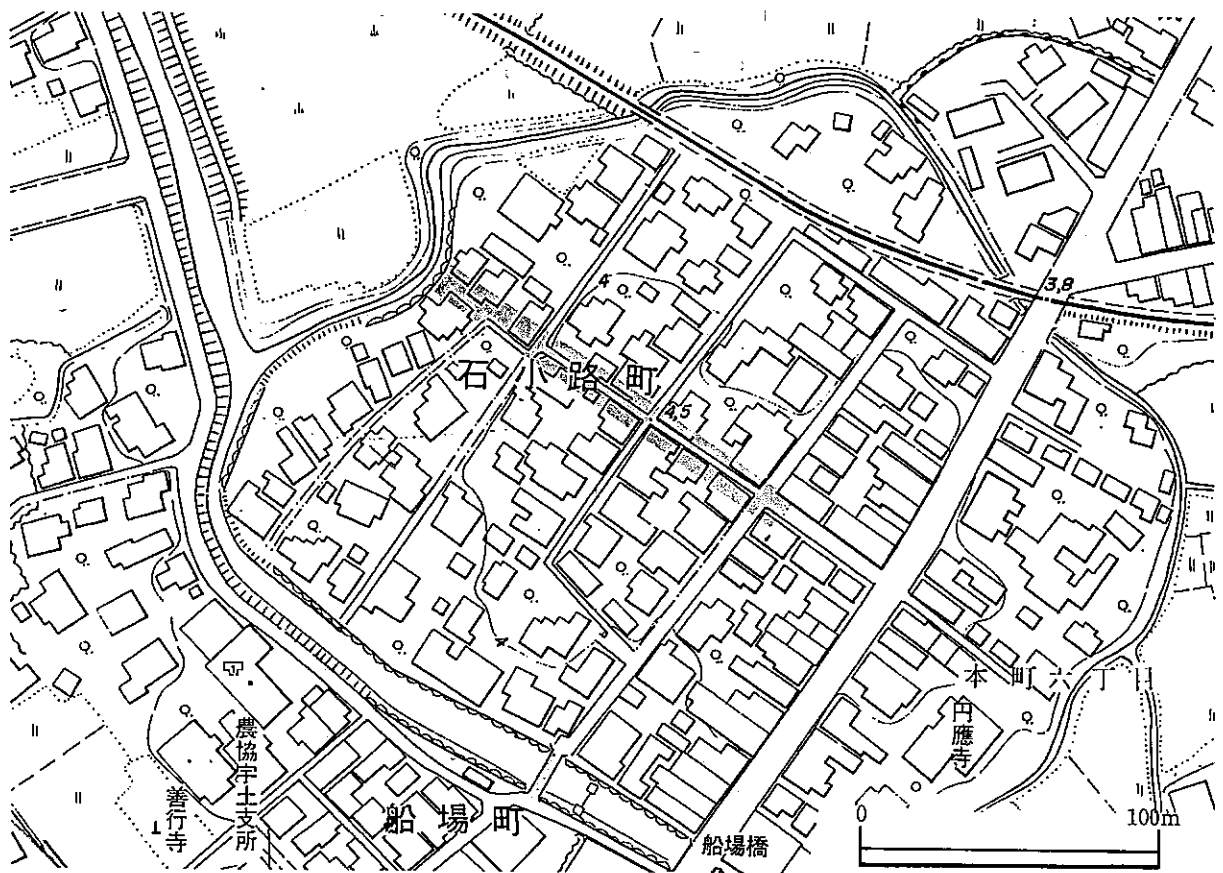
石ノ瀬遺跡が、宇土市石小路町に所在する弥生時代前期ないしは中期前半にかけての遺跡であることは、既に早い段階にわかっていた。^(註1)しかし遺跡の立地が市街地であって、住宅が立ちこめているためその内容についてはほとんど何もわかっていなかった。

旧藩時代の徒木屋敷にもあたっているために既に早い段階に遺跡の小規模な破壊が進行していたことは推測できたが、今回の発掘調査で判明したように、遺跡の中心地と思われる一帯が中世末から近世初期にかけての城郭遺構が存在していることが明らかになり、その段階での大規模な遺跡破壊がなされているという事も今回新たにわかったことの一つである。^(註2)加えて、江戸時代に宇土の藩主となった細川行孝が宇土に入部した段階で、藩主屋敷をはじめとする武家屋敷の造成にあたって、この石ノ瀬付近の土砂を埋め立て用に使ったということも判明するなど、度重なる遺跡破壊の実体も判ってきた。^(註3)

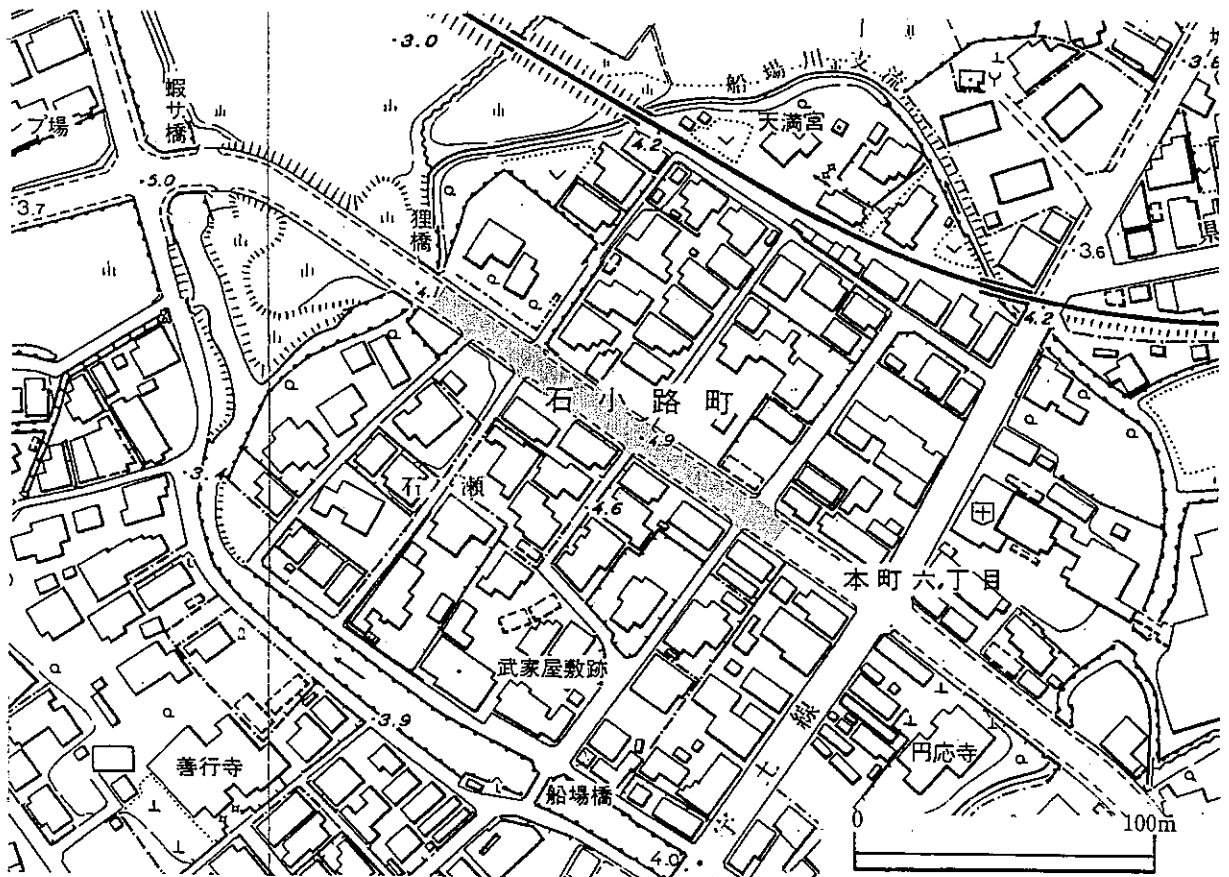
さて、当地での現在の標高は約4.2mから4.6mにかけての範囲内であって、微高地となっている。近世以降において宇土市街地が形成される以前、この石ノ瀬付近が微高地であったために、中世末ないしは近世初期における宇土城下の東の守りとするための、出城とされたものである。^(註4)



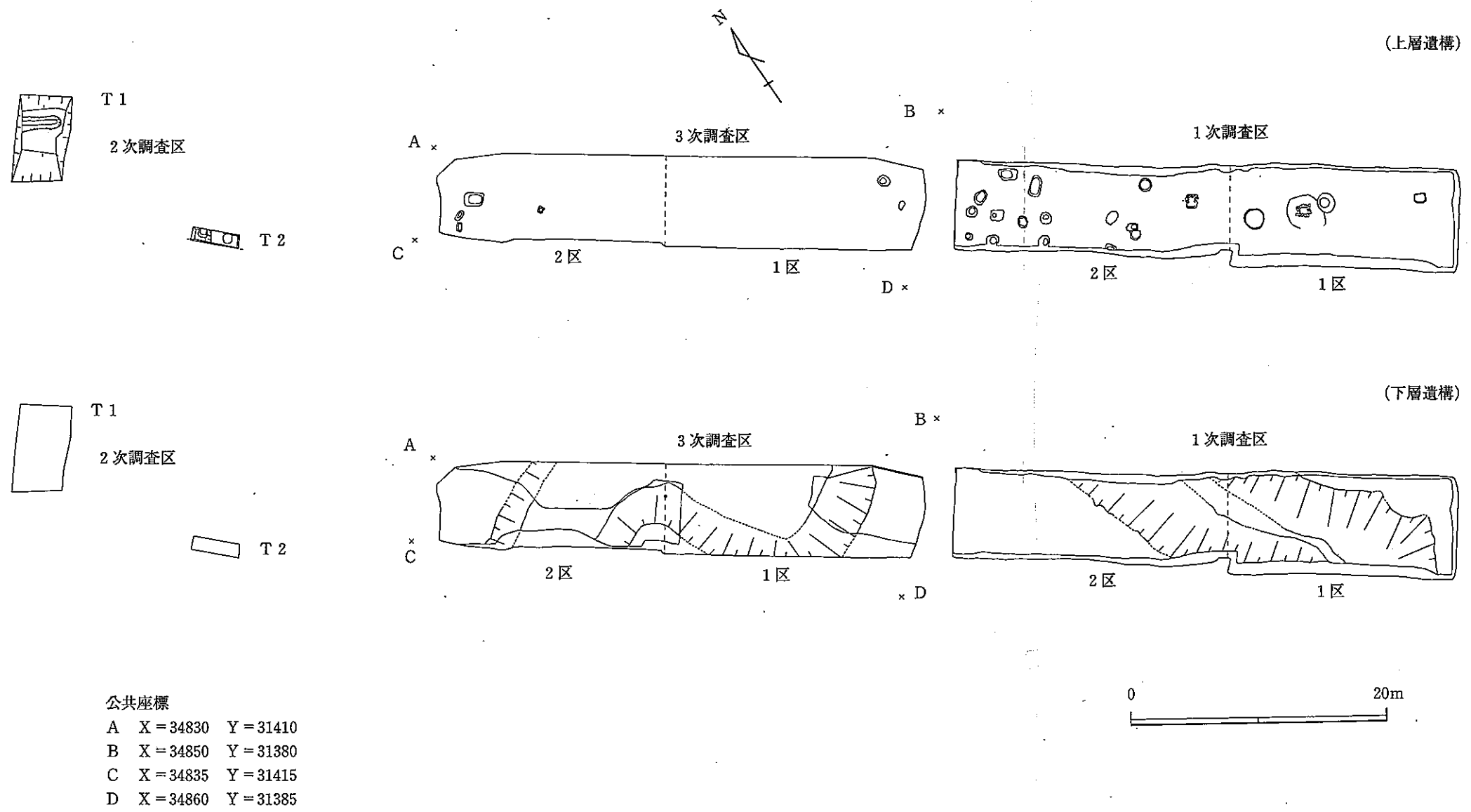
第1図 石ノ瀬遺跡位置図 (★、1/25,000 国土地理院発行二万五千分の一「宇土」を使用)



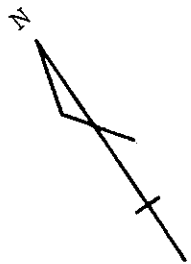
第2図 石ノ瀬遺跡調査地（アミ部分）



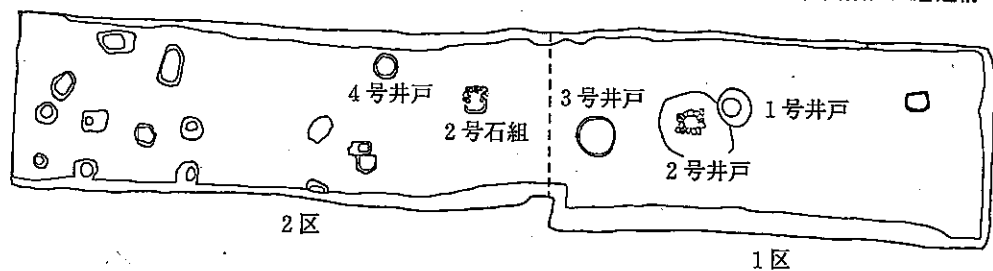
第3図 石ノ瀬遺跡調査地（工事完了後）



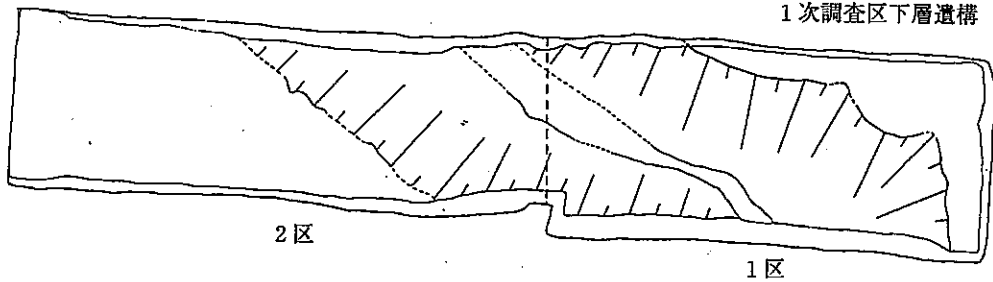
第4図 石ノ瀬遺跡調査区設定図 (1/400)



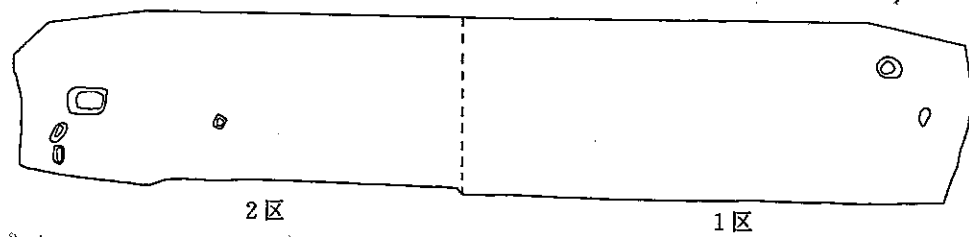
1次調査区上層遺構



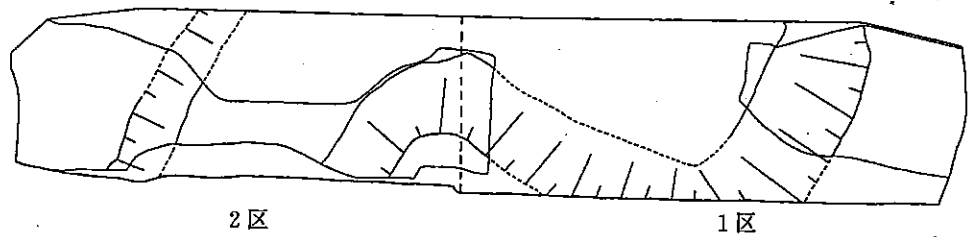
1次調査区下層遺構



3次調査区上層遺構



3次調査区下層遺構



第5図 石ノ瀬遺跡遺構図 (1/300)

それでは、中世以前はどのような状況であったろうか。元来、宇土市街地が載っている基盤は、旧緑川の氾濫土砂が堆積して微高地を形成していたものと理解されていた。それは、鎌倉時代以前において緑川には阿蘇山を水源とする白川が流れ込んで、現在の熊本市野田町の大慈寺東側付近で合流していたものであり、ここで合流して大川となった緑川が、現宇土市馬ノ瀬町付近で大きく蛇行して大曲となり、有明海に注いでいた。この蛇行地の南に市街地があるため、緑川と白川から流れてきた土砂が堆積し、微高地を形成していたというものである。

ところが、今回の石ノ瀬遺跡発掘資料の中に縄文時代早期に属する押型文土器が少なからず入っていることが明らかになったので、少なくともこの石ノ瀬遺跡付近は、8千年以上も前にあたる完新世初期には既にこの場所が陸地であり、人が生活するだけの基盤があったということがわかった。

その後しばらくの空白期があって、弥生時代前期の終りから中期はじめにかけての朝鮮系無文土器を伴った生活集落の形成、古墳時代前期に属するとみられる縄蓆文タタキをもった陶質土器片や布留式土器、それに中期末の円筒埴輪を伴った古墳(?)の存在などが今回明らかになったし、その後の中世から近世にかけての土地利用については、前に述べた通りである。

(高木・木下)

註

- 1) 富樫卯三郎1988年「遠賀川式土器の回想—宇土市石ノ瀬遺跡出土の弥生土器底部片—」『宇土市史研究』第9号
- 2) 木下洋介1996年「まぼろしの石ノ瀬城発見」広報うとNo.651、平成5年8月15日号
- 3) 舟田義輔1995年「宇土細川支藩成立の前後」『宇土市史研究』第16号
- 4) 井上正校訂1977年「肥後宇土軍記」『宇土城跡(西岡台)』(史料編)、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集

2. 発掘調査の概要

石ノ瀬遺跡の調査は、都市計画道路北段原線の道路建設に起因する。これに伴う事前の緊急発掘調査として、宇土市教育委員会が主体となって文化振興課文化振興係が実施したものである。調査は1次調査を平成3年7月から同年12月にかけて実施し、担当は木下洋介が行なった。2次調査は平成5年2月から同年3月にかけて、元松茂樹が担当となって実施した。3次調査は同じく平成5年5月から同年7月に木下・本田浩二・淵上真行が担当した。

(1) 第1次調査

調査区を東西1・2区に分割し、まず東側の1区から開始した。遺構検出後早い段階に近世以降の井戸や石組みが検出したので、これを上層遺構とし、その調査が完了してから下層に中世末から近世初期に属するとみられる堀の存在が明らかになった(下層遺構)。

出土遺物には多くの弥生式土器や円筒埴輪が混在していたがいずれもこの堀の埋土か堀底から出土したものである。弥生・古墳時代に関する遺構の存在は確認できなかった。

(2) 第2次調査

中世以前に属する遺構の検出はなく、わずかに近世後期の溝が検出したのみ。

(3) 第3次調査

ごく一部ではあるが近世に属するピットが検出した以外は、1次調査で検出した堀が、この調査区内でも明らかになった。当該城跡遺構の存在を実証するものである。

3. 遺物解説

(1) はじめに

3次にわたる発掘調査によって、幾つかの遺構が検出され、数多くの遺物が出土した。惜しい事に度重なる遺跡破壊の歴史を経ているため、ほとんどの遺物が遺構に伴って出土したものではない。

最も大きな破壊は中世末か近世初頭の城郭に伴う堀によるものであるが、これに続く武家屋敷造成に伴う採土の破壊も大きい。

以上のような状況であるので、遺構に伴った状態での出土遺物は皆無であり、今回報告するのは弥生時代前期末の弥生式土器と無文土器だけであり、それ以外の押型文土器や土師器、埴輪、それに中世遺物などは今後の宇土市史資料編等において紹介される予定となっている。

(高木・木下)

(2) 弥生土器

① はじめに

1991年に調査が行われた石ノ瀬遺跡からは、弥生時代前期～中期にかけての土器が多数出土している。その中には、朝鮮系無文土器が含まれていて注目されるが、これについてはすでに片岡宏二氏^(註1)によって報告されており、次節においても解説がなされている。本稿ではそれ以外の未報告の在地土器を中心に紹介する。

石ノ瀬遺跡において弥生時代の遺物包含層は、中世～近世の時期に攪乱を受けている。そのため紹介する弥生土器の各型式間の前後関係、共伴関係については不明である。また、遺物のほとんどは小破片で摩滅しており、器形全体を知ることができるものはほとんど無い。以上のことから遺物の紹介については、各器種とも口縁部と底部の形態に着目して分類を行い、各型式ごとに紹介する。

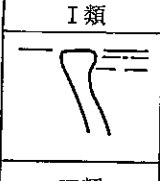
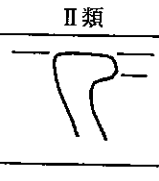

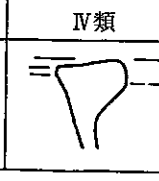
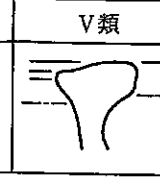
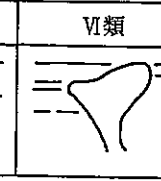
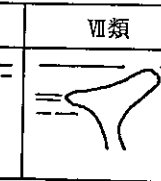

② 甕形土器、壺形土器の分類

出土した遺物の中で、最も数量の多い甕形土器と壺形土器の口縁部の分類について説明を行う。底部片および、鉢形土器、高坏、器台などは次項の出土遺物の説明の中で分類基準も含め説明を行う。

甕形土器 (第6図)

突帯の傾きと形態、口縁部内側の突出の強さによって分類を行う。

- I類 …口縁部に小さな断面三角形の突帯が施されるもの。突帯上面は平坦で、口唇部には刻目が施されるものがある。口縁部内側に突出は無く、突帯と胴部外面の境は完全にナデ消されていない。
- II類 …突帯がI類よりも大きく、傾きが水平なもの。突帯上面は平坦で、断面形態にバリエーションがある。口縁部内側に突出は見られない。
- III類 …突帯が「く」の字に上方に傾くもの。突帯の形態はII類と変わらない。口縁部内側に突出はみられない。
- IV類 …「く」の字に傾いた突帯の内側が小さく突出するもの。
- V類 …「く」の字状に傾いた突帯の内側が強く突出するもの。
- VI類 …「く」の字に傾いた突帯の上面が、強くナデられることによって浅く窪み、突帯の内側が強く突出するもの。
- VII類 …「く」の字に傾いた突帯の上面が、反り返るように強く窪むもの。

I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類
						
VIII類						

第6図 石ノ瀬遺跡甕形土器分類模式図

Ⅷ類 …胴部から口縁部にかけて内径し、口縁部の先端に突帯を施すもの。

壺形土器（第7図）

頸部、口縁形態と文様を中心に分類を行う。

I類 …頸部が強く外反し、口縁部外面に薄い粘土帯を貼り合わせることによって肥厚しているもの。口縁部と頸部の境には低い段が見られる。

II類 …内傾する頸部から口縁部が外反し、口唇部に文様が施されないもの。

III類 …直立する頸部から口縁部は緩やかに外反し、口唇部がナデによって浅く窪むもの。

IV類 …直立した短い頸部から、口縁部が外反するもの。

V類 …粘土紐を貼り合わせることによって口唇部の下端を拡張しているもの。

VI類 …直線的に外方へ開く口縁部で、器壁が薄く焼成が良いもの。

VII類 …口縁部の上面を粘土紐によって肥厚させるもの。口縁部の内側には低い段が見られる。

Ⅷ類 …Ⅷ類は鋤先口縁の壺形土器である。口縁形態の違いによって2つに細分できる。

Ⅷa類…短い口縁部の内側が突出するもの。突出部は上面が平坦で先端は尖った作りである。

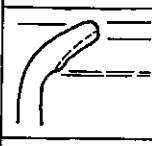
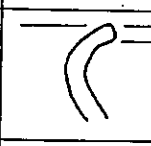
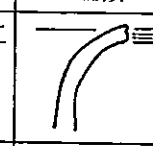
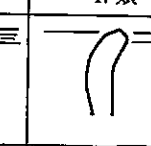
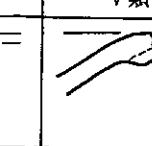
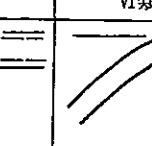
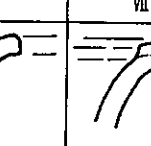


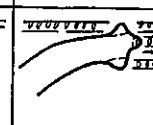
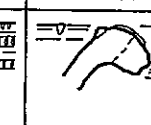
Ⅷb類…外方へ伸びる細長い口縁部の上面が浅く窪み、口縁部の内側が突出するもの。

IX類 …口縁部の外反が強く、口唇部の上面、上端、下端に小さな断面三角形の刻目突帯文を施すもの。

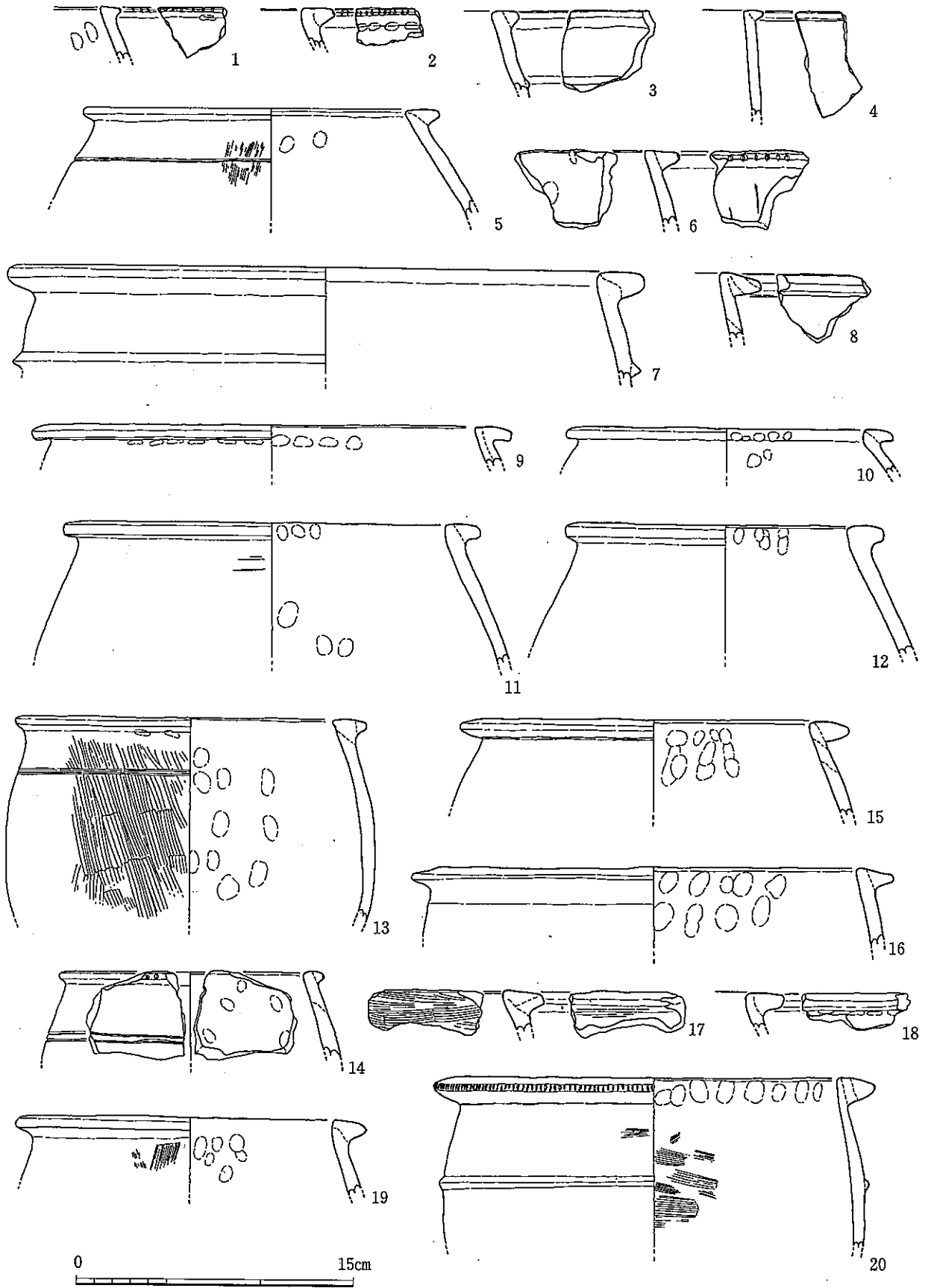
X類 …口縁部に部厚い突帯が垂れ下がるように施されるもの。口唇部は浅く窪み、口縁部の上面には棒状浮文が、内面には小さな突帯が施される。

③ 出土遺物の説明

個々の遺物の詳しい説明は一覧表にゆずり、ここでは分類した遺物の概要を説明する。各器種の口縁部、底部の総数は紹介できなかったものも含めて第1表にまとめた。

I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類
						
Ⅷa類	Ⅷb類	IX類	X類			
						

第7図 石ノ瀬遺跡壺形土器分類模式図



第8図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図

第1表 石ノ瀬遺跡出土弥生土器集計表

器種	I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類	VIII類	IX類	X類	その他	計
甕形土器(口縁)	4	43	26	49	29	12		1	1		不明1	166
〃 (底部)	2	30	8	29	9	1					不明2	81
壺形土器(口縁)	2	8	7	2	1	2	1	VIII a 6	VIII b 1	1		32
〃 (底部)	1	20	2	5	4							32
鉢形土器	1	2										3
高坏	1	2	3								脚部1	7
器台											1	1
											総数	322

甕形土器 (第8図～第14図)

口縁部と底部を合わせて総数247点のうち口縁部131点、底部25点を図化した。遺物が小片のため、甕形土器と鉢形土器との分類が困難であり、紹介する甕形土器の中に鉢形土器が含まれている可能性がある。

I類 (1～4)

1～3のように上胴部が強く張るものと、4のように胴部がほとんど張らずに、底部に向かってすぼまるものがある。1、2は口唇部に浅い刻目が密に施される。3の胴部突帯は、口縁部突帯に比べて小さい。1、2、4は内外面ナデ調整。

II類 (5～36)

II類は緩やかに膨らみをもった胴部に、厚みのある脚台状の底部がつくものである。このような器形の特徴はII類～VII類まで共通している。胴部には、ヘラ描沈線文や突帯が巡るものがある。口縁部突帯と胴部突帯の大きさの差が顕著になり、胴部突帯はI類よりもシャープな作りで形が整っている。外面にはハケ目調整が施される。口縁部突帯の断面形態にバリエーションがあり、3つに細分することができる。

5～12は口縁部突帯の断面が方形または台形に近く、口唇部は平坦に成形されている。5は胴部に1条のヘラ描沈線文が施される。7は胴部突帯が口縁部突帯に比べかなり小さく、外面には横ナデ調整の痕跡が明瞭に残っている。

13～19は口縁部突帯の先端部が細くなり、口唇部が丸みを帯びるものである。13、14は2条のヘラ描沈線文が胴部に施される。16は突帯上面がわずかに窪んでいて、胴部内面には多くの指頭圧痕が見られる。

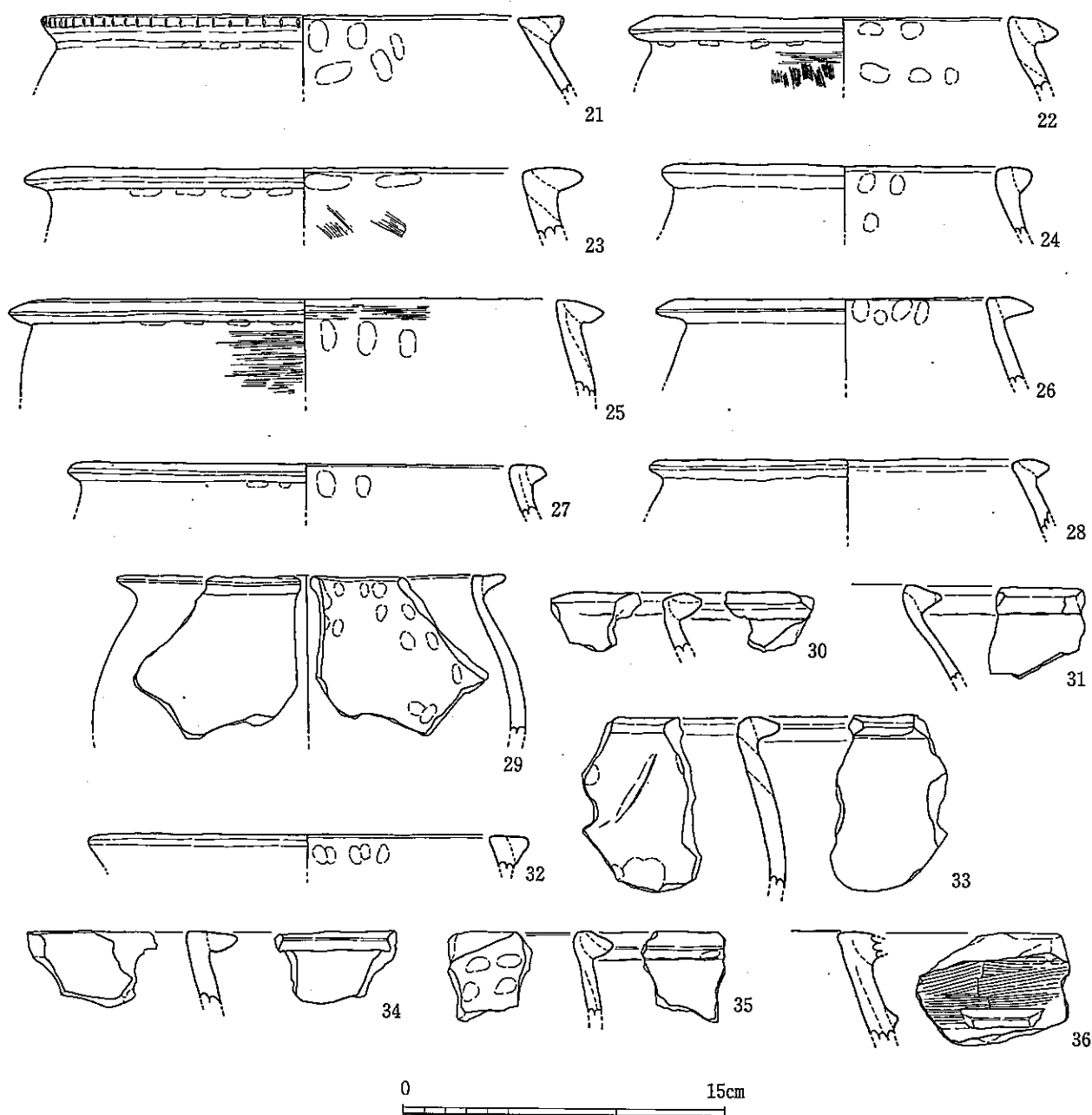
20～35は口縁部突帯の断面形態が三角形に近いものである。20、21は口唇部に刻目が施されている。20が密に施されるのに対して、21は刻目の間隔が広がっている。31は器壁が薄く丁寧な作りである。

III類 (37～57)

II類と同様に口縁部突帯の断面形態により3つに細分できる。

37～42は口縁部突帯の断面形態が方形に近く、37～40は口唇部を平坦に成形している。39は推定口径が9.4cmと小さく鉢形土器の可能性もある。42は突帯上面が部分的にわずかに窪み、口唇部に浅い幅広の刻目が施される。

43～51は口縁部突帯の先端が細くなり、口唇部が丸みを持つものである。45は突帯が細長



第9図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図

く、口縁部の内側に1条のヘラ描沈線文が施される。50は胴部が強く張り、突帯下が幅3mm程浅く窪む。胴部には粗いハケ目調整が施される。

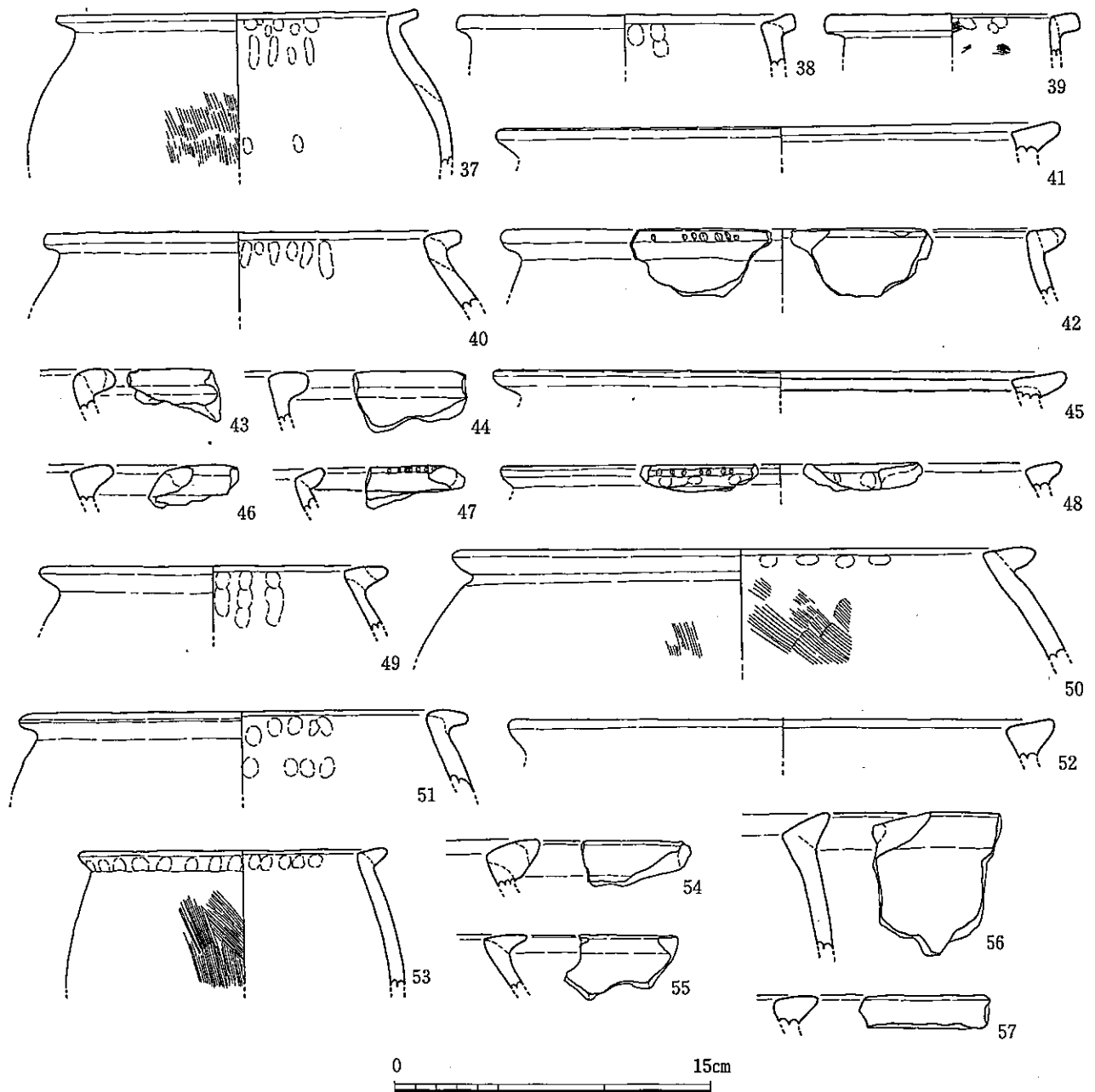
52~57は口縁部突帯の断面形態が三角形に近いものである。53の突帯下には指頭圧痕が等間隔に残っている。外面には単位の細かいハケ目調整が丁寧に施されている。

IV類 (58~93)

IV類、V類の中には、部厚い口縁部突帯を持つものが見られる。口縁部突帯の断面形態によって3つに細分することができる。

58~66は口縁部突帯の断面形態が方形に近いものである。その中でも、58、62、63、65は突帯の厚さが1.8cm程で部厚い作りである。59は突帯上面が部分的にわずかに窪み、胴部には1条のヘラ描沈線文が施されている。61は細長い突帯の先端に刻目が施されている。

67~83までは突帯の先端部が細くなり、口唇部が丸みを帯びるものである。72の内面は横方向のミガキ調整が施されている。77の突帯は厚さが1.5cmで部厚い作りである。75、78、80は突



第10図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図

帯上面が部分的にわずかに窪む。79は推定口径が11.3cmと小さく、鉢形土器の可能性もある。

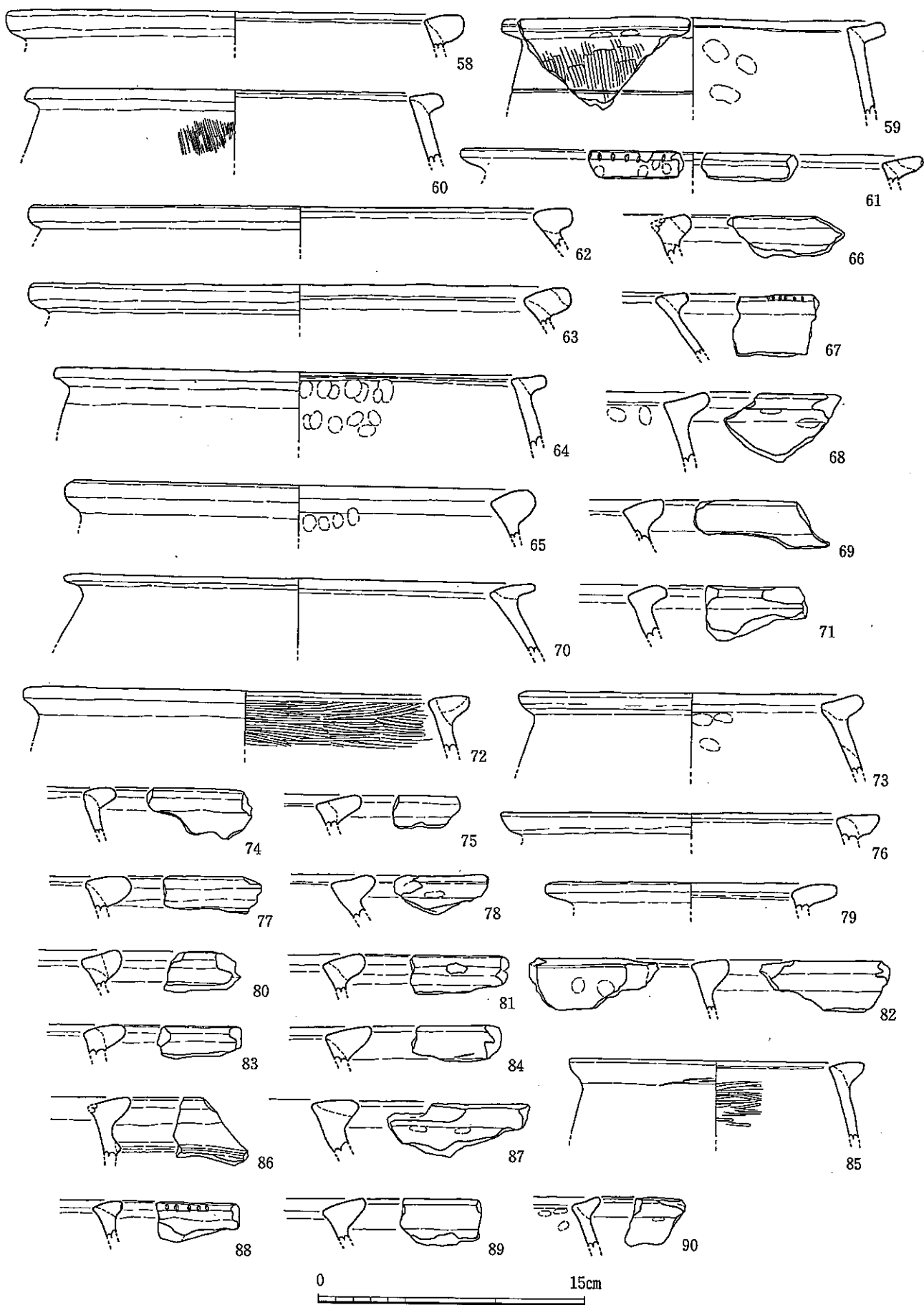
84~93は口縁部突帯の断面形態が三角形に近いものである。85の外面には突帯と胴部との境に工具痕が残っている。外面は横ナデ調整、内面は粗雑な横方向のミガキ調整。86の胴部には、歪んだ小さな断面三角形の突帯が1条残る。

V類 (94~119)

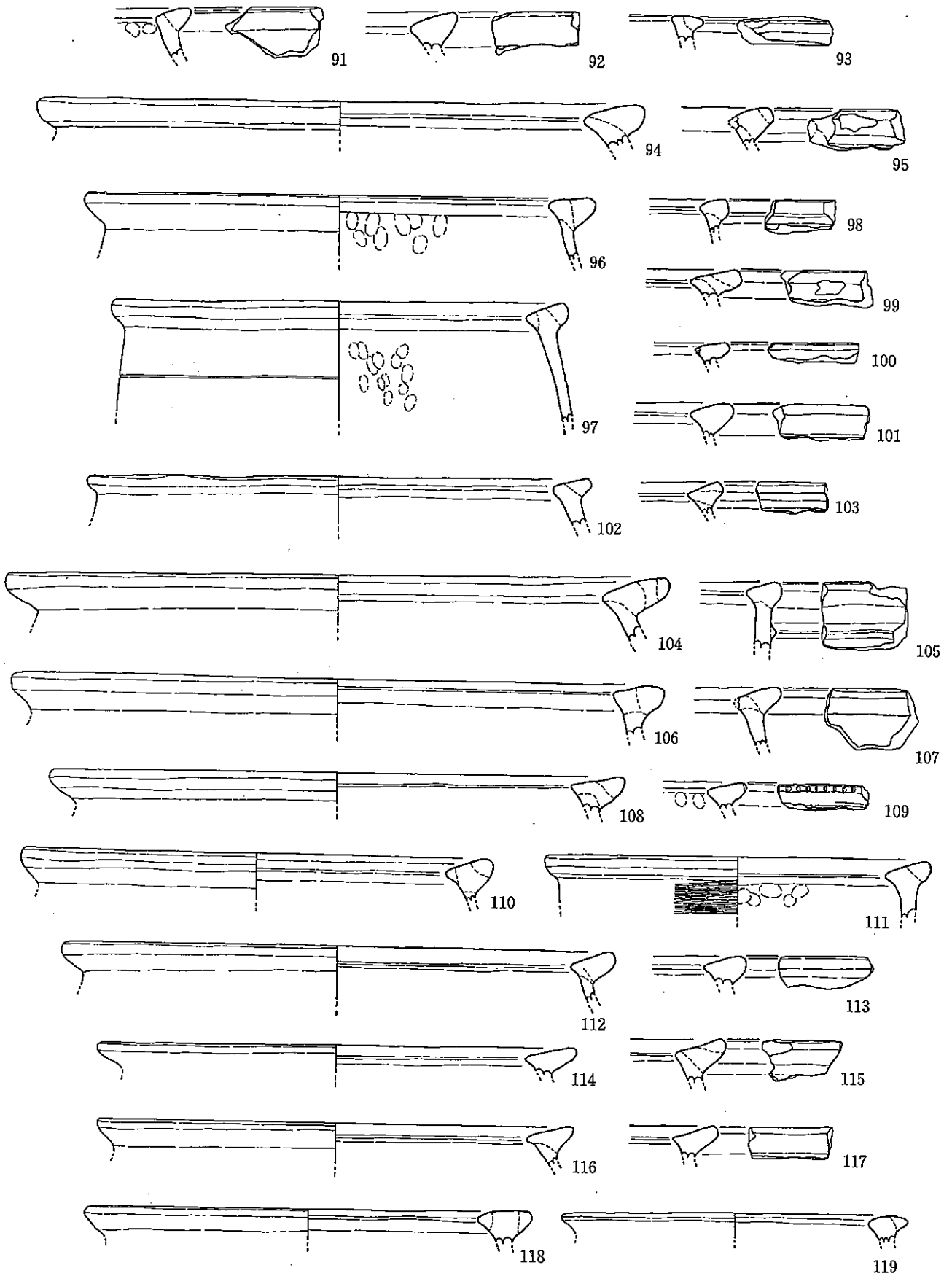
口縁部突帯の断面形態によって、2つに細分することができる。

94~103は口縁部突帯の断面形態が方形に近いものである。97は口縁内側の突出部を粘土紐を付け足すことによって作り、胴部外面には、細い1条のヘラ描沈線文が施される。98~103は口唇部を平坦に仕上げている。

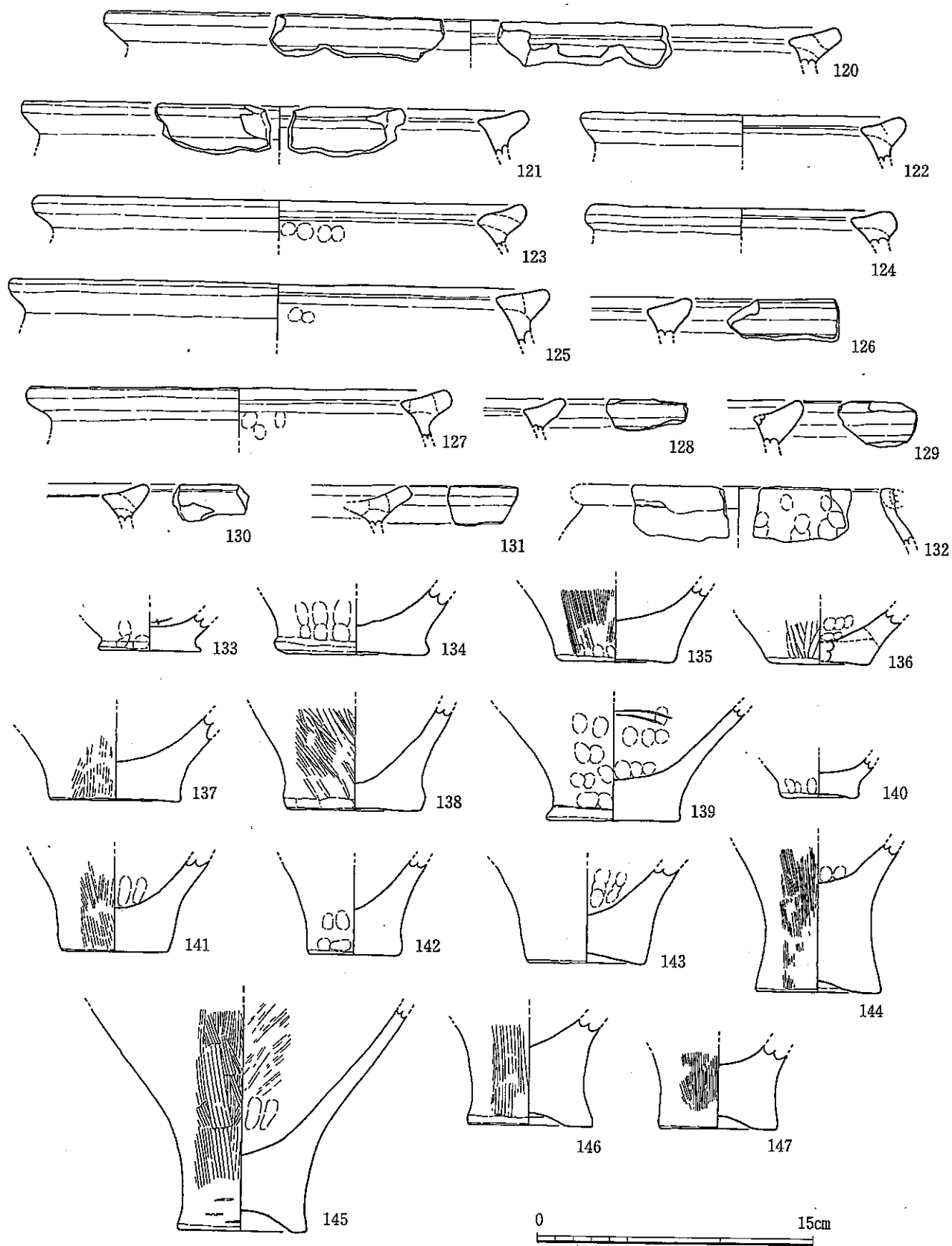
104~119は、口縁部突帯の先端部が先細りし、口唇部が丸みを帯びるものである。104は推定口径が36cm、106は35.4cmの大型品である。110は突帯の厚さが1.5cm程で他のものよりも厚く、



第11図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図



第12図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図



第13図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器実測図

口縁内側の突出部は粘土紐を付け足すことによって作る。111の胴部外面には幅1mm程の細かいミガキ調整が丁寧に施されている。115～117は細長い突帯の上面が、横ナデによってわずかに窪む。118、119は口縁の傾きが水平に近いものである。

VI類 (120～130)

VI類は口縁内側の突出部の上下を指で挟み、横方向にナデるために、突帯上面の中央部が浅く窪んでいる。突帯の断面形態によって方形に近いもの(120、121、123、124、127)と先端部が細くなり丸みを帯びるもの(122、125、126、128～130)に細分できる。IV、V類に特徴的な厚みのある突帯は見られない。120は推定口径が39cmと大きく、甕棺の可能性も考えられる。

VII類 (131)

口縁部内側の突出部が欠損しているため全体の形状を知ることはできない。口縁上面は反り返るように窪み、口唇部は丁寧に面取りがなされている。全体的に器壁が薄く丁寧な作りである。

VIII類 (132)

器形の特徴から朝鮮系無文土器であると考えられる。突帯は欠損しているために全体の形状は不明である。突帯の一部が、押し潰されるように垂れ下がっている点は、石ノ瀬遺跡から出土している他の朝鮮系無文土器の甕形土器と共通した特徴である。胎土は在地の土器と変わらない。

底部

底部は、器形の違いによりVI類に分けることができる。

I類 (133、134)

I類は底縁部が小さく張り出すものである。133、134の外面は指頭圧痕のために表面が緩やかに凹凸している。両者とも粗雑な作りである。

II類 (135～140)

II類は底からわずかに内湾しながら立ち上がるもの。外面には、ハケ目調整(135、137)、ミガキ調整(136、138)、ナデ調整(139、140)が施される。139は底付近の調整が途中であるために、底部の外周の2/3程が外側へ張り出している。

III類 (141～143)

III類は、底から直立または、わずかに外傾して立ち上がり、II類よりも底の器壁が厚くなるもの。

IV類 (144～152)

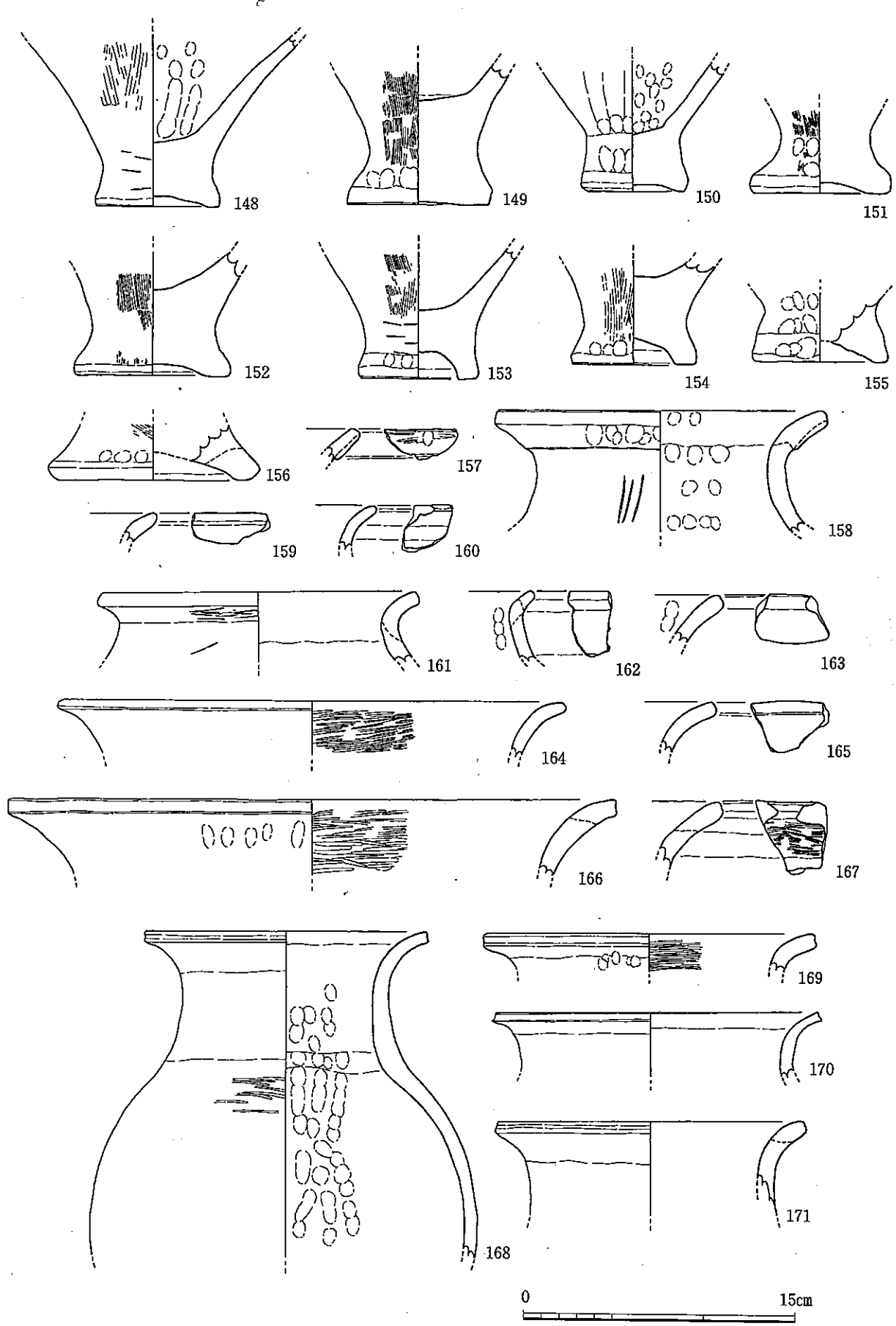
IV類は厚みのある脚台状を呈する底部。底の器壁が厚いために、上げ底は高くはならない。接地面は平坦に作られ、外面は括れ部付近までハケ目調整が施されている。裾広がり弱いもの(144～147)と強いもの(148～152)がある。

V類 (153～155)

V類は脚台状を呈し、IV類よりも上げ底が高くなる底部。上げ底の窪みが深くなるために、IV類に比べて、脚部の厚みが薄くなり、接地面の幅も狭くなる。外面は括れ部付近までハケ目調整が施される。

VI類 (156)

VI類は裾広がり強い、脚台状の底部で、底径が11.4cmと大きくなるもの。裾端部は面取りがなされる。



第14図 石ノ瀬遺跡出土甕形土器・壺形土器実測図

壺形土器（第14図～第15図）

壺形土器は、口縁部と底部を合わせて64点のうち、口縁部21点、底部10点を図化した。

I類（157、158）

157は口縁部の小片で、外面はナデ調整後に、部分的にミガキ調整が施されている。158は頸部に3本の沈線文が縦方向に施される。内外面ナデ調整である。I類は板付Ⅱ式の壺形土器と考えられる。

Ⅱ類（159～165）

小片のために、頸部から口縁部にかけての器形が不明なものが多い。161、162は、内傾する頸部から短い口縁部が強く外反する。164は外面がナデ調整、内面が丁寧なミガキ調整である。

Ⅲ類（166～173）

166は推定口径が32.6cmの大型品である。内面は丁寧なミガキ調整、外面は摩滅のため不明。168は上胴部が張らずに、長胴気味になる。外面は摩滅しているが、上胴部に横方向のミガキ調整が残っている。内面はナデ調整で、指頭圧痕が多く残り、緩やかに凹凸している。169は内面は丁寧なミガキ調整、外面は横ナデ調整。173は口唇部の窪みの上下に刻目が施されている。

Ⅳ類（174、175）

174は焼成が良く、内外面に単位の細かいミガキ調整が丁寧に施される。178の口縁は外反が強く逆「L」字状を呈している。外面は布のようなものを使い横方向にナデた後、縦方向へのナデ消しが行われている。

V類（176）

V類は口唇部の下端を粘土紐を貼り合わせることによって拡張しているもの。内外面ナデ調整である。

Ⅵ類（177、178）

Ⅵ類は口縁が朝顔形に開く、広口壺と考えられる。177の口唇部は面取りされ、下方に小さく突出している。外面には浅く細いヘラ描沈線文が1条施されているが、暗文は見られない。薄手で焼成が良く、内外面ナデ調整。167の口唇部は丸みを帯びる。焼成が良く丁寧な作りである。内面はナデ調整、外面は摩滅のためはつきりと確認できないが縦方向のミガキ調整と考えられる。暗文は施されていない。

Ⅶ類（180）

180は口縁部の上面を粘土紐によって肥厚させている。内外面ナデ調整である。

Ⅷ a類（179、181～184）

Ⅷ a類は口縁部の内側が突出する、鋤先口縁のものである。182は推定口径が34.4cmと大型で、口縁部の外反が強い。粗雑な作りであるために、内外面の接合部が完全にナデ消されず、口唇部と口縁内側の突出部が歪んでいる。

Ⅷ b類（185）

185は細長い口縁部の上面が浅く窪み、口縁部の内側が突出する。口縁部上面の窪みの程度は、甕形土器のⅥ類に近い。全体的に器壁が薄く、丁寧な作りである。内外面ハケ目調整。

Ⅸ類（186）

186は口縁部が強く外反し、口唇部の上面、上端、下端に小さな断面三角形の刻目突帯文を施す。刻目は幅が狭く浅いもので密に施されている。内外面ナデ調整。

X類 (187)

187は口縁部上面に縦方向の棒状浮文が、内面には横方向に1条の小さな突帯が施され、両者は繋がっている。鹿児島県を中心に分布する入来Ⅱ式に伴う壺形土器と考えられる。

底部 (第15図)

底部は形態の違いによって5つに分類できる。

I類 (188)

188は底から短く直立し胴部へと続くもの。粗雑な作りのため、括れ部の接合部は完全にナデ消されていない。外面にはミガキ調整が施される。

Ⅱ類 (189~192)

Ⅱ類は底の方から、小さく内湾しながら斜め方向に立ち上がるものである。

Ⅲ類 (193)

底の器壁が厚く、内湾しながら斜めに立ち上がるもの。

Ⅳ類 (194、195)

接地面から、そのまま斜め方向に立ち上がるもの。

V類 (196、197)

底の厚さと器壁の厚さがほぼ同じで、底から外側に膨らみを持って立ち上がるもの。器壁が薄く丁寧な作りで、内外面共にナデ調整が施される。

鉢形土器 (第16図)

口径が小さく、胴部が張らないものを鉢形土器に分類した。

I類 (198)

「く」の字に傾く口縁部の内側がわずかに突出するもの。突出の程度は、甕形土器のⅣ類に近い。

Ⅱ類 (199、200)

「く」の字に傾く口縁部の内側が強く突出するもの。突出の強さは、甕形土器のV類に近い。200は壺形土器の可能性も考えられる。

高坏 (第16図)

I類 (201)

細長く直線的な口縁部のもの。外面にはハケ目調整が施される。

Ⅱ類 (202)

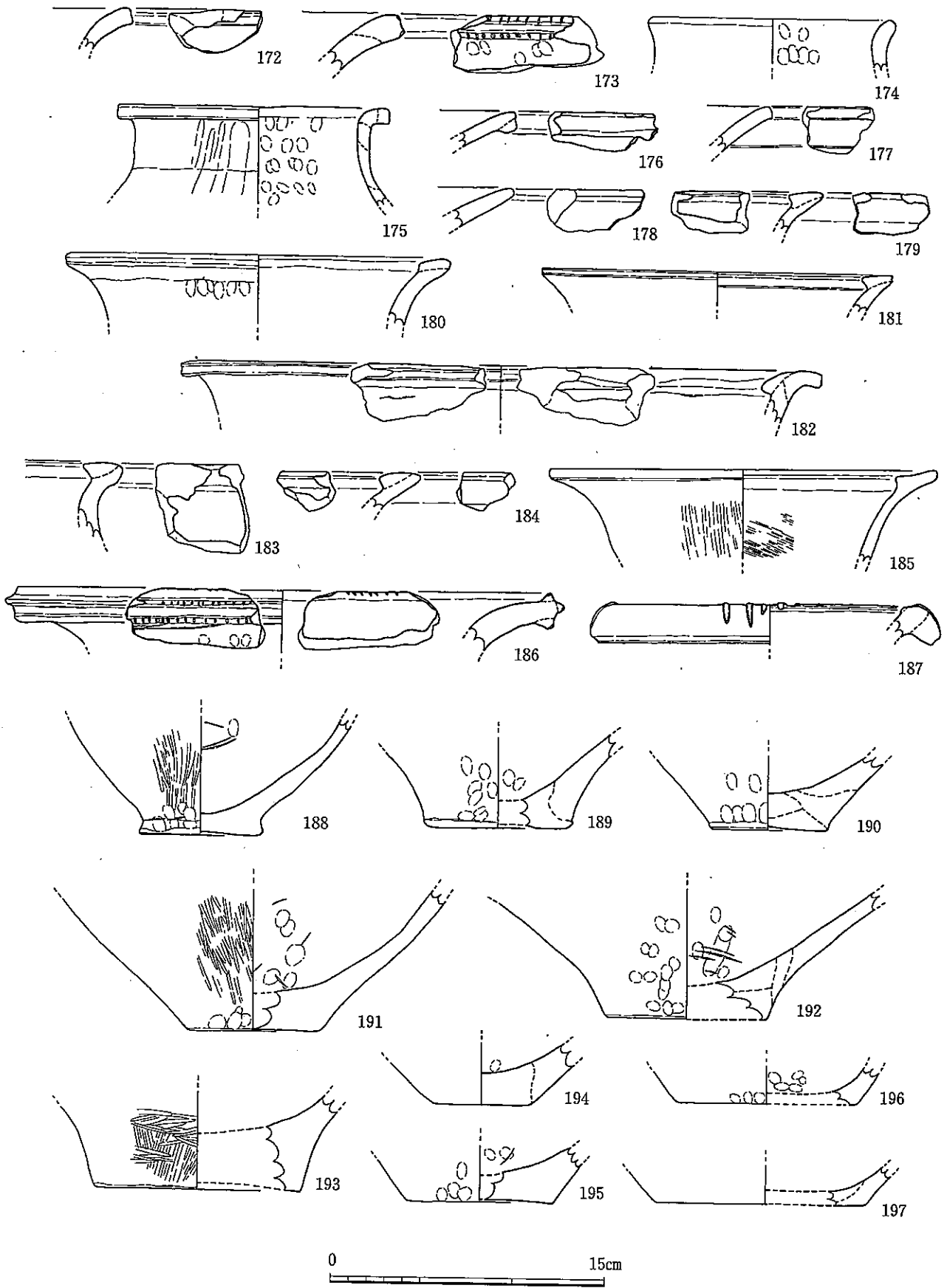
直線的で細長い口縁部の内側がわずかに突出するもの。突出の程度は甕形土器のⅣ類に近い。202は丁寧な作りである。

Ⅲ類 (203)

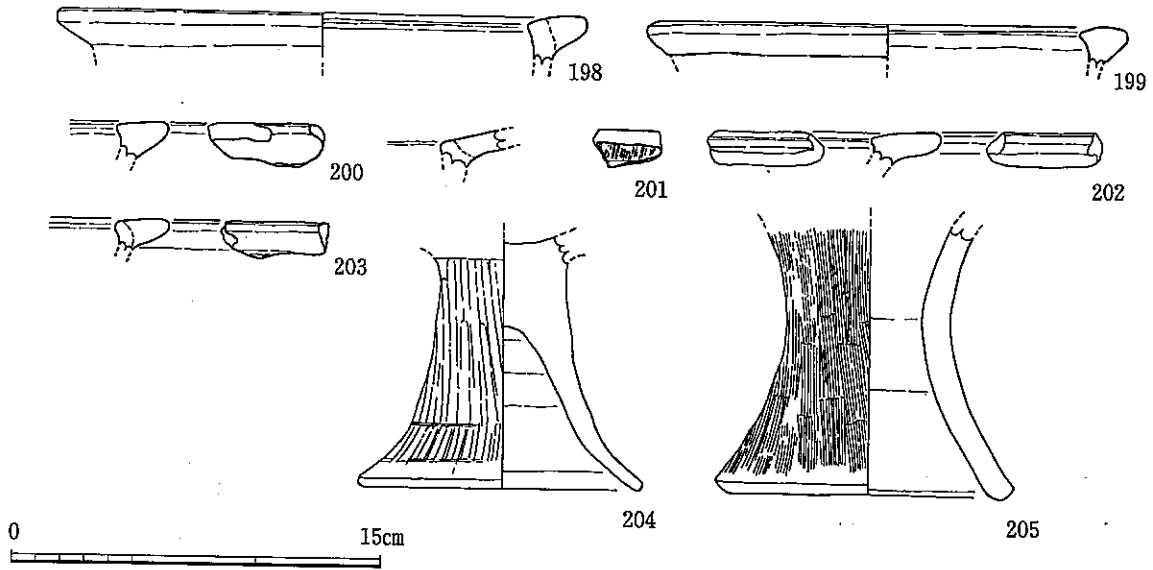
直線的な口縁部の内側が強く突出するもの。突出の程度は甕形土器のV類に近い。

脚部 (204)

204は脚柱部から緩やかに裾部が広がり、外面には赤色の丹塗りが施されている。外面は脚柱部から裾部にかけて縦方向のミガキ調整が、裾部は横ナデ調整が施される。



第15图 石ノ瀬遺跡出土壺形土器実測图



第16図 石ノ瀬遺跡出土鉢形土器・高坏・器台実測図

第2表 石ノ瀬遺跡出土甕形土器・壺形土器と他遺跡との対応関係

石ノ瀬分類 遺構名	甕形土器								壺形土器										
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIIIa	VIIIb	IX	X
宇土城三ノ丸SD1	36								1	8									
境目西原SD1		8	1									4							
入来V字溝		8								2	3								
上の原57号住居		14	2	3															
◇ 32号住居		10	14	4												1			
◇ 57号住居		14	2	3															
◇ 61号住居		3	1	1								2							
◇ 68号住居		1	5	2							1	1				1			
◇ 24号住居		9	6	7	3							4		2					
◇ 60号住居		1	3	2	4														
◇ 66号住居		6		3	2						2	1							
◇ 63号住居				1	4														
入来西南地区溝						1											2		
矢護川日向38号住居				2		3								1					
◇ 41号住居				4	3	1										2	1		
◇ 12号住居				2	8	5	3							2					
◇ 3号住居					5	4	8							8		3	7		
◇ 14号住居				1	3	6	8	21									3		
谷頭 2号住居				1		3	5	28						2					
◇ 5号住居						2	5	14						2					
◇ 6号住居						3	4	20						4					

器台 (205)

欠損しているために、天地は不明である。体部から緩やかに裾部が広がる。外面は体部がハケ目調整、裾部が横ナデ調整で、内面は横ナデ調整が施される。

④ 出土遺物の時期について

第2表は分類した土器の熊本・鹿児島両県の遺跡における遺構内出土状況についてまとめたものである。第2表の各遺跡から出土している弥生土器は、現在の編年では弥生時代前期後半～中期後半に位置づけられている^(註3)。このことから、本稿で紹介した弥生土器は、弥生時代前期後半～中期後半にかけてのものであると考えられる。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、高木恭二氏をはじめ宇土市教育委員会の方々には貴重なご教示を数多くいただきました。深く感謝申し上げます。また、下記の諸先生、諸機関から貴重なご教示、資料の提供をいただきました。文末にご芳名を記して感謝の意を表します。

阿田幸子・亀田学・清田純一・熊本県文化課・熊本大学考古学研究室・甲元真之・小牧多恵・佐藤伸二・城南町教育委員会・林麻穂・古森政次・藤本貴仁・本田道輝・宮崎敬士

(五十音順・敬称略)

(川口雅之)

註

- 1) 片岡宏二1999「渡来人・渡来文化の南下一熊本・鹿児島出土の朝鮮系無文土器を中心として」『人類史研究』11、人類史研究会
片岡宏二1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
- 2) 境目西原遺跡、上の原遺跡、矢護川日向遺跡については宇土市教育委員会、熊本県文化課、熊本大学考古学研究室の許可を得て、報告書に掲載されていない遺物も第2表に含めた。また、第2表は石ノ瀬遺跡から出土している型式のみを対象としている。
- 3) 西健一郎1983「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』12、九州古文化研究会
中園 聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9、人類史研究会
本田道輝1999「松木藪0式土器、その後」『鹿児島考古』33、鹿児島県考古学会

参考文献

- 安達武敏・浦田信智・佐藤伸二・本田京子 1980『矢護川日向調査報告』九州電力株式会社・日向遺跡調査団
- 安達武敏・河北 毅・高木恭二・富樫卯三郎ほか 1982『宇土城三ノ丸跡』熊本勤労者住宅生活協同組合・宇土城三ノ丸跡発掘調査団
- 河口貞徳 1976「入来遺跡」『鹿児島考古』11、鹿児島県考古学会
- 柴尾俊介・島津義昭・瀬丸敬二・松村道博 1978『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団・西原村教育委員会
- 高木恭二 1983「宇土半島基部の弥生資料(一)―境目遺跡出土の石器―」『宇土市史研究』4
- 中園 聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9、人類史研究会
- 西健一郎 1983「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』12、九州古文化研究会
- 野田拓治・松本健郎ほか 1983『上の原遺跡I』熊本県教育委員会
- 本田道輝 1980「松木藪遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』14、鹿児島県考古学会
- 本田道輝 1984「松木藪1号住居址出土土器とその意義―松木藪式土器の系譜をめぐって―」『鹿大史学』32 鹿大史学会
- 本田道輝 1999「松木藪0式土器、その後」『鹿児島考古』33、鹿児島県考古学会

第3表 石ノ瀬遺跡出土弥生土器観察表

No	出土地点	器種	分類	色	胎	土	調整	備考	土器番号
1	1次・1区p-7	甕形土器	I類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/3 外面：橙色7.5YR6/6 内面：橙色7.5YR7/6	内外面：少量含む	長石、石英を少量含む	内外面：横ナデ	焼成：良好、口唇部に刻目が施される。	106
2	1次・T-II層	甕形土器	I類	外面：橙色7.5YR6/6 内面：橙色7.5YR7/6	内外面：少量含む	長石、石英を少量含む	内外面：ナデ	焼成：良好、口唇部に刻目が施される。	103
3	1次・1区南Tr	甕形土器	I類	内外面：にぶい黄褐色5YR4/4	内外面：少量含む	角閃石、雲母を少量含む	内外面：摩擦	焼成：良好、胴部に突帯が1条残る。	121
4	1次・1区堀埋土(コーナ一部)	甕形土器	I類	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい橙色7.5YR6/4	内外面：少量含む	長石、石英、砂粒を少量含む	内外面：横ナデ	焼成：良好。	101
5	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	II類	内外面：灰黄褐色10YR6/2	内外面：少量含む	角閃石を所々に含む	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ 内面：横ナデ	推定口径：16cm。 焼成：良好、胴部外面に1条のへラ描沈線文が施される。	37
6	1次・1区東西トレンチ東側(堀埋土)	甕形土器	II類	内外面：赤褐色10R6/6	内外面：少量含む	角閃石、長石を少量含む	外面：口縁部横ナデ、胴部摩擦 内面：ナデ	焼成：良好、口唇部に刻目が施される。胴部外面に工具痕が残る。	2
7	3次・2区SD1北側黒色土	甕形土器	II類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3	内外面：少量含む	角閃石、砂粒を少量含む	内外面：横ナデ	推定口径：28.6cm。 焼成：良好、横ナデの痕跡が明瞭に残る。	16
8	2次・2区SD1	甕形土器	II類	内外面：橙色2.5YR6/6	内外面：少量含む	角閃石、長石、石英を少量含む	内外面：横ナデ	焼成：良好。	11
9	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	甕形土器	II類	内外面：橙色5YR7/6	内外面：少量含む	角閃石、長石、石英を少量含む	内外面：横ナデ	推定口径：21.6cm。 焼成：良好。	8-1
10	1次・1区東西トレンチ(堀埋土)	甕形土器	II類	外面：褐色2.5YR6/6 内面：灰黄褐色10YR6/2	内外面：少量含む	角閃石、石英を所々に含む。砂粒を少量含む。	外面：口縁部横ナデ、胴部摩擦 内面：ナデ	推定口径：14.3cm。 焼成：良好。	20
11	1次・1区堀埋土(コーナ一部)	甕形土器	II類	外面：暗灰色2.5Y5/2 内面：淡黄色2.5Y8/4	内外面：少量含む	石英、金雲母を所々に含む	内外面：ナデ	推定口径：18.3cm。外面に工具痕残る。	14
12	1次・2区堀埋土(コーナ一部)	甕形土器	II類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/4	内外面：少量含む	金雲母、雲母、石英を少量含む	内外面：横ナデ	推定口径：14cm。 焼成：良好。	39
13	1次・2区P-1	甕形土器	II類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：にぶい黄色2.5Y6/3	内外面：少量含む	長石、石英、雲母を少量含む	外面：口縁部横ナデ、胴部ハケ 内面：ナデ	推定口径：14.9cm。 焼成：良好、上胴部に2条のへラ描沈線文が施される。	44
14	1次・2区堀埋土	甕形土器	II類	外面：黒褐色2.5Y3/1 内面：にぶい黄褐色10YR5/4	内外面：少量含む	石英を少量含む	内外面：ナデ	推定口径：11.9cm。 焼成：良好、口唇部に刻目、胴部に2条のへラ描沈線文が施される。	17
15	1次・1区堀埋土(4号井戸東側)	甕形土器	II類	内外面：橙色2.5YR6/6	内外面：少量含む	角閃石を多く含む。石英を少量含む。	外面：口縁部横ナデ、胴部摩擦 内面：ナデ	推定口径：16.4cm。 焼成：良好。	21
16	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	II類	外面：にぶい赤褐色2.5YR4/4 内面：にぶい褐色7.5YR7/4	内外面：少量含む	砂粒を少量含む	内外面：横ナデ	推定口径：21.8cm。 焼成：良好、突帯の上は浅く窪み、内面には指頭圧痕が多く残る。	5
17	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	II類	内外面：黄灰色2.5Y5/1	内外面：少量含む	長石、石英を少量含む	外面：横ナデ、内面：ハケ	焼成：良好。	9-2
18	1次・1区堀埋土(コーナ一部)	甕形土器	II類	外面：褐色7.5YR7/6 内面：灰色5Y4/1	内外面：少量含む	長石、石英を少量含む	内外面：ナデ	焼成：良好。	12-1
19	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	II類	内外面：灰黄褐色10YR5/2	内外面：少量含む	角閃石を所々に含む	外面：口縁部横ナデ、胴部ハケ 内面：横ナデ	推定口径：14.9cm。 焼成：良好、ハケ目の単位は細かい。	23

No	出土地点	器種	分類	色	調	胎	土	調整	備考	土器番号
20	不明	甕形土器	Ⅱ類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：にぶい黄褐色10YR7/4		角閃石、長石、赤色の砂粒を多く含む。		外面：口縁部ナデ、胴部擦過、内面：口縁部ナデ、胴部擦過。	推定口径：19.6cm。 焼成：良好。口唇部に刻目に1条の突帯が施される。	1
21	1次・3号井戸掘り 込み北側	甕形土器	Ⅱ類	内外面：黄褐色2.5Y5/3		長石、石英、金雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：19.6cm。 焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	47
22	1次・1区北Tr	甕形土器	Ⅱ類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3		角閃石、長石、石英を少量含む。		内外面：ナデ。	推定口径：15.2cm。 焼成：良好。	7
23	1次・堀埋土（黒色土+青灰色粘土）	甕形土器	Ⅱ類	内外面：明赤褐色2.5YR5/6		角閃石、長石、石英を少量含む。		内外面：ナデ。	推定口径：19.8cm。 焼成：やや軟質。	8-2
24	1次・1区堀埋土（3号井戸周辺）	甕形土器	Ⅱ類	外面：にぶい橙色7.5YR6/4 内面：灰黄褐色10YR6/2		雲母を多く含む。石英を所々に含む。		内外面：ナデ。	推定口径：13.6cm。 焼成：良好。突帯上面がわずかに凹凸している。	22
25	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	Ⅱ類	内外面：にぶい橙色7.5YR7/3		長石、石英、金雲母を所々に含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：22.6cm。 焼成：良好。横ナデの痕跡が明瞭に残る。	9-1
26	1次・堀埋土（黒色土+青灰色粘土）	甕形土器	Ⅱ類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：黄褐色2.5Y5/3		角閃石、石英を所々に含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：15.2cm。 焼成：良好。	4
27	3次・T1トレンチ	甕形土器	Ⅱ類	外面：にぶい橙色5YR7/4 内面：灰黄褐色2.5Y6/2		長石、石英、金雲母を少量含む。		外面：突帯上面ハケ、胴部横ナデ、内面：横ナデ。 内面：磨滅。	推定口径：18cm。焼成：良好。	6-3
28	3次・黒色土	甕形土器	Ⅱ類	内外面：にぶい赤褐色5YR5/4		雲母片、砂粒を多く含む。		内外面：磨滅。	推定口径：14.8cm。焼成：良好。	53
29	1次・1号井戸東	甕形土器	Ⅱ類	内外面：暗灰黄色2.5Y5/2		角閃石、石英を所々に含む。		内外面：ナデ。	推定口径：14.7cm。 焼成：良好。突帯上面がわずかに窪む。	15
30	3次・T1黒色土	甕形土器	Ⅱ類	内外面：灰黄色2.5Y7/2		角閃石、長石、石英を少量含む。		内外面：ナデ。	焼成：良好。	6-2
31	1次・1区堀埋土（2号井戸北側）	甕形土器	Ⅱ類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：黒褐色2.5Y3/1		角閃石、石英を所々に含む。		外面：口縁部横ナデ、胴部磨滅。 内面：ナデ。	焼成：良好。突帯と胴部外面の接合部が完全にナデ消されていない。	18
32	3次・2区	甕形土器	Ⅱ類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3		石英を多く含む。金雲母を少量含む。		内外面：ナデ。	推定口径：12.8cm。 焼成：良好。	161
33	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	Ⅱ類	内外面：黄灰色2.5Y4/1		角閃石、石英を所々に含む。		内外面：ナデ。	焼成：良好。内面に工具痕有り。	13
34	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	Ⅱ類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/3		金雲母を所々に含む。石英を多く含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	3
35	1次・1区南Tr	甕形土器	Ⅱ類	内外面：灰黄色2.5Y6/2		角閃石、長石、石英を少量含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	10
36	3次・T1トレンチ	甕形土器	Ⅱ類	内外面：灰黄色2.5Y7/2		角閃石、長石、石英を少量含む。		外面：擦過、内面：擦過、胴部ナデ。 内面：口縁部擦過、胴部ナデ、胴部ハケ。内面：横ナデ。	焼成：良好。胴部に1条の突帯を施す。口縁部突帯は欠損している。	6-1
37	1次・1区堀埋土（3号井戸東側）	甕形土器	Ⅲ類	内外面：橙色5YR6/6		角閃石を少量含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：14.2cm。 焼成：良好。指頭圧痕が多く残る。	29
38	1次・T-II層	甕形土器	Ⅲ類	内外面：明赤褐色2.5YR5/6		角閃石を少量含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：12.8cm。 焼成：良好。突帯上面がわずかに窪む。	31
39	1次・1区堀埋土（3号井戸周辺）	甕形土器	Ⅲ類	外面：橙色5YR6/6 内面：黄灰色2.5Y4/1		角閃石、長石を少量含む。		外面：口縁部横ナデ、胴部：磨滅。 内面：ハケ後ナデ。	推定口径：9.4cm。 焼成：良好。鉢形土器の可能性がある。	28
40	1次・1区堀埋土（コーナー部）	甕形土器	Ⅲ類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：淡黄褐色2.5Y8/3		石英、金雲母を多く含む。		内外面：ナデ。	推定口径：15cm。 焼成：良好。	19

No.	出土地点	器種	分類	色	胎	土	調整	備考	土器番号
41	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	Ⅲ類	内外面：灰黄褐色10YR5/2	雲母を少量含む。		外面：摩滅。内面：ナテ。	推定口径：21.6cm。 焼成：良好。	153
42	1次・1区堀埋土(2号井戸東側)	甕形土器	Ⅲ類	内外面：黄褐色2.5Y5/3	金雲母を少量含む。		内外面：摩滅。	推定口径：22.5cm。 焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	50
43	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	Ⅲ類	外面：黄褐色2.5Y5/3 内面：にぶい黄色2.5Y6/3	石英、金雲母を少量含む。		内外面：横ナテ。	焼成：良好。	34
44	不明	甕形土器	Ⅲ類	外面：褐色7.5YR7/6 内面：褐色5YR6/8	角閃石、金雲母を少量含む。 石英を多く含む。		外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：やや軟質。	32
45	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	Ⅲ類	内外面：灰黄褐色10YR6/2	角閃石、雲母を多く含む。		内外面：摩滅。	推定口径：21.6cm。 焼成：良好。口唇部に刻目に1条のへラ描沈線文を施す。	159
46	1次・1区攪乱	甕形土器	Ⅲ類	内外面：明褐色7.5YR5/6	石英、金雲母を少量含む。		内外面：横ナテ。	焼成：良好。	36
47	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	Ⅲ類	内外面：黄灰色2.5Y5/1	角閃石、砂粒を多く含む。石英を少量含む。		外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	33
48	不明	甕形土器	Ⅲ類	内外面：橙色2.5YR6/6	石英を少量含む。		内外面：横ナテ。	推定口径：23cm。 焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	68
49	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	Ⅲ類	内外面：にぶい赤褐色5YR4/4	角閃石、石英を少量含む。		外面：口縁部ナテ、胴部摩滅。 内面：横ナテ。	推定口径：12.2cm。 焼成：良好。	30
50	1次・SB1P-6	甕形土器	Ⅲ類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/2	角閃石を所々に含む。		外面：口縁部・上胴部横ナテ、胴部ハケ。 内面：口縁部横ナテ、胴部ハケ。	推定口径：22.1cm。 焼成：良好。	26
51	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	Ⅲ類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：灰黄色2.5Y6/2	石英を少量含む。		内外面：横ナテ。	推定口径：17cm。 焼成：良好。	27
52	1次・T-3	甕形土器	Ⅲ類	内外面：灰白色10YR8/2	石英を少量含む。雲母、金雲母を多く含む。		内外面：横ナテ。	推定口径：20.8cm。 焼成：良好。突帯の上面がわずかに窪む。	55
53	1次・1区堀埋土(2号井戸北側)	甕形土器	Ⅲ類	外面：黄灰色2.5Y4/1 内面：にぶい黄色2.5Y6/3	角閃石、石英を少量含む。		外面：口縁部横ナテ、胴部ハケ。 内面：横ナテ。	推定口径：11.6cm。 焼成：良好。突帯下部に指頭圧痕が等間隔に残る。ハケの単位は非常に細かい。	24
54	1次・1区東西トレンチ(堀埋土)	甕形土器	Ⅲ類	内外面：暗灰黄色2.5Y5/2	雲母を所々に含む。		外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：良好。	69
55	1次・1区堀埋土(2号井戸北側)	甕形土器	Ⅲ類	内外面：橙色5YR6/6	長石を少量含む。雲母を多く含む。		内外面：摩滅。	焼成：やや軟質。	25
56	不明	甕形土器	Ⅲ類	内外面：にぶい赤褐色5YR4/4	角閃石、石英、雲母を少量含む。		内外面：横ナテ。	焼成：良好。	39-1
57	1次・1区南北トレンチ	甕形土器	Ⅲ類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：灰黄色2.5Y7/2	角閃石、石英、金雲母を少量含む。		外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：良好。	35
58	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	Ⅳ類	外面：黄灰色2.5Y4/1 内面：黄褐色2.5Y7/4	角閃石、雲母を少量含む。		内外面：横ナテ。	推定口径：21.3cm。 焼成：良好。	67
59	1次・2区堀埋土	甕形土器	Ⅳ類	外面：黄灰色2.5Y6/1 内面：にぶい黄褐色10YR7/4	角閃石、長石、石英、雲母を少量含む。		外面：口縁部横ナテ、胴部ハケ。 内面：ナテ。	推定口径：16.9cm。 焼成：良好。	45
60	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	Ⅳ類	内外面：灰黄色2.5Y6/2	角閃石、雲母を少量含む。		外面：口縁部横ナテ、胴部擦過。 内面：横ナテ。	推定口径：19.2cm。 焼成：良好。	40

No	出土地点	器種	分類	色調	胎土	調整	備考	土器番号
61	1次・1区堀埋土(コナー一部)	甕形土器	IV類	外面：橙色5YR6/6 内面：灰黄色2.5Y7/2	角閃石、石英を少量含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：21.4cm。 焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	60-1
62	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色5YR5/6	金雲母、雲母を少量含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：26cm。 焼成：良好。	62
63	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	IV類	外面：橙色10YR7/4 内面：にぶい黄褐色10YR7/3	金雲母、雲母を少量含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：24.8cm。 焼成：良好。	86
64	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	甕形土器	IV類	内外面：灰黄色2.5Y6/2	雲母を少量含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：23.4cm。 焼成：良好。突帯上面がわずかに窪む。	98
65	3次・T1トレンチ	甕形土器	IV類	外面：灰黄色2.5Y6/2 内面：にぶい赤褐色5YR4/4	角閃石、石英、金雲母、雲母を少量含む。	外面：横ナテ。内面：摩滅。	推定口径：21.2cm。 焼成：やや軟質。突帯が部厚い。	59
66	不明	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/2	角閃石、長石、金雲母、雲母を少量含む。	外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：良好。	70
67	不明	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色2.5YR5/8	金雲母を少量含む。	外面：突帯上面横ナテ。胴部摩滅。 内面：ナテ。	焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	43
68	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR6/4	長石、石英、金雲母を少量含む。	内外面：ナテ。	焼成：良好。	52-1
69	3次・2区SX1	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3	角閃石、金雲母を少量含む。	外面：突帯上面横ナテ。口縁部摩滅。 内面：摩滅。	焼成：良好。	53-1
70	不明	甕形土器	IV類	外面：淡黄色2.5Y7/3 内面：橙色5YR6/6	石英、金雲母を少量含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：21.2cm。 焼成：良好。突帯は厚さが薄い。	38
71	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	IV類	外面：橙色5YR7/6 内面：明赤褐色2.5YR5/8	角閃石を所々に含む。	外面：横ナテ。内面：摩滅。	焼成：良好。	71
72	1次・2号井戸	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色2.5YR5/8	角閃石、長石、石英を少量含む。	外面：横ナテ。内面：ミガキ。	推定口径：20cm。 焼成：良好。	48
73	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	IV類	外面：黄褐色10YR6/6 内面：暗灰黄色2.5Y5/2	角閃石、長石、石英、雲母を少量含む。	内外面：ナテ。	推定口径：14.3cm。 焼成：良好。	46
74	1次・T-1II層	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄色2.5Y6/3	角閃石、金雲母、雲母を所々に含む。	内外面：ナテ。	焼成：良好。	54
75	1次・1区堀埋土(コナー一部)	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/4	雲母を多く含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。	73
76	1次・1区堀埋土(南側)	甕形土器	IV類	内外面：灰黄色2.5Y5/1	角閃石、石英を所々に含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナテ。	推定口径：16.5cm。 焼成：良好。	65
77	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	IV類	内外面：灰白色10YR8/2	角閃石を少量含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。突帯が部厚い。	66
78	2次・2区SD1。黒色土	甕形土器	IV類	内外面：橙色5YR6/6	角閃石、長石、石英を少量含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。突帯上面がわずかに窪む。	52-2
79	不明	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色2.5YR5/6	角閃石を多く含む。	外面：横ナテ。内面：摩滅。	推定口径：11.3cm。 焼成：良好。鉢形土器の可能性も有り。	160
80	1次・1区南溝	甕形土器	IV類	内外面：暗灰黄色2.5Y5/2	長石、石英を少量含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。	111
81	1次・T-2	甕形土器	IV類	外面：にぶい黄褐色10YR7/4 内面：橙色5YR6/6	角閃石、金雲母を少量含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。	58
82	3次・2区堀埋土	甕形土器	IV類	外面：明赤褐色2.5YR5/6 内面：灰黄褐色10YR6/2	角閃石を所々に含む。	内外面：横ナテ。	焼成：良好。	42

No	出土地点	器種	分類	色調	胎土	調整	備考	土器番号
83	1次・堀埋土(黒色土+茶褐色土)	甕形土器	IV類	内外面：灰黄褐色10YR5/2	石英を所々に含む。金雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	152
84	1次・T-2表土	甕形土器	IV類	内外面：黄灰色2.5Y5/1	石英、雲母を少量含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。外面に工具痕有り。	61
85	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/4	角閃石を少量含む。	外面：横ナデ。内面：口縁部横ナデ。胴部粗いミガキ。	推定口径：12.4cm。焼成：良好。外面に工具痕有り。	41
86	1次・SD1	甕形土器	IV類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3	雲母を少量含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。胴部に1条の突帯が残る。	63
87	不明	甕形土器	IV類	内外面：橙色5YR6/6	角閃石、長石、石英、金雲母、砂粒を少量含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	49
88	不明	甕形土器	IV類	内外面：にぶい橙色5YR6/4	石英を少量含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	72
89	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色5YR5/6	石英を所々に含む。	外面：横ナデ。内面：磨滅。	焼成：やや軟質。	60
90	3次・T1トレンチ	甕形土器	IV類	内外面：橙色7.5YR7/6	長石、石英、金雲母を少量含む。	内外面：ナデ。	焼成：良好。	51
91	不明	甕形土器	IV類	内外面：褐灰色7.5YR5/1	角閃石を所々に含む。雲母を多く含む。	内外面：磨滅。	焼成：良好。	56
92	1次・2区P-1	甕形土器	IV類	外面：褐灰色10YR5/1 内面：にぶい橙色10YR6/4	石英、金雲母を少量含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	57
93	1次・2区P-1	甕形土器	IV類	内外面：黄灰色2.5Y5/1	石英、雲母を所々に含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	119
94	不明	甕形土器	V類	内外面：浅黄褐色10YR8/4	石英を多く含む。金雲母を少量含む。	内外面：ナデ。	推定口径：28.4cm。焼成：良好。	83
95	1次・1区堀埋土	甕形土器	V類	内外面：灰黄褐色10YR4/2	角閃石、石英を少量含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	90
96	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	V類	内外面：明黄褐色10YR7/6	角閃石、石英を少量含む。	内外面：横ナデ。	推定口径：25.2cm。焼成：良好。突帯の上面がわずかに窪む。	116
97	1次・T-3攪乱	甕形土器	V類	外面：にぶい赤褐色5YR5/4 内面：暗灰黄色2.5Y4/2	石英を所々に含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	推定口径：20.2cm。焼成：良好。口縁部に煤の付着有り。胴部に1条のヘラ描沈線文が施される。	85
98	1次・西攪乱	甕形土器	V類	内外面：橙色5YR6/6	角閃石、石英を少量含む。	内外面：ナデ。	焼成：良好。	92
99	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	V類	外面：にぶい褐色7.5YR4/1 内面：褐灰色10YR4/1	角閃石を所々に含む。雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	82
100	1次・1区排土	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/4	角閃石を少量含む。石英を多く含む。	内外面：磨滅。	焼成：良好。	81
101	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	V類	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：にぶい黄褐色10YR7/4	石英、雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	95
102	不明	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/4	石英を少量含む。	内外面：横ナデ。	推定口径：22.2cm。焼成：良好。	88
103	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	V類	内外面：褐灰色10YR6/1	角閃石を少量含む。	内外面：ナデ。	焼成：良好。	93
104	3次・2区SX1道路部分南側黒色土	甕形土器	V類	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：浅黄褐色10YR8/3	石英を所々に含む。	内外面：ナデ。	推定口径：28.8cm。焼成：良好。	75
105	1次・堀埋土(黒色土+黄灰色粘土)	甕形土器	V類	外面：褐色2.5YR6/8 内面：にぶい黄褐色10YR5/3	金雲母、雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。上唇部に1条の突帯が施される。	117

No	出土地点	器種	分類	色	調	胎	土	調	整	備	考	土器番号
106	1次・1区堀埋土(4号井戸東側)	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄橙色10YR7/2		石英を多く含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：29.8cm。 焼成：良好。突起部が部厚い。		88-1
107	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄橙色10YR7/3		雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。		焼成：良好。		89
108	3次・1区南北トレンチ	甕形土器	V類	内外面：褐灰色10YR6/1		角閃石を多く含む。金雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：23.4cm。	焼成：良好。	96
109	1次・堀埋土(黒色土+茶褐色土)	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄橙色10YR6/1		雲母を多く含む。		内外面：横ナデ。		焼成：良好。口唇部に刻目が施される。		79
110	1次・T-3区攪乱	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄橙色10YR7/3		石英を少量含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：20.6cm。	焼成：良好。	84
111	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	V類	外面：黒色5Y2/1 内面：黄灰色2.5Y4/1		角閃石を所々に含む。雲母を多く含む。		外面：口縁部横ナデ。胴部ミガキ。 内面：横ナデ。		推定口径：16cm。 焼成：良好。ミガキの単位は細かい。		91
112	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	V類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：浅黄橙色10YR8/4		角閃石、石英を多く含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：23.6cm。	焼成：良好。	74
113	1次・1区南側I層	甕形土器	V類	内外面：橙色5YR6/6		角閃石を多く含む。		外面：摩滅。内面：横ナデ。		焼成：良好。		93
114	3次・2区堀埋土(黒色土+黄褐色土)	甕形土器	V類	外面：浅黄橙色10YR8/4		角閃石、雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：20.4cm。	焼成：良好。	76
115	1次・1区堀埋土(コーナー部)	甕形土器	V類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/4		石英を所々に含む。		内外面：横ナデ。		焼成：良好。		78
116	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	V類	外面：褐灰色10YR4/1 内面：浅黄橙色10YR8/3		雲母を所々に含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：20.8cm。	焼成：良好。	77-1
117	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	V類	外面：にぶい黄褐色10YR7/4		金雲母を少量含む。		外面：横ナデ。内面：摩滅。		焼成：やや軟質。		77-2
118	1次・中央攪乱	甕形土器	V類	内外面：黄灰色2.5Y4/1		金雲母を少量含む。雲母を多く含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：18.4cm。 焼成：良好。口縁の傾きが水平である。		118
119	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	甕形土器	V類	内外面：赤褐色10YR6/6		角閃石を所々に含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：14.4cm。 焼成：良好。口縁の傾きが水平である。		120-2
120	1次・2区堀埋土	甕形土器	VI類	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい黄褐色10YR7/3		角閃石、雲母をわずかに含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：33.6cm。 焼成：良好。鬚指の可能性も有る。		100
121	1次・1区北トレンチ	甕形土器	VI類	内外面：橙色5YR6/8		角閃石、石英をわずかに含む。雲母を多く含む。		内外面：ナデ。		推定口径：21.8cm。	焼成：やや軟質。	199
122	1次・T-1地山直上	甕形土器	VI類	外面：橙色2.5YR6/6 内面：灰白色2.5Y8/1		石英、金雲母、雲母を所々に含む。		内外面：摩滅。		推定口径：12.6cm。	焼成：良好。	113
123	1次・1区堀埋土(2号井戸南側)	甕形土器	VI類	内外面：橙色5YR7/8		石英、雲母を多く含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：21cm。	焼成：良好。	112
124	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	VI類	内外面：にぶい褐色7.5YR5/4		角閃石、石英を所々に含む。金雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：11.6cm。	焼成：良好。	102
125	3次・2区南北トレンチ	甕形土器	VI類	外面：にぶい黄褐色10YR7/3 内面：暗灰黄色2.5Y5/2		角閃石を所々に含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：23.2cm。	焼成：良好。	97
126	1次・1区東西トレンチ(堀埋土)	甕形土器	VI類	内外面：浅黄褐色10YR8/3		石英をわずかに含む。		外面：摩滅。内面：横ナデ。		焼成：良好。		104
127	1次・P-7~P-9	甕形土器	VI類	外面：橙色2.5YR6/8 内面：浅黄褐色10YR8/3		石英を所々に含む。雲母を多く含む。		内外面：横ナデ。		推定口径：17.2cm。	焼成：良好。	107

No	出土地点	器種	分類	色	調	胎	土	調整	備考	土器番号
128	1次・1区堀埋土	甕形土器	VI類	内外面：橙色7.5YR7/6		金雲母、雲母を少量含む。		内外面：摩滅。	焼成：良好。	109
129	1次・1区堀埋土 (コナ一部)	甕形土器	VI類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3		角閃石、雲母を所々に含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	110
130	1次・1号井戸	甕形土器	VI類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3		角閃石、長石、石英を少量含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	108
131	3次・1区南北トレンチ	甕形土器	VII類	内外面：黄灰色2.5Y5/1		雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。丁寧な作りである。	114
132	不明	甕形土器	VIII類	内外面：明赤褐色2.5YR5/8		角閃石を少量含む。		外面：摩滅。内面：横ナデ。	焼成：良好。丁寧な作りである。	148
133	1次・1区堀埋土 (3号井戸南側)	甕形土器	I類	外面：灰黄褐色10YR8/6 内面：浅黄褐色10YR8/6		角閃石を多く含む。		外面：ナデ。底面：ナデ。 内面：擦過後ナデ。	底径：5.4cm。 焼成：良好。内面に工具痕有り。粗雑な作り。	186
134	1次・1号井戸北側	甕形土器	I類	外面：灰黄色2.5Y6/2 内面：黄灰色2.5Y5/1		角閃石、雲母を所々に含む。		内外面：ナデ。底面：ナデ。	底径：7.4cm。 焼成：良好。内面に煤が付着している。外面には指頭圧痕が多く残る。	167
135	1次・1区堀埋土 (3号井戸東側)	甕形土器	II類	外面：明赤褐色2.5YR5/6 内面：黒色10YR2/1		石英を所々に含む。		外面：ハケ。底面：ナデ。 内面：不明。	推定底径：6.4cm。 焼成：良好。内面に煤が付着している。	163
136	1次・1区堀埋土 (3号井戸周辺)	甕形土器	II類	内外面：にぶい、橙褐色7.5YR6/4		角閃石を所々に含む。		外面：粗いミガキ。底面：ナデ。 内面：ナデ。	推定底径：5.2cm。 焼成：良好。	165
137	3次・黒色土青灰色粘土	甕形土器	II類	外面：橙褐色7.5YR5/6 内面：暗灰黄色2.5Y5/2		角閃石を少量含む。		外面：ハケ。底面：ナデ。 内面：摩滅。	底径：7cm。 焼成：良好。	169
138	1次・1区堀埋土 (3号井戸北側)	甕形土器	II類	外面：黒色10YR2/1 内面：浅黄褐色10YR8/4		角閃石、雲母を多く含む。		外面：粗いミガキ。底面：ナデ。 内面：摩滅。	推定底径：7cm。 焼成：良好。立ち上がり部分を工具によって平坦に整形する。	166
139	1次・1区堀埋土 (3号井戸周辺)	甕形土器	II類	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：明灰色N3/		角閃石を少量含む。		内外面：横ナデ。底面：ナデ。	底径：7cm。 焼成：良好。内面に工具痕有り。立ち上がり部分の調整が完全に行われていない。	168
140	1次・1区堀埋土 (3号井戸北側)	甕形土器	II類	外面：赤褐色5YR4/6 内面：暗灰黄色2.5Y4/2		角閃石を多く含む。		内外面：ナデ。底面：ナデ。	推定底径：4.2cm。 焼成：良好。	162
141	1次・T-2	甕形土器	III類	外面：橙褐色2.5YR6/ 内面：黒色7.5YR2/1		石英、雲母を多く含む。		外面：ハケ。底面：ハケ。 内面：ナデ。	底径：5.6cm。 焼成：良好。	170
142	1次・SB1-P3	甕形土器	III類	外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：暗灰色N3/		角閃石、雲母を多く含む。		内外面：摩滅。	推定底径：5cm。 焼成：良好。	173
143	1次・1区堀埋土	甕形土器	III類	外面：にぶい橙褐色5YR6/4 内面：灰黄色2.5Y7/2		石英、角閃石を少量含む。		内外面：摩滅。底面：ミガキ。	底径：6.3cm。 焼成：やや軟質。	171
144	3次・黒色土青灰色粘土	甕形土器	IV類	内外面：暗灰黄色2.5Y4/2		角閃石、雲母を多く含む。		外面：細かいハケ。底面：ハケ。 内面：ナデ。	底径：6.8cm。 焼成：良好。外面に煤の付着。	174
145	1次・T-II層	甕形土器	IV類	外面：橙褐色2.5YR6/8 内面：にぶい黄褐色10YR7/3		角閃石、石英を少量含む。		外面：下胴部から括れ部までハケ。括れ部より下ハケ後横ナデ。 底面：ナデ。内面：ハケ後ナデ。	底径：6.9cm。 焼成：良好。ハケは下胴部から括れ部までは、丁寧に施す。	175
146	1次・1区堀埋土 (3号井戸周辺)	甕形土器	IV類	外面：橙褐色2.5YR6/8 内面：黄灰色7.5YR4/1		角閃石を多く含む。		外面：ハケ。底面：ナデ。 内面：ナデ。	推定底径：6.7cm。 焼成：良好。	176

No	出土地点	器種	分類	色調	胎土	調整	備考	土器番号
147	1次・1区堀埋土(1号井戸周辺)	甕形土器	IV類	外面：明褐色7.5YR5/6 内面：黒色10YR2/1	金雲母を少量含む。	外面：括れ部細かいハケ、括れ部より下横ナデ底面：摩滅。 内面：摩滅。	底径：6.3cm。 焼成：良好。内面に煤が付着している。	172
148	1次・1区堀埋土(3号井戸東側)	甕形土器	IV類	内外面：明赤褐色2.5YR5/8	角閃石、石英を少量含む。	外面：下胴部粗いハケ、括れ部横ナデ底面：ナデ。 内面：横ナデ。	底径：6.7cm。 焼成：良好。括れ部に工具痕有り。	177
149	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	IV類	外面：橙色7.5YR6/6 内面：にぶい黄褐色10YR7/3	角閃石、石英を少量含む。雲母を多く含む。	外面：下胴部細かいハケ、括れ部より下横ナデ底面：ナデ。 内面：摩滅。	底径：6.7cm。 焼成：良好。	180
150	1次・堀埋土(黒色土)	甕形土器	IV類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：褐灰色10YR4/1	角閃石、雲母を多く含む。	内外面：ナデ。底面：横ナデ。	底径：5.8cm。焼成：良好。内外面に指頭圧痕が多く残る。	179
151	3次・東西Tr	甕形土器	IV類	外面：にぶい黄褐色10YR7/4 内面：褐灰色10YR4/1	角閃石、雲母を少量含む。	外面：下胴部細かいハケ、括れ部より下横ナデ後ナデ底面：ナデ。 内面：ナデ。	底径：8.2cm。 焼成：良好。	183
152	1次・1区堀埋土(コーナ一部)	甕形土器	IV類	内外面：黄褐色7.5Y7/8	角閃石、雲母を少量含む。	外面：下胴部細かいハケ、括れ部より下横ナデ底面：ナデ。 内面：摩滅。	底径：7.3cm。 焼成：良好。	182
153	1次・1区中央部北側・攪乱	甕形土器	V類	外面：橙色5YR7/6 内面：灰黄褐色10YR6/2	角閃石、雲母を所々に含む。	外面：下胴部細かいハケ、括れ部横ナデ底面：横ナデ。 内面：摩滅。	底径：6.4cm。 焼成：良好。外面上に工具痕が残る。	178
154	1次・1区南Tr	甕形土器	V類	外面：にぶい黄褐色10YR6/4 内面：黒色7.5YR2/1	角閃石、石英を多く含む。	外面：括れ部ハケ、括れ部より下横ナデ底面：横ナデ。 内面：摩滅。	底径：6.6cm。 焼成：良好。	181
155	3次・堀埋土	甕形土器	V類	にぶい黄褐色10YR5/3	石英を多く含む。雲母を少量含む。	外面：横ナデ底面：摩滅。	底径：7.2cm。焼成：良好。	184
156	不明	甕形土器	VI類	にぶい黄褐色10YR7/4	角閃石、長石を少量含む。	外面：括れ部ハケ、括れ部より下ナデ底面：ナデ。	推定底径：11.4cm。 焼成：良好。	185
157	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	I類	内外面：にぶい黄褐色10YR6/4	角閃石を少量含む。	外面：ナデ後部分的にミガキ。 内面：横ナデ。	焼成：良好。	123
158	1次・1区堀埋土(2号井戸北側)	壺形土器	I類	外面：明黄褐色10YR6/6 内面：暗灰黄色2.5Y4/2	角閃石、石英を少量含む。	内外面：横ナデ。	推定口径：19cm。 焼成：良好。頸部に縦方向の沈線文が3本施される。	122
159	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	II類	内外面：明赤褐色5YR5/6	雲母を少量含む。	内外面：摩滅。	焼成：やや軟質。	127
160	1次・1区堀埋土(コーナ一部)	壺形土器	II類	外面：灰黄色2.5Y6/2 内面：褐灰色10YR6/1	角閃石、雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	130
161	1次・1号石組	壺形土器	II類	外面：赤色10YR4/6 内面：褐色7.5YR4/4	雲母を多く含む。	内外面：ナデ。	推定口径：17.4cm。焼成：良好。口縁部に工具痕が多く残る。	124
162	1次・3号井戸掘り込み北側	壺形土器	II類	外面：にぶい赤褐色5YR5/4 内面：褐灰色10YR5/1	角閃石を所々に含む。	内外面：ナデ。	焼成：良好。	129
163	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	壺形土器	II類	内外面：橙色5YR6/8	石英を多く含む。	内外面：摩滅。	焼成：やや軟質。	128
164	1次・1区堀埋土	壺形土器	II類	内外面：橙色7.5YR7/6	角閃石、雲母を少量含む。	外面：横ナデ。内面：ミガキ。	推定口径：27.4cm。 焼成：良好。	125

No	出土地点	器種	分類	色	調	胎	土	調整	備考	土器番号
165	1次・堀埋土(黒色土)	壺形土器	Ⅱ類	内外面：橙色7.5YR7/6		角閃石を少量含む。		外面：横ナデ内面：ミガキ。	焼成：良好。	126
166	3次・2区SX1道路部分南側黒色土	壺形土器	Ⅲ類	外面：黄褐色2.5Y5/4 内面：明赤褐色5YR5/6		角閃石、雲母を所々に含む。		外面：口唇部横ナデ、口縁部摩滅。 内面：ミガキ。	推定口径：32.6cm。 焼成：良好。	138
167	1次・3号井戸	壺形土器	Ⅲ類	内外面：橙色7.5YR6/6		角閃石を所々に含む。		外面：口唇部横ナデ、口縁部ミガキ。内面：摩滅。	焼成：良好。	136
168	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	壺形土器	Ⅲ類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：灰黄色2.5Y7/2		角閃石を所々に含む。雲母を少量含む。		外面：口縁部摩滅。肩部ミガキ、胸部摩滅。内面：ナデ。	推定口径：15.3cm。 焼成：良好。内面に指頭圧痕が多く残る。	131
169	1次・1区堀埋土(2号井戸南側)	壺形土器	Ⅲ類	外面：にぶい黄褐色10YR6/3 内面：明赤褐色2.5Y5/6		角閃石を所々に含む。雲母を少量含む。		外面：横ナデ内面：ミガキ。	推定口径：18cm。 焼成：良好。	137
170	1次・堀埋土(黒色土)	壺形土器	Ⅲ類	内外面：黄灰色2.5Y4/1		石英を少量含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：17.7cm。 焼成：良好。	135
171	1次・T-3擾乱	壺形土器	Ⅲ類	内外面：灰黄色2.5Y7/2		石英、角閃石、雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。	推定口径：16.8cm。焼成：良好。	132
172	1次・1区堀埋土	壺形土器	Ⅲ類	外面：浅黄褐色10YR8/4 内面：橙褐色2.5YR6/8		石英を多く含む。雲母を少量含む。		外面：摩滅。内面：ナデ。	焼成：良好。	134
173	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	Ⅲ類	灰黄褐色：10YR4/2		石英を少量含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。口唇部に刻目が施される。	139
174	1次・堀埋土(黒色土)	壺形土器	Ⅳ類	外面：褐灰色10YR4/1 内面：赤褐色2.5YR4/6		長石を所々に含む。金雲母を少量含む。		外面：口唇部横ナデ、口縁部ミガキ。内面：ミガキ。	推定口径：13.4cm。 焼成：良好。	147
175	1次・堀埋土(黒色土)	壺形土器	Ⅳ類	外面：明赤褐色5YR5/8 内面：にぶい黄褐色10YR7/4		角閃石、石英を少量含む。		外面：粗い横ナデ。内面：ナデ。	推定口径：14.6cm。焼成：良好。頸部に縦方向のナデ消しを施す。	149
176	1次・1区中央部・堀埋土直上	壺形土器	V類	内外面：浅黄色2.5Y7/3		石英、金雲母を少量含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	140
177	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	Ⅵ類	内外面：灰黄褐色10YR5/2		黒褐色の砂粒を所々に含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。頸部に1枚のヘラ描沈線文が施される。	201
178	3次・1区南北トレンチ	壺形土器	Ⅵ類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/3		角閃石、石英、雲母を所々に含む。		外面：ミガキ。内面：ナデ。	焼成：良好。	202
179	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	壺形土器	Ⅶa類	内外面：にぶい黄褐色10YR6/4		石英、金雲母を少量含む。		外面：横ナデ。内面：摩滅。	焼成：良好。	146-2
180	1次・1区堀埋土	壺形土器	Ⅶ類	内外面：明赤褐色5YR5/8		角閃石を所々に含む。		内外面：摩滅。	推定口径：20.6cm。 焼成：良好。	141
181	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	壺形土器	Ⅶa類	内外面：明赤褐色5YR5/8		石英、雲母を所々に含む。		外面：横ナデ。内面：ミガキ？	推定口径：18.8cm。 焼成：良好。口唇部は浅く窪む。	146-1
182	3次・1区南北トレンチ	壺形土器	Ⅶa類	内外面：黄灰色2.5Y5/1		角閃石、石英、雲母を多く含む。		外面：横ナデ。内面：摩滅。	推定口径：34.4cm。焼成：良好。粗雑な作のため、口唇部の歪みが激しい。	142
183	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	Ⅶa類	外面：灰黄色2.5Y6/2 内面：にぶい橙褐色7.5Y6/4		角閃石を少量含む。		外面：横ナデ。内面：摩滅。	焼成：良好。	145
184	3次・2区南北トレンチ	壺形土器	Ⅶa類	外面：灰黄褐色10YR6/2 内面：にぶい黄褐色10YR6/4		角閃石を少量含む。雲母を多く含む。		内外面：横ナデ。	焼成：良好。	144
185	1次・堀埋土(黒色土)	壺形土器	Ⅶb類	内外面：明赤褐色5YR5/6		角閃石、金雲母を少量含む。		外面：口縁部横ナデ、頸部ハケ。内面：口縁部横ナデ。	推定口径：20.8cm。 焼成：良好。丁寧な作りである。	143

No	出土地点	器種	分類	色	胎	土	調整	備考	土器番号
186	3次・2区堀埋土(黒色土+黄褐色土)	壺形土器	IX類	外面：にぶい黄褐色10YR7/3 内面：明赤褐色5YR5/6	角閃石、石英、雲母を少量含む。	角閃石、石英、雲母を少量含む。	外面：横ナデ。内面：ミガキ。	推定口径：28.2cm。 焼成：良好。口管部に刻目突起が施される。	151
187	1次・1区堀埋土(3号井戸周辺)	壺形土器	X類	内外面：橙色5YR6/8	角閃石、雲母を多く含む。	角閃石、雲母を多く含む。	内外面：磨減。	推定口径：18.6cm。 焼成：やや軟質。口縁上面と内側に浮文が施される。	150
188	1次・2区表土	壺形土器	I類	外面：暗灰黄色10YR4/2 内面：黄灰色2.5Y5/1	角閃石を多く含む。	角閃石を多く含む。	外面：下脚部ミガキ。括れ部ナデ。底面：ナデ。内面：磨減。	底径：6.4cm。 焼成：良好。内面に工具痕が残る。粗雑な作りである。	187
189	1次・1区堀埋土(4号井戸周辺)	壺形土器	II類	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：橙色2.5YR6/8	角閃石を多く含む。	角閃石を多く含む。	内外面：ナデ。底面：磨減。	底径：7.3cm。 焼成：良好。	190
190	3次・堀埋土	壺形土器	II類	内外面：暗灰黄色2.5Y5/2	石英を所々に含む。	石英を所々に含む。	内外面：ナデ。	推定底径：6.2cm。 焼成：良好。	188
191	不明	壺形土器	II類	内外面：にぶい黄色2.5YR6/3	角閃石を少量含む。	角閃石を少量含む。	外面：下脚部ミガキ。底面：ナデ。内面：ナデ。	底径：7cm。 焼成：良好。内面に工具痕が残る。	189
192	1次・1区堀埋土(3号井戸北側)	壺形土器	II類	外面：黒褐色2.5Y3/1 内面：橙色7.5YR6/6	石英を少量含む。	石英を少量含む。	内外面：ナデ。底面：不明。	推定底径：8.4cm。 焼成：良好。内面に工具痕が残る。	193
193	1次・南北T1	壺形土器	III類	内外面：橙色2.5YR6/8	角閃石、雲母を少量含む。	角閃石、雲母を少量含む。	外面：ハケ後ミガキ。底面：不明。内面：磨減。	推定底径：11cm。 焼成：良好。	192
194	1次・堀埋土(黒色土+茶褐色土)	壺形土器	IV類	外面：橙色7.5YR6/6 内面：浅黄褐色10YR8/3	角閃石を所々に含む。	角閃石を所々に含む。	外面：ナデ。底面：ナデ。	底径：5cm。 焼成：良好。	194
195	3次・1区南北トレンチ	壺形土器	IV類	内外面：灰黄褐色10YR6/2	角閃石を多く含む。	角閃石を多く含む。	内外面：ナデ。底面：ナデ。	推定底径：7.8cm。 焼成：良好。	191
196	1次・1区P7~P9	壺形土器	V類	外面：灰黄色2.5Y6/2 内面：にぶい黄褐色10YR7/3	角閃石、雲母を多く含む。	角閃石、雲母を多く含む。	内外面：ナデ。底面：不明。	推定底径：9.6cm。 焼成：良好。丁寧な作りである。	195
197	3次・2区東西トレンチ	壺形土器	V類	外面：暗灰黄色2.5Y5/2 内面：黒褐色10YR3/1	砂粒をごく少量含む。	砂粒をごく少量含む。	内外面：ナデ。底面：ナデ。	推定底径：10.6cm。 焼成：良好。丁寧な作りである。	196
198	3次・2区南北トレンチ	鉢形土器	I類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3	角閃石、雲母を多く含む。	角閃石、雲母を多く含む。	内外面：横ナデ。	推定口径：16.4cm。 焼成：良好。	156
199	1次・T-1溝	鉢形土器	II類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/3	角閃石、雲母を少量含む。	角閃石、雲母を少量含む。	内外面：ナデ。	推定口径：15.2cm。 焼成：良好。	158
200	1次・堀埋土(黒色土+青灰色粘土)	鉢形土器	II類	内外面：にぶい黄褐色10YR5/3	角閃石を少量含む。	角閃石を少量含む。	内外面：磨減。	焼成：良好。	154
201	3次・2区南北トレンチ	高坏	I類	内外面：橙色5YR6/8	角閃石を少量含む。	角閃石を少量含む。	外面：ハケ。内面：横ナデ。	焼成：良好。	115
202	3次・黒色土	高坏	II類	内外面：にぶい黄褐色10YR7/3	砂粒をわずかに含む。	砂粒をわずかに含む。	内外面：横ナデ。	焼成：良好。	151
203	1次・溝上層攪乱	高坏	III類	内外面：褐灰色10YR6/1	角閃石、雲母を多く含む。	角閃石、雲母を多く含む。	外面：磨減。内面：横ナデ。	焼成：良好。鉢形土器の可能性もある。	80
204	1次・2区堀埋土	高坏		外面：明赤褐色5YR5/6 内面：にぶい橙色7.5YR6/4	角閃石を少量含む。	角閃石を少量含む。	外面：脚柱部ミガキ。裾部横ナデ。内面：横ナデ。	底径：10.9cm。 焼成：良好。外面に丹塗りが施される。	201-1
205	3次・2区南北トレンチ	器台		外面：橙色7.5YR6/6 内面：にぶい黄褐色10YR7/4	金雲母を多く含む。	金雲母を多く含む。	外面：体部ハケ。裾部横ナデ。内面：横ナデ。	推定底径：10.6cm。 焼成：良好。	202-1

(3) 朝鮮系無文土器

宇土市石ノ瀬遺跡の性格を特徴づけるものに、朝鮮系無文土器の多量の出土がある。その朝鮮系無文土器は熊本県内では、熊本市護藤遺跡周辺、同市江津湖遺跡周辺でも発見され、大きくみると、かつての海岸線が熊本平野中心部に入りこんだ北側・東側・南側を取り巻く、それぞれの台地の拠点的な遺跡に点在している。

石ノ瀬遺跡周辺からは、同市境目遺跡で、古く宇土高等学校社会部の地表調査で、朝鮮系無文土器甕が採集されていた。また、宇土城三ノ丸遺跡では、朝鮮系無文土器の影響を受けた擬朝鮮系無文土器の出土も知られている。

石ノ瀬遺跡から出土した朝鮮系無文土器の一部は、以前に宇土市教育委員会のご好意により公表する機会を得ていたが、今回未公表のものを含めて、ここに掲載させていただく機会を得た。なお、本資料の調査にあたっては、宇土市教育委員会高木恭二氏、木下洋介氏のご教示を受けたことを記しておきたい。

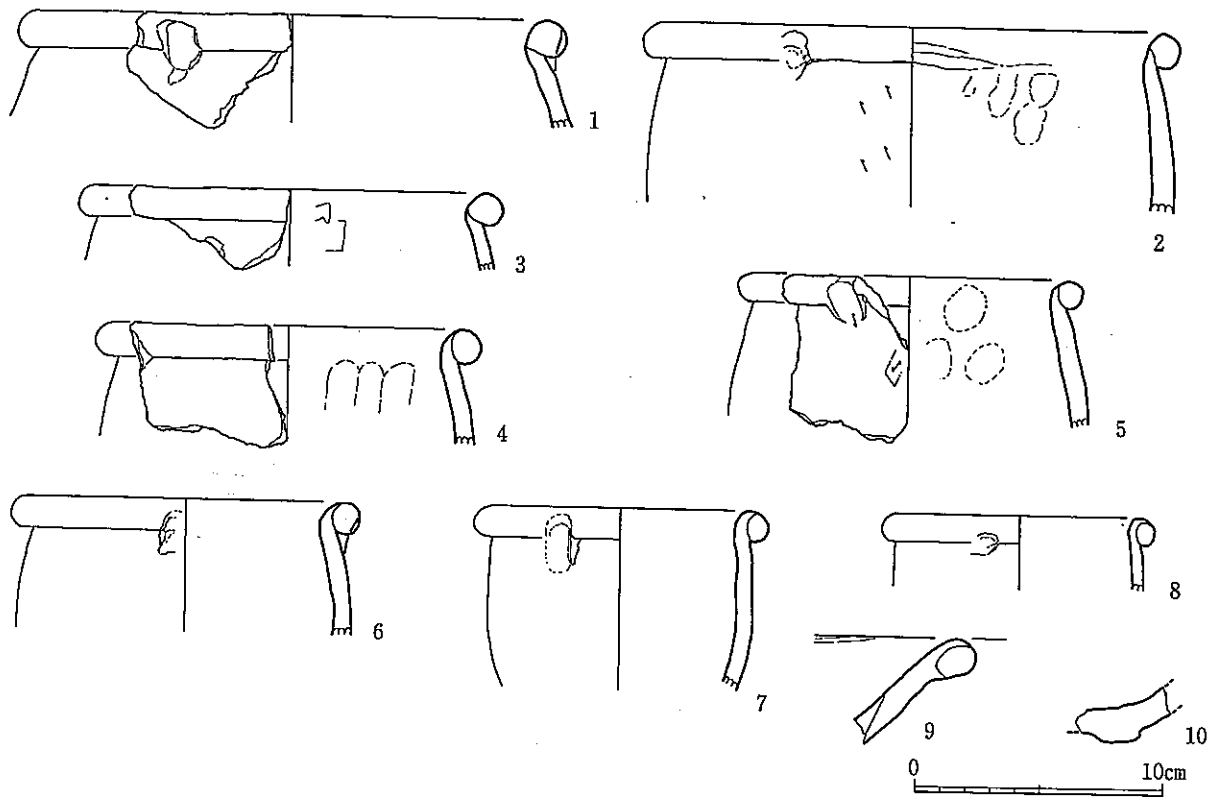
1から8はいずれも粘土紐甕と呼称される、朝鮮系無文土器の甕である。粘土紐の断面形状を円形に保つ特徴から、朝鮮半島無文土器時代「後期前半」のものとされる。日本の弥生土器の編年では前期中ごろから中期初頭に並行関係を求められる。弥生土器の影響を受けて擬化したものが宇土城三ノ丸遺跡から出土しているが、それに比較して、本来の無文土器に近いものであることは明らかである。

土器とその口縁部成形法の特徴は、先端を伸ばした擬口縁の外側に、直径が1cm程度の断面円形粘土紐を巻きつけ、擬口縁を外側に折って、その粘土紐を巻きつけるものである。粘土紐の径は1のように1.5cmの太さのものから8のように8mm程度のものもある。

粘土紐の固定はその巻きつけと一部を指頭で押さえつけて行う方法で、弥生土器のうち城ノ越式土器に見られるような粘土紐下端の横ナデによる押圧は見られない。指頭による押圧は、1・2・4～8の資料に認められる。今回の出土資料には、口縁が1周全部残っているものが無いために、1周のうち何箇所に指頭押圧があるのかわからないが、ほかの遺跡出土例に1周3～4箇所に押圧された資料があるので、これが参考になるだろう。

調整の基本は内外面ともナデである。痕跡としてもハケの使用されたものは確認できていない。ただし、2の外面にある斜め上方向へのケズリ痕や3の内面と5の外面にあるような工具による擦過痕を残すものもある。粘土紐は基本的に調整しないのであるが、5～8のように口縁上端部に緩く横ナデの入るものもある。この程度の横ナデは弥生土器の横ナデとはその強さと密度において、かなり違いがある。また今回の資料でも7のようにナデで調整する以前に成形時のタタキらしい痕跡を残すものも確認できる。内面には指があたって窪むものもある。このうち2・4のように口縁下に連続して縦方向の指痕を残すものがある。同様の指痕は他遺跡例でも確認でき、口縁部の粘土紐を巻きつけるため擬口縁の内側に第2指から第5指までの指を入れ、指腹を擬口縁に当てて第2関節をまげて巻きつけたのであろう。

法量はその口径から3つに分けられ、1・2が復元口径20cmを超す大型、3～6が14～17cmを測る中型、7・8が11～12cmの小型である。(ただし8は小片のため口径復元に若干の問題を残す。)大・中・小あるにしても、せいぜい11～22cmの範囲に収まり、この大きさの画一性は無文土器に共通するものである。大型と中型は口縁下から胴部にかけてやや張るが、小型は胴部に張りが無い。器壁はいずれも5～7mm程度であるが、大型の胴部は1cmほどの厚みのあるものもある。



第17図 石ノ瀬遺跡出土朝鮮系無文土器実測図 (1/3)

胎土は共伴する在出土器との違いが認められるものはない。色調は黄褐色系統のものが多く、弥生土器に比較して特異なものとは言いがたい。焼成も弥生土器と特に異なるところは認めにくい。したがって、弥生土器との比較において朝鮮系無文土器と認識しうる最大の特徴は、器形・成形調整法である。

9は前述の一群の甕同様、径1cm前後の粘土紐を口縁外側に巻きつけたものであるが、本来の朝鮮系無文土器ではなく、その製作技術上の影響を受けた、擬朝鮮系無文土器であろう。傾きが甕とはかなり違って、器形としては鉢になるのであろうか。調整も甕とは異なっていて、口唇内外面には横方向にヘラ状工具を横方向にミガキ風に擦り付けた痕跡がある。口縁下はいずれもナデである。残存部が少なくて、口径の復元をすることが不可能だが、およそ40cm近くになることが想像される。成形の特徴以外に弥生土器との特異な差は認められない。

10はいくつか出土した底部のうちで、おそらく朝鮮系無文土器の底部になるであろうと考えられたものを図示した。胴部と底部の境が明瞭で、底は中心がやや窪んでいる。端部をいったん外に引き出すように成形し、その後内側に押し付けて整形している。

(片岡宏二)

以上の1~10の土器の法量・観察は表のとおりである。

註

1 片岡宏二1999「渡来人・渡来文化の南下 -熊本・鹿児島出土の朝鮮系無文土器を中心として-」『人類史研究』11

第4表 石ノ瀬遺跡出土朝鮮系無文土器観察表

番号	出土箇所	器形	胎土・色調・焼成	口径	調整
1	1区堀埋土 (3号井戸周辺) 底	甕	胎土) 精良でほとんど砂粒を含まない 色調) 黄灰褐色、表面は化粧土の塗布と 見られる赤変部がある 焼成) 良好	22.2cm (復元)	外面ていねいなナデ、内面ナデ
2	溝東コーナー上 層	甕	胎土) 長石・石英・雲母の小砂粒を含む 色調) 赤褐色 焼成) たいへん良好	21.3cm (復元)	外面左上方向にケズリ、内面右 上方向にケズリ後ナデ
3	1区堀埋土	甕	胎土) 精良、わずかに微小砂粒を含む 色調) 黄褐色～赤褐色 焼成) 良好	17.2cm (復元)	外面ナデ、内面横方向に工具に よる擦過後ナデ
4	3号井戸掘り込 み北側上層	甕	胎土) 精良でほとんど砂粒を含まない 色調) 黄褐色 焼成) 良好	15.6cm (復元)	内外面ともナデ、口唇内面に緩 いヨコナデあり
5	1区堀埋土 (3号井戸北側) 0-150	甕	胎土) 精良、わずかに微小砂粒を含む 色調) 外面黄褐色、内面暗褐色 焼成) 良好	13.9cm (復元)	外面ナデ一部擦過痕を残す、内 面成形時の指痕を残し、横方向 にやや強いナデ
6	1区堀埋土最上 層	甕	胎土) 砂粒をあまり含まず精良 色調) 茶褐色 焼成) 良好、2次焼成を受け残存部1/3に スス付着	14.0cm (復元)	外面ミガキ風なので、内面ナデ
7	1区東西トレン チ(堀埋土) 10 0~120	甕	胎土) 雲母が目立つが砂粒をあまり含ま ず精良 色調) 外面茶褐色、内面黒褐色 焼成) 非常に良い	11.8cm (復元)	外面ていねいなナデで、それ以 前にタタキか、内面ナデ
8	出土地点不明	甕	胎土) きわめて精良 色調) 外面は2次焼成のため赤褐色、内 面は地肌の黄褐色 焼成) 2次焼成を受けるがもとは良好	11.0cm (復元)	内面ナデ、外面2次焼成のため 不明
9	I区堀埋土100	鉢?	胎土) 径1mm前後の小砂粒を少量含む 色調) 黄褐色 焼成) 良好	推定約 40cm	口唇ない外面ともミガキ、胴部 内外面ともナデ
10	1区東西トレン チ(堀埋土) 10 0~120	甕?	胎土) 雲母を含む、ほとんど砂粒を含ま ず精良 色調) 外面は2次焼成のため赤褐色に変 色、内面は黄褐色 焼成) 良好、2次焼成を受ける	底 径 不 明	内外面ともナデ

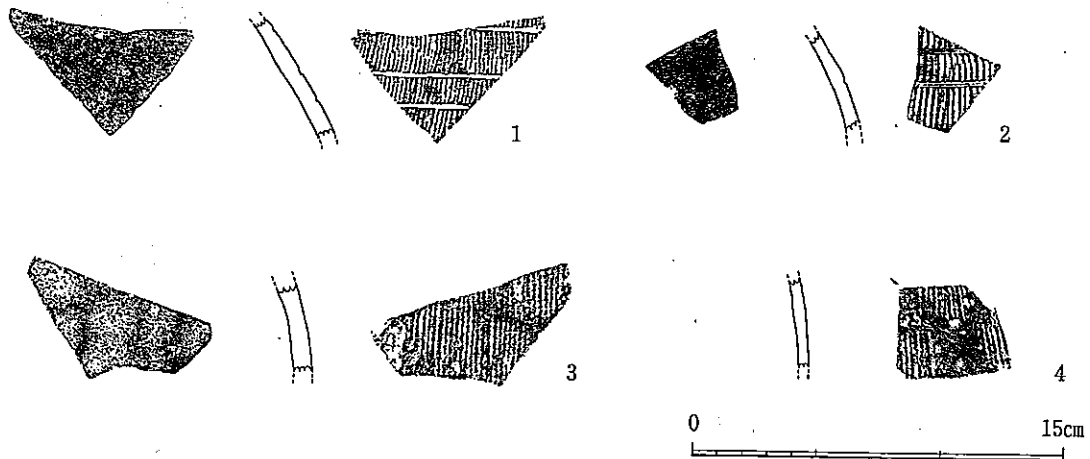
(4) 陶質土器・赤焼土器

淡青灰色を呈する2片の陶質土器と黄赤褐色を呈する3片の赤焼土器の2種がある。前者の1は、1cmあたり6本の割合で施した縄蓆文タタキを縦方向に施す陶質土器であり、これには幅1.8cmと1.5cmの沈線が交互に螺旋状にまわるものであり、内面にはナデがほどこされる。2も1とほぼ同じであるが別個体のものである。これは1cmあたり4本のタタキで、幅1.2cmを残して沈線を施す。

後者の3・4は、縄蓆文を1cmあたり5本の割合で施した赤焼土器で、内面はナデによる凹凸がある。同一個体の破片と思われる。

これらはいずれも朝鮮半島からの搬入品であろうとみられる。

(高木・木下)



第18図 石ノ瀬遺跡出土陶質土器・赤焼土器実測図

第5表 石ノ瀬遺跡出土陶質土器・赤焼土器観察表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	調整	焼成ほか
1	1次1区堀、- 0.5~2m	甕?	内外面とも黄灰色2. 5Y 6/1	精良	外面：縄蓆文タタキの ち沈線 内面：横ナデ	良好、陶 質土器
2	2次T1、4層最 下	甕?	内外面とも灰色N5/	精良	外面：平 行タタキの ち沈線 内面：横ナデ	良好、陶 質土器
3	3次2区南北ト ンチ-0.5~1m	甕?	外面：にぶい黄褐色10YR5 /4 内面：にぶい黄褐色6/4	良、わずかに 微小砂粒を含 む	外面：縄蓆文 内面：ケズリ(?)のち ナデ	軟質、赤 焼土器
4	3次2区堀、黒色 土	甕?	内外面とも、にぶい褐色7. 5YR5/3	良、わずかに 微小砂粒を含 む	外面：縄蓆文 内面：ケズリ(?)のち ナデ	軟質、赤 焼土器

4. まとめ

石ノ瀬遺跡における最初の人類の痕跡を示すのは縄文時代早期の押型文土器の段階である。少なくともその当時、この場所が陸地であって、人が生活するだけの基盤があったということが判明したので、改めて人類が生活していた段階における自然地形の変化についてはいま少し詳細に調査する必要性を感じる。

その後は、弥生時代前期末から中期はじめ頃に集落が形成されていた可能性が高い。鹿児島

県立埋蔵文化財調査センター川口雅之氏は、本遺跡出土の弥生式土器を、甕形土器8類、同底部6類に、壺形土器10類、同底部を5類に、鉢形土器2類、高坏形土器を3類に分類している。

今回は、分類した土器の詳細や分析結果についてはふれられていないが、弥生時代前期末から中期前半における宇土半島基部ないしは熊本県内での土器の地域色や編年的位置付け等については、改めて言及される予定である。

以上述べた弥生式土器の他に、朝鮮系無文土器が数点入っているということが早い段階にわかっていたので、今回この種の土器の研究を深化させておられる小郡市埋蔵文化財調査センターの片岡宏二氏にお願いして、実測図と詳細な観察結果を収録させていただくことになった。

無文土器の多くは、断面が円形をした粘土紐を口縁部に貼り付けた粘土紐甕であり、わが国では弥生時代前期中頃から中期初頭にかけての時期に伴出するという^(註1)。

興味深いのは、色調や胎土には、共伴する在地の弥生式土器との顕著な違いが認められず、器形や成形調整法だけが違うというのは興味深い。

無文土器を作った人が渡来人であった可能性は高いものの、実際にはわからない。ただ、紀元前1・2世紀段階においてこの地が、水稻耕作に伴う生活に適した自然立地であったことが予想され、その段階において渡来人が重要な役割を果たした可能性は否めない。

これと直接関連するわけではないが、古墳時代になってからも生活根拠地となったことは間違いないようで、布留式に属する土師器も出土しているし、それに伴うとみられる朝鮮系陶質土器の破片も見つかっている。螺旋状沈線^(註2)を施した縄蓆文タタキをもった陶質土器片・赤焼土器片2種の出土であり、同種遺物の出土例に新たな知見を加えた。

埴輪は、その殆どが円筒埴輪であり、1点だけではあるが形象埴輪もある。円筒埴輪の外周調整は横ハケ目調整であり、ごく一部にB種横ハケをもつものがある。器壁やタガの調整は丁寧であり、川西宏幸による埴輪編年のIV期に該当するであろう。ただ、この埴輪も遺構に伴って出土したものではなく、中世の堀の中に放置された状態で出土したものであるため、遺構の性格はつかめない。ただ、埴輪の数やいくつかあるパターンなどから考えて、生産に関わる遺跡と見るより、古墳などの消費地に伴うものとみてよからう。

石ノ瀬古墳の存在が予想され、宇土半島基部における中期古墳の存在はあまり知られていないので、この場所に古墳があったとすれば、改めてその意味について考えなければならなくなるであろう。

弥生時代から古墳時代にかけての自然景観もよくわからないが、少なくともこの石ノ瀬遺跡の場所だけが宇土半島基部では最も北側の低丘陵上に位置し、東南の境目遺跡や西南の宇土城山遺跡などに弥生前期、中期、それに古墳時代の集落が形成されていたとみられるので、それらの遺跡とはやや違った立地であることと、この朝鮮半島系土器の出土は何らかの関連があるのかもしれない^(註3)。

(高木・木下)

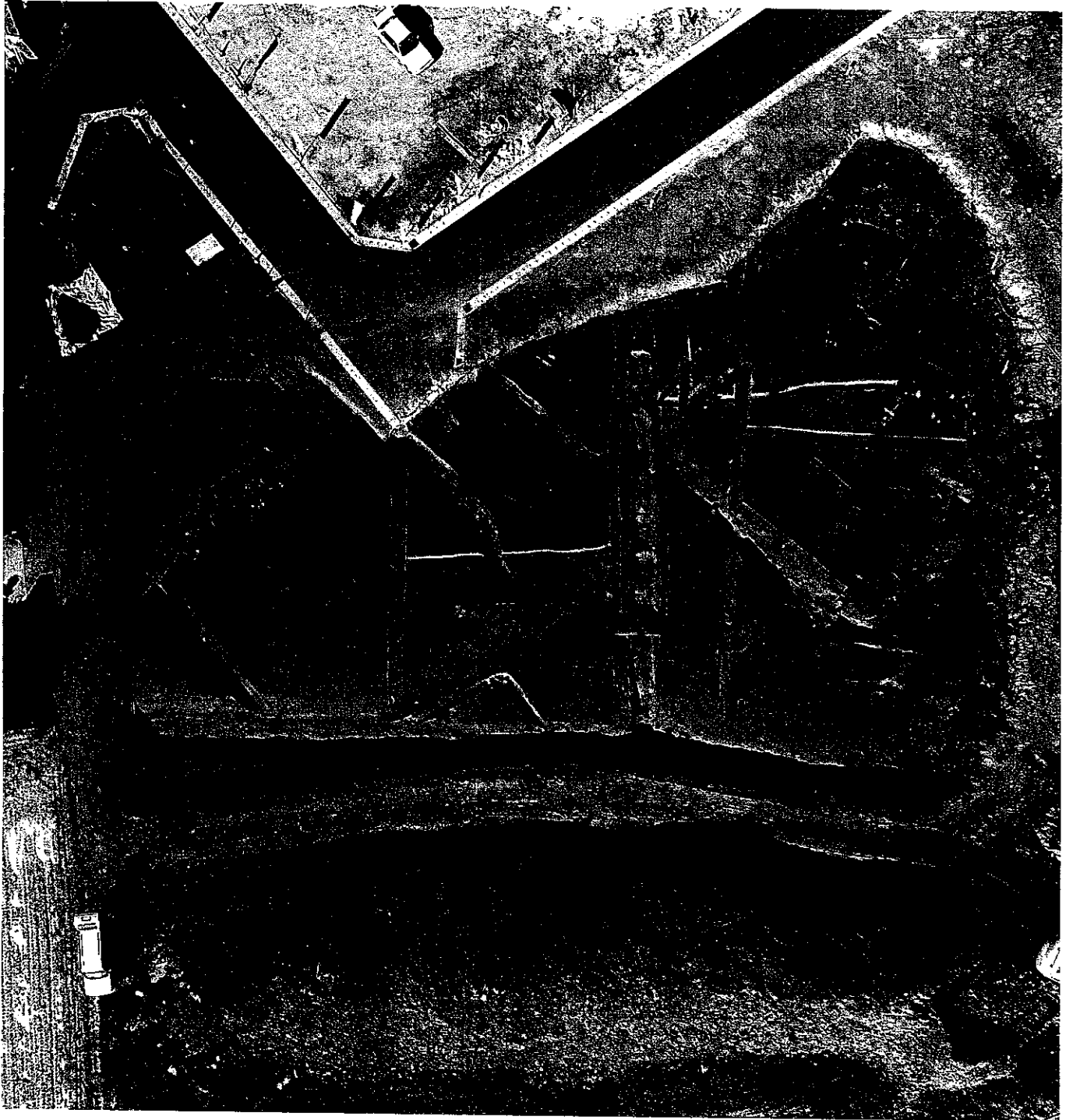
註

- 1) 片岡宏二1999年「渡来人・渡来文化の南下一熊本・鹿児島出土の朝鮮系無文土器を中心として」『人類史研究』11
- 2) 陶質土器・赤焼土器は、遺物整理過程において佐藤伸二氏と高木が確認。
- 3) 朝鮮系無文土器は、この石ノ瀬遺跡以外にも境目西原遺跡において円形粘土紐の無文甕が、宇土城山山の三ノ丸跡において擬口縁の無文甕形土器片が出土している。

かみまつやま
上松山遺跡



上松山遺跡 1次調査地空中写真



上松山遺跡 2 次調査地空中写真

上松山遺跡

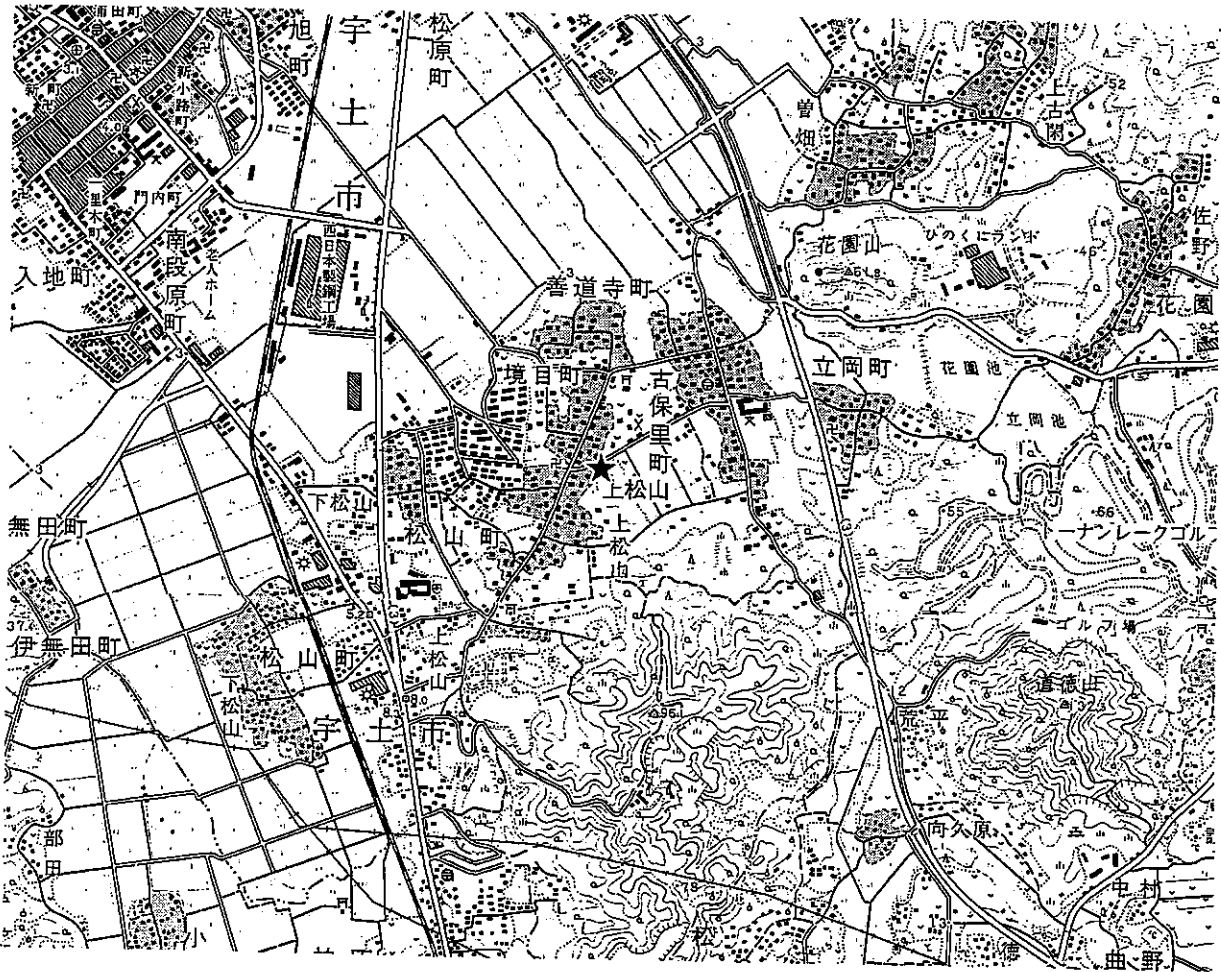
1. 遺跡の概要

上松山遺跡は、宇土半島基部東側に位置する小山塊高城（標高96.1m）から北側に派生した低丘陵上にある。すぐ南に山内遺跡が隣接しているが、この遺跡の詳細はよくわかっていないため、同一遺跡である可能性もある。さらに北側には境目遺跡や善道寺遺跡、東には古保里遺跡などがあって、宇土半島基部でも遺跡密集地帯のひとつとなっている。

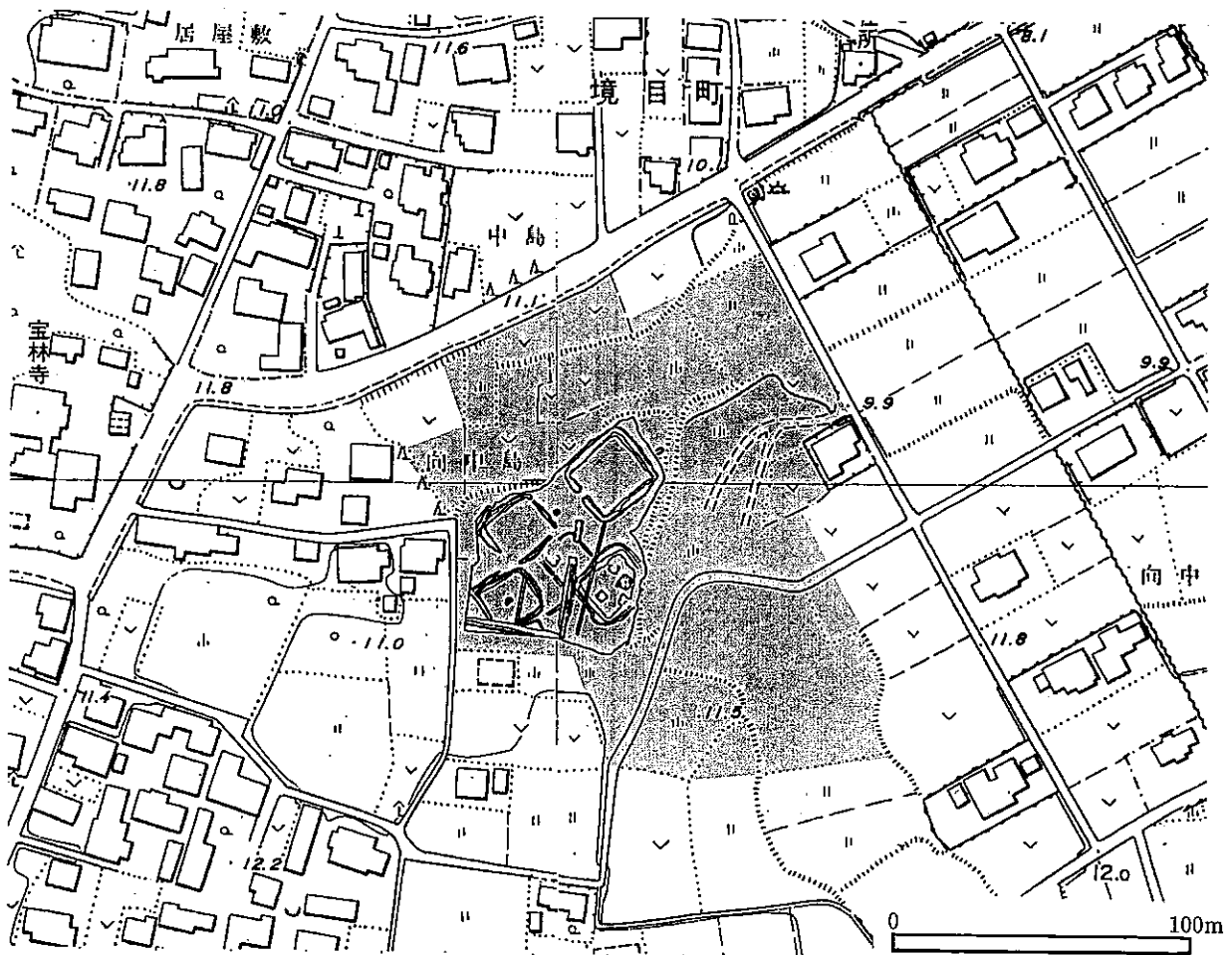
標高約10m前後の低丘陵先端部にあり、地形を巧みに活用した遺跡形成を行なっている。これまでの発掘調査の経緯としては、昭和33年2月に箱式石棺の発掘調査がなされ、安山岩板石を組み合わせた箱式石棺1基が発見されている。石棺内の調査だけにとどめられており、石棺内部には赤色顔料が塗布され、鉄ヤリガンナ1本が発見されている。

2. 発掘調査の経緯

上松山遺跡の発掘調査は、当地の一角に㈱三共土地開発が54区画の分譲住宅計画を立てたことに起因する。全体分譲予定面積16,429.22㎡を4期に分けて実施する開発計画が出され、三共土地開発の委託によって、宇土市教育委員会が発掘調査を実施することになった。調査にあたっては、三共土地開発の全面的な協力のもと、平成8年11月6～14日に試掘調査を実施し、約3,000㎡について本調査が必要となった。まず2・3期分譲予定の北側部分について平成8年



第1図 上松山遺跡位置図 (★、1/25,000 国土地理院発行二万五千分の一「宇土」を使用)



第2図 上松山遺跡調査地 (1/2,500)

度を実施し、これを第1次調査とした。

また、その南に接し平成9年11月まで実施し、これを第2次調査とした。

調査にあたっては、まず、試掘によって得られた遺構の深さ情報によって、開発部分の中で最も浅いと思われる地域を重機で表土層排除を行なった。そして、面的広がりを見るために手作業によって遺構面の検出を行い、徐々にあるが幾つかの遺構を確認することができた。

3. 遺構の検出

(1) 試掘調査

開発予定地内に手掘り10ヶ所、バックホーによる掘削3ヶ所（総延長109m）について遺構確認を行なった。これによって西寄りの部分数箇所において古墳時代に属する土器が出土し、明らかに遺構の存在が確認できたので、本調査を実施する必要性がでてきた。

この試掘結果をもとに、宇土市と三共土地開発側との間で本調査実施の委託契約を取り交わし、平成9年2月から実施することになった。

(2) 第1次調査

調査区の左右に二つの大きな溝遺構が検出され、それが後に方形周溝墓であることが判明した。西側に検出されたものを1号方形周溝墓とし、東側のものを2号方形周溝墓とした。そして、1号周溝墓の南西にも周溝墓の一部と思われる溝SD02を検出したが、これは2次調査において5号周溝墓であることがわかった。

また、1号周溝墓の東に接して中世に属するとみられる井戸遺構が検出したし、北西コーナー付近では古墳時代末～古代に属するとみられる溝も見つかった。

SD03遺構は箱堀状の断面形をなし、端部は直線的におわる。

なお、1号周溝墓の西側には陸橋と思われる空間があったし、同様のものは2号方形周溝墓の西側にも見出され、そこが陸橋であることを容易に推測させた。

(3) 第2次調査

第2次調査区は1次調査区の南に接して調査区を設定し、幾つかの重要な遺構が検出された。西から4号方形周溝墓、その南に6号方形周溝墓、その東に7号方形周溝墓の一部と思われる溝の一部(SD07)と、5号周溝墓の南に3号方形周溝墓の存在が明らかになった。そして4号方形周溝墓の西辺にはSD05が検出されたが、これは1次調査区のSD01につながる可能性もある。

4号方形周溝墓の北にも溝状の掘り込みSD06が確認でき、これは別に遺構が存在する可能性を示しており、1号周溝墓の西に新たに8号周溝墓があった可能性が考えられる。

4号周溝墓には主体部の一部が残っていた。石材は抜かれていたものの、安山岩の板石を組み合わせた箱式石棺であったことが判明する。この石棺が昭和33年2月に行なわれた発掘調査の折に出土したものとみられる。

3・4号方形周溝墓において主体部の一部が残っていたが、他には検出できなかった。

また、先のSD03に直交するSD04も中世から近世にかかる時期の所産と考えられたが、その性格等は不明ながら、区画等を表すものであるかもしれない。

3号方形周溝墓は規模も大きなものであったが、その内部に3基の住居跡が確認できた。住居の掘り方は浅いものであり、3号周溝墓の主体部が2号住居跡のコーナーに重複しており、その掘り方から明らかに住居跡が方形周溝墓より古いということがわかる。なお、住居跡はこの3基以外にも5号方形周溝墓内でも検出しており、これは4号住居とした。

4. まとめ

従来、宇土半島基部において方形周溝墓の検出は初めてのことであった。今回、確実にこれとわかる遺構は6基あり、それ以外にも2基の存在が予測される。このうち、1号・2号・5号墓において西側に陸橋が存在することがわかった。

検出した遺構の中で明らかに古い時期に属するのは、住居跡であり、少なくとも2号住居跡と3号方形周溝墓の重複状況から、住居跡の方が古いということが想像され、住居跡群は庄内式新段階頃に位置付けできるであろう。ただ、3号方形周溝墓についても、さほどの時間は経過していないものと思われるので、方形周溝墓群は布留式古段階頃に相次いで築造されたものとみられる。ただ2号住居と3号周溝墓の1ヶ所だけの状況から他の遺構までそうであると断定することはできないが、その可能性は高い。このことは遺物の検討によってより詳細に明らかにする必要がある。

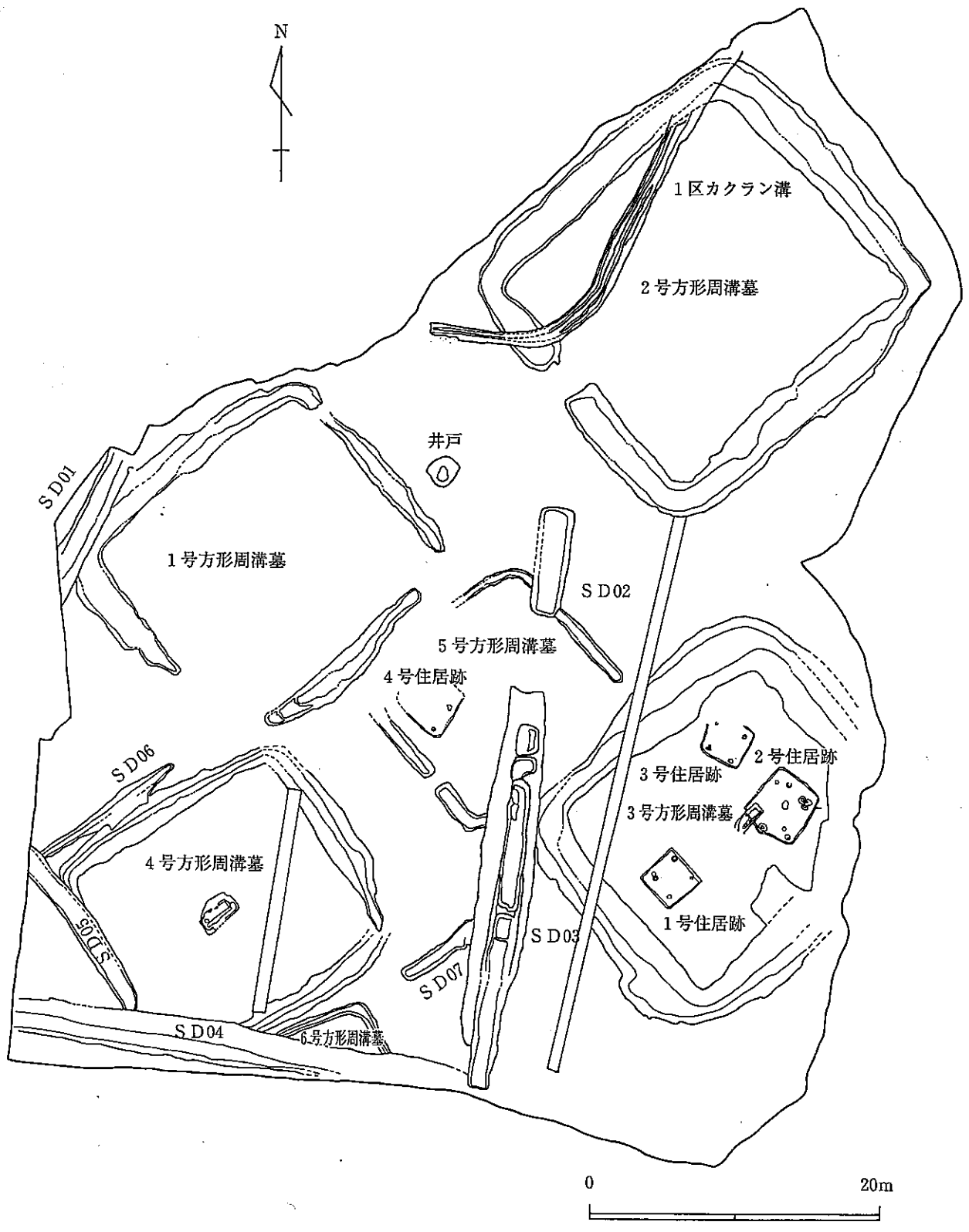
古墳時代末～古代に属する遺構としてはSD01とSD05の二つあるが、直交ないしは平行しない。

5. 後記

上松山遺跡出土遺物の実測は、福岡大学人文学部武末純一教授をはじめとする同大学関係者による(109頁名簿参照)。ご多忙な中に実測作業をお引き受けいただき、整図や遺物観察表を作成していただいたことに深甚の敬意を表するものである。

なお、当方の都合等によって上松山遺跡出土遺物の詳細な検討やその報告を割愛していただくざるを得なくなってしまい、ご迷惑をかけてしまったことには、おわび申しあげたい。

(高木・木下)



第3図 上松山遺跡遺構全体図

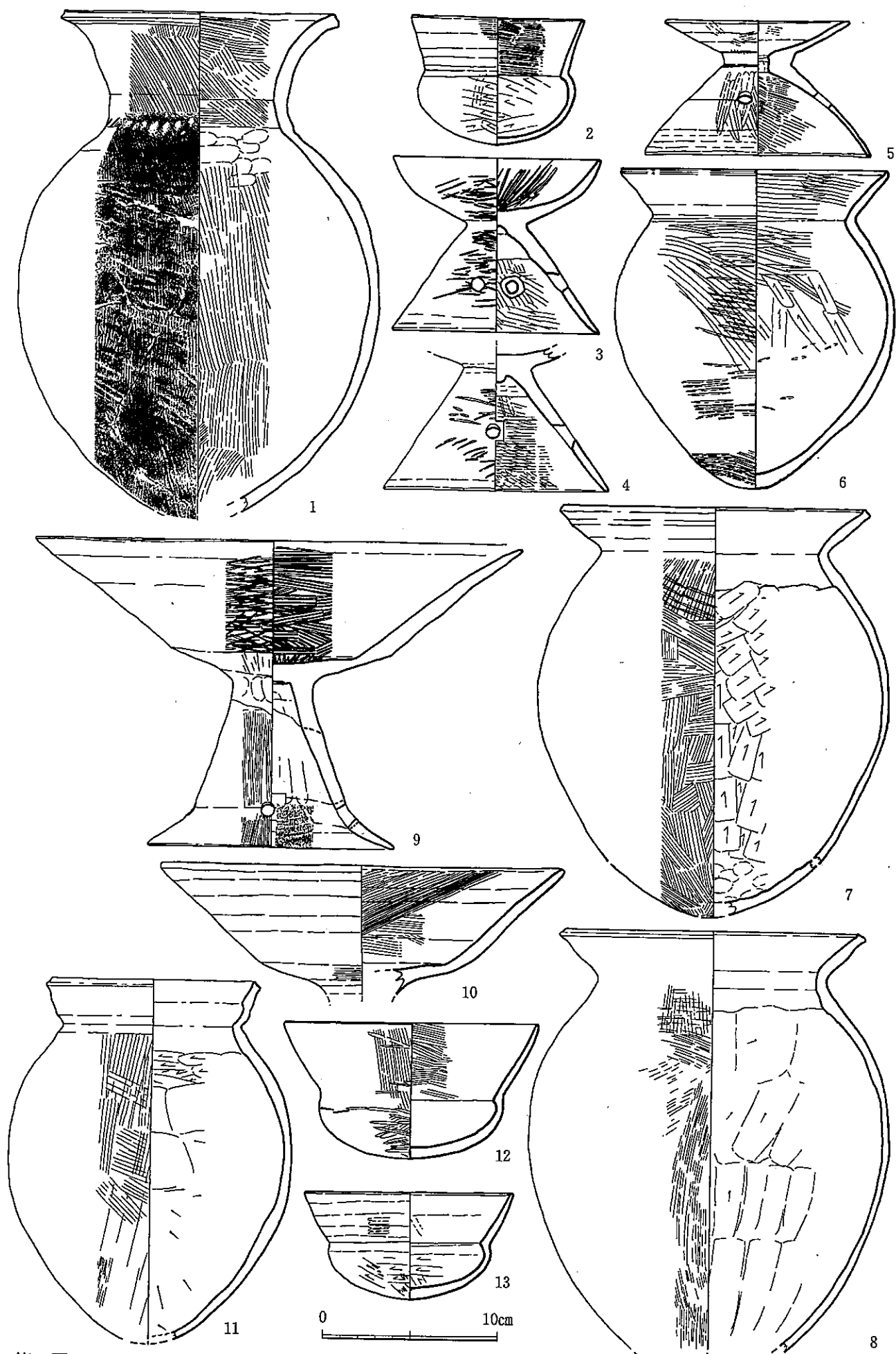
第1表 上松山遺跡遺構一覧表

1次調査

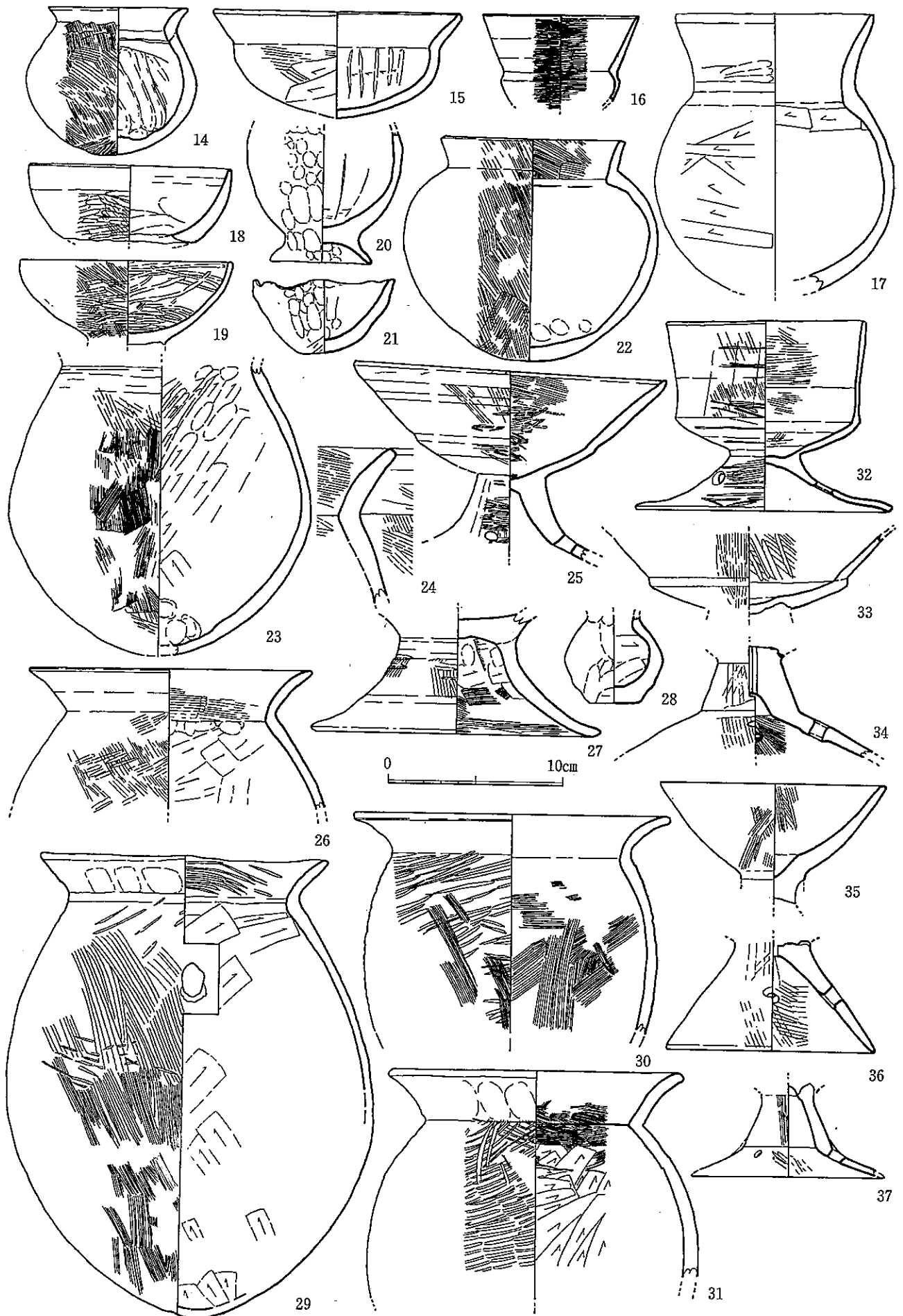
遺構名称	規 模	特記事項	遺物番号
1号方形周溝墓	外周 22m×20.5m 内周 18.5m×16.3m 溝上面幅 0.6~2.6m	西南部に陸橋部?	14-30
2号方形周溝墓	外周 26m×24.3m 内周 20.3m×19.2m 溝上面幅 1.6~3.5m	西南部に陸橋部	31-100
SD01	幅 1.25~1.8m 深さ 0.4m 断面形状 浅い皿状		154-165 167・168
SD02	幅 2m 深さ 0.4m 断面形状 浅い皿状	5号方形周溝墓の一部	169
井 戸	幅 1.8×2.0m 深さ 2.17m	二段掘り	176・177

2次調査

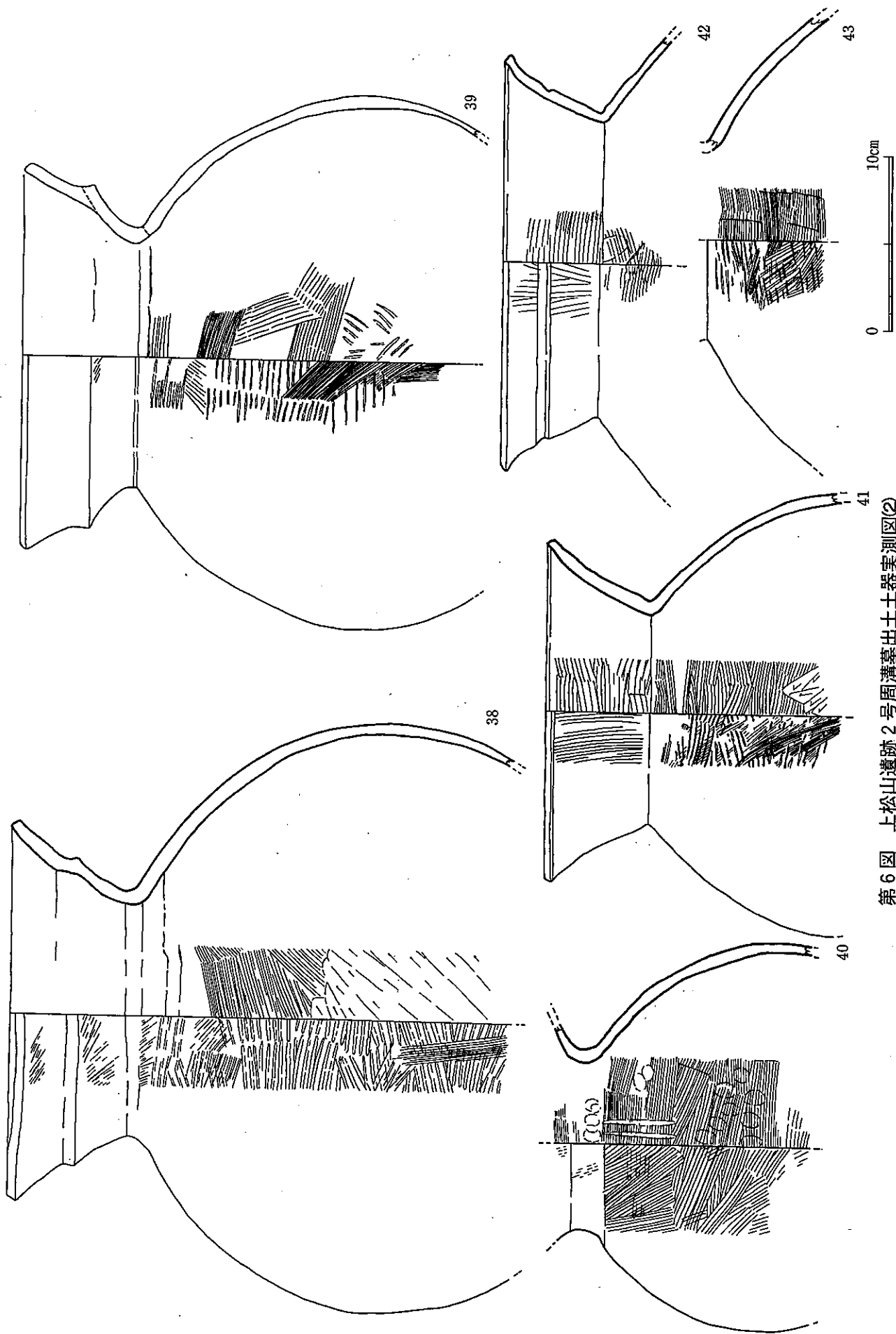
遺構名称	規 模	特記事項	遺物番号
3号方形周溝墓	外周 23.5m×21.5m 内周 17m×14m 溝上面幅 1.6~4.2m	内部に1~3号住居跡 主体部が3号住居を切る	101-122
4号方形周溝墓	外周 19.7m×18m 内周 16m×14.3m 溝上面幅 1.0~2.4m		123-153
5号方形周溝墓	外周 15m×13m 内周 13m×11.5m 溝上面幅 0.8~1.2m		
6号方形周溝墓	外周 6.5m以上×5m以上 内周 6m以上×4.5m以上 溝上面幅 0.7m		
SD03	最大幅 3.7m 深さ 0.6~0.67m 断面形状 浅いU字状		171・172
SD04	最大幅 2.9m 深さ 0.8m 断面形状 U字状		174
SD05	最大幅 1.8m 断面形状 浅いU字状		175
SD06	最大幅 0.7m 深さ 0.2m 断面形状 皿状	8号方形周溝墓?	170
SD07	最大幅 1.1m 深さ 0.34m 断面形状 皿状	7号方形周溝墓?	173
1号住居跡	1.9×1.52m	方形プラン 東北面にベッド状の段あり 柱穴5	
2号住居跡	2.27×2.0m	方形プラン、ベッド状の段 あり 土師器多数、3号方形 周溝墓の主体部に切られる	1-9
3号住居跡	1.6×1.45m	方形プラン、柱穴4	10
4号住居跡	1.7以上×1.4m以上	方形プラン? 焼土あり	11-13



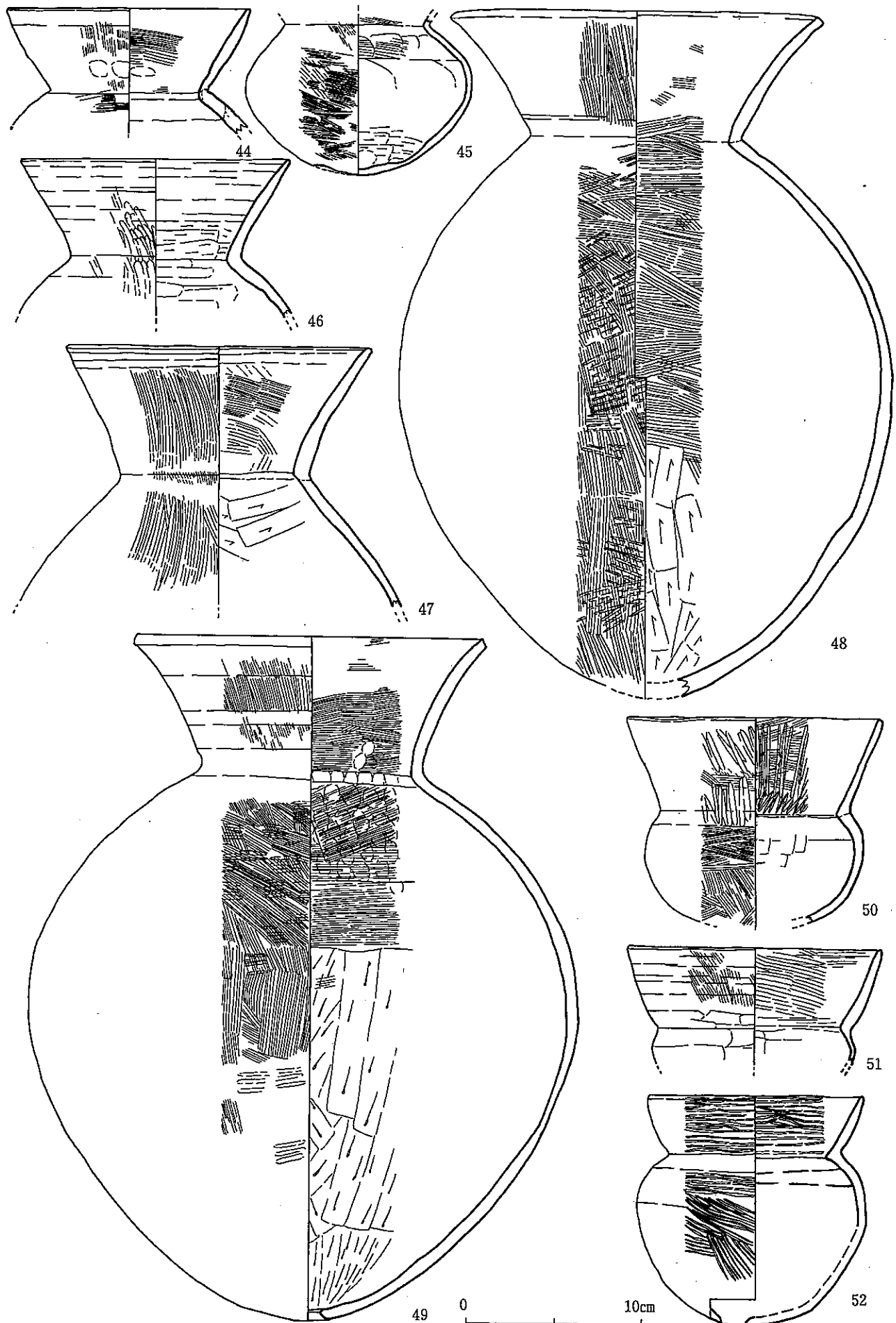
第4图 上松山遺跡1~4号住居跡出土土器実測図 (1~9: 2号住居跡 10: 3号住居跡 11~13: 4号住居跡)



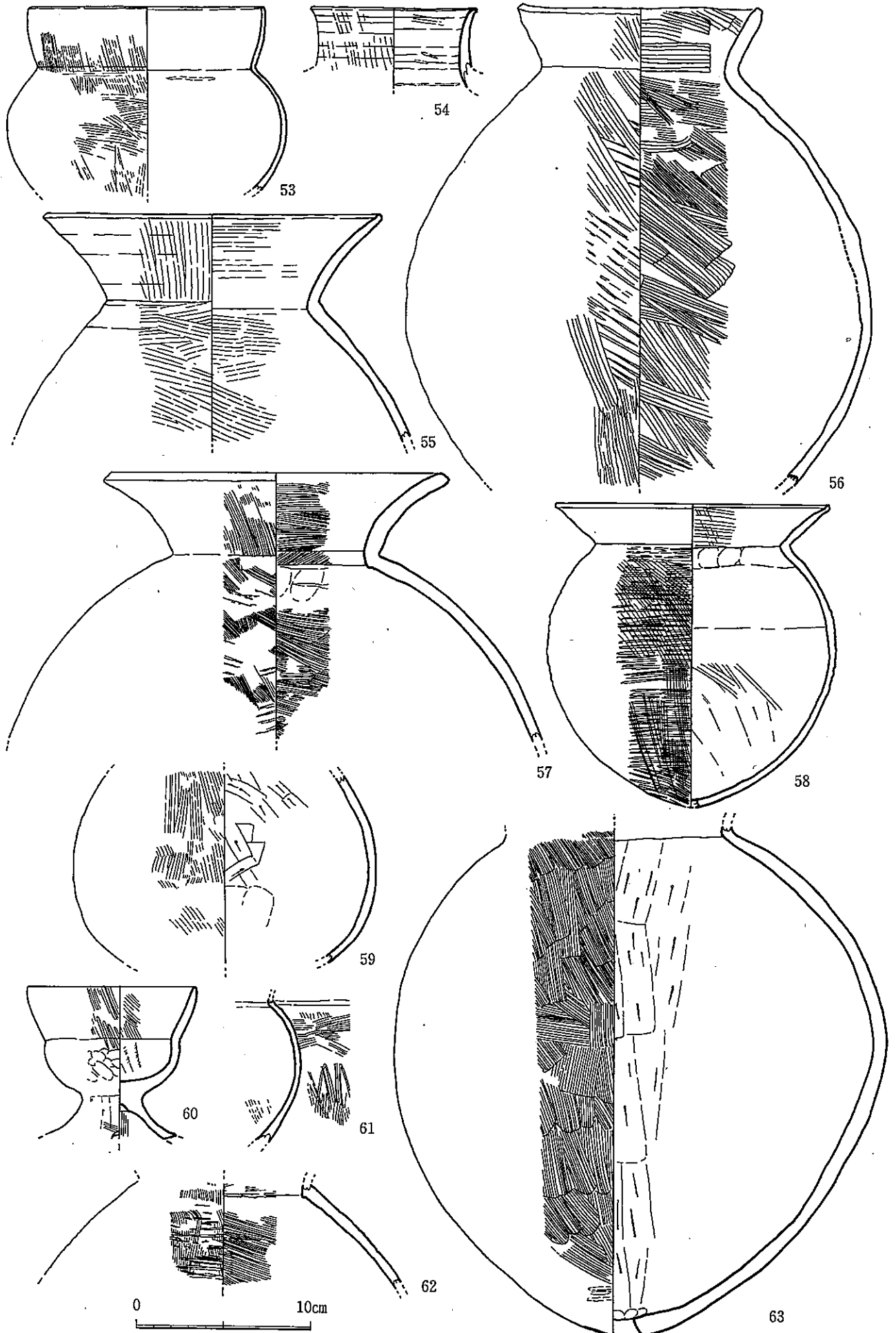
第5図 上松山遺跡1号周溝墓出土土器実測図、および2号周溝墓出土土器実測図(1) (14~30: 1号周溝墓 31~37: 2号周溝墓)



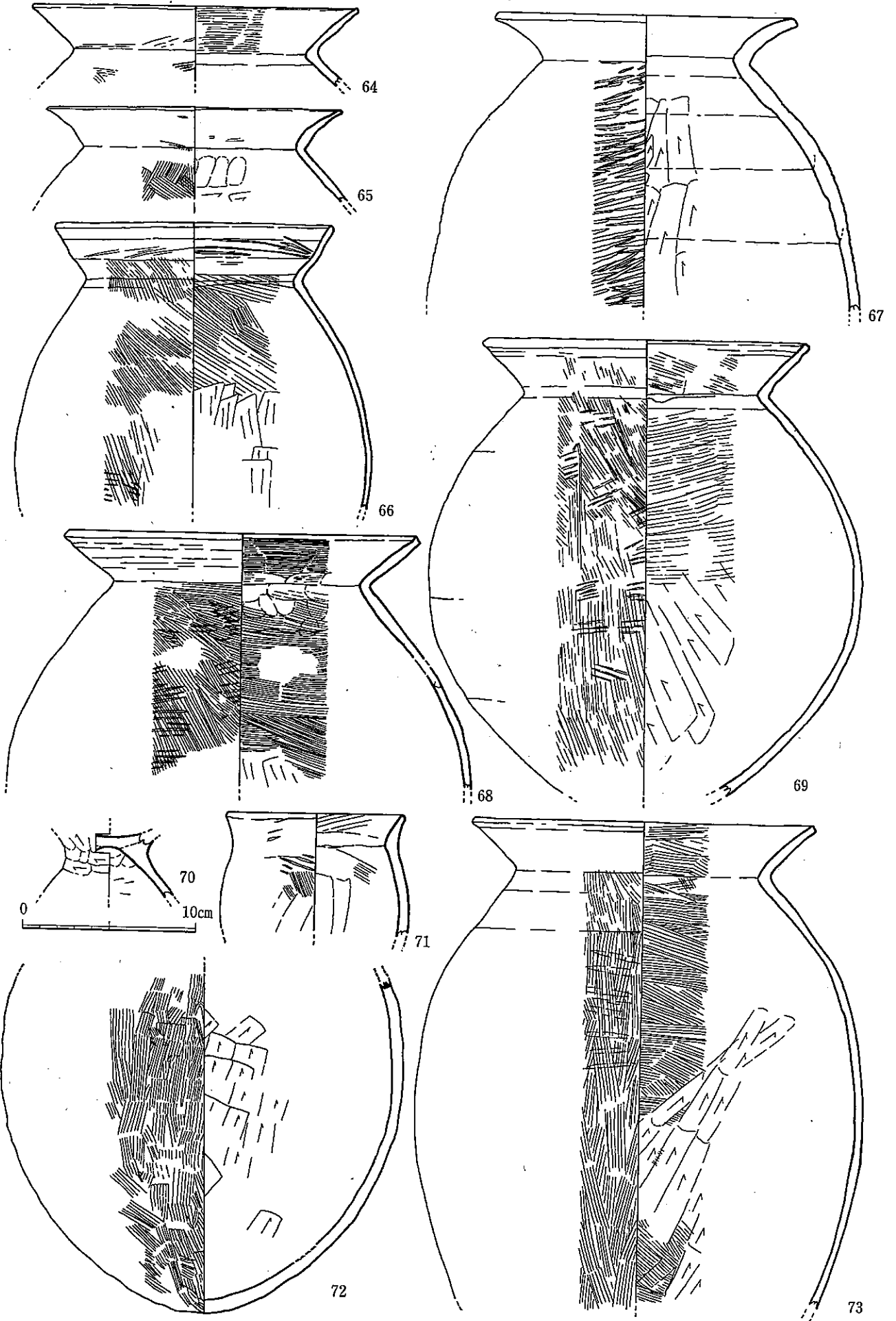
第6图 上松山遺跡2号固溝墓出土土器実測図(2)



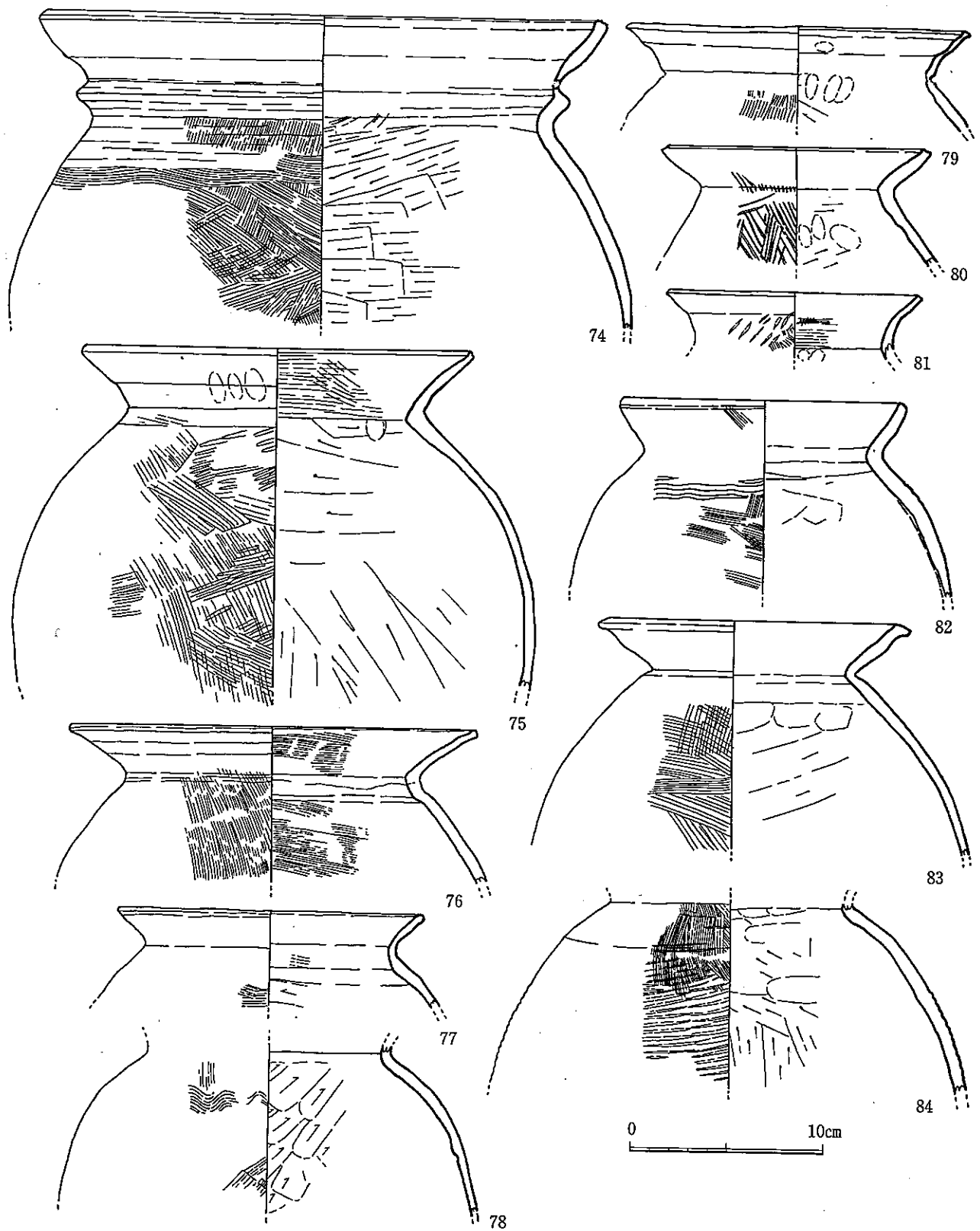
第7图 上松山遗迹2号周沟墓出土土器实测图(3)



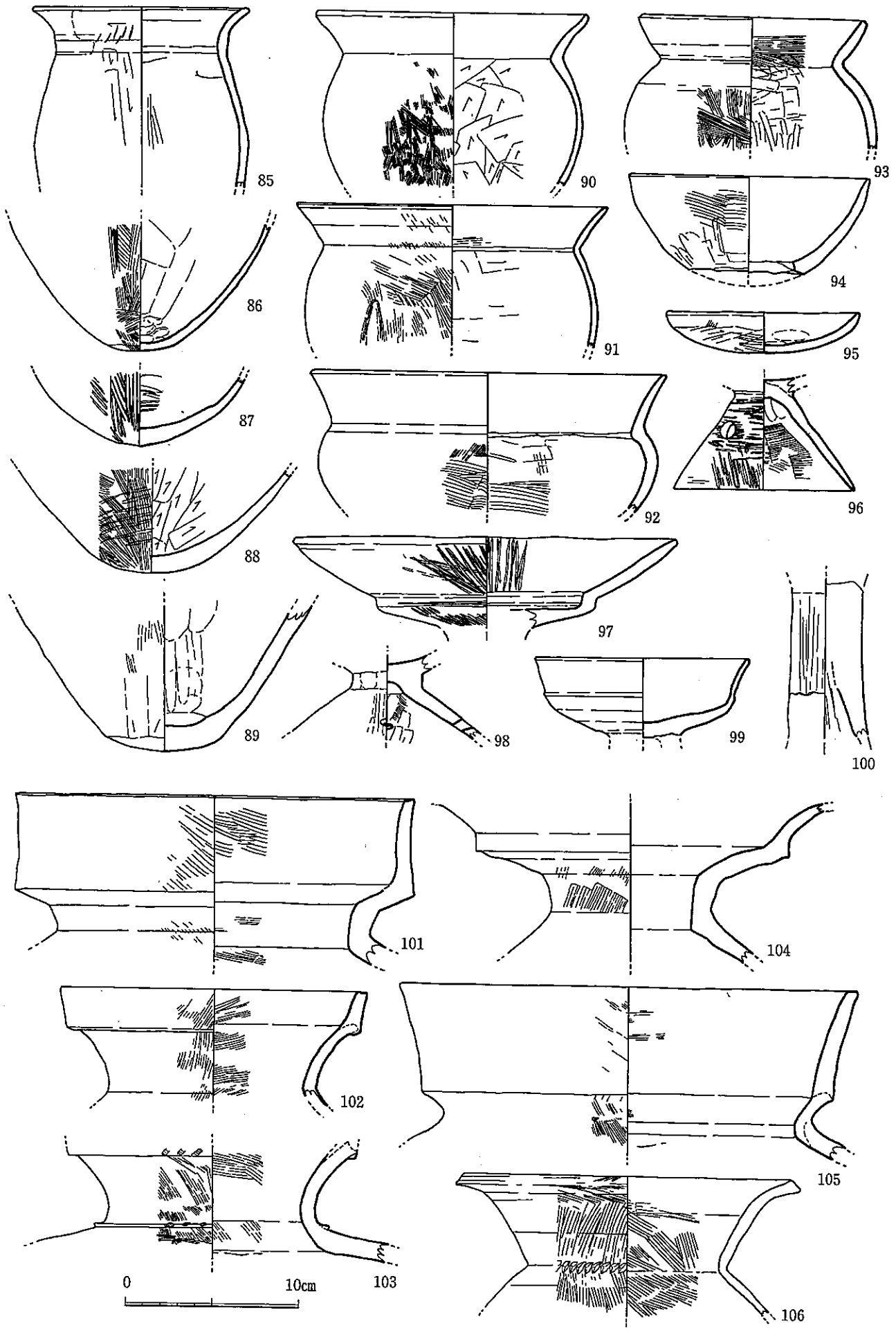
第8图 上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図(4)



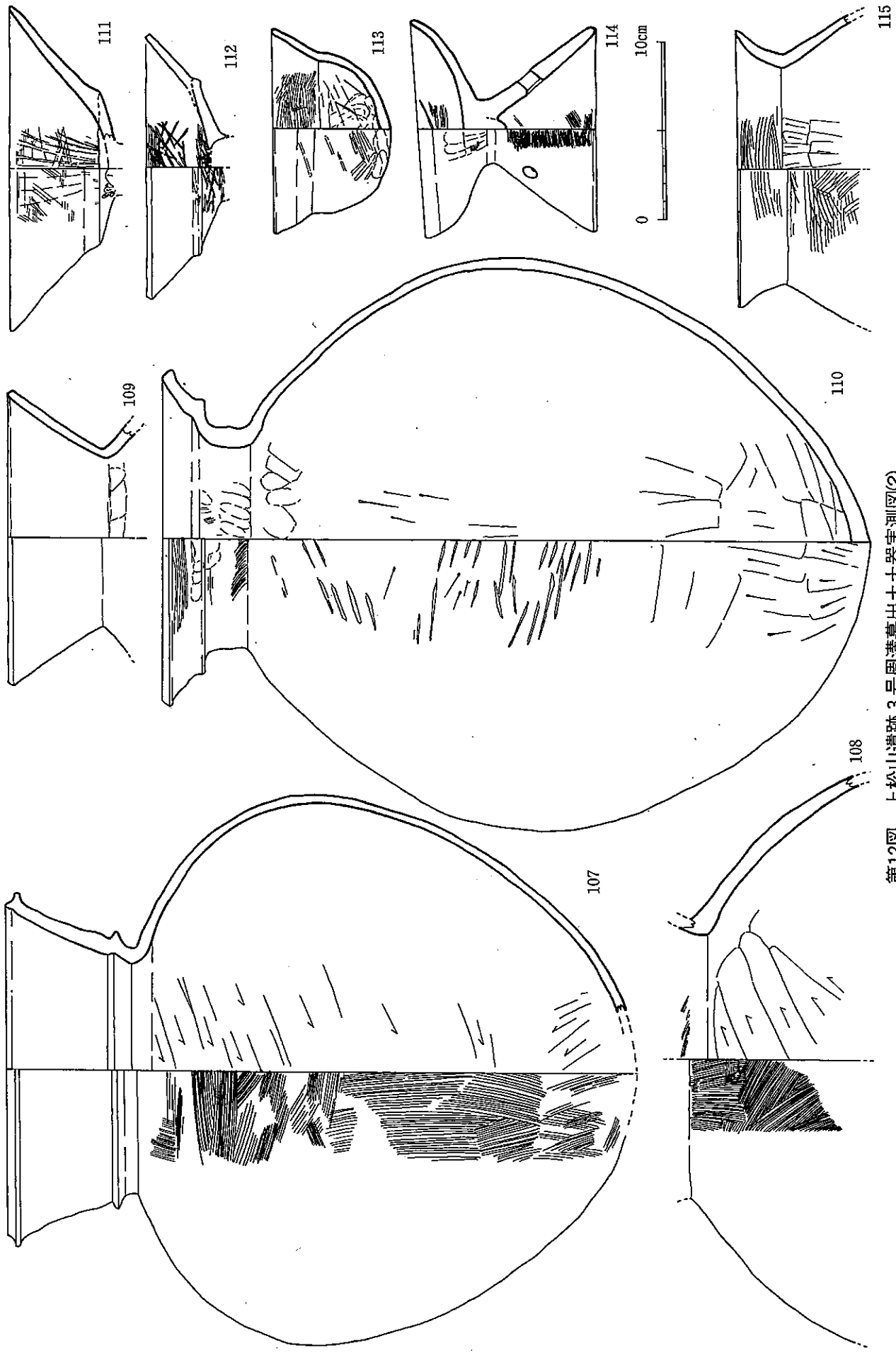
第9图 上松山遺跡2号周溝墓出土土器実測図(5)



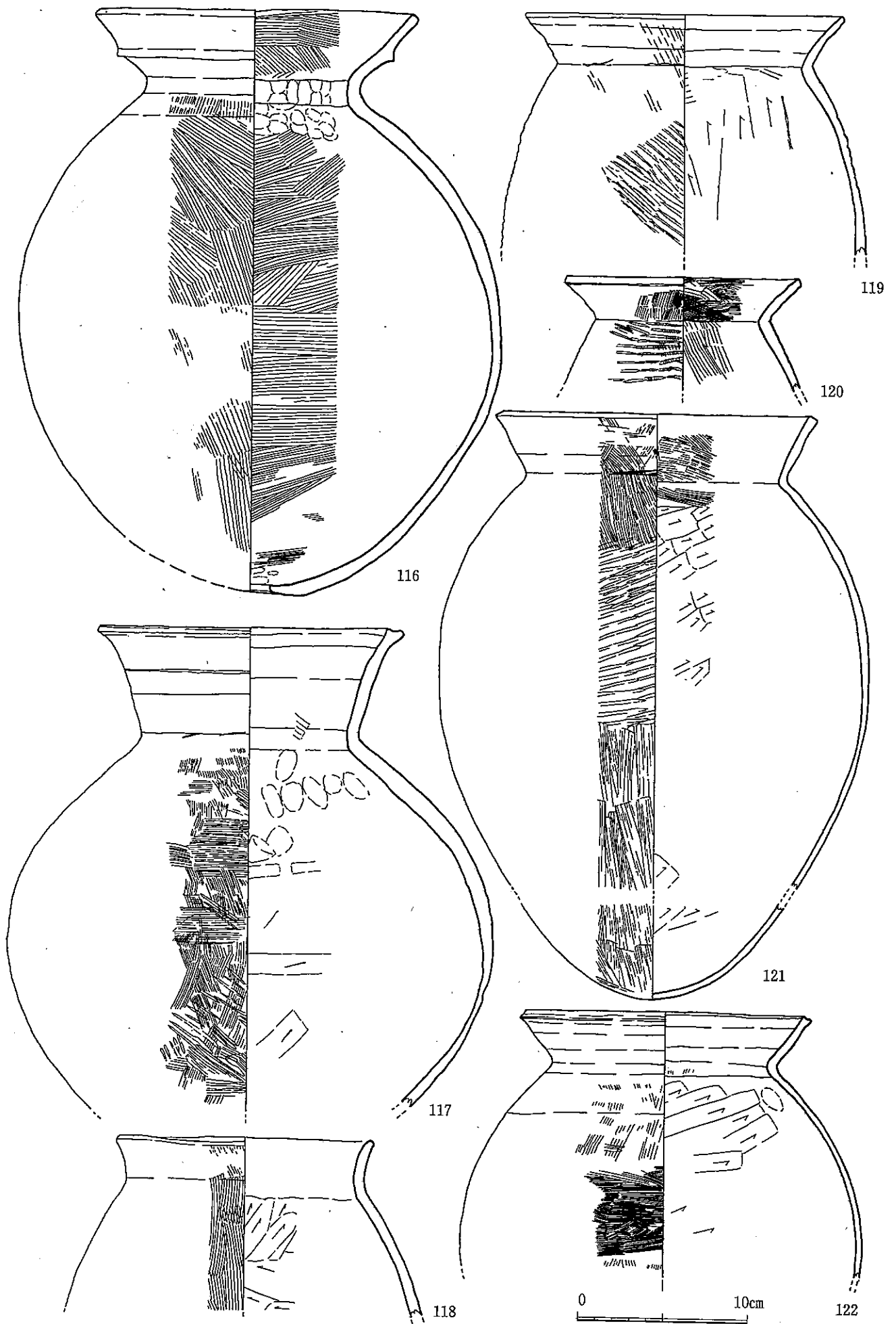
第10図 上松山遺跡 2号周溝墓出土土器実測図(6)



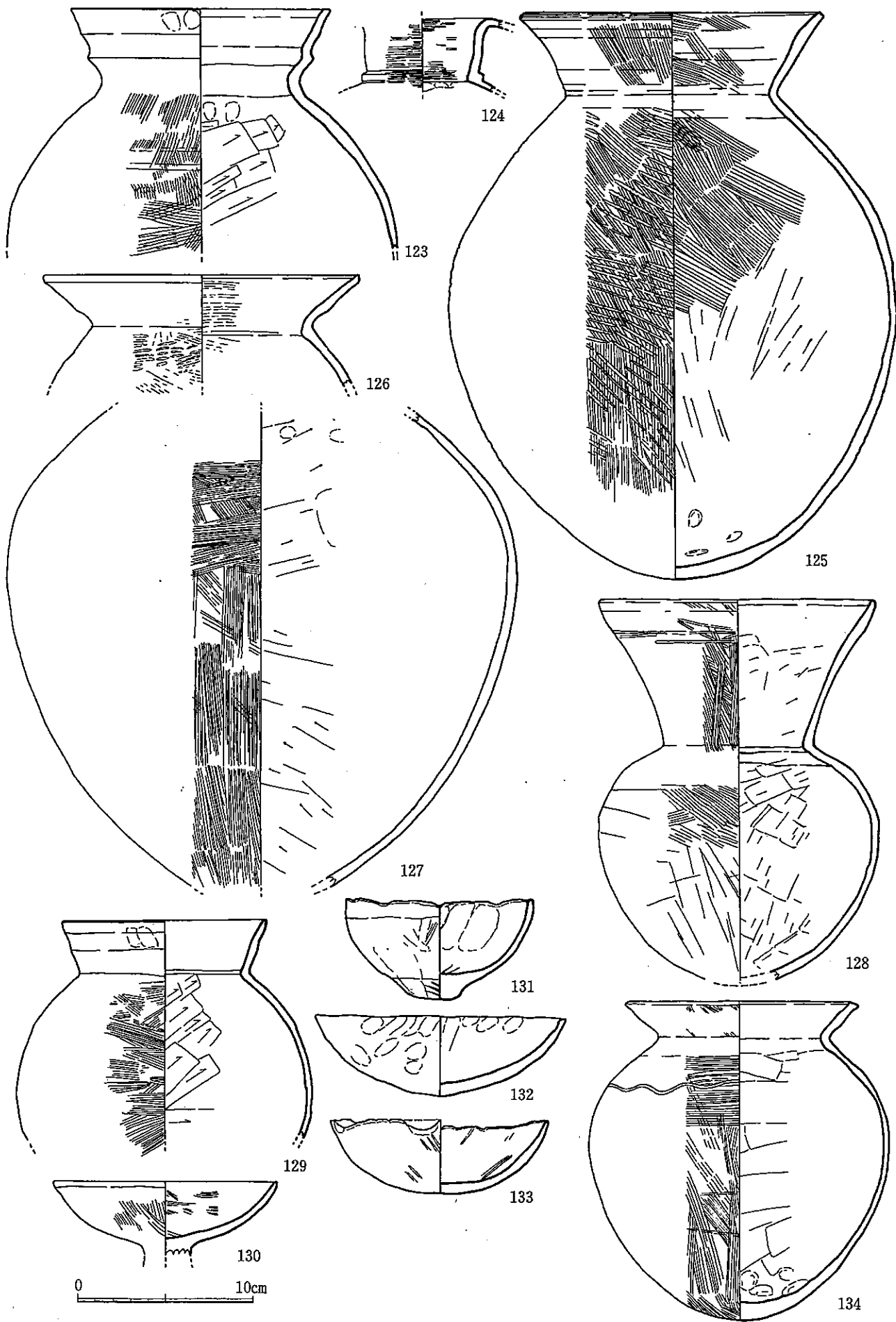
第11图 上松山遗址2号周溝墓出土土器实测图(7), 3号周溝墓出土土器实测图(1) (85~100: 2号周溝墓 101~106: 3号周溝墓)



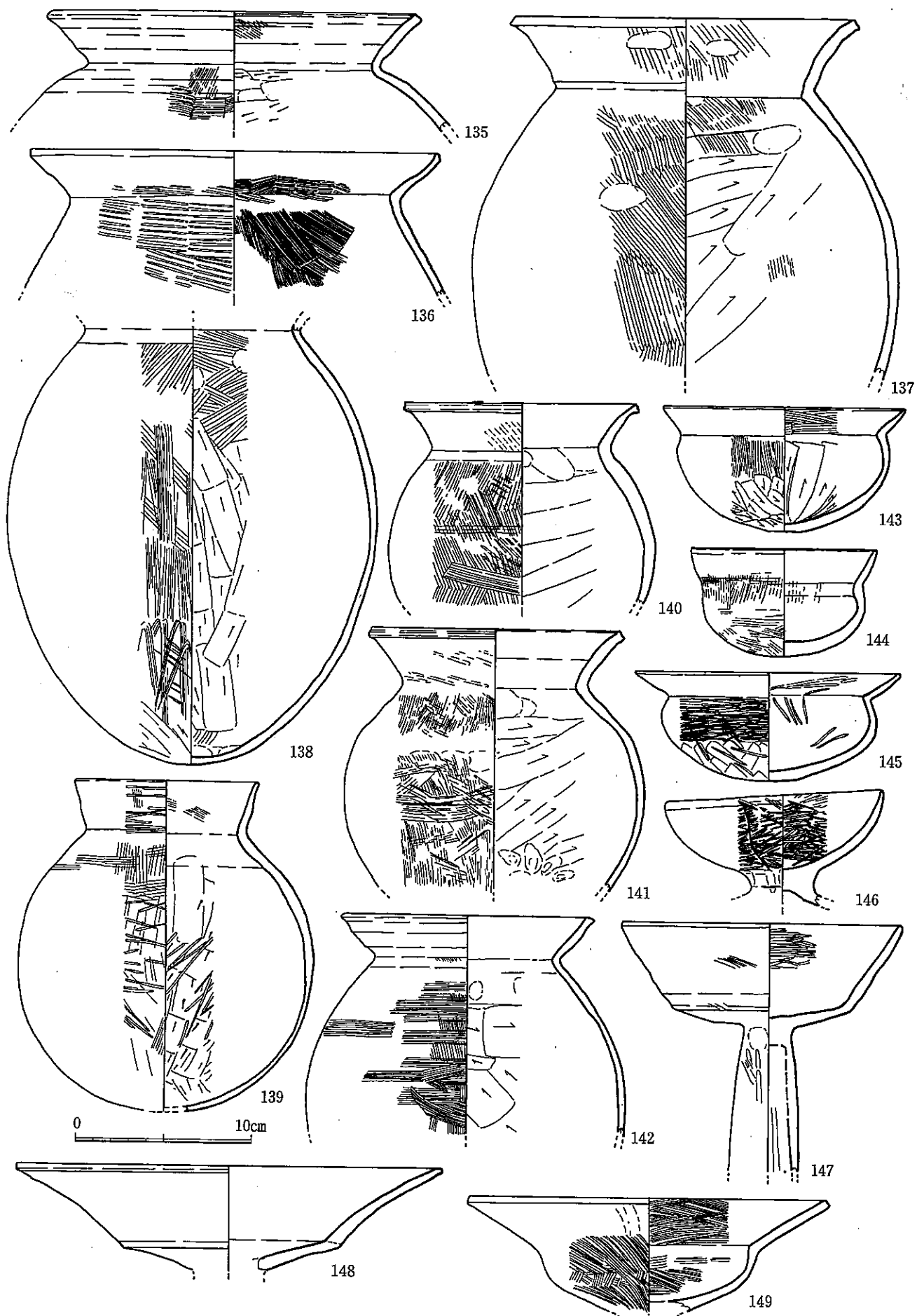
第12图 上松山遺跡3号周溝墓出土土器実測图(2)



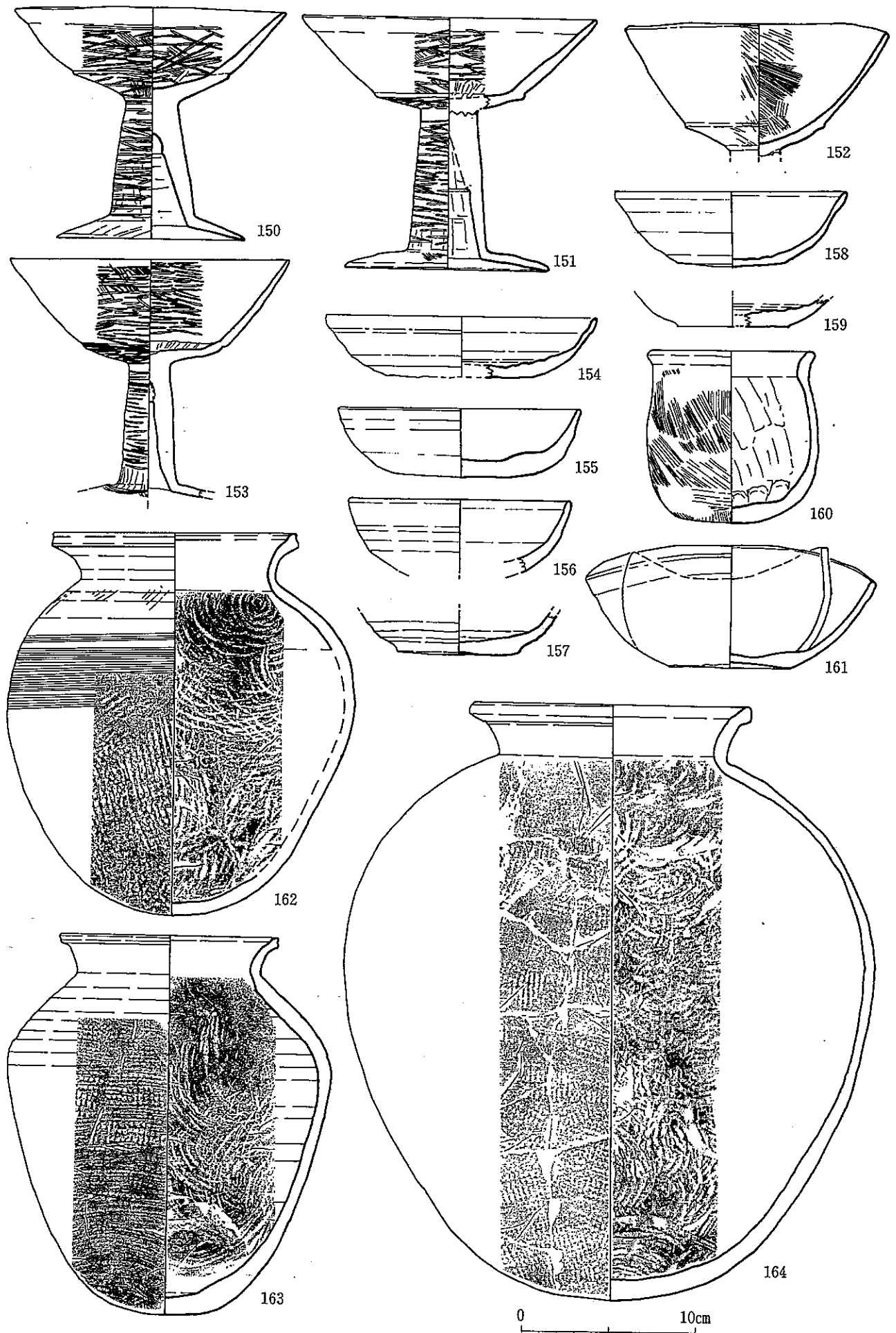
第13图 上松山遺跡 3号周溝墓出土土器実測図(3)



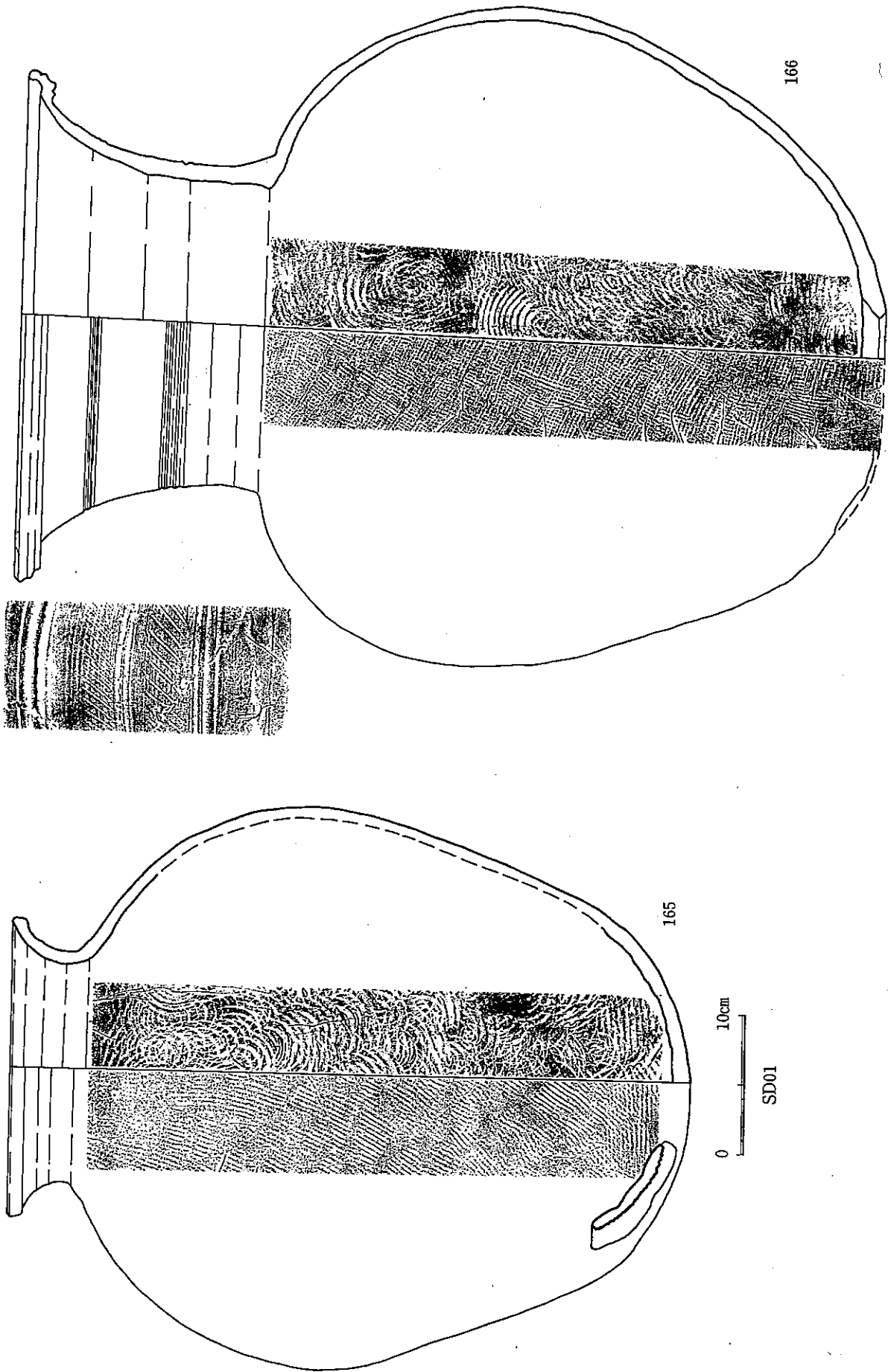
第14图 上松山遗迹 4号周沟墓出土土器实测图(1)



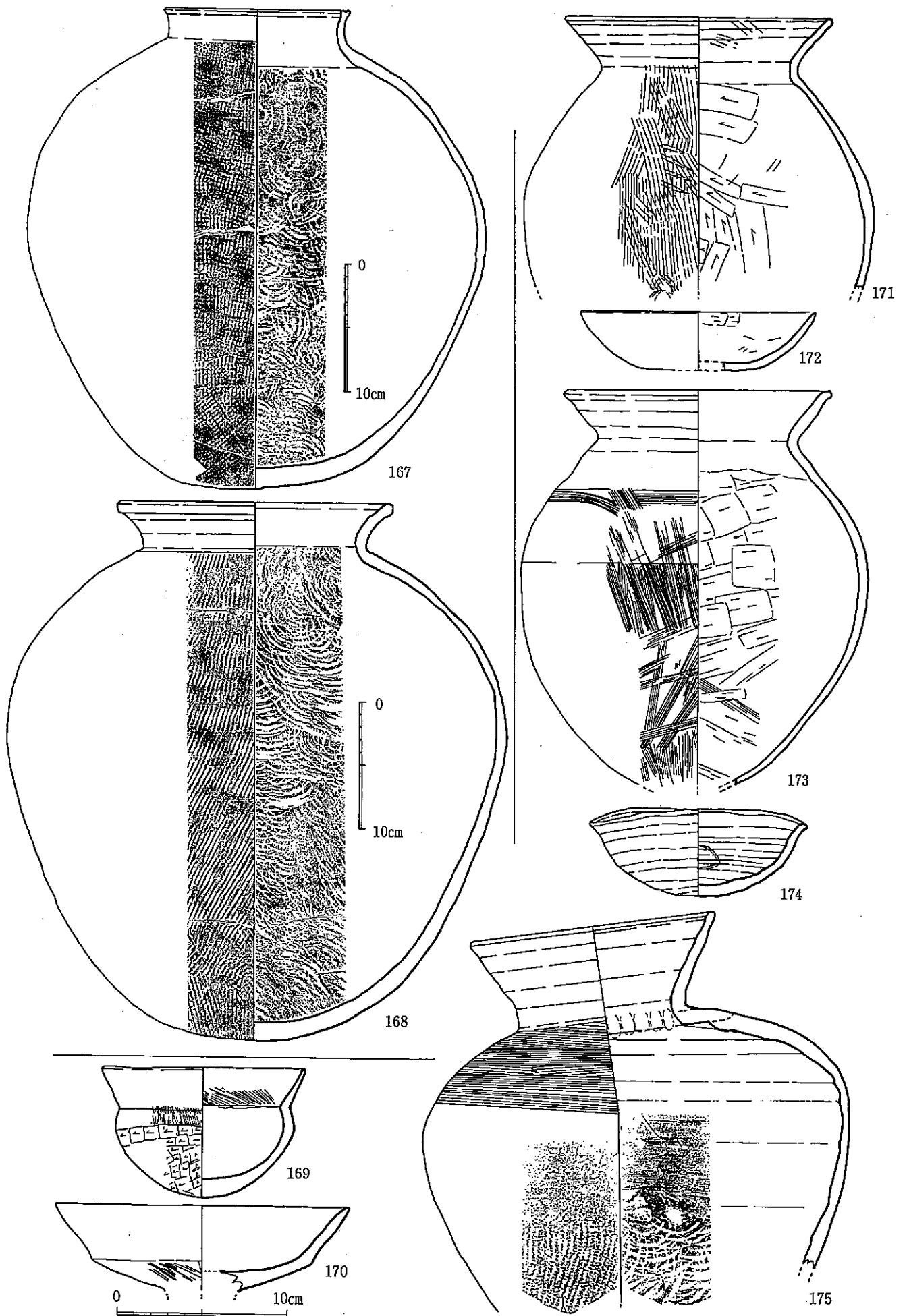
第15图 上松山遺跡4号周溝墓出土土器実測図(2)



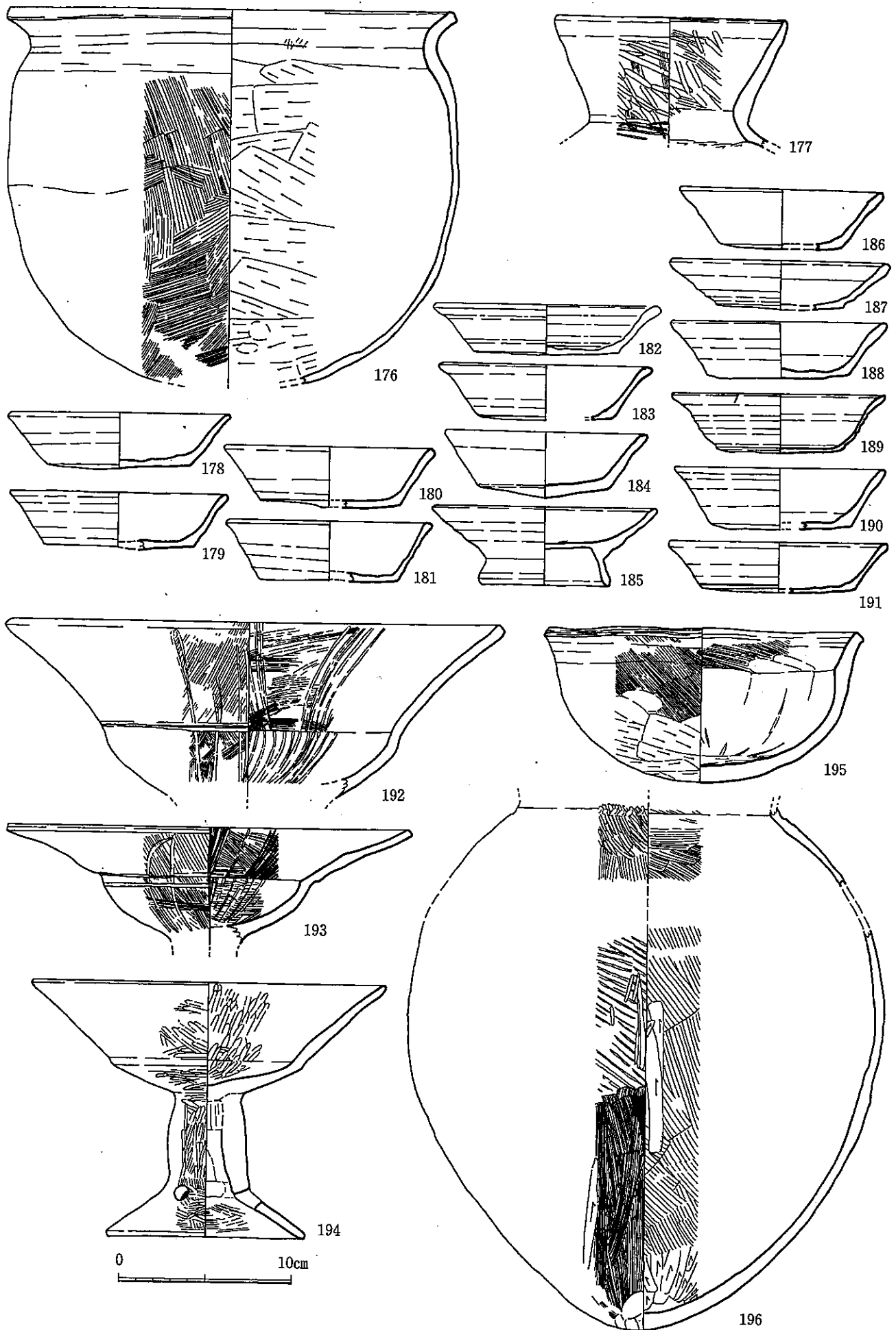
第16图 上松山遺跡4号周溝墓出土土器(3), SD01出土土器実測図(1) (150~153: 4号周溝墓 154~164: SD01)



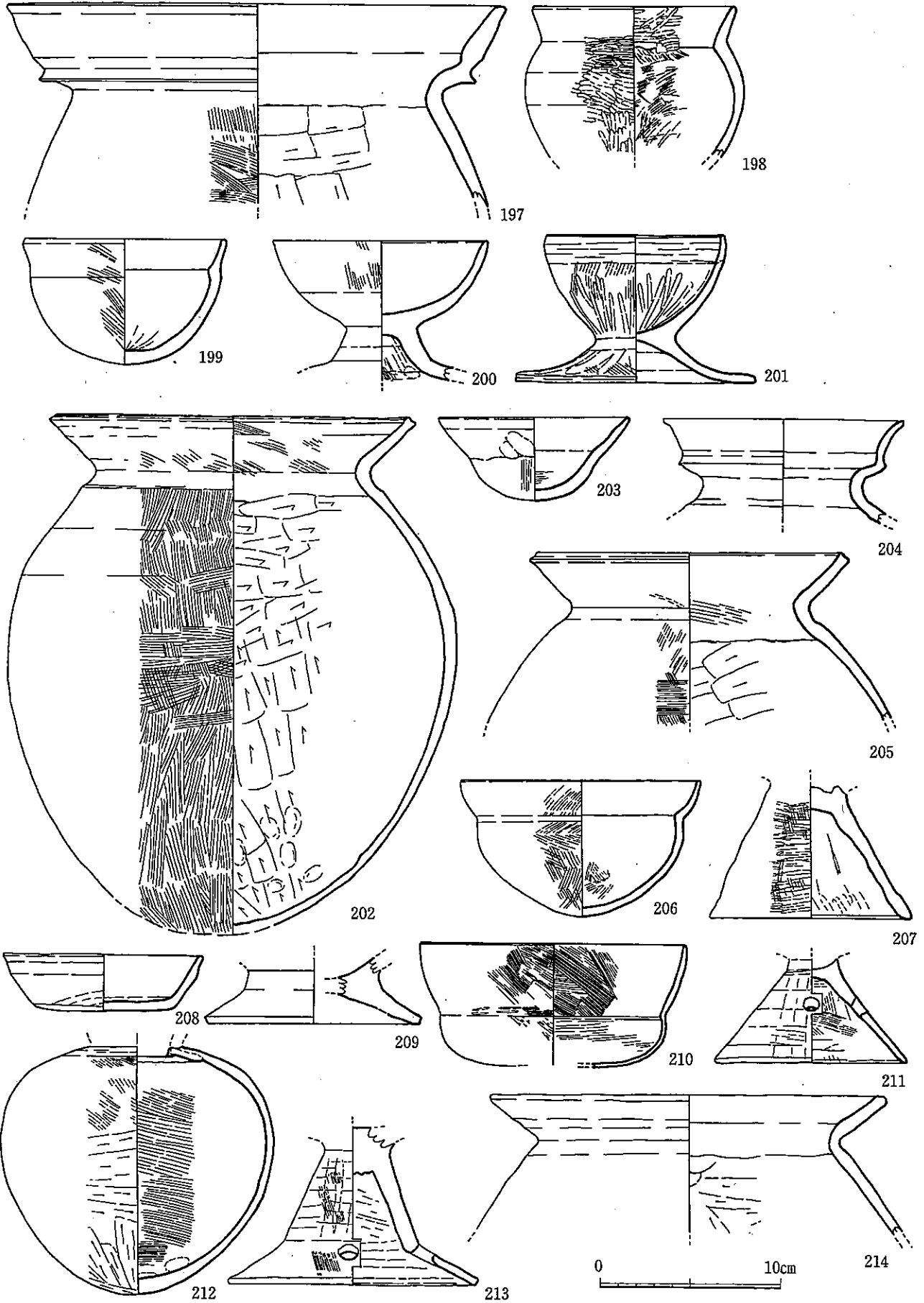
第17图 上松山遺跡SD01出土土器(2)・他遺構出土土器実測図



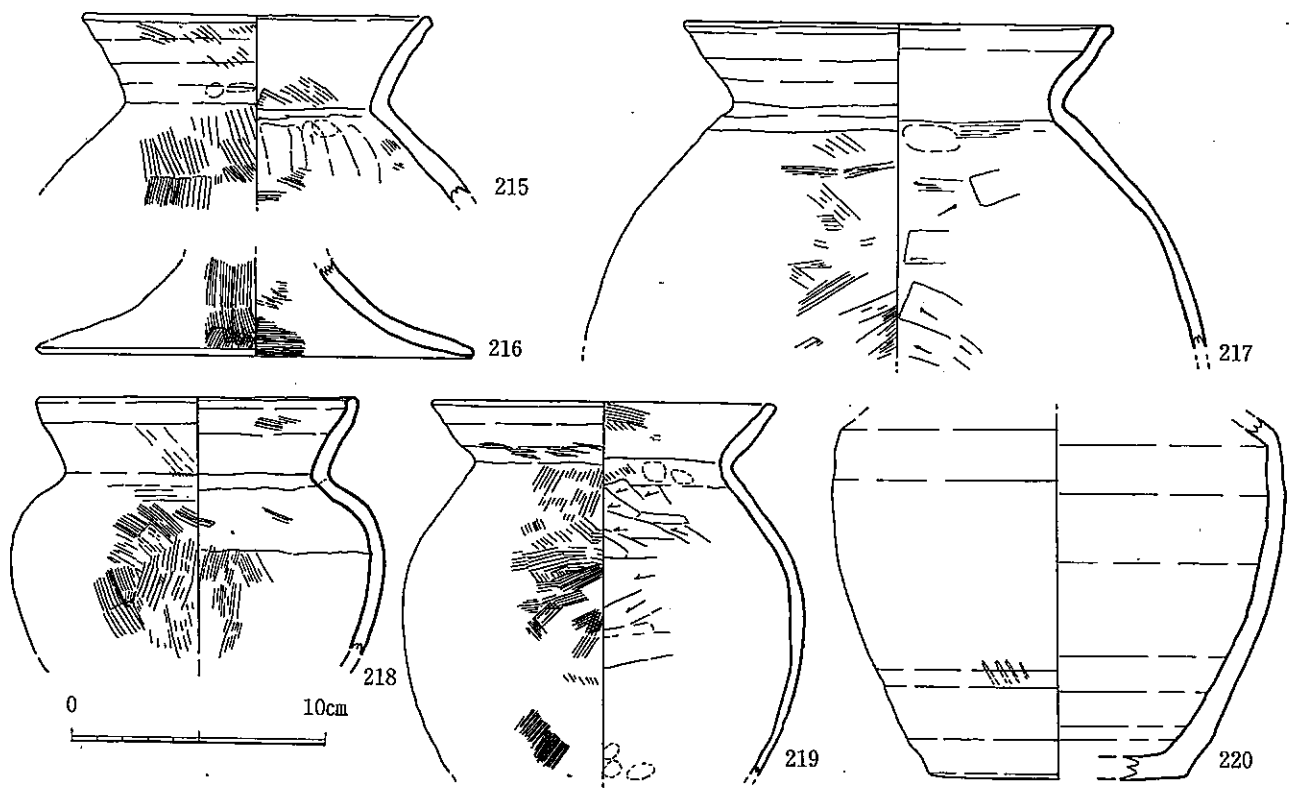
第18图 上松山遺跡SD01出土土器実測図(3), SD02~07出土土器実測図
 (167・168:SD01 169:SD02 170:SD06 171・172:SD03 173:SD07 174:SD04 175:SD05)



第19図 上松山遺跡1号井戸およびC-3, C-6, D-3出土土器実測図
 (176・177: 1号井戸 178~191: C-3 192~194: C-6 195・196: D-3)



第20图 上松山遺跡D-3, D-5, D-6出土土器実測図 (197~201: D-3 202: D-5・D-6 203・205: D-6)



第21図 上松山遺跡表土および攪乱部出土土器実測図

※第4～21図の実測者は次のとおりである（所属は実測当時のもの）。

武末純一（福岡大学人文学部教授）、井上義也（春日市教育委員会）、小沢佳憲（九州大学大学院生）、西山めぐみ・今塩屋毅行・元吉知子・西堂将夫・坂本真一・下原幸裕・津曲大祐（福岡大学大学院生）、坂田邦彦・木室友希・上田龍児・伊藤優介・長直信・中西真央・中原三栄子・豊原亜希子・八久保舞・山口裕平・吉田伸介・國崎絹代・比嘉えりか・税所篤英・河野牧子・原口美奈子・堀内憲二・板倉綾美・松尾七枝・西岡千絵・押方梢・藤田真弓（福岡大学学生）

第2表 上松山遺跡出土遺物観察表

①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径、胴端径 [「穿孔」の表示は焼成後のものに限った]

資料集番号	出土地点 (詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
1	2号住 東コーナー・ 耕作土・埋土SD01	壺(略完形)	①15.8 ②(28.8) ③20.4	精良	浅黄橙/浅黄橙	(胴)タタキ→縦ハケ (口縁)横ナデ→沈線→(頸部)列点文	(胴)縦ハケ、(頸)指オサエ (口縁)ハケ→(口縁)横ナデ	81
2	2号住耕作土埋土	小型丸底埴	①9.8 ②(7.3)	密、1mm	橙/橙	(胴)縦ハケ→ケズリ→ナデ、 (口縁)横ハケ→横ナデ	(胴)ケズリ→ナデ (口縁)横ハケ→横ナデ	192
3	2号住No.2	小型器台 (4孔)	①11.9 ②10.0 ③11.9	精良	(坏部)橙褐/橙褐 (脚部)黄褐/黄褐	ミガキ→ナデ→(口縁・裾)横ナデ	(脚)ハケ→横ナデ (脚上半)上半ケズリ (坏)横ナデ→暗文	46
4	2号住No.1	器台 (台部)(4孔)	④12.8	密	淡黄/黄橙	ミガキ、横ナデ	(脚)横ハケ→横ナデ、ナデ、 (坏)ミガキ	190
5	2号住No.8	器台	①10.5②7.7 ④13.0	密、1mm	暗褐/橙	ハケ→ミガキ→横ナデ	(脚)斜ハケ、 (坏)ハケ→横ナデ、ミガキ	187
6	2号住居No.4	甕	①15.4②18.3 ③16.2	密砂ほとんどな し	黄褐～灰黄/橙～ 黄橙	(胴)タタキ→ハケ→(口縁)横ナデ	(胴)ヘラケズリ→ナデ→(口縁～胴上 位)横ハケ	19
7	2号住No.6新作土、 埋土	甕(略完形)	①17.2 ③20.2 ②23.6	密、1～3mm	にぶい黄褐/にぶ い黄褐	(胴)タタキ→横・縦ハケ→(口縁)横 ナデ	(底)指おさえ、(胴)ヘラケズリ、 (口縁)横ナデ	162
8	2号住耕作土埋土	甕(略完形)	①16.8 ②(23.8)	粗	淡茶褐/淡茶褐	タタキ→(胴)ハケ、(口縁)横ナデ	(胴)削り→縦ナデ、(口縁)横ナデ	121
9	2号住No.5	高坏(4孔)	①27.8 ②17.55 ④14.1	精良、1mmほど の砂若干	明黄褐/明黄褐	(坏)下半ケズリ→横ミガキ (脚部)縦ハケ→一部横ナデ	(坏部)粗い横ハケ(不定方向)→ 底部ミガキ(放射状) (脚部)縦指ナデ→横ナデ [裾に布目痕]	82
10	3号住埋土 3号住No.1	高坏(坏部)	①23.0 ②(7.4)	密、2～3mm	淡黄/淡黄	縦ハケ→横ナデ→縦ナデ	縦ハケ→横ナデ→縦ナデ	186
11	4号住No.3	甕	①12.3 ②(20.6) ③16.2	密1mm前後	黄橙/浅黄橙	縦～左上ハケ→(口縁)横ナデ、(胴下半) 縦ナデ	ヘラケズリ→ナデ (口縁)横ナデ	86
12	4号住No.1	小型丸底埴	①14.6 ②17.7 ③10.6	密、0.5～2.0mm	浅黄橙色～褐色/ 浅黄橙～褐	ハケ→ミガキ	横ハケ→(胴)ナデ	59
13	4号住直上	小型丸底埴	①11.8 ②6.1	密	淡黄/淡黄	横ナデ、ケズリ、横ハケ	(口縁)横ナデ→ミガキ、(胴)	188
14	1号周No.3	小壺	①8.0②8.5 ③9.8	密1mm大の砂が わずか	黄灰/黄灰	ハケ→(口縁)横ナデ	指オサエ→(口縁)横ナデ	5
15	1号周 東(北)埋土黒色	小型丸底埴	①14.2②6.1 ③11.8	精良	橙黄灰/橙黄灰	(胴)粗いハケ→ナデ消し、 (口縁)横ナデ	(胴)ケズリ (口縁)横ナデ	2

資料集 番号	出土地点 (詳細)	器種 (部位)	法量 (cm)	胎 土	色 調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
16	1号周 B-5直上 (溝埋土)・A-5直上	小形丸底拵 (口~胴上部)	①(8.9) ②(5.3) ③(6.8)	精良	橙褐/橙褐	縦・斜ハケ→ミガキ	ミガキ→(口縁端)ナデ	18
17	1号周 B-4直上 (溝埋土)SD01埋土	壺 (略定形)	①11.4 ②(15.9)	密	明赤褐/明赤褐	(胴)ケズリ→ナデ、(口縁)横ナデ、 ミガキ	(胴)ケズリ→ナデ、(口縁)横ナデ、 ミガキ	166
18	1号周 西溝A-5埋 土	台付鉢 [穿孔] (鉢部)	①11.7	精良、砂粒わず か	にぶい橙~橙/ ぶい橙~橙	ハケ→ミガキ→(口縁)横ナデ	横ハケ→ミガキ→(口縁)横ナデ	204
19	1号周A-5直上	台付鉢 (鉢部)	①12.4	密、1mm以下	淡茶褐色/淡茶褐 色	ハケ→横ナデ→ミガキ	ハケ→横ナデ→ミガキ	1
20	1号周No4	脚付小形壺 (口縁欠)	③8.9 ④5.85	1~2mmほど	波橙褐/淡橙褐	指オサエ	指オサエ→(胴)ケズリ→(脚)ナデ	10
21	1号周No5	手握ね土器	①8.1②8.2	1mmほど	黄褐/黄褐	オサエ、(底部)ケズリ	指オサエ・ナデ	4
22	1号周No7	壺	①10.6 ②12.7 ③14.5	砂粒多い	黄白/黄白	ハケ→(口縁)横ナデ	(底)指オサエ→(胴)ナデ→(口縁) ハケ	15
23	1号周溝北直上	甕 (頸~底)	③(17.4) 頸(11.4)	細砂粒	黄灰/黄灰	(胴)ハケ→ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ユビナデ、指オサエ (底、 頸)	57
24	1号周 北(東)埋土 黒色土	甕 (口縁~頸)	②(8.7)	やや粗、1~2mm	明黄褐/明黄褐	縦・斜ハケ→(口縁)横ナデ	斜ハケ→(胴)ケズリ	17
25	1号周 北(中央溝) 黒埋土	高坏 (坏~脚柱)	①18.0	1~2mm	黄褐/黄褐	ハケ→ナデ、横ナデ→ミガキ	(坏部上半)ハケ→横ナデ→ミガキ	3
26	1号周 周辺ユンボ カクラン	甕 (口縁~胴上位)	①16.2	1mmほど	橙灰/橙灰	(胴)タタキ→ハケ(口縁)横ナデ	(胴)ヘラケズリ (口縁)横ハケ→横ナデ	16
27	1号周 北東埋土	台付甕 (台部)	④16.6 頸部径6.6	密、0.5~2.0mm	明黄橙/明黄橙~ 灰白	縦ハケ→横ナデ	指オサエ(成形)→横ハケ→横ナデ	20
28	1号周 A-5直上	手握土器	③(5.6)	1mmほど	黄灰/黄灰	オサエ	ナデ	7
29	1号周周溝	甕 [穿孔]	①16.3cm ②26.4cm ③20.6	密、1~5mm	淡橙色~スス付着 /淡橙色~スス付 着	(胴)タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	(口縁)タタキ→横ナデ (胴)ヘラケズリ	44
30	1号周周辺	甕 (口縁~頸部)	①18.0 頸部径13.6	密、1~2mm	黒褐色橙/明橙	タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	(口縁)横ナデ (胴)横ハケ→横ハケ	26
31	2号周 北西溝埋土黒	甕 (口縁~上半)	①16.0cm ②(13.1)	密	にぶい黄橙/にぶ い黄橙	(胴)タタキ、(口縁)ハケ→横ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ、(胴)ケズリ→ハ ケ→ヘラナデ	167
32	2号周No.10	台付鉢	①11.3 ②10.8 ③14.8	1~2mm	黄褐/黄褐	(鉢部)底ケズリ→上半縦ハケ→ナデ→ ミガキ (脚)ナデ→ミガキ	(鉢)ハケ→ナデ (脚)横ナデ	36
33	2号周 東(北) 埋土 (上)	高坏 (坏部)		細砂混	淡黄褐/淡黄褐	縦ハケ→ナデ、(上半)横ナデ	斜ハケ→ナデケシ→ミガキ	24

資料集 番号	出土地点 (詳細)	器種 (部位)	法量 (cm)	胎 土	色 調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
34	2号周No13	高坏 (脚部)(4孔)			淡赤褐/淡赤褐	縦ハケ→縦ミガキ→ナデケシ、横ナデ→ 穿孔	斜めハケ→ナデ	30
35	2号周No16	高坏 (坏部)	①13.0 ②(5.5)	細砂混	明褐/明褐	粗いハケ→細かいハケ→口縁横ナデ	縦ハケ→ナデ→口縁横ナデ	23
36	2号周No2	小形器台 (脚部)(4孔)	②(6.2) ③12.0		淡黄褐/淡黄褐	縦・横ハケ→ミガキ→横ナデ	斜・横ハケ→ナデ→横ナデ	27
37	2号周 南埋土南西 コーナー	高坏 (脚部)(3孔)	②残(4.7) ④11.0	精良	淡赤褐/淡赤褐	ミガキ	(脚柱)ケズリ→縦ハケ (縦)ハケ→ナデ	22
38	2号周No2 北溝(西)埋土	二重口縁壺 (口縁~胴中位)	①21.7 ②(33.0)	やや精良1~2mm	橙~浅黄橙/褐灰	タタキ→ナデに近いハケ (口縁)ハケ→横ナデ	(胴)ハケ→ケズリ(口縁)横ナデ	92
39	2号周 北(東)埋土	甕 (頸~胴)	頸部14.7 30.0	密、1~2mm	淡黄/淡黄	(胴)タタキ→斜ハケ (口縁)斜ハケ→横ナデ	斜ハケ→(口縁)横ナデ	164
40	2号周 北西隣埋土黒	二重口縁壺 (頸~胴上半)	②(14.5) ③12.1	1mm	淡黄褐/淡黄褐	斜ハケ→(口縁)横ナデ	(胴)指オサエ→ハケ (口縁)ハケ→横ナデ	48
41	2号周 北西隣埋土 黒西隣橋 (北)埋土	壺 (口~胴上半)	①19.0cm ②(16.8)	密、2mm以下	明黄褐/にぶい黄褐	タタキ→ハケ→(口縁)横ナデ	ハケ→(胴)ケズリ・(口縁)横ナデ	173
42	2号周 東溝埋土(上層)	甕 (口~肩)	①23.0cm ②(9.15)	密、3mm以下	明黄褐/明黄褐	ハケ→横ナデ	ハケ→横ナデ	172
43	2号周 南西埋土	壺 (肩部)	②(6.8)	密	淡黄褐/淡黄褐	タタキ→横・斜ハケ→ナデ	指オサエ→横ハケ→ナデ	123
44	2号周 東溝埋土 (上層)	壺 (口縁~肩)	①14.0 ②(6.9) 頸9.0	精良 3~4mm、1mm以下	にぶい褐/にぶい 赤褐	(胴)タタキ→横ハケ→頸指オサエ (口縁)縦ハケ→横ハケ	(胴)横ナデ (口縁)ハケ→横ナデ	73
45	2号周No1	壺 [穿孔] (頸~底)	②(8.1) ③12.95 頸18.3	精良	浅黄橙~橙/黄灰	ヘラケズリ→ハケ→横ナデ、ナデ	斜ハケ、ケズリ→(上半)ナデ、(底) 指オサエ→(頸より上)横ナデ	78
46	2号周 南溝(東)埋 土(黒)中位	壺 (口~頸)	①15.4 ②残(8.9) 頸(9.8)	精良	浅黄橙~橙/浅黄 橙~橙	縦・斜ハケ→縦ミガキ→(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ(口縁)横ミガキ	77
47	2号周・東(北)埋 土(上層)・埋土東 (南)	壺 (口縁~肩)	①17.3 ②(14.7)	密、1~2mm	浅黄/浅黄橙	(胴)タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ、(胴)ケズリ	125
48	2号周・北西隣埋 土黒・西隣橋(北) 埋土	甕 [穿孔]	①21.2 ②(39.0) ③28.1	密、2mmなど	にぶい黄橙/にぶ い黄橙	(胴)タタキ→横ハケ(縦~右上) (口縁)縦ハケ→横ナデ	(胴)不定方向の横ハケ→下位のケズリ (口縁)横ハケ→横ナデ	196
49	2号周 北(東)埋土・ 2号周No19ほか	壺 [穿孔]	①20.0 ②38.8 ③30.6	1mm	淡黄褐/黄褐	(胴)タタキ→縦・斜ハケ→ナデ (口縁)縦・斜ハケ→横ナデ	胴上半指オサエ→ハケ (胴上半)胴下半ヘラケズリ (口縁)横ナデ	42
50	2号周 北西隣埋土 黒	甕 (略完形)	①14.65 ②(12.2) ③12.5	やや精良、0.5~ 1.5mm	にぶい黄橙~黄褐 /にぶい橙	縦ハケ→横ハケ→(口縁)横ナデ→ミガ キ	(胴)ケズリ→横ナデ (口縁)横ハケ→縦ミガキ	84

資料番号	出土地点 (詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
51	2号周・東埋土 (上層)・東側周溝埋土黒	小形丸底埴 (口~肩)	①146 ②(6.65) 頸11.0	精良	橙/橙	(口縁)縦ハケ→ナデ (胴)ケズリ→ナデ	(口縁)斜ハケ→横ナデ (胴)ナデ	49
52	2号周№9西辺(南) 埋土(上層)	壺[穿孔]	①124 ②12.9③13.3 頸10.0	密、0.5~2mm	淡赤橙/淡赤橙~ 赤橙	ハケ→ミガキ→(肩)ナデ	(胴)ケズリ→ナデ (口縁)ミガキ	74
53	2号周西溝(最下 層)陸橋(南)黒	壺(底部欠)	①196 ②(10.8)	密、1~2mm	浅黄橙/黄橙	縦ハケ→横ナデ	(口縁)ヘラケズリ→ナデ→横ナデ	69
54	2号周東溝埋土 (上層)	壺 (口縁)	①9.5 ②(4.5)	密、1mm	橙/橙	縦ハケ→横ナデ	横ハケ→横ナデ	141
55	2号周・南溝(西) 埋土	甕 (口縁~胴上位)	①19.7 ②(12.6)	精良 砂粒わずか	橙/橙	(胴)斜ハケ(口縁)縦ハケ	(胴)斜ハケ→(口縁)横ハケ	168
56	2号周№11	壺 (口~胴)	①14.2 ②(27.5) ③26.8 頸11.4	細砂多混	淡黄褐/淡黄褐	(胴)左上タタキ→上半ナデ、下半縦ハケ (口縁)斜めハケ→ナデケシ	斜めハケ	228
57	2号周南溝(西)埋土南西 コーナー東坑表土	甕 (口~肩)	①188 ②(15.2)	密、3mm以下	明黄褐/にぶい黄 褐	タタキ→ハケ→横ナデ	ナデ→ハケ→(口縁)一部横ナデ	171
58	2号周南西陸橋(北) 埋土	甕	①16.0 頸11.2	細砂混	灰褐/灰褐	横・平行タタキ→斜・縦ハケ→(口縁) 横ナデ	(胴)ケズリ→横ナデ・ナデ (口縁)斜ハケ→横ハケ	35
59	2号周北西隅埋土 黒	甕 (胴)	③17.0cm	密、3~1mm	浅黄橙/浅黄橙	縦ハケ→横ナデ	ヘラケズリ→ナデ	119
60	2号周F-4遺構面 直上	台付小型丸底埴	①9.6 ②(8.5)		明淡褐/明淡褐	縦・斜ハケ→(口縁)横ナデ→縦ミガキ	ハケ→ナデ、(口縁)横ナデ	21
61	2号周西溝陸橋 (南)黒色土	甕 (胴部)	②(8.2)	密、1~5mm	浅黄橙/浅黄橙	頸縦ハケ→ナデ(胴)横ハケ→縦ハケ	ハケ→ナデ	145
62	2号周西隅埋土黒	甕 (頸~肩)	頸(10.0)	密、1mm以下(3 mm混)	褐/黒褐	タタキ→縦ハケ→横ナデ	斜ハケ→横ナデ	140
63	2号周西溝(最下 層)陸橋(南)№5	甕[穿孔] (頸~底)	②(29.1) ④(28.2)	密1mm	黄褐/黄褐	タタキ→ナデ・横ナデ	ヘラケズリ、底部指オサエ	52
64	2号周東坑表土	甕 (口縁)	①19.0	密、1mm	灰黄/浅黄	ハケ→横ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ(胴)ケズリ	68
65	2号周東溝埋土黒 (上層)	甕 (口~肩部)	①16.9cm ②8.2	密、1mm以下	明赤褐/橙	ハケ→横ナデ	ハケ→(胴)ヘラケズリ(口縁)横ナデ	169
66	2号周・北西隅埋 土黒・西陸橋	甕 (口~胴中位)	①16.2 ②(16.4) ③20.6 頸(12.6)	精良	明黄橙/明黄橙	タタキ→斜ハケ→(口縁)横ナデ	斜ハケ→(胴)ケズリ→(口縁)横ナデ	34
67	2号周南西埋土南 溝(西)埋土	甕 (口~体部中)	①17.2cm ②(16.6cm)	密、3mm以下	にぶい黄橙/にぶ い黄橙	(胴)タタキ→ナデ (口縁)縦ハケ→横ナデ	ハケ→(胴)ケズリ・(口縁)横ナデ	170

資料集 番号	出土地点 (詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
68	2号周北西隅埋土 中2号周西陸橋(北) 埋土	甕 (口~胴上半)	①20.6 ②(14.5) ③26.8	精良	明黄橙/明黄橙	タタキ→斜ハケ→ (口縁)横ナデ	(胴)ハラケズリ→横・斜ハケ (頸)ナデ	29
69	2号周・西陸橋 (北)埋土 ・北西隅埋土黒 ・北西隅埋土黒	甕 (略完形)	①18.6cm 頸13.9 ②24.8	密、1~3mm	黄褐/黄褐	口縁：ハケ→横ナデ(胴)タタキ→ハケ (頸)横方向のナデとオサエ→(脚)縦 方向ナデ	(胴)ケズリ→ハケ→(口縁)横ナデ (頸)ケズリ→ナデ(脚)ナデ	133
70	2号周南溝(西)埋 土	台付甕 (接合部)	②(3.65)	細粒やや多	橙/橙			51
71	2号周南西埋土	小形甕 (口~胴上半)	①10.3 ②(7.7) ③10.9 頸(9.5)	細砂多混	淡褐/淡褐	(胴)タタキ→縦ハケ→ナデ→(口縁) 横ナデ	(胴)ケズリ→ナデ・斜ハケ(口縁)横・ 斜ハケ→横ナデ	47
72	2号周・北西隅埋 土黒・西陸橋(北) 埋土黒	甕 (胴~底)	③23.0	粗、1~5mm	にぶい橙~褐灰/ にぶい橙	タタキ(左上がり)→縦ハケ	ケズリ(縦)→ナデ	124
73	2号周・北西隅埋 土黒・西陸橋(北)埋土 土黒	甕 (口縁~胴中位)	①19.8 ③25.8	密、1~2mm	灰白~にぶい草橙 /浅黄橙~明黄褐	水平な平行タタキ→縦ハケ→(口縁)横 ナデ	ハケ→(胴)ケズリ(口縁)→横ナデ	163
74	2号周・南溝 (西)埋土 ・南西コ一 ナ	甕 (上半)	①29 ③32.3	1~2mm	浅黄橙/浅黄橙	縦ハケ・斜ハケ→(肩)横ハケ→(口縁) 横ナデ	(胴)ケズリ→(口縁)横ナデ	43
75	2号周・北西隅埋 土黒・西陸橋(北)埋土 土黒	甕 (口~胴上半)	①20.4 ②(12.4) ③27.2	密	灰褐/黄褐	(胴)タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ (口縁)ハケ→横ナデ	50
76	2号周北西隅埋土 黒	甕 (口縁)	①21.2cm ②(8.0)	密、1mm	浅黄橙/浅黄橙	縦ハケ→(口縁)横ナデ	横ハケ→横ナデ	70
77	2号周北西隅埋土	甕 (口縁~肩)	①(15.7) ②4.7	密、2~3mm	橙/浅黄	横ハケ	横ハケ、ケズリ	142
78	2号周・南埋土南 西コ一ナ・南溝 (西)埋土	甕 (胴上半)	頸(12.6)	やや粗、2mm以 下	にぶい黄褐/にぶ い黄褐	斜ハケ、肩に波状文	(胴)ケズリ(頸)ナデ	144
79	2号周東溝埋土黒	甕 (口縁)	①16.0 頸(13.9)	密、1~3mm	橙/橙	(口縁)横ナデ (胴)ハケ→横ナデ	(口縁)オサエ→横ナデ (頸)縦のナデ→ケズリ	147
80	2号周南溝(西)埋 土(上層)	甕 (口~胴上半)	①14.0 ②(6.1) 頸10.1	0.5~2mm	黄橙/淡黄橙	ハケ→(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ→指オサエ (口縁)横ナデ	75
81	2号周東溝埋土 (上層)	甕 (口縁)	①13.4 頸10.4	密、1~3mm	にぶい橙/橙	右上がり平行タタキ→縦ハケ→横ナデ	横ハケ→縦ハケ→横ナデ	146
82	2号周 ・西陸橋(北)埋土 ・北西隅埋土	甕 (上半肩)	①15.0 ②(9.9) 頸12.4		/	タタキ→縦・横ハケ→横ナデ→波状文 (沈線・3条)	(胴)ケズリ (口縁)横ナデ	41

資料集番	出土地点 (詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
83	2号周・北西隅埋土黒 ・西陸橋(北)埋土 コナナ	甕(上半)	①16.2 ②(11.7) 頸10.5	砂粒混	灰/灰	(胴)縦ハケ→斜ハケ→細かい横ハケ→ (口縁)横ナデ	(胴)ケズリ→ナデケシ (口縁)横ナデ	38
84	2号周南埋土南西 コナナ	甕(上半)	②(9.5)	比較的精良、細 粒若干アリ	にぶい橙～橙/に ぶい橙～橙	タタキ(右上)→縦ハケ	ケズリ→頸部付近丁寧ナデ	143
85	2号周埋土東(南) 出土	甕(口縁～胴中位)	①12.4 ②(12.3)	密0.5～2.0mm	にぶい黄褐～橙/ 褐灰～明黄褐	タタキ→縦ヘラナデ→(口縁)横ナデ	(胴)縦ハケ→ナデ (口縁)横ナデ	37
86	2号周・東埋土 ・直上	甕(底部)	②(7.1)	密	淡褐/淡褐	横・斜ハケ→縦ハケ→ナデ	指オサエ→ケズリ→横ケズリ	126
87	2号周東溝埋土 (上層)	甕(底部)		密	淡褐/淡褐	ハケ→ナデ	指おさえ→ケズリ→ハケ→ナデ	120
88	2号周西陸橋(北) 埋土	甕(底部)		密、1～2mm	にぶい褐/浅黄橙	右上がりタタキ→縦ハケ	ケズリ	118
89	2号周東溝埋土 (上層)	甕(底部)	②(8.3)	密	淡褐/淡褐	ハケ、ケズリ→ナデ	指ナデ→ケズリ→縦・斜ナデ	122
90	2号周北西隅埋土	甕(口縁～胴)	①15.3 ②(9.2cm)	密	にぶい橙/橙	(胴)左上がりタタキ→ハケ (口縁)横ナデ	(胴)ケズリ、(口縁)横ナデ	99
91	2号周・東埋土(上 層)・東側溝埋土黒	甕(口縁～胴中位)	①17.8 ②(16.7)	砂粒若干アリ	黄褐/黄褐	ハケ目→(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ→(口縁)横ハケ→横ナデ	31
92	2号周北西隅埋土 黒	附付鉢 (上半)	①20.4 ②(7.9) 頸18.0	細砂混	淡褐/淡褐	(胴)横ハケ→細かい縦ハケ→(口縁) 横ナデ	(胴)粗い横ハケ→縦ハケ→横ミガキ・ ナデ→(口縁)横ナデ	45
93	2号周北西埋土黒	甕(口縁～胴上半)	①13.0 ③14.4	密0.5～1.5mm	にぶい黄橙～明黄 褐/にぶい黄褐～ 明褐	(胴)縦ハケ→横ハケ(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ→ナデ(口縁)横ハケ後横 ナデ	76
94	2号周東(北) 埋土(上)	鉢[穿孔]	①13.8		淡褐/淡褐	横ハケ→横・縦・ケズリ風ミガキ→縦ナ デ→(口縁)横ナデ	斜ハケ→横ナデ	33
95	2号周東埋土(上層)	鉢	①11.1 ②(2.3)	精良	橙/橙	ケズリ→粗いハケ→(口縁)横ナデ	ナデ→(口縁)横ナデ	54
96	2号周南西埋土	小形器台 (脚部)(3孔)	②(6.3) ④(10.6)	精良	橙褐/橙褐	縦ミガキ→横ミガキ→横ナデ	ハケ→横ナデ	39
97	2号周No17	高坏 (坏部)	①22.0	密、砂ほとんど なし	橙/橙	タタキ→横ナデ→ミガキ	横ナデ→放射状にヘラミガキ	40
98	2号周No8	台付鉢 (脚部)(4孔)		細砂多混	淡褐/淡褐	(横ハケ?)→縦ミガキ→指オサエ	ケズリ→細かいハケ→ナデケシ	32
99	2号周No14	須惠器高坏 (坏部)	①12.2 ②(4.6)	1～3mm	暗灰→地(自然釉に より漆黒)/暗灰	(口縁～胴)横ナデ (坏底部)回転ヘラケズリ→ナデ	横ナデ	55
100	2号周No18	弥生土器高坏 (脚部)			黄褐/黄褐	ミガキ	工具による調整	53

資料集番号	出土地点・ (詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
101	3号周北側直上 (カクラン)	二重口縁壺 (口~頸)	①22.8 ②8.5	密、3mm以下	明褐/明褐	斜ハケ→横ナデ	斜ハケ→横ナデ	176
102	3号周北溝(西)埋 土	二重口縁壺 (口~頸)	①16.5 ②(6.5)	密、1mm以下	明黄褐/明黄褐	縦ハケ→横ナデ	斜ハケ→横ナデ	174
103	3号周南溝中央埋 土	二重口縁壺 (口縁)	頸12.0	密、1~2mm大	橙~にぶい褐/橙 ~にぶい褐	ハケ→頸部 口縁屈曲部に刻み目	斜ハケ→横ナデ	180
104	上松山3号周No.12	二重口縁壺 (口~頸)	①22.4 ②(9.05)	密、1~4mm	橙~黄橙/橙~黄 橙	ハケ→横ナデ	横ナデ	14
105	3号周南溝(西)埋 土	二重口縁壺 (口~頸)	①25.2 ②(9.6)	密、2mm以下	明褐/明褐	ハケ→横ナデ	横・斜ハケ→横ナデ	203
106	3号周南溝中央埋 土	壺 (口縁~頸部)	①19.6	密、1~2mm	にぶい黄橙/にぶ い黄橙	縦ハケ→横ナデ→頸部刻み目	ハケ→横ナデ	182
107	3号周No.2 北コーナー埋土最 下層	二重口縁壺 (略完形)	①19.8 ②(35.6) ③30.8	精良、砂粒ほと んどナシ	灰白~灰黄/灰白 ~灰黄	(胴) タタキ→縦ハケ→横ハケ→(口縁 ~肩) 横ナデ	(胴) ヘラケズリ (口縁) 横ナデ	132
108	3号周南溝(西) 埋土	壺 (胴上半)	頸部15.9	密	明褐/橙	縦ハケ→斜ハケ	(胴) ヘラケズリ (口縁) ハケ→横ナデ	100
109	3号周南溝中央埋 土	壺 (口縁部)	①16.2 ②6.6	密	灰色/灰色	横ナデ	(口縁) 横ナデ (頸) 指オサエ	181
110	3号周No.3、No.7 ・北溝(西)埋土・ 北溝直上	二重口縁壺	①19.0 ②40.0 ③32.3	精良砂粒少ない	黄白橙~赤橙色/ 黄白~灰白色	①タタキ→ヘラケズリ→ナデ (口縁) 斜ハケ→横ナデ	(胴) 底部縦ハケ→上半ヘラケズリ (口縁) ハケ→横ナデ	131
111	3号周北コーナー 埋土	高坏 (坏部)	①18.0 ②(5.9)	密、3mm以下	明赤褐/明赤褐	(上半) ハケ→ナデ→縦研磨 (下半) ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ→暗文風ミガキ	178
112	3号周南溝(西)埋 土	高坏 (坏部)	①(14.9)	精良、1mmほど の砂	橙/橙	(上半) ナデ (下半) ミガキ	横ハケ→ミガキ	227
113	3号周No.10	小型丸底埴	①11.4 ②7.6 ③9.0	ほぼ精良	黄白/黄白	(口縁) 横ナデ (底) 指オサエ→タタキ→ナデ	(胴) 指オサエ→ケズリ→ナデ (口縁) 横ハケ	11
114	3号周直上	器台 (3孔)	①12.0 ②12.0 ④11.2	やや密	橙/橙	横ハケ→縦ミガキ→(脚) 横ナデ	(坏) ハケ→ヘラミガキ (胴) ハケ→ナデ(縦) 横ナデ	183
115	3号周北コーナー 埋土	甕 (口~頸部)	口(15.6) 頸(13.0)	密、1~2mm	浅黄橙/灰白	(口縁) 横ハケ→横ナデ (胴) 横ハケ→縦ハケ	(口縁) 横ハケ→横ナデ (胴) ケズリ→ナデ	177
116	3号周南コーナー 埋土ほか	壺 [穿孔]	①19.1 ②(34.2) ③28.5 頸12.6	密	黄褐/黄褐	(胴) 斜ハケ→ナデ→(口縁) 横ナデ	指オサエ→縦・斜ハケ	25
117	3号周No.11南コー ナー埋土	壺 (上半)	①18.1 頸12.9 ③29.4	密、1~3mm	淡黄~浅黄/浅黄 橙	(口縁) 縦ハケ→横ナデ (胴) タタキ→ 横ハケ→縦ハケ	(口縁) 横ナデ (胴) ケズリ→オサエ	197

資料集番号	出土地点(詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調(外面/内面)	外面調整	内面調整	土器番号
118	3号周北コーナ-埋土(下層部)	甕(口縁~胴上半)	①15.0	密、2mm以下	浅黄橙/浅黄橙	タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	ケズリ→(口縁)横ナデ	179
119	3号周中央部直上	甕(口~胴)	①18.8 ②15.2	密、1~2mm	黄褐/黄褐	タタキ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	(口縁)横ハケ→横ナデ (胴)縦ケズリ	184
120	3号周北コーナ-埋土	甕(口縁~胴)	①14.0 ②10.3	密、1~2mm	にぶい黄橙/浅黄橙 にぶい黄橙	(口縁)縦ハケ→横ナデ (胴)タタキ→縦ハケ	(口縁)細かいハケ→ハケ (胴)縦ハケ→ナデ	185
121	3号周・南溝(西)埋土 ・南溝(西)ブリッジ	甕(略完形)	①19.0 ②(34.2) ③(25.4)	密、1~3mmの砂粒	浅黄橙~にぶい黄褐/明黄褐	(口縁)ハケ→横ナデ (胴)タタキ→ハケ	(口縁)斜ハケ→横ナデ (胴)ケズリ→ナデ、ハケ	223
122	3号周・北溝(西)ブリッジ・北溝中央部埋土	甕口縁(頸~胴)	①17.3 ②13.3 ③23.9	密、1~2mm	にぶい黄橙/にぶい黄橙	(口縁)横ナデ(胴上半)縦ハケ→横ナデ (胴下半)縦ハケ→横ハケ	(口縁)横ナデ (胴)ケズリ→ナデ	165
123	4号周北溝(中)埋土	二重口縁壺(口~胴上半)	①14.8 ②(13.8) ③11.2	1~3mmと5mm	浅黄橙/浅黄橙	(胴)縦ハケ→横ナデ	(頸)指オサエ→(胴)ケズリ→ (口縁)横ナデ	71
124	4号周No4	二重口縁壺(頸)		密	明褐/明褐	ハケ→ハケ→ミガキ	ハケ→ハケ→ミガキ→ナデ	129
125	4号周No15	壺	①17.4 ②32.4 ③25.6	密、1~2mmの砂粒	明~にぶい黄褐/明灰褐~明黄褐	タタキ→ハケ→(口縁)横ナデ	(底部)指オサエ→(胴)ハケ→板ナデ→ (口縁)横ナデ	56
126	4号周南溝埋土	甕(口縁)	①18.0 ②(6.9)	密、1mm	浅黄/浅黄	叩き→ハケ→横ナデ	ハケ目→ナデ	66
127	4号周西溝埋土No16	壺(胴部)	③29.1	密、1~1.5mm	明黄褐/浅黄橙	不規則な横~左上のハケ→目の細かい縦ハケ→(肩)横ナデ	ハラケズリ[全体に朱附着]	88
128	4号周No19南溝(西)埋土	長頸壺(略完形)	①15.6 ②(21.4) ③16.1	(頸部)精良 (胴部)密	(頸部)橙→(胴部)灰白	ハケ→(胴)ナデ→横ナデ、(口縁)横ナデ→ミガキ	ケズリ→(口縁)上半横ナデ→ミガキ (原体不明)	113
129	4号周東溝(北)	甕(口~胴中位)	①11.5 ②(12.4) ③16.85 ④(9.7)	1~2mm	浅黄/にぶい黄橙	斜ハケ→横ハケ→(口縁)横ナデ	(胴)ケズリ→(口縁)横ナデ→ナデ	58
130	4号周No8	高坏(坏部)	①12.6 ②(4.1)	密	橙/橙	ハケ→ナデ	(脚)削り→横ナデ、ハケ→ナデ	127
131	4号周No1東溝(南)埋土	鉢	①10.6 ②5.7	密、1~2mm	浅黄橙/浅黄橙	タタキ→ハケ・ケズリ→ナデ	ハラケズリ→ナデ	64
132	4号周No2	鉢	①14.4 ②4.4	密、1mm	淡黄/淡黄	指押さえ、ナデ	ナデ	6
133	4号周東溝(南)埋土	鉢	①12.45 ②4.2	密、1mm	淡黄/淡黄	指押さえ、タタキ	ケズリ→指押さえ、ナデ	61
134	4号周No5	甕	①13.4 ②18.0 ③17.2	密、1~3mm	浅黄/浅黄	タタキ→縦ハケ→肩部横ハケ→肩部波状文、(口縁)斜めハケ→横ナデ	ケズリ、(口縁)横ナデ	114

資料集番号	出土地点(詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調(外面/内面)	外面調整	内面調整	土器番号
135	4号周北溝(中)埋土	甕(口縁~肩部)	①(21.4)	細粒部多い	黒褐~浅黄橙/浅黄	(口縁) 縦ハケ→横ハケ→横ナデ	(胴) ケズリ→ナデ (口縁) 斜ハケ後横ナデ	128
136	4号周東溝(南)埋土	甕(口~肩)	①22.9 ②(8.0)	密	浅黄/明黄褐	タタキ→ハケ→横ナデ	ハケ→一部ハラミガキ、横ナデ	97
137	4号周No.13	甕(口縁~胴中位)	①19.0 ②(24.1)	2mm以下の砂若干	黄白/黄白	(胴) ハケ(縦~左上) (口縁) 横ナデ	(胴) ハケ→(胴) ケズリ→部ナデ (口縁) ハケ→横ナデ	13
138	4号周南溝(西)埋土	甕(口縁欠)	③21.0 ②(24.3)	密、1~2mm	浅黄橙/明黄褐	タタキ→左上ハケ→縦ハケ→縦ナデ	ハケ→ケズリ(底部) 押え	87
139	4号周No.11、No.12、No.13北溝(中)埋土	短頸壺	①11.2 ②(18.6) ③16.7	密、砂粒若干	灰白/灰白	(胴) 縦ハケ→横ハケ→雑なミガキ (口縁) ハケ→横ナデ→雑なミガキ	(胴) ケズリ→雑なミガキ (口縁) 斜めハケ→横ナデ	112
140	4号周No.5No.6北溝東アリツシ	甕(口縁~胴中位)	①13.0 ②(17.5)	砂やや多い	明黄白/明黄白	タタキ→縦ハケ→横ハケ→(口縁) 横ナデ	(胴) ハケ→ケズリ→ナデ (口縁) 横ナデ	8
141	4号周No.10・北東溝・北溝(東)埋土	甕(口縁~胴中位)	①14.6 ②17.0	密、1mm以下	黄白/黄白	タタキ→指オサエ→(口縁~底) 縦ハケ→(口縁) 横ナデ	指オサエ→ケズリ→(口縁) 横ナデ	9
142	4号周No.3	甕(口縁~胴上半)	①14.2 ②(17.9)	密、0.5~2.0mm	浅黄橙/にぶい橙	タタキ→縦ハケ→横ハケ(口縁) 横ナデ	(胴) ケズリ (口縁) 横ナデ	72
143	4号周・南溝埋土・北東溝・北溝(東)埋土	小型丸底埴	①13.6 ②5.8	密	明赤褐/明赤褐	縦方向のハケ→(口縁) 横ナデ(胴) 粗いハラ削り	ハケ、ナデ、板状工具ナデ	96
144	4号周北溝(中)埋土	小型丸底埴	①10.6 ②6.2	密、1~2mm	浅黄/灰白	ハケ→ナデ	(口縁) ハケ→ナデ、 (胴) ナデ	67
145	4号周No.14	小型丸底埴	①15.1②6.1 ③12.2	砂粒ほとんどナシ	淡赤褐/淡赤褐	(底) ケズリ→(口縁) 横ナデ→(胴) ミガキ	(口縁) 横ナデ→ミガキ、赤色顔料塗付	12
146	4号周No.7	台付鉢(坏部)	①12.4	精良1mmほど	浅黄橙/にぶい黄褐	ハケ→横ナデ→ミガキ	(鉢部) 不定方向へのハラ削り→ミガキ、 (脚部) ハケ	94
147	4号周東溝北(中位)	高坏(脚短欠)	①15.9 ②(14.0)	1~3mm	黄褐/黄褐	(脚) ミガキ→縦ハケ (坏) 斜ハケ→横ナデ、(口縁) ナデ	(坏) ミガキ、ナデ (脚柱) ナデ	63
148	4号周	高坏(坏)	①24.0 ②6.0	1~2mm密	橙/橙	ナデ	ナデ	65
149	4号周東溝(南)埋土	高坏(坏部)	①10.0 ②(6.7)	密	明褐/明褐	ハケ→横ナデ	ハケ→ナデ	98
150	4号周東溝北(中位)	高坏	①15.7 ②13.0 ④10.8	精良、砂粒若干アリ	橙/橙	(坏) ハケ→ミガキ→(口縁) 横ナデ (脚) ハラナデ→ミガキ、(裾) 横ハケ→横ナデ	(坏) ハケ目→放射状ケズリ→横ナデ→不定方向ミガキ(脚) 柱部ハラケズリ→裾部横板ナデ	109
151	4号周東溝(北)埋土	高坏	①16.9 ②14.3 ④11.8	精良	橙/橙	(坏) ハケ→ミガキ→(口縁) 横ナデ (脚) ハラナデ→ミガキ、(裾) 横ハケ→横ナデ	(坏) 横ナデ→ミガキ(底部) 放射状ミガキ (脚) ケズリ→横板ナデ→裾部横ナデ	110
152	4号周北溝(中)埋土	高坏(坏部)	①15.1	密0.5~2.0mm	橙/橙~浅黄橙	ハケ→横ナデ	ハケ→(坏) 横ナデ	62
153	4号周東溝(北)埋土	高坏	①16.1 ②(13.2)	密1mm以下	橙/明橙	(坏) 横ナデ(脚) ハラナデ(一部ハケ)→ミガキ	横ナデ→ミガキ(脚) 横ケズリ→横ナデ	134

資料集番号	出土地点(詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調(外面/内面)	外面調整	内面調整	土器番号
154	SD01埋1 SD01No.12	杯	①15.5 ②3.5 ③8.5	精良、1~3mm	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ	225
155	A-4区 SD01溝中No.2	坏	①13.8②3.9 ③9.2	密、1~3mmの砂多い	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ	115
156	A-4区SD01埋土	須惠器杯(生焼け) (口縁~胴部)	①12.9	やや精良、砂ほとんと	明黄褐/明黄褐	横ナデ(磨耗により調整不明瞭)	横ナデ(磨耗により調整不明瞭)	157
157	SD01埋土	杯(底部)	残存(2.6) ④7.0	密、小石	赤褐/赤褐	横ナデ、ヘラ切り→ナデ	横ナデ→ナデ	193
158	A-4区 SD01埋土 No.09・No.12	坏	①13.4 ②4.5	砂	明赤褐/明黄褐	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ	150
159	A-4区 SD01埋土	坏(底部)	④6.2	密	明黄褐/明黄褐	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ	149
160	A-4区 SD01埋土	甕	①9.3 ②9.7 ③9.9	密、3mmほど	褐/褐	粗いハケ→ナデ、(口縁)横ナデ	(胴)指オサエとナデ→ケズリ→(口縁)横ナデ	116
161	SD01-No.07	須惠器杯	①16.9 ②(5.1)③7.0	やや精良、1mm前後の砂	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り未調整	横ナデ、(底面)ナデ	151
162	A-4区No.3 SD01溝中	須惠器 壺	①13.8 ②21.9	密	青灰色/青灰色	タタキ→横ナデ、カキ目	横ナデ、(胴下半)同心円文	90
163	SD-01No.4	須惠器 壺	①12.4 ②21.45	密、1mm	灰白色/灰白色	格子目タタキ→横ナデ	横ナデ、(胴下半)同心円文	89
164	SD01 No.6 No.11	須惠器 甕	①15.8 ②34.3 ③30.6cm	密、1mm	黄橙/黄橙	横ナデ 格子目タタキ	横ナデ 同心円文	201
165	SD01 A-4区 No.1か?	須惠器 甕 [穿孔]	①21.2 ②48.3 ③40.3	密、1mm	オリーブ黒/オリーブ灰	(口縁)横ナデ (胴)平行タタキ	(口縁)横ナデ (胴)同心円文	202
166	試掘出土 3号周 北溝上層	須惠器 甕 [穿孔]	①35.5 ②61.6 ③47.2	精良、2mmほどの砂含む	灰白~明オリーブ灰/灰白~明オリーブ灰	(胴)格子目タタキ (口縁)横ナデ→斜行連続文	(胴)同心円文 (口縁)横ナデ	200
167	SD01 No.8+ (9.10.11.12.13. 14.15.16)	須惠器 甕	①14.6 ②38.0 ③36.4	密	橙/黄橙	(口縁)横ナデ (胴)格子目タタキ (穿孔)	(口縁)横ナデ (胴)同心円文	199
168	A-4区No.18 SD01埋土	須惠器大甕	①21.2 ②42.6 ③39.5	精良、砂粒若干含む	灰~明緑灰/明緑灰	平行タタキ→横ナデ	同心円文→横ナデ	93
169	SD02No.1	小型丸底埴	①11.8 ②(7.6)	密	淡褐/赤褐	縦ハケ→ケズリ、(口縁)縦ハケ→横ナデ	(口縁)斜ハケ→横ナデ、(胴)ナデ	148

資料集番号	出土地点(詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調(外面/内面)	外面調整	内面調整	土器番号
170	SD06直上	高坏(坏部)	①17.0cm ②(5.0cm)	粗	明赤褐/明赤褐	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	161
171	T2SD03	壺(上半部)	①15.6 ②(16.1)	密、1mm	浅黄色/淡黄色	タタキ→(口縁)横ナデ、(胴)縦ハケ	(胴)ヘラケズリ→縦ハケ→(口縁)横ナデ	155
172	SD03埋土	杯	①13.9 ②(3.5)	密1mmの砂若干	浅黄橙/浅黄橙	ナデ	ケズリ→ナデ	159
173	SD07直上・中表土	壺(略完形)	①15.7 ②(24.2) ③20.3	密、0.5~1.5mm	浅黄橙/にぶい橙	(胴)ハケ→肩部に液状文風のハケ(幅7~8ミリ)→(口縁~頸)横ナデ	(胴)ケズリ→底部に若干のハケやナデ→(口縁~肩)横ナデ	79
174	SD-04No5	須恵器杯	①13.0 ②5.1	密	灰白/灰白	横ナデ、ヘラケズリ	横ナデ、ヘラ記号あり	156
175	SD-05No1	須恵器 平瓶(口縁~胴部)	①14.4 ②(21.5) ③95.35	密、1~2mm	灰黄褐/灰黄褐	平行タタキ→横ナデ、カキ目	横ナデ、(下半)同心円文	91
176	1号井戸埋土上層	壺(略完形)	①26.4 ②(21.45) ④26.4	1mm	橙~にぶい橙/橙 ~にぶい橙	縦ハケ→斜ハケ→(口縁)面取り後ナデ、横ナデ	(胴)ヘラケズリ(口縁)斜ハケ→横ナデ	80
177	1号井戸埋土上層	壺(口縁~頸部)	①13.6	やや精良、1mmほど	橙/橙	タタキ?→縦ハケ→横ナデ→ミガキ	左~左上ハケ→横ナデ(頸部指ナデ)→多少のミガキ(胴)ケズリ→ハケ	83
178	C-3直上C-3土師血群	坏	①12.7②3.1 ④8.4	1~2mm砂	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ、ナデ	105
179	C-3直上C-3土師血群	坏	①12.4	砂粒を若干含む	明黄褐/橙	横ナデ	横ナデ	102
180	C-3直上C-3土師血群	坏	①11.9 ②3.4④8.1	1mm砂	黄褐/黄褐	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ、ナデ	104
181	C-3直上C-3土師血群	坏	①12.1 ②3.4	密、砂	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ、ヘラ切り	106
182	C-3土師血群	坏	①13.5 ②2.9 ③8.4	々	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ	226
183	C-3直上C-3土師血群	坏	①12.4 ②3.1	砂粒を若干含む	橙/橙	横ナデ	横ナデ、ナデ	103
184	C-3直上C-3土師血群	坏	①11.6 ②3.75	密		横ナデ、ヘラ切り	横ナデ、ナデ	108
185	C-3直上C-3土師血群	壺	①12.8 ②4.5	密	明黄褐/明黄褐	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ→ナデ	136
186	C-3直上C-3土師血群	坏	①11.6 ②3.4	砂粒を若干含む	記入ナシ	横ナデ	横ナデ	101
187	C-3直上C-3土師血群	坏	①12.4 ②2.8	密	橙/橙	横ナデ、ヘラ切り→板ナデ	横ナデ、ナデ	135
188	C-3直上C-3土師血群	坏()	①12.5 ③9.3	密	赤褐/赤褐	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ、ナデ	107

資料集番号	出土地点(詳細)	器種(部位)	法量(cm)	胎土	色調(外面/内面)	外面調整	内面調整	土器番号
189	C-3直上 C-3土師血群	坏	①12.2 ②(3.4)	密	にぶい黄橙/にぶい黄橙	横ナデ、ヘラ切り	横ナデ→ナデ	137
190	C-3直上 C-3土師器群	坏	①12.2 ②(3.4) ④8.2	密、0.5mm以下	淡褐/淡黄褐	横ナデ、ヘラ切り→ナデ	横ナデ→ナデ	139
191	C-3直上 C-3土師血群	坏	①12.6 ②(2.9) ④9.0	密、1mm以下	淡褐/淡黄褐	横ナデ、ヘラ切り→ナデ	横ナデ→ナデ	138
192	C-6直上	高坏(坏部)	①28.4 ②(10.0)	密、1~2mm	橙/橙	斜ハケ→横ナデ、縦ミガキ(暗文)	横ナデ、横ハケ→縦ミガキ(暗文)	217
193	C-6直上	高坏(坏部)	①13.2 ②(6.5)	密	黄褐/黄褐	斜ハケ→横ナデ、暗文風ミガキ	ハケ→ナデ→暗文風ミガキ	218
194	C-6直上 E-1直上	高坏(3孔)	①(20.6) ②14.65 ④11.55	精良、細粒若干アリ	橙/橙	(坏)ハケ→ミガキ→ナデ (脚)柱部縦ヘラケズリ→ミガキ 器部ハケ→ミガキ	(坏)ハケ→ミガキ (脚)シボリ→ケズリ→ナデ (脚)ハケ→横ナデ	224
195	D-3直上	鉢	①18.6 ②8.9	1mmの砂若干多い	橙~にぶい黄橙/橙~にぶい黄橙	ハケ→(底)ケズリ→ナデ(口縁)横ナデ	(脚)ヘラケズリ→(口縁)横ナデ→ナデ	205
196	D-3区No1直上	甕(肩~底)	頸部15.3 ③27.7 ②(30.3)	密2mm以下	黄褐/黄褐	タタキ→縦ハケ→ヘラケズリ、(頸部)ヘラナデ	ハケ→ナデ→(底)ヘラケズリ	195
197	D-3直上	二重口縁甕(口縁~胴)	①25.6	1mmほどの砂やや含	にぶい黄橙/にぶい黄橙	ハケ→(口縁)横ナデ	(口縁)横ナデ(胴)ヘラケズリ	209
198	D-3直上 D-3No1	甕(略壳形)	①11.2 ③13.2	密	明褐/明褐	横ナデ→ミガキ	(口縁)横ナデ→ミガキ(胴)ケズリ→ハケ、ナデ	210
199	D-3直上	小型丸底埴	①11.3 ②6.8	やや粗	明赤褐/明赤褐	斜ハケ→ナデ→横ナデ	(口縁)横ナデ、(胴)研磨	208
200	D-3直上	高坏(略壳形)	①11.8 ②(7.5)	粗	浅黄/浅黄	(杯)縦ハケ→横ナデ(脚)タテナデ→横ナデ	(杯)ナデ、(脚)縦ハケ→ナデ	211
201	D-3直上	脚付鉢	①10.0 ②8.15 ④13.4	精良1mmの砂わずか	にぶい橙~橙/にぶい橙~橙	(杯)ハケ→ナデ・暗文風ミガキ、縦ハケ→ナデ→横ナデ	(杯)ナデ→横ナデ→縦ミガキ、(脚)斜ハケ→ナデ	207
202	D-5区 D-6区直上	甕	①20.2 ②28.6 ③24.7	密、2mmほど	にぶい黄橙~褐灰/橙~褐灰	(胴)タタキ→ハケ(口縁)ハケ→横ナデ	底部指オサエ成形→(胴)ヘラケズリ(口縁)ハケ→横ナデ	194
203	D-6直上	小型丸底埴	①10.6 ②4.6	密	/	縦ハケ→(口縁)横ナデ	ハケ→横ナデ	212
204	D-5 D-6直上	二重口縁甕(口縁)	①13.4 頸8.9	精良、0.2~0.1mm	にぶい黄橙/にぶい黄橙	横ナデ	ケズリ→横ナデ	220
205	D-6直上	甕(口~肩)	①16.9 ②(9.1)	密	にぶい黄橙/にぶい黄橙	斜ハケ→(口縁)横ナデ、(肩)横ハケ	斜ハケ→(胴)ヘラ削り	216
206	C-5直上	小型丸底埴	①13.3 ②7.5	密	黄褐/黄褐	斜ハケ→(口縁)横ナデ	斜ハケ→(口縁)横ナデ	214

資料集 番号	出土地点 (詳細)	器種 (部位)	法量 (cm)	胎 土	色 調 (外面/内面)	外面調整	内面調整	土器 番号
207	A・4表土 1号周B・4直上(溝 埋土)	台付甕 (台部)	④16.4 ②(7.2)	密	/	タタキ→ハケ→横ナデ・ナデ	ハケ→ナデケシ、横ナデ	215
208	1区カクラン溝	坏	①10.9cm ②3.2cm ③7.4cm	密	橙/橙	横ナデ、(底)ヘラ切り→板ナデ	横ナデ	85
209	B・4表土	台付き甕 (台部)	④(5.6) ②(4.2)	粗、1~3mm	にぶい橙/にぶい 黄橙	横ナデ	横ナデ	222
210	1区カクラン溝	小型丸底埴 (略完形)	①14.8 ②(6.7) ③12.55	精良	橙褐/橙褐	ハケ→(胴)ミガキ	(胴)横ハケ→ナデ (口縁)ハケ	28
211	中表土	器台 (台部) (3孔)	④10.6	密、1mm	淡黄/淡黄	縦ヘラケズリ→ハケ→横ナデ	縦ハケ・横ハケ→ナデ	189
212	F・1表土	甕 (胴部)	③(15.2)	やや精良、1mm の砂若干アリ	橙/橙~浅黄橙	ハケ・ケズリ→ナデ(わずかに平底痕跡)	(底)指オサエ(胴)斜めハケ→(肩~ 頸)ナデ	206
213	西表土	高坏 (脚部) (4孔)	④13.6	粗、1mm大	暗褐~褐/浅黄橙	縦ケズリ→縦ハケ→横ナデ、ナデ	横ケズリ→ナデ、横ハケ→横ナデ	191
214	中カクラン	甕 (口縁~肩部)	①21.6	粗、1~3mmの砂 多い	にぶい橙/橙	ハケ→横ナデ・ナデ	(胴)ヘラケズリ(口縁)横ナデ	117
215	中カクラン	甕 (口縁)	①13.7 頸10.4	精良、1~2mm	明褐/赤褐	(口縁)ハケ→横ナデ→ユビナデ (胴)右上下タタキ→ハケ→横ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ(胴)ハケ→ユビ ナデ上げ	154
216	中カクラン	高坏 (脚部)	④17.2	密	橙/にぶい黄褐	ハケ	ハケ	158
217	中カクラン	甕 (口縁~胴)	①17.0 頸13.1	粗、1~3mm	にぶい黄橙~褐灰 /黒褐	(口縁)横ナデ、(胴)ハケ→横ナデ、ナ デ	(胴)ナデ→ケズリ→(口縁)横ナデ	160
218	3号周 中央部直上	甕 (口~胴)	①12.8 頸10.5 ③14.7	密、1~3mm	にぶい橙/にぶい 黄橙	(口縁)ハケ→横ナデ (胴)ハケ→ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ (胴)ハケ→ハケ	175
219	中カクラン 中表土	甕 (口縁~胴)	①13.5 頸10.1 ③15.7	粗、1~3mm	にぶい黄橙/浅黄 橙	(口縁)タタキ→縦ハケ→横ナデ (胴)縦ハケ→横ハケ→横ナデ	(口縁)ハケ→横ナデ (胴)横ハケ→ケズリ	152
220	1区カクラン溝	須臾器 甕 (肩~底)	④10.2 ②(14.2)	密、2mm	青灰/青灰	タタキ→ヘラケズリ→ナデ	横ナデ	153

新宇土市史基礎資料 第9集
考 古

発 行 宇土市教育委員会
熊本県宇土市新小路町95番地
発行日 平成13年3月29日
印 刷 コロニー印刷
熊本市二本木3丁目12-37

